

のんびり口調の可愛い妹

ブリザード

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

マイペースでのんびりとした口調の妹とその兄と妹の幼馴染の日常的なお話。

目次

第1話	妹は可愛い。彼氏なんて以ての外	1
第2話	モカと一緒にシヨツピング	6
第3話	お昼寝するモカと甘いもの大好き少女	12
第4話	デレるギタボと添い寝するモカ	19
第5話	風邪引きモカと葛藤するラテ	27
第6話	喧嘩する兄妹と頼りになる姉貴	35
第7話	こき使われるラテと弄ばれるラテ	43
第8話	ご褒美の約束をするモカとご褒美を実行するモカ	52
第9話	意地悪するラテと慰めるモカ	59
第10話	パーティする6人と運の悪いモカ	68
第11話	ベッドでいちやつく兄妹と兄妹に憧れるつぐみ	76
第12話	雨宿りする兄妹とモカのバイト先	86
第13話	モカの好みのタイプと修学旅行に行きたくないラテ	

98

第14話	ホラー映画にビビる3人と怪談にビビる4人	109
第15話	毎月の恒例行事とラテを慕う第2の妹	123
第16話	案の定なラテと拗ねるモカ	138
第17話	夏休みを満喫したいラテと仲のいい蘭とモカ	150
第18話	デートするモカとデートするリサ	159
第19話	海に行く6人	171
第20話	シスコン2人と膝枕するモカ	182
第21話	怒るひまりと羽丘女子学園の七不思議	195
第22話	脅かすラテと呑気なモカ	206

第23話	落ち込むモカとその理由	217
第24話	ラテの苦手なものと夢に出るモカ	227
第25話	弁当を忘れたモカと気持ちよさそうに眠る蘭	236
第26話	ラブレターをもらうラテ	250
第27話	キュンとされたいラテとときめいた頑張り屋さん	263
第28話	大量のパンと拗ねるラテ	273
第29話	迷子になる女の子	285
第30話	ラテの妹になる4人とラテの幼馴染なモカ	291
第31話	女装をしたくないラテと準備のいいモカ	303
第32話	酷い目に遭わされがちなラテ	312
第33話	風邪を引いたラテと看病するモカ	322
番外編	お兄ちゃんと呼びたいひまりとお兄ちゃんに甘えたいひまり	333
番外編	買い物に付き合うラテと綺麗な蘭	342
番外編	恋人のようなモカとパンに包まれるモカ	350
番外編	平和な1日と怖いモカ	365
番外編	モカの冒険	373

第1話 妹は可愛い。彼氏なんて以ての外

突然だが俺、青葉ラテには妹がいる。名前は青葉モカ。のんびりとした口調が特徴で基本マイペース。興味のないものにはとことん無関心だが、好きな人のためには一生懸命になれる。そんな女の子。

俺は思う。俺の妹、青葉モカは世界中のどんなアイドルよりもいや、世界中のどんな女の子よりも可愛いと、兄貴である俺はそう断言する。

「ねえねえー、お兄ちゃん。起きて〜」

「んー……あと10分」

朝。布団にくるまって寝ている俺を誰かがのんびりとした口調に合わせて、揺すって起こそうとしてくる。

「むー、お兄ちゃん。起きろ〜」

「嫌だ。あと5分」

「早く起きないと、お兄ちゃんの机の3つ目の引き出しの1番奥にある本と本の間にあるDVD、燃やしちゃうよ〜」

「はいごめんなさい起きます！今すぐ起きますから!!」

「ふへへ〜、やっと起きた〜」

何やら不吉な言葉が聞こえ、俺はベットから飛び起きた。全く誰だ。こんな朝早くから俺を起こそうとしてくるのは………つて言うまでもないか。

「おはよーお兄ちゃん」

俺の体を揺すって起こしてきたのはモカ。俺の妹だ。

「おはようモカ。で、何の用だ？今日は土曜日。学校は休みだからこ

んなに早く起こされる事はないんだが？」

ただいまの時刻は朝の9時。休みの日ならいつももう2時間は寝ているところだ。

「んーとねー、お兄ちゃんお願いがあつてねー」

「お願い？」

「今からパン買いに行こー。お腹すいたー」

「お腹すいたつて。朝ごはんはどうしたんだ？」

「まだー。お兄ちゃん起きるの待つてただけど、なかなか起きないから起こしに来たのー」

つまり俺が起きないからモカはご飯をたべれなかつた。なんか悪いことしちゃったな。

「けど、俺はもう少し寝ていたい。だからパンは1人で買つてくればいいぞ」

「それじゃあダメなんだよー」

「というと？」

「あたしは、お兄ちゃんと一緒にご飯が食べたいんだよねー」

「よし！5分……いや、3分待つてろ！すぐ着替えて準備する!!」

妹に……いや、モカにそんなこと言われて飛び起きない兄貴がどこにいる！眠気とだるさも全部吹っ飛ばしたぞ！

「わーい、じゃああたし外で待つてるねー」

モカが部屋を出て行ったのと同時に寝間着を一瞬で脱ぎ捨て服を着る。その時間、10秒。すぐさま部屋を出て洗面所に行き、顔を洗い歯を磨く。その時間20秒。部屋に戻り、必要最低限なものを持って部屋を出て玄関で靴を履く。その時間、30秒。合計1分!!

「じゃあー準備完了！待たせたなモカー！」

「3分どころか1分で準備するなんて、流石はあたしのお兄ちゃんー」

「ふっふっふー。凄いだろー？て事でパン屋さんー？」

「レッツゴー」

モカの掛け声とともに、家を出て商店街のパン屋に向かった。

「とうちやーく」

商店街に入り、しばらく歩くとモカが毎日のように通うパン屋、『山吹ベーカリー』に着いた。

「モカ。今日は俺の奢りだ。好きなパンを何個でも買っていいからな」

「ほんとー？お兄ちゃん太っ腹だね」

「愛しの妹を待たせた俺の罪だ。その罪は重い。何でも買ってやる」

何時から起きていたのかは知らないが、モカを待たせた罪は万死に値する。その罪を償わなければならない。

「おはよーございまーす」

「ちわーっす」

「いらっしやいませー……あ、モカ。それにラテさんも」

「おはよーさーやー」

「うーっす。今日は沙綾が店番なのか？」

「そうなんです。今日は学校休みなんで1日中手伝うことにしました」

店番をしている彼女の名前は山吹沙綾。この『山吹ベーカリー』を経営している山吹家の長女である。母親の代わりによくこのパン屋の手伝いをする親孝行な女の子だ。

「えらいな沙綾は。可愛いし、気もきくし、きっと学校でモテモテなんだろう？」

「あはは、可愛いなんてそんな。それにうちは女子校なんでモテるとかそういうのはないですよ」

「あー、それもそっか」

「ねえねえ、お兄ちゃん〜？」

「ん？」

トレイとトングを取りながらもモカは俺の服の袖をくいくいと

引っ張る。

「あたしは可愛い〜?」

「もちろん!世界一可愛い!!」

「わ〜い」

「即答……相変わらずのシスコンぷりですね、ラテさん」

「事実だからな。モカが世界一可愛いのは」

マイペースでのんびりとした口調。短めに切った髪型にいつも好んで着るパーカー姿。どれを取っても可愛いとしか言えない。

「そんな調子だと、将来モカに彼氏が出来たらどうするんですか?」

「彼氏……モカに……彼氏?」

モカに彼氏。俺の事をずっとお兄ちゃんと呼び慕ってくれるモカに?幼い頃からずっと、楽しい時も辛い時も一緒に暮らしてきたモカに?今日だって、お腹空いてるのにもかかわらず俺とご飯を食べるために待っていてくれた優しいモカに?彼氏?

「んなもん、許すと思ってるのか?」

「あ、ごめんなさい。そうですよね」

「万が一、モカに男が出来た場合。その時は俺という壁を祓ってくれらるまで彼氏なんて許さねえ」

「はい。わかりました。ごめんなさい。聞いたあたしが悪かったです」

「大丈夫だよ、お兄ちゃん」

「なにがだ?」

「モカちゃんはお兄ちゃんがいてくれるなら、彼氏なんていらんから〜」

「モカ……」

俺はなんて幸せなんだ。妹に……モカにこんな事言ってもらえるなんて……俺は。

「モカ、ずっと一緒に暮らそうな!!」

「は〜い」

「………そういうのは他所でやってくれませんか?」

こんな調子でずっといるのも店側に悪いので俺とモカのパン。計

合わせて20個を買って俺たちはお店を出ていった。沙綾は物凄く疲れ切った表情をしていたが何故だろうか。

第2話 モカと一緒にシヨツピング

「お兄ちゃん」

「ん？なんだ？」

家のリビングのソファの上に寝そべりながら漫画読む俺に声をかけてきたのは、俺の妹のモカ。

「昨日ね、バイトの初のお給料が入ったんだよー」

「あー、そっか。モカはコンビニでバイトをはじめたんだよな」

先月のはじめから。高校に入ったモカはアルバイトを始めた。場所は近くのコンビニ。なにやら幼馴染のみんなとバンドを始めるためにお金が必要なのだと。

心配だな。モカが変なお客さんに絡まれてるかもしれないと思うと……俺は心配だ。もう心配すぎて今勤めているバイトを辞めて、モカと同じコンビニに移りたいくらいに。

「それでねー、お給料は大半は貯金するんだけど、やっぱり初めて自分で働いてもらったお金で少しは使いたいから」

「ふむふむ」

「お兄ちゃん、今からあたしとシヨツピングに行こー」

「行く!!」

読んでいた漫画を放り投げ、財布と携帯をポケットに入れ、俺は玄関に向かった。

「さあいくぞーシヨツピング！」

「はーい」

折角モカが誘ってくれたんだ。モカを楽しませれるように頑張らないと。

「さーて、着いた」

「いっぱい歩いたのでモカちゃんは疲れました」

家から歩いて数十分、この街の大きめのショッピングモールに到着した。これなら歩くよりも自転車で来る方が良かったかもしれない。

「大丈夫か？少し休憩するか？」

「だいじょーぶ。まずは何処からまわりましようか？」

「モカが誘ってくれたんだから、モカが自由に決めてくれていいんだぞ？買う物が多いなら俺が持つてやるし」

「ありがと。んーとね、まずは服を見にいきましょう」

「はいよ」

ちよつと考えるような仕草をしたモカはすぐに2階にある服屋に向けて歩き出した。そんなモカについて行くように、横に並び歩き始める。

「……そういや、なに買うのかはもう決めてるのか？」

「もちろん決まってるよ」

「へえ……なに買うんだ？」

「それはひみつなのさ」

「なんだそれ……」

「買うのは決まってるけど、何をかうかは決めてない」

「………なんだ、その謎かけみたいなの」

「ふっふっふ」

妹のことなのに何を考えてるのか分からないのはすごく悔しい。兄として。

「うーん………と、すみません」

考え事をしながら歩いていると、前から歩いてきている人に気づかず、肩がぶつかってしまった。

「休日だからやっぱり人が多いな」

「そうだね。これだけ人が多いと逸れちやいそう」

「だな。逸れないように手でも繋ぐか？」

「そうしよ」

一応許可をもらい、人混みの中逸れないようにモカの手を取った。
「モカはのんびりしてるから放っておくと1人でどっか行ってそうだよな」

「そんな事ないよー。モカちゃんはこう見えても迷子になった事がないんだよ」

「それは嘘だ。昔祭りの時に迷子になったのを俺は覚えてるぞ」

あの時もこうして手を繋いでいたはずなのに気がつけばモカの手が離れていて、何処に行ったかわからないモカを人混みをかき分けて探し回った。いや、あれは大変だった。

「あれはモカちゃんが迷子になったのではなく、お兄ちゃんが迷子になったんだよ」

「どの口が言うんだまったく。俺があの時どれだけ心配したか……」

「ごめんね」

「まあ過ぎた事だ……つと着いたぞ」

「おう、ほんとうだよ」

話しながら歩いていると、いつの間にか目的地の服屋に着いていた。繋いでいた手を離してモカは服を見て回る。

「どうだ？なにか欲しいものあったか？」

「女の子の服選びというのは時間がかかるものなんだよー。デリカシーがないなお兄ちゃん」

「わ、悪い……つていつもフード付きのパーカー着てるやつにあまり言われたくねえな」

「あれはあたしのファッションだからね」

「まあ、どんなパーカーを着いてもモカはモカだから可愛いけどな」

「おう、今のはちよっとキュンってなったよ。お礼に後でパンを買ってあげよう」

「じゃあ、メロンパンな」

「はーい」

服を手にとって選びながらもモカは俺との話を合わせてくれる。なんというか器用だな、モカは。

「ねえ、お兄ちゃん。このパーカーとこのパーカー。どっちが似合う

く？」

「どっちって……そうだな」

モカが手にとったのは同じタイプのパーカー。ただ色が違うだけ。水色か、黄緑色か。どっちも可愛いと思うんだけど。

「俺は水色の方が好きかな？そっちの方がモカにあつてると思う。でも、モカが気に入らないなら試着してみればいいんじゃないか？」

「うくん。お兄ちゃんが選んでくれるのに間違いはないからこっちにする」

そう言つてモカは黄緑色のパーカーを元に戻して、もう片方の水色のパーカーをレジへと持つて行った。

「絶対試着してみる方がわかりやすいのに……まあいいか」

レジをし終えたモカはこっちに戻つてきて、再び手を繋いで次の店へと向かった。

「色々買ったな。まだお金はあるのか？」

あれから昼食を挟みつつ、いろんな店を回り、俺の手には計3つの紙袋があつた。1つ1つが高いものなわけではないが、それでもやはりモカの所持金心配になつてきたところだ。

「そろそろかな？でも、もう1箇所だけ行きたいところあるんだよ」

「そっか。何処だ？」

「あそこ」

モカが指差すのは、すぐその時計屋さん。なんでそんなところに行きたがるのかわからないが、行きたいなら付き合おうまでだ。

「じゃあ行くか。あんまり遅くなつても母さん心配するだろうし」

「そうだね」

床に置いていた紙袋を手にとって、先を歩くモカの後ろを着いて行くように歩き出した。

「で、最後に何を買うんだ？」

「もう決めてあるんだ。お兄ちゃんはここで待ってってね。」
「ん？わかった」

モカは時計屋の中に入った。何を買うつもりなのかわからないが、すでに決めてあるならそんなに時間もかからないだろう。

「お待たせ」

「つて、え、はやっ!!まだ入って1分も経ってないぞ!!」

「ふっふっふ。支払いはすでに済ませてたのだ」

「そ、そうなのか……いつの間に。で、何を買ったんだ？」

「それは家に着いてからのお楽しみ。それじゃあ、帰ろ」

「あ、おい。待てよモカ!気になるだろ!」

結局モカは何を買ったのか教えてくれないまま家に着いた。モカが最後に買ったものをら持とうとしてもそれを渡そうとはしなかった。何故だ?物凄く気になる。

「ただいま」

「ただいま。お兄ちゃん、荷物ありがと」

「ん?ああ、はい」

ずっと手に持っていた紙袋をモカに手渡す。それを受け取ると、モカはそれを床に置いた。

「それと」

「ん？」

「これ。初お給料記念のプレゼント」

「……………へっ？」

モカは最後に買ったものを中身を取り出して俺に渡してくれた。戸惑いながらもそれを受け取る。

「えへへー。サプライズ大成功」

「あ、はは。何が何だか。中身開けてもいいか？」

「もちろん」

モカに許可をもらい、中身を開ける。入っていたのは高そうな腕時

計だった。

「お前……これ」

「お兄ちゃんが去年あたしにくれた事のお返しだよ？このパーカー去年お兄ちゃんが初お給料記念ってあたしに買ってくれたパーカーだよ。だから、それのお返しって事」

「そういえばそうだった。モ力が今着ているパーカーは俺の初給料で買ったものだ。」

「あー、なんだ。そういう事か。それで買うのは決まってるけど、何買うかは決めてない、だったのか」

「そういう事ー。よく気づけました」

「買うのは『俺へのお返し』。何を買うのかはまだ決めてなかった、という事だったのか。」

「はは。ありがとうモ力。俺の一生の宝物にする。大事に使わせてもらうからな」

「喜んでもらえて何より。じゃあ、お兄ちゃん。ご飯作って。歩き疲れてお腹すいた」

「はいはい。なんでも作ってやるよ」

「わくわく。じゃあ、パンね」

「夜ご飯にそれはない」

「ケチ」

「俺からした事を忘れるなんて俺もアホだな。でもいいや。この腕時計は大切に使用してもらおうとしよう。」

第3話 お昼寝するモカと甘いもの大好き少女

「お兄ちゃん」

「うおつと。モカ、いきなり抱きついて来たら危ないだろ？」

休日。リビングのソファで本を読んでいた俺に妹であるモカはいきなり俺に抱きついて来た。まあ、抱きついて来たなら抱き返すのが道理というものだろう。

「で、どうしたんだ？」

「モカちゃんはもうすぐバイトなので、頑張るために成分を補給しての〜」

「そっか。それならいくらでも補給してくれ」

「は〜い」

モカは体勢を変えて、俺に背を向け、そのまま俺の股の間に座った。そしてそのまま俺にもたれかかってくる。

「はあく、気持ちいい〜。このまま寝ること出来そうだよ〜」

「じゃあ、もっと気持ちよくしてやるよ」

俺は読んでいた本にしおりを挟んで閉じ、右手でモカの頭を優しく撫でた。

「おお〜、これはダメだよ〜。反則的にダメなやつだね〜。やめたほうがいいよ〜」

といつつも、気持ちよさそうに目を細めるモカ。この反応を見ることができると思うと、ずっと続けてられる。というか、やめれるわけがない。

「バイトまで後どれくらいだ？」

「後1時間はゆっくりしてられるよ〜」

「それなら後1時間ずつとこうしてられるな」

「そんなことされ続けたらモカちゃんの瞼が落ちちゃうよ〜」

とかいいつつ、モカはすでに眠そうにしている。どうやら予想以上に気持ちいいみたいだ。

「寝てもいいぞ?」1時間経ったら起こしてやるし、ぐっすり眠れるようにずっとこうして撫でてやるわ」

「じゃあ、お言葉に甘えようかな」

「甘えろ甘えろー。俺もこうしてると退屈しないしな」

「じゃあお言葉に甘えてー。おやすみ、お兄ちゃん」

「おやすみ」

言葉を終えるとともにモカは瞼を閉じてそのまま眠ってしまった。こいつ寝付き物凄くいいから直ぐ眠れるんだよな。羨ましい限りだけど。

「すう……………すう……………」

「……………でもこの体勢だと寝顔が見れないのはショックだな」

それにしてもいい匂いだな。使ってるシャンプーや石鹸は同じはずなのにどうしてこんなに変わるものか。髪もサラサラだし、俺もこんなサラサラヘアー目指したい。

「んん……………ダメだよひーちゃん」

「寝言か？」

「そんなに食べるとまた太るよ」

「……………幸せそうな夢みてるんだな」

きっとモカの幼馴染とお菓子でも食べてる夢でも見てるんだろう。

「本当に……………可愛いなモカは」

幸せそうに頬を緩めて眠るモカを見て、俺は改めてモカの可愛さを認識した。

「ほらモカ起きろ。1時間経ったぞ」

「ん……………あと5分」

あれからモカの頭をずっと撫で続けながらも本を読み時間を潰し

た。1時間という長い時間であったが、モカを愛でる事でとても早く感じた。

「ダメだ。バイトに遅刻するぞ」

「お兄ちゃんのケチ〜」

「ケチじゃない。ほら、顔洗ってさっさと行ってこい」

「は〜い」

納得したのか、モカはゆっくりと体を起こしてふらふらな足で洗面所に向かった。

「まったく……それにしてもバイトか」

モカのバイト姿。今まで気にしたことはあまりなかったが、バイト中のモカの姿を見たことがなかったな。

「じゃあお兄ちゃん、いつてきまーす」

「はいはい、いつてらっしやい」

顔を洗ったモカは最低限の用意を鞆に入れてそのまま家を出ていった。

「あの調子でちゃんと仕事が出るのか？」

いや、いくら寝起きといえどちゃんと出来るだろう。いや、でも心配だな……モカに対してのクレームが来たりしたら……

『おい店員、何やってんだよ。温めた弁当にチョコレート一緒に入れてんじやねえよ』

『すみませんでした〜』

『謝って済むか！おい責任とれ!!』

『そんなこと言われても……どうすれば〜?』

『簡単だよ。服を脱げ。そして俺に奉仕しろ』

なんて事になったらどうしよう!!モカが！俺のモカの貞操が誰とも知らない男にとられてしまう!!!

「いかん！一大事だ！」

モカの貞操。いや、モカの全ては俺が守る！決意した俺は見つからないように変装道具を準備した。

「行くぞモカ！お兄ちゃんはお前のためにバイト先に見に行かせてもらおう!!」

『ありがとうございますー』

『しゃーした〜』

「いや、しゃーした〜、つて。どんな挨拶してんだよあいつ」

今のところ何も起きていない。いや、そんな簡単に変なことは起きないんだろが、変なことが起きた場合俺の出番だ。

「いや、でも。バイトしてるモカも可愛いな〜」

いつも通りのんびりとしているが、そんな姿でバイトしているモカもやっぱり可愛い。写真撮りたい。

「それにしても……なんだか周りの視線が気になるな。そんな変な格好してるのか俺？」

なんだか周りから『うわ、何あの人』だの、『こわーい』だの、嫌な声が聞こえてくる。とりあえず現在の俺の格好を確認してみるか。

現在の俺の格好。

服、パーカーのフード付き。

ズボン、ジーパン。

頭、帽子。

顔、普段つけない伊達メガネ。マスク。

場所、コンビニの外でモカがよく見える場所。

「……………俺不審者じゃん!!?」

やっべ。なんで今までに気づかなかつたんだ。でも、こんな姿モカにバレるわけには行かないし、どうすれば……………

「……………せめてフードは外すか。あと、マスクも外そう。うんそうしよう」

「おまわりさん！不審者です！コンビニを覗き見する不審者がいます!!」

「やつ！ちよ、ちよつと待ってください！俺は不審者なんかじゃ………つて、あれ？ひまりちゃん？」

「はい。えへへ、びつくりしました？」

おまわりさんが来たと思い、言い訳をしながら振り返るとそこに立っていたのはおまわりさんではなく女の子。

「い、いや、まあびつくりしたよ」

「やった！でも本当に不審者みたいでしたよー。それこそ警察呼ばれてもおおかしくなかったです」

「や、やっぱりそうだよな。気をつける」

女の子の名前は上原ひまり。モカの幼馴染の1人にしてモカが組んでいるバンド、Afterglowのリーダー。明るい性格でピンク髪に高校生と思えないほどの胸の持ち主。

「で、こんなとこで何してたんですか？」

「決まってるだろ。モカの監視だ」

「うっわ、相変わらずドン引きするレベルのシスコン」

「うっせー。もうお前らには言われ慣れたよ」

ひまりちゃん………というか、モカの幼馴染4人とは過ごす時間も長かったため、シスコンというのはもう言われ慣れてしまった。

「だいたいあんなに可愛いモカを愛でるな、という方が頭おかしいぞ」

「あー、はいはい。そうですね。それも言われ慣れましたよ」

「うっ………すまん。それより、ひまりちゃんこそこんなとこで何してたんだ？」

「あたしはコンビニスイーツを買いに来たんですよ」

「あー、そういうこと。それにしても、よく俺だと気づけたな」

「うえっ？あ、そ、そりやそうですよ。あたしたちからしたらラテさんも幼馴染みたいなものですしー！」

「ふーん………そういうもんか？」

「そういうもんなんですー！」

俺はどちらかというところ、それぞれ個性が違う妹みたいに思ってるんだが、まあ、あまり変わらないか。

「というか、コンビニスイーツか………」

じーつと、ひまりちゃんの体を見つめる。

「な、なんですか？視線がいやらしい」

「いや、今日モカが昼寝してる時にふと呟いてたんだよ。『そんなに食べるよまた太るよ』って」

「んなっ!？」

「だからその甘いものを食べた栄養がどこに向かってるんだろかな、ってちよつと観察を……ひまりちゃん？」

「……………どいです」

「へっ?」

「酷いです!ラテさん変態!警察呼びます!!」

「待て待て!なんでそうなる!!」

涙目になりながら、携帯電話片手に取り警察呼ぼうとするひまりちゃんの腕を掴み俺は止めた。

「あたしだって体重気にしてるんですよ!それなのにラテさんはあたしの体を舐め回すようにじつと見て!」

「待て、舐め回すように見てはいない!」

「サイツターです!こうなったら、今日の事を全部モカに言いつけてやるんですから!!」

「待て。それは本当に待て。そんな事されたらモカに嫌われる!」

「嫌われたらいいんですよ!ラテさんなんて!!」

モカに嫌われたら俺の娯楽全てがなくなることになる。それだけは絶対に止めなければならぬ。

「ひ、ひまりちゃん?」

「なんですか!」

「い、今からカフェに行こう。2人で」

「へっ?」

「うん。そうしよう。ここだったら迷惑になるし、カフェでゆっくり話し合おう。なんだったらケーキ奢ってあげるから?ね?」

「ほ、本当ですか?」

昔モカの言っていたことが役に立った。ひまりちゃんは甘いものが好きだから、それを盾にすれば大抵なんでも言うことを聞いてくれ

るって。

「も、もちろんだよ。カフェだけじゃなくても好きなどこ連れてってあげるから。どうかかな?」

「つ、つまりそれって。で、デートって事ですか?」

「ん? ああ、まあ、そうだな。デートかな? うん」

「デート……ラテさんとデート」

考え直すような仕草を取ったひまりちゃん。そして勢いよく顔を上げた。

「わかりました! 行きましよう! デート!」

「あ、うん。じゃあ行こっか」

「はい!」

涙目になって怒っていたのから一転、超ご機嫌になったひまりちゃんは俺の腕に抱きついてそのまま歩き出した。

「デート、デート! ラテさんとデート!」

「よかった、機嫌治って」

その後、カフェで甘いものを食べまくったひまりちゃんはさらに超ご機嫌に、逆に俺はひまりちゃんが食べたものすべてを奢り、財布が軽くなって超どんよりした。

第4話 デレるギタボと添い寝するモカ

「て事があつたんだよ。どう思う、蘭？」

「別にどうとも。というかそれ悪いのラテじゃん」

「いや、そうだけど。そうだけどそこまで食べるまでしなくてもいいと思うんだ。ただでさえ自分の体重気にしてたくせにそれを自分で増やしてるんだぞあいつは」

この前ひまりちゃんとおつた時の出来事を俺は商店街のとある喫茶店で愚痴っていた。相手は女の子。当たり前だがモカではない。

「ひまりはそういう子だから仕方ないよ」

「くそー。今度あつたら絶対に体重の事で弄り倒してやる」

「大人気ないね、ラテは」

「うっせー!!」

クールにズバツと俺に言葉を返してくるのはモカの幼馴染にして1番の友達、美竹蘭。モカの組んでいるバンド、Afterglowのギター&ボーカル。黒髪に赤いメツシユを入れているのが特徴でとても気が強い。でもたまにデレる。いわゆるツンデレっ気がある女の子。

「まあそれはさておき。俺に用っていうのはなんだ？」

そもそもここにいるのは俺からではない。俺の目の前にいる蘭が俺を呼び出したからだ。なにやら用があるようなのだが。

「うん。特に用事があるわけじゃない」

「へっ?じゃあなんで?」

「たまにはラテとお茶でもしたいって思ったから。だから呼び出した」

「はっ?」

え、なに。つまりあれか?用事も相談もなにもないけど、ただ俺とお茶したいから呼んだと。

「ふざけんな!モカと一緒にいられる時間を割いてここまで来たのに!!」

「いいでしょ別に。てか、シスコンキモい」

「くっ…………この」

俺がモカと一緒にいる時間を削るのがどれほど辛い事なのかわかっていいのかこいつは。今頃家で1人寂しく、『お兄ちゃ〜ん、お腹空いた〜』と嘆いているに違いない。

「あ、ちなみにモカは今日ひまりと巴と遊ぶって言ってたから大丈夫だよ。寂しくなんてしてないと思うから」

「さりげなく俺の心を読むな!」

「ラテの表情がわかりやすいんだよ。つぐみ、おかわり」

「はーい」

ちなみに今店の中には俺と蘭以外は誰もいない。いるのは店員であり、モカ達の幼馴染である羽沢つぐみとそのお父さん。

「どう思う、つぐちゃん!俺のモカとの時間を奪ったんだぞ蘭は!」

「えっ?えつと、その……ラテ君は少しモカちゃんに構いすぎじゃないかな、って思うこともあるけど?」

「だってモカだもん。構うよ!」

「だ、だよねー、あはは」

羽沢つぐみ。モカの組んでいるバンドのキーボード担当。とつても頑張り屋さんで、多少のことではめげない性格。

「ラテの頭の中の8割がモカの事でいっぱいそうだよね」

「ん?なに当たり前のこと言ってるんだ蘭?1日24時間。そのうちの8割はモカの事でいっぱいだよ。むしろ俺が日常の中でモカの事を考えてない方がおかしいぞ?」

「うわっ、きも。本気できもいよラテ」

「ち、ちなみに寝る時はどうなのかな?」

「それ絶対聞かなくてもいいでしょつぐみ」

「い、いや、なんだが気になっちゃって」

「愚問だな、つぐちゃん」

寝る時。そんなの普通なら考えられるわけがない。だが俺の手にかかれば余裕だ。

「夢の中でモカと会えるからな」

「……………」

「ごめんなさい流石に冗談です。見ない時もあるから。だから、そんなに露骨に引かないで」

蘭とつぐちゃんがお互いに手を握りあい俺から離れて行った。冗談だから、本当に。4割くらいは冗談だから。

「よくモカもこんな兄と一緒に過ごせるよね。私なら絶対無理」

「お前それは流石にひどいぞ！つぐちゃんはそんな事ないよな！」

「え、私!?私はずっと……その……あ、蘭ちゃん、コーヒー入れてくるね！」

「逃げたな」

「逃げたね」

小走りで新しいコーヒーを淹れに行くつぐちゃんを見て俺はショックに陥りそうになった。

「いいさ。結局俺のことを理解してくれるのはモカだけなんだ。モカが俺の全てなんだから」

「はあ……ラテ。別に妹離れしろって言うわけじゃないけど、モカにもっと自由にさせてあげたら？」

「はあ?何言ってるんだ。モカには自由させまくってるぞ。バンドもしてるし、バイトもしてる。学校だってお前らと同じ女子校だし、クソ自由してるじゃないか」

「そうじゃなくてプライベートの事。休日とか、あんたという事の方が絶対多いでしょ」

「そりゃまあ、そうだけど。でもそれはあいつから俺に絡んで来ることも多いぞ」

まあ、いつもつてわけじゃないけど。そりゃ確かに俺から絡むことの方が多いいけどさ。

「あんたほどでないとはいえモカもラテの事大好きみたいだし。でも、あたしとかみんなだつてモカとその……一緒にいたいし」

頬を赤らめてそう言う蘭。もしかしてこいつデレた?いつもツンツンしてる蘭がデレたのか?

「まあ、お前らなら全然良いんだよ。そこは心配してない。というか、蘭。もしかしてお前さ」

「なに？」

「俺がモカと一緒にいる時間長くて、お前らという時間奪うせいで、一緒にいる時間少なくなってるから、それでお前拗ねてるのか？」

「なっ!!?ちがつっ!あたしはそんな!!」

「なーんだ。そういう事ならそう言ってくれたらいいのに。蘭は本当にわかりにくいな」

「はあ!!?あたしが言ってるのはそういう事じゃなくて!モカの将来のために言ってるの!」

「はいはい、わかったよ。本当に蘭はモカの事が好きだなく。今日家に帰ったらモカにそのこと伝えといてやるから」

「違うって!!その確かにモカといる時間は物足りないかもだけど、あたしが心配してるのバンドの事!!練習時間少ないと、本番で変なミスしたら恥ずかしいでしょ!!」

蘭は顔を真っ赤っかにして俺に詰め寄って来る。でも、さらっと物足りないって本音言ってるし。もう面白いな、蘭は。

「わかったわかった。とりあえず蘭の今の姿の写真撮ってモカに送るから。はいピース」

「やめて!絶対撮らないで!」

「じゃあ俺も一緒に写ってやろうか？」

「そういう問題じゃないし!」

「お待たせく、蘭ちゃんコーヒー……どうしたの？」

「あ、つぐちゃん見てみる。蘭のこのデレっぷり。いやー、俺を呼んだ理由がそれだって言ってくれたら良かったのにさ」

「だから、違うって言ってるでしょ!!」

「えっと、なんだかよくわからないけど、楽しそうだね蘭ちゃん」

「楽しくない!!ラテも撮らないでってば!」

「つぐちゃんも一緒に写ろうぜ、ほら」

「あ、うん!」

「つぐみも乗らなくていいから!!」

「やっぱりデレた蘭は可愛いな。モカには負けるけどそれでも可愛いと思う。」

「お兄ちゃん」

「ん？どうした？」

その日の夜。家に帰った俺は速攻風呂に入って、モカと一緒に飯を食った後、自室で勉強をしていた。蘭の可愛い姿撮れたし、今日は本当にいい日だった。

「今日は一緒に寝よう」

「おう。いいぞー………つてえっ？」

「わーい。じゃあ枕持って来るね」

………なに突然？もしかして俺今日死ぬのか？蘭の可愛い姿撮れただけでなく、モカと一緒に寝ようなんて言うなんて。

「いや待って落ち着け俺。きつとあれだ。今日は俺の運勢が大吉。もしくは一位だったんだろう」

とりあえず勉強道具をしまつて、俺も寝間着に着替えて、よし準備完了!!

「お待たせ。いやー、待たせちゃったね」

「お、おう」

「ん？お兄ちゃん緊張してるの？」

「い、いや、そういうわけじゃない。ただびっくりしてるだけだ。モカがいきなり変なこと言うから」

「あたしは普通だよ。さ、早く早く」

モカがベッドの中に入るよう手招きをするのでそれに従って俺が先にベッドの中に入る。

「よ、よし。いいぞ」

「じゃあ、お邪魔します」

一言言ったモカはそのまま布団の中に入って来る。2人じゃちよつと狭いけど、そのおかげで密着度が高まって俺の心臓がバクバクいつてるのがわかった。

「も、モカ。お前風呂上がりか？」

「そうだよー」

やばいな。通りでモカの体温があつたかいわけだ。それに風呂上がりだと、匂いとかあつたかさとかダイレクトに伝わって来る。この前のモカの昼寝していた時とはわけが違うぞ。

それに向かい合つて寝転んでるからそれも相まって、モカの顔がこんなにすぐ近くにあるのもダメだ。

「えへへへ、お兄ちゃんあつたかいね〜」

「ま、まあ、そりやそうだよ」

「心臓もバクバク言ってるよー。やっぱり緊張してるでしょ」

「くっ……………当たり前だろ。いきなりこんな事されて……………なんのご褒美だ!!」

「モカちゃんからのご褒美なのだよ」

素敵すぎるご褒美、ありがとうございます!!じゃなかった。

「で、なんでいきなりこんな事を？」

「んーとね、聞いたよひーちゃんから。この前カフェでケーキとかご馳走したって」

「あ、ああ。したなうん。それがどうした？」

「ひーちゃんがそのお礼に、『あたしじや満足させられないだろうから、モカが代わりに』ご褒美をあげて』って言うから」

「それでこれか？」

「そーだよ。ひーちゃんとトモちゃんとゼーんぶ決めただ。気持ちいいでしょ？」

「もう死んでもいいと思えるくらいに気持ちがいいです」

「おおー。予想以上の反応だ」

ひまりグツジョブ!!これがまた味わえるならケーキ何個でも奢つてやる!!

「あとね、蘭からも連絡があつて〜」

「蘭？なんでだ？」

「今日の昼に蘭が辱めを受けたから仕返しして欲しいって。だからお兄ちゃん、こっち向いて〜」

「こっち？」

「上だよ、上〜」

なにがあるんだろう、と思いつつ上を見上げると、こっそりと携帯を構えていたモカがシャッターボタンを押した。

「これでよし。後で蘭に写真送つとくね。モカちゃんと一緒に添い寝して、顔真つ赤にしてにやけてるお兄ちゃんの顔〜」

「いや待て！それはダメだ！それがA f t e r g l o w内で拡散したら俺死んじまう!!」

「だいじよーぶ。あたしも一緒に写ってるから〜」

「そうか。なら問題ない……って事もないだろ！いや、おかしいぞそれ!!」

「お兄ちゃんはあたしと一緒に写真撮るのいやー？」

「いや、ぜんっぜん嫌じゃないぞ。むしろ嬉しい。モカとの思い出が増えるからな」

「なら何の問題もないよー」

「よくな……いや、いつか。もう今更だろ」
「でしよ〜？」

あー、まあいいか。モカとの思い出写真が増えた事だし。何よりこっちやってモカと一緒に寝れる事が俺の中でどれだけ幸せなことか。

「モカちゃんはそろそろ眠たくなってきたので、おやすみしようと思いまーす」

「あー、うん。そうだな。じゃあ電気消すぞ」

「はーい。あ、1つ忘れてた。お兄ちゃん〜」

「ん？なんだ？」

電気を消そうとして体を起こすと、モカも体を起こして、そして俺の耳元で囁いた。

「お兄ちゃん、ラブ〜♡」

「……………」

そのままモカはクスツと笑った後、固まった俺の代わりに電気を消して、起こしていた俺の体も一緒に倒した。

「じゃあ、おやすみお兄ちゃん〜」

「……………」

おやすみ、の一言も言えずに俺は硬直してしまっていた。まさか最後の最後であんな事を言ってくるとは予想できず、俺はその日、モカが最後に囁いた言葉が頭と耳の中で一生こだまして眠る事ができなかった。

第5話 風邪引きモカと葛藤するラテ

「ねえねえ、お兄ちゃん〜」

「ん？どうしたモカ……………」

「風邪ひいた〜。だるいよ〜」

「寝ろ！すぐに寝ろ！」

ある日。俺は家で掃除や洗濯といった家事をしている時。俺の愛しの妹であるモカは顔を真っ赤にして、ふらふらな足取りで2階から降りてきた。

「どうしたいきなり!？」

「昨日お風呂はいった後に、髪の毛乾かさずに寝ちやつたからかも……………」

「バカ！ああもう！今すぐ部屋戻れ！」

「もう歩けないよ〜。連れてって〜」

「仕方ないな、もう!!」

なら何故下に降りてきたんだ、と突っ込みたいところだがそんな事を言っている場合ではなく、だるそうにして俺にもたれかかるモカを抱えてモカの部屋に向かった。

「わーい、お姫様抱っこだ〜」

「言ってる場合か！早く病院に…………って今日は日曜日か。とりあえず布団入ってあったかくして待ってろ。今日はつきつきりで看病してやるから」

「やったー。ありがとう、お兄ちゃん」

「どういたしまして！」

折角の休日だというのに風邪をひくとはモカも運が悪い。とりあえず濡れタオルを用意して、その後なにが食べやすいものでも作って。

「ほら、モカ。とりあえずこれおでこにおけ。で、体温計で熱計れ。どこが辛い？食欲はあるのか？何か欲しいものはあるか？」

濡れタオルをおでこにおいて、体温計を口に咥えさせながら、俺はモカに尋ねる。

「そんなにいつぺんに聞かれても答えられないよー」

「じゃあーつずつ聞く。どこが辛い?」

「頭と喉と体の節々が痛い」

「食欲は?」

「あるー」

「何か欲しいものは?」

「パン」

「寝込んでるんだからそれは遠慮しろ」

「ケチ」

「文句言わない!」

いつも通り答えてるように見えるけど、息切らせてるみたいだ。ただの風邪のように見えるけど、これ結構しんどいんじゃないのか?

「つと、体温計なつたか。何度だ?」

「38度3分だねー」

「完全に風邪だな。今日バンドの練習は?」

「……あつたような気がする」

「なんで曖昧なんだよ。まあいいや。それは俺が聞いといてやるからモカはとりあえず寝とけ。ついでに昼ごはん作ってくるけど、何がいい?」

「パン」

「それはダメってさっき言った!!っていうか、作れるか!」

「む。じゃあお兄ちゃん特製のおかゆがいい」

「おかゆだな。わかった。すぐ作ってくるからちよつと待ってろ」

「はーい」

俺はすぐさま下に降りておかゆの準備をする。出来る間に電話して、今日バンドの練習があるか聞かないと。

「……蘭でいいか」

鍋に火を入れた後、俺は携帯を手にとって蘭に電話をかけた。

『……………もしもし?』

「お、蘭?今時間いいか?」

『大丈夫だけど。珍しいね、ラテから電話かけてくるなんて』

「ちよつとな。今日はバンドの練習あるのか？」

『あるよ。ちようど今スタジオに向かっているとところ』

「ああ、そうなのか。実はさ、モカは風邪引いちまって。熱も出てるから今日バンドの練習行けないんだ」

『モカが？それも珍しい。大丈夫なの？』

「今日は病院空いてないから詳しいことはわからないけど、多分ただの風邪だと思う。昨日風呂入った後髪の毛乾かさずに寝たとか言ってたし」

『そうなんだ。わかった、みんなにはあたしから伝えておく』

「頼んだ。じゃあそういうことだから」

『了解。モカにお大事になって伝えといて』

「了解。じゃな」

やっぱりあったのか。当日のことなのに、把握してないってあいつは本当に抜けてるな。まあそれがモカのいいところでもあるんだろうけど。

「掃除途中だけど仕方がないか。モカのためだし、また今度ちゃんとやろう」

「モカー？…入るぞ〜？」

「はい」

部屋に入るとモカはおとなしく布団に入っていたようだ。まあ、熱出してるのに本読んだりとかはしないだろうけど。

「おかげできたぞ。あと薬も持ってきた。体起こせるか？」

「ん〜…………無理」

「早いな。仕方ない」

おかゆを乗せたお盆を机の上に置き、体を起こせないというモカ（本当かは知らない）を優しく起こす。

「はい、おかゆだ。自分で食べれそうか？」

「お兄ちゃんに食べさせて欲しいな〜」

「…………モカ、風邪っていうのを言い訳にして、俺に甘えてるんじゃないだろうな？」

「ひどーい。モカちゃんは頑張ってるんだけど、無理だったからお兄ちゃんにお願いしてるんだよ〜」

「…………それにしても挑戦する気もないようにしか俺にはみえないんだが？」

「それにねー、モカちゃんはお兄ちゃんが大好きだからこうやって甘えなくなるんだよ〜」

「そ！そんな言葉で俺を惑わそうたってそうはいかないんだからな！はい、あーん」

「あーん」

くそ。モカが俺のこと大好きなんて言うから自然とモカのお口の中にレンジで搦ったおかゆを持って行ってしまった。なんて巧妙な罠なんだ。

「うまいか？」

「うん、美味しいよ〜」

「それは良かった。食べれるだけでいいからな。しっかり食べるんだぞ？」

「はーい」

その後モカはおかゆを食べ続け、瞬間に鍋の中にあっただおかゆは空っぽになってしまった。

「ぐちそうさま〜」

「食欲はあるんだな。なら大丈夫だろう。ほら、薬。粉薬は嫌がるかと思っ、錠剤にしておいたぞ」

「さすがお兄ちゃん、よくわかっていらっしやいますな〜」

「当然。モカのことならなんでも分かるぞ俺は。とりあえず、それ飲んだら1度寝るんだぞ。俺はリビングにいるから。何か用があるん

だったら、電話でもなんでもしてくれたらいいからな」

それじゃあ、と言ってお盆を持って部屋を出ようとする、モカは俺の服の裾を掴んで俺が出て行くのを止めた。

「モカ？」

「今日はずきつきりで看病してくれるんだよね？」

「ん？まあ」

「言ったよねー？だから、モカちゃんは今汗かいて気持ち悪いから、体拭いて〜」

「……………はい？」

「このままじゃ気持ち悪くて眠れない〜」

いやいやいや。何を言ってるんだ。確かに言った。つきつきりで看病するって言った。でも俺もモカももう高校生だぞ。

「あのモカ？体ってどこまで？」

「全部〜」

「いやダメだろ。後ろなら百歩譲ってオツケーだとしても前はダメだろ」

「だいじょーぶ。兄妹だから〜」

「ああそうだな。兄妹だもんな、ってなるか！」

「モカちゃんが気にしないからだいじょーぶ」

「いや、大丈夫じゃない。絶対大丈夫じゃない」

「むく…………もし体拭いてくれるなら、あたしも安心して寝る事が出来るんだけどなく？」

「くっ…………」

ダメだ。モカは何があっても引く気がない。いや、モカの体を見たくないと言ったら嘘になる。当然見たい。でも兄としてそれはいいのか？絶対ダメなことだと思う。でも、モカは引かないし。でも、あんなこと言われたら断れないし…………

「お兄ちゃん、お願い…………」

「お、俺も出来るならしてあげたいんだぞ。でも、ほら。俺たちもう立派に成長してるし。出るところも出てるんだし…………」

「おねがい…………」

「ず、ずるいぞ。そんな顔でお願いしてくるなんて……」

涙目なんてずるい。まるで弱っている小動物のような表情だ。弱っているのは事実だけど。ていうか、可愛い。モカの涙目超可愛い。

「ううー……」

「……ああもう！わかったよ。ただし後ろだけだ。前は自分でふくんだぞー！」

「やった〜」

「はあ……とりあえず先に食器を水につけてくるから。その間に着替えの準備をしとけ」

「はーい。ありがとうお兄ちゃん〜」

本当に俺は……モカに弱い。いや、風邪をひいてるからかわいそうだと思う気持ちがあるからなのだろう。でもそれを踏まえたとしても俺はモカに弱い。いや仕方ない。モカが可愛すぎるのがいけないんだ。

部屋を出て、食器を水につけた俺は、風呂場に置いてある桶にお湯を入れてタオルをつけた。そしてそれを持ってモカの部屋に戻る。

「モカは妹。モカは妹。モカは可愛い妹。変な気を起こしてはダメだ。モカは妹。モカは妹。モカは可愛い妹。よし!!」

自己暗示のようなものをかけ、俺は部屋のドアを開けた。部屋に入ると、準備万端のようで、パジャマを脱いで、下着姿になったモカが俺に背を向けてベッドの上に座っていた。いつもは見えない白くて、傷1つない綺麗な肌。やばい、本当に緊張してきた。

「お兄ちゃん、よろしく〜」

「よ、よし。じゃあ拭くぞ」

桶の中に入れていたタオルを絞って、そのままモカの体を拭いていく。最初は右肩、下がるように腕、手を優しく拭いていく。

「い、痛くないか？」

「だいじよーぶ〜」

一通り終わると、今度は左肩にいき、また下がるようにして拭いていく。にしても、モカの体ってスベスベだな。ザ、女の子って感じの

体をしている。流石は俺の妹。

「つて、俺は何考えてるんだ！」

「お兄ちゃん、どうしたの〜？」

「あ、いや、なんでもない……………よし、じゃあ次は背中を拭いていくぞ」
「はい」

今度は背中、肩甲骨のあたりから下に下がるようにして拭いていく。

「気持ちいい〜」

「そ、それは良かった……………」

その後、モカの体を極力見ないようにして、体を拭いていき、俺が拭ける部分は全て終わらせた。

「よし。これでいいだろ。あとは自分でできるだろ？」

「うん。だいじょーぶ〜」

「よ、よし。なら俺は部屋から出るからな」

やばい。心臓が物凄くドキドキしている。妹の体に興奮するなんて俺ただの変態じゃん。

「じゃ、じゃあ俺は下にいるから。じゃあな」

この気持ちをモカにバレないように、急いで部屋の扉を開けて出ようとした、瞬間。

「モカ。今日練習休みになったからみんなでお見舞いに……………つて」

「モカちゃん、風邪大丈夫!? あったかくしてないと悪化しちゃう……………あれ？」

……………オーケー。状況を整理しよう。今この部屋にいるのは、部屋から出ようとした俺と体を拭くために下着姿でベッドに座るモカ。そして、俺が開ける前に、部屋に入ろうとして扉を開けた蘭とつぐちゃん。

「……………」

「……………」

「……………」

「蘭、どしたの〜？」

あまりにいきなりのごとで固まる俺と蘭とつぐちゃん。唯一モカだけが正常に機能していた。

「えっと、その、蘭。つぐちゃん。これには訳があるんだけど、聞いてくれる？」

「聞くと思ってるの、変態」

「えっと……いくらなんでもこれは流石にちよつと、あたしもフオローできないかな、って」

「ですよ〜」

その後。モカの看病はつぐちゃんとひまりちゃんともう1人の幼馴染に任せ、俺は1階のリビングで蘭にこっそり絞られた。

第6話 喧嘩する兄妹と頼りになる姉貴

「あのさく、お兄ちゃん?」

「んー?」

「冷蔵庫に入ってたプリン知らない?」

学校から帰ってきた平日の夜。晩御飯を食べた後リビングでゴロゴロしている、モカがそんなことを聞いてきた。

「ああ、それならさつき俺が食ったぞ」

「えっ……?」

「いやー、手前に普通に置いてあるから食っていいものかと思って食べちゃった」

「酷いー」

いつもと口調は変わらない。でも俺にはわかる。モカは少し怒っている。そう聞こえる。

「あれ、ひーちゃんがあたしのために買ってくれたちよつと豪華なやつだったのに」

「え、あ、ごめん。そうとは知らなくて…」

「サイテーだよ。人の物を勝手に食べるなんて」

「本当に悪かったよ。でも、モカだってそんなに大切なものなら、それがわかるように名前とか書いておくべきだったんじゃないのか?」

「でも、それを言うならプリン食べていい? って聞くとこるじやないの? 冷蔵庫にプリン1個しか入ってなかったんだから」

「うっ………」

返す言葉もない。確認を怠らなかつた俺が悪い。

「ごめんなさい………」

「許さないー。お兄ちゃんのばーか」

モカが暴言を吐くなんて珍しい。こんな滅多にない事だ。相当怒ってるみたいだ。

「ごめんって! 今度同じやつ買ってやるから」

「そうしたら許してもらえる、みたいな感じもなんか気に入らない。お兄ちゃんのおんぼんたん」

今回のことは全部俺が悪い。それは認める。でもそこまで言われるのはなんとというか腹立たしくなった。

「…………おい。確かに勝手に食べたのは悪かったけど、そこまで言わなくてもいいんじゃないか？」

「だって勝手に食べたお兄ちゃんが悪いんだもん〜」

「そうだよ。その上で俺はちゃんと謝ってるだろ。何が気に入らないんだよ」

「さっきみたいな同じものを買ってきたら許してもらえと思うてるところだよ」

「仕方ないだろ！食後になんか食いたくなっただから！」

「ほらまたそうやって言い訳する〜」

「モカが根に持って許してくれないからだろ！」

「だって事実だもん〜」

俺たちの言い合いはどんどんヒートアップしていつている。それこそ止まらないレベルまで。

「それにしたってだろ。たかがプリン1個食べただけでそんなにネチネチ言うモカもどうかと思うぞ!!」

「ひーちゃんが買ってくれたものだもん。お兄ちゃんがプリン食べなかつたらあたしもこんなに怒ってないのに〜」

「ほら。そんなに大切なものだったんだろ？だったらやつぱり自分のって名前書かなかつたモカも悪い!!」

「あたしは悪くないもん。悪いのはお兄ちゃんだよ」

「そんな事ない。全部の全部俺が悪いわけじゃない。4割くらいはモカの責任だ!」

「むく。お兄ちゃんの分からず屋〜」

「ああ。分からず屋で結構だ!」

「もういい。お兄ちゃんがちゃんと悪いのを認めないまで、お兄ちゃんと口聞かないから〜」

「ああそうかい!じゃあ俺だってモカがちよつとでも非があるって思わない限り、俺も口聞かないからな!!」

モカはそれだけ言うと、部屋に戻っていった。俺もイライラしてい

るせいか、その日はシャワーだけ浴びて自室に戻りすぐに寝た。

「ていう事があったんだよ。どうしよう、巴」

「いやまあ、なんというか……」

その次の日。朝起きて、怒りが冷めた俺はちゃんとモカに謝ろうとしたが、モカは自室から出てこようとせず結局朝は何も話せなかった。

「どうしよう……このままモカと一生話せない日々が続いたら。俺の癒し……いや、俺の全てがなくなってしまおう」

「気に病みすぎだ。そこまでする事なんてあるわけないだろ」

その日の放課後。俺はある人物に相談に乗ってもらうために、その人物を電話で呼び出し、今はファミレスにいる。

「だって……モカがあそこまで怒ってるの俺初めて見たし……もうだめだ。どうしたらいいのかわからない」

「まあ、今日はモカ、学校にも来なかったしな。あいつも相当気にしてるんじゃないのか？」

その人物の名前は宇田川巴。モカの幼馴染にしてモカの組んでいくバンドのドラム担当。お姉さん……というか姉貴気質な性格で、幼馴染5人をよく引つ張る頼りになる人物。俺も悩みがあるときはいつも巴に聞いてもらっている。

「ああもう！なんで俺昨日モカに怒ったんだろ。どう考えても悪いの俺なのに……」

「アタシはあまりあことは喧嘩しないからその気持ちわからないな」

あこ。というのは巴の妹の宇田川あこという女の子だ。巴と同じくバンドを組んでいてドラムをしているらしい。

「モカ……モカー！こんなダメな兄貴を許してくれ……」

「落ち着けて。ちゃんと自分の気持ちを伝えたらモカもわかってくれるはずだ」

「そうかな……昨日みたいに喧嘩になるだけじゃないかな？」

「モカだって昨日言いすぎた、ってなってるはずだ。ちゃんと話し合えばあいつも許してくれるよ」

「だといいけど」

モカと話さずに……いや、モカの顔を見る事ができずに学校行くのがどれだけ辛いか身にしてみた。モカがいるから俺は学校に通えている。俺にとつてモカはそこまでの存在なんだ。

「アタシからもあとでモカにメールして聞いというてやるから元気出せ。なっ?」

「うう………巴。ありがとう」

巴がいて本当に良かった。こんなに頼りになる姉貴文は絶対ないよ。俺より年下だけど。

「そういえば、ひまりちゃんがモカに買ったっていうプリン。どこで売ってるか知らない?物で許してもらおう、なんては思っていないけど、やっぱり食った俺が悪いし、誠意は見せないという思ってるんだけど」

「ん?ああ。それならモカのバイト先のコンビニで売ってるぞ。そこにある一番高いやつだ」

「モカがあれだけ言っていたプリンの売ってる場所がコンビニかよ。なんか拍子抜けだな」

「まあ、ひまりセレクトだからな。ひまりはコンビニのスイーツ大好きだし」

ひまりの好物はコンビニスイーツだ。俺は食っていると飽きてくるのでその気持ちはわからないが。

「そもそもなんでひまりちゃんはそのプリンをモカに買って行ったんだ?」

「モカが昨日頑張ってたんだよ。バンドの練習。ライブの日が近づいてるからだろうな。それを見たひまりがモカにご褒美だ、って」

「………つまり俺はモカの頑張りをも破壊したって事になるのか

？」

「え？いや、えっと」

「だってそうだよな。モカの頑張ったご褒美に買ったプリンを俺が食べただけで。つまり、モカの頑張りは俺が食べたって事だ」

「いや、それはなんか違うと思うぞ」

「ごめんモカー！！許してー！！」

「ファミレスで叫ぶな！店に迷惑だ！っていうか、こつちが恥ずかしくなるんだよ！！」

周りを見ると、なんだなんだという感じで俺達が座る席をじつと見る客がたくさんいた。

「す、すいません」

「つたく。とにかく、今日は帰ったらちゃんとモカと話し合う事。モカ自身も昨日のこと絶対気にしてるから許してくれないわけがない」

「は、はいー！」

「だから、ちゃんも誠意を見せて、モカに謝る！いいな？」

「り、了解です姉貴！！」

「誰が姉貴だ！！」

いつも思う。巴は誰よりも姉貴をしているなど。

「ただいま」

その後も巴としばらく話し、帰るのは19時くらいになった。俺がずっとモカの話聞いてもらっていただけだったが。家に帰ると、いるといつも出迎えてくれるモカがいない。いない日もあるけど、いるとわかっている日に出迎えてもらえないのがこんなに辛いと思わなかった。

「落ち着け。落ち着け俺。一応ひまりちゃんが買ったっていうプリン

も買った。反省文も考えた。だから大丈夫。大丈夫なはずだ」

荷物を置いて2階に向かう。目指すはモカの部屋へ。階段を上る足が重たく感じる。1段1段にズシン、ズシンと重みを感じるようだ。

「よ、よし」

なんとかモカの部屋の前までたどり着き、深呼吸する。唾を1度ゴクリ、と飲み込み部屋のドアをノックした。

「も、モカ？いるか？」

部屋の前で尋ねるが返事はない。あれ？おかしいな。家に靴はあったから絶対いるはずなんだけど。

「モカ？入るぞ……………っておうわっ!!」

確認のために部屋のドアを開けようとした瞬間、俺はドアノブに触れる前にドアは開いた。そして、何かの衝撃に襲われて俺はそのまま尻餅について倒れた。

「いつつ……………なんだいきなり……………ってモカ？」

「……………」

どうやらモカが俺に飛びついてきたようだ。モカは倒れたままの俺の体をぎゅつと抱きしめて離してくれない。

「おーい、どうしたんだ？モカ？」

「……………」

「お、おい。まさかお前、今で頭打ったんじゃないんだろうな？おい！」

「あ、だいじょーぶ」

「大丈夫なんかい！ていうか、意識あったのかよ!!」

本気で意識失ったんじゃないかと心配したその時、モカはいつも通りの表情で俺に答えた。無駄に心配させるやつだ、本当に。

「それよりお兄ちゃん、何かあたしに用があったんじゃないの？」

「あ、ああ。そうだった。とりあえず1回離れてくれないか？」

「いや」

「えっ？」

「話しならこのままでもできるでしょー？」

「いや、まあそうだけど。このまだとちやんと言えないから」

「あたしは気にしないからだいじょぶだよ。お兄ちゃん、どうぞ」

そう言ってモカは俺の胸板に頭を乗せた。後ろに回したても離してくれない。本当にこのまま話をしろって言うのかこいつは。

「はあ……………モカ」

「なーに〜?」

「昨日は悪かった！俺が勝手にプリン食ったのに、俺を罵倒するモカを見て、イラつとしたせいでお前に逆ギレしちゃった。本当にごめん!!」

「いいよ。許してあげる〜」

「あれ、お前がひまりちゃんに買ってもらったものなんだろう?それなのに、俺勝手にたべて……………つて、えっ?今なんて?」

「許してあげるよ。あたしもプリン勝手に食べられて、ちよつと態度悪くしちゃったし、ごめんなさい」

「へ、あ、うん。でさ、これ。昨日俺が食べたっていうプリン。これで許してもらおうなんて思わないけど」

「わ〜い、ありがとうお兄ちゃん。あとモカちゃんはもうお兄ちゃんのことを許したんだよ〜」

ようやく起き上がったモカはプリンを手に持ってそれを机の上に置きに行つて、俺を手招きした。

「お兄ちゃん〜」

「なんだ?」

「仲直りの印に、あたしのことギュツてして〜?」

「ギュツ?抱きしめてつてことか?」

「そう。あたしからはさつきしたから、今度はあたしにお兄ちゃんがする番〜」

「……………ああ。もちろんだ」

両腕をいっぱい広げて待つモカを俺はゆっくりと抱きしめた。手の片方を後ろに回して、もう片方はモカの後頭部に当てて。そのまま頭をゆっくりと撫でる。

「しあわせ〜」

「そうだな。俺もだよ。たった1日なのにモカに会えない日がこんなに辛いなんて思わなかったよ」

「あたしはそんな事なかったよ〜」

「へえ、そうなのか。じゃあさつきなんでモカは俺に飛びついてきたんだらうな?」

「何のこと〜?モカちゃんそんな事してないよ〜」

「いや。俺の頭の中でもう記憶したから」

おそらくモカも同じ気持ちだったんだらう。たった1日なのにその1日が会えないのがこんなに辛いんだと。だからモカは飛びついてきたんだらう。

「知らないよ〜。ねえねえ、お兄ちゃん〜?」

「なんだ?」

「あと30分くらいしたら、ご飯作ってね〜。お腹すいた〜」

「俺はあと1時間くらいしたらがいい」

「それはながすぎるよ〜」

いや、30分でも十分長いと思うんだが。

「あとは〜、今日は一緒に寝る事〜」

「ああ、わかった」

「お兄ちゃん」

「ん?」

「やっぱりなんでもない〜」

「なんだそりゃ」

無事に仲直りできたよかったが拍子抜けだった。俺の今日の葛藤は一体何だったんだらうか。

「まあいいか」

第7話　こき使われるラテと弄ばれるラテ

俺の妹、モカには幼馴染がいる。それも4人も。気が強い蘭、頑張り屋さんのつぐちゃん。甘いもの大好きひまりちゃん。姉貴気質な巴。モカも含め5人はバンドを組んでいても仲良しだ。軽い言い合いをしているところを見た事があっても喧嘩をしているところなど見た事がない。

まあ、そんなことはどうでもいい。この5人が揃うととても賑やかだ。笑いが絶えない。それは俺と一緒にいたとしても同じだ。でも……

「ねえねえお兄ちゃん。これ持って〜」

「これもお願い、ラテ」

「あ、これもお願いしますラテさん！ほら、つぐも持ってもらいなよ！」

「いや、でもラテ君大変そうだし。よかつたら手伝おうか？」

「つぐは本当優しいな。あ、ラテ。これもお願いな」

でも、この5人と買い物に行くのはとても辛い。何故なら、1人だけ男である俺がいつも荷物持ちをさせられる事となるから。

「なあ、お前ら。これはいくらなんでもやりすぎじゃねえのか？いじめだよな？なあこれいじめだよな！」

「いいじゃないですかラテさん！こんなに可愛い女の子と一緒に買い物に行けるんですよ！」

「ばっか！モカが可愛いのは認める！モカの荷物を持ってやるならいくらでもしてやるが他のやつ荷物を持ってやる義理はない！」

「あいつかわらず、引くレベルのシスコン。しかも遠回しにモカ以外

の私達は可愛くないって言ってるように聞こえます」

俺の両手には10を超える紙袋を持たされている。今日は全員休日でバンド練習も休みという事で6人でシヨツピングに来ているわけだが。まあ当然のごとく俺は荷物持ちをさせられている。

「もうみんな。ラテ君がいるからって頼りすぎだよ。ラテくん貸して。私も少し持つから」

「つぐちゃん……まじやさしー。ほら、お前らもつぐちゃんを見習え！この優しくしてスーパーツぐってるつぐちゃんを!!」

「お兄ちゃん、つぐってるの使い方間違ってるよ」

「え、まじ?」

「あの、つぐってるって?」

説明しよう。つぐってるとは。モカが考えた頑張るのつぐちゃんバージョンだ。多分これであってるはず。知らないけど。

「男のくせに泣き言言うなんて、恥ずかしくないの、ラテ?」

「買う物全部俺に持たせるような鬼女に言われたくねえよ蘭」

「でもまあ、流石に持たせすぎだな。アタシも少し持つよ」

「ありがとう巴!」

流石に見るに堪えなかったのか。俺も正直辛いところもあり、荷物の半分を巴とつぐちゃんが分けて、俺から受け取った。え、モカの荷物?もちろん俺が持つてるぞ。モカの荷物が盗まれたら大変だからな。俺が肌身離さず持つていることにした。

「ねえねえラテさん!私気になることがあるんです!」

「なんだ?」

しばらく次の店を探しつつ歩いていると前を歩くひまりちゃんがクルッと俺の方を向いた。後ろ向きで歩くのは危ないと思うんだが……

「ラテさんって、モカを除いた私達4人だったら誰が1番好きですか?」

「モカ」

「モカを除いたって言ったでしょ!も〜!」

いや、モカを除くっていう選択肢とか俺の中にないんだけど。俺に

好みの女性を聞くなら普通に聞くといい。全部モカって答えるから。「ひまり、このシスコンに何を言っても無駄だよ。頭の中の8割がモカで埋まつてるんだから」

「おい蘭。俺のこと褒めてんのか？」

「んなわけないでしょ、キモい」

てつきり褒め言葉かと思つて勘違いしてしまった。

「お兄ちゃんはホントあたしのこと好きだよね」

「モカもでしょ」

「とーぜんく。ラブ♡だよ」

「俺もモカのこと、ラブ♡だぞ」

「……………」

「ごめんなさい。冗談ですから。モカのごことは確かに好きだけど、今のラブは冗談だからそんなに引かないくださいお願いします」

俺がモカの真似をすると、モカを除く4人が俺の事を蔑んだ目で見ながら、遠ざかつて行った。まさかつぐちゃんまでそんな顔をするなんて……

「ま、まあいいです！では、もう1度聞きます。ラテさんは私達の中で誰が1番好みですか？」

「そう言われてもなあ……………」

蘭は気が強いけど、デレたら可愛いし。何より自分の言ったことでたまに自爆するところが面白い。プレゼントとか照れながらも渡してくれそう。

ひまりちゃんはムードメーカー的存在で感情豊か。一緒にいると絶対退屈しない。一緒に出かけると、行き当たりばつたりになりそう。

つぐちゃんとは頑張り屋さんでいつもその頑張る姿を見て癒されることができる。デートプランとか必死に考えてくれそう。

巴は俺よりしっかりしているし、年上の俺でも頼りたくなる何か持っていて、かっこいい。年上でも率先して引っ張ってくれそうだな。

ついでに言うとモカは……………いや、説明すると収まりが効かない

からやめておこう。

「誰か1人、だなんて無理だな。選べない。みんな魅力的で可愛いから。俺にはもつたいない存在だよ」

「つつ……!!」

「ふええっ!?!」

「ちよ、ちよっとラテ君!?!」

「ま、まさかシスコンのラテの口からそんな言葉が出るなんて……」

蘭、ひまりちゃん、つぐちゃん、巴の順でそれぞれ違った反応を見せている。でも1つだけ同じ点があった。

「おおう、みんな顔真っ赤だ」

「本当だ。トマトみたいになってる」

そう。4人とも顔を真っ赤にしていたのだ。そんな変なことを言ったつもりはないんだが、何か間違っていたのだろうか？

「ひ、ひまりちゃん!今度はあっちの服屋に行こ!あの服なんかひまりちゃんにとっても似合いそうだよ!」

「へっ?あ、うんそうだね!行こうつぐ!」

「あ、アタシ達も行こうぜ蘭!ほら、そこに気になるアクセサリーがあるんだよ」

「う、うん、そうだね。あたしも欲しいのがあったんだ」

俺とモカを除く4人がそれぞれ分かれて違う店に入って行った。

「なあ、モカ?」

「ん?」

「俺なんか変なこと言ったか?」

「知らなーい。お兄ちゃん、あたしたちも行きましょー」

「ああ………ってなんで腕組むんだ?」

「なんとなくだよー。いや?」

「いや、全く。むしろ歓迎する」

何を思ったのか、モカは俺の荷物を持つのを邪魔にならない程度に俺の腕を取って歩き出した。本当にどうしたんだろう、みんな。

「はあ、まさかラテ君の口からあんな言葉が出てくるなんて」

「だなー。あの返しは流石に予想外だったよ」

「ラテさんつてもしかしたら天然のタラシなのかも！」

「そんなわけではないでしょ。だってあのシスコンだよ？」

シヨツピングの休憩中。俺たち6人はひと段落して近くにあったカフェで休憩していた。何故か、俺とモカ以外の4人が隣のテーブル席に座り、俺とモカが2人でテーブルをもう1つ使うという事になった。みんなと一緒に座った方が楽しいのに。

「ねえ、お兄ちゃん。あーんして〜」

「ん？いいぞ。ほら、あーん」

「あーん。ん〜、おいしく〜」

モカに俺の頼んだケーキを食べさせてあげる。側から見たらこれはカップルに見えるのだろうか。いや、絶対見えるな。だってほら、周りからの視線が痛いもん。あそこにいる男性店員なんて唇から血が滲むほど歯をくいしばってるし。

「あんな事平気でしてるんだよ？モカ以外の女の子に興味あるわけない」

「でも気にならない？私達の中の誰かがラテさんを誘惑したらどうなるかって」

「それは……………気になるね」

「ああ。確かに気になる」

隣の席で一体何をこそこそ話してるんだ？物凄く気になるんだけど。まあいいか。モカが隣にいてくれるだけで俺は幸せだ。

「はいお兄ちゃん。あーん」

「あーん。んー、うまいぞモカ。ありがとな」

「えへへ〜」

お返しに俺にケーキを食べさせてくれたモカの頭を撫でると、唇から血を滲ませていた男性店員が走って飛び出して行った。

「でも、その役って誰がするの?」

「それは……じゃんけん?」

「それ、無理やりやらされる感じになるからヤダ。ていうか、あたしはやりたくない」

「じゃあ、蘭は抜きねー。巴はどうする?」

「んー。アタシもパスかな。そういうのって苦手だし」

「じゃあ私がつぐだね。どうする?」

「えっと、私もどうやって誘惑すればいいかわからないから、ひまりちゃんに任せるよ」

「何言ってるんだつぐ。ラテを誘惑する方法なんて簡単だぞ」

「えっ?」

「だって、あいつに……」

「えええっ?!?!」

なんだ?隣でつぐちゃんが大声をあげて叫んでるぞ?なにかあったのかな?

「む、無理無理。私には無理だよ」

「大丈夫。つぐならできるよ!」

「なんで私がする事前提に……ひまりちゃんがやってよ〜」

「今回はつぐに譲ってあげる。蘭も巴もそれでいいよね?」

「いいんじゃない、別に」

「ああ。つぐならきつと上手くできるさ」

「う、うーん……わ、わかった!私頑張ってみるね!」

今までこっそり話し合っていたのに、いきなりつぐちゃんが席を立ち、俺の向かい側の椅子に座った。

「えっと、つぐちゃん?どうかした?」

「すー、はー。すー、はー」

なんでこの子は深呼吸してるんだ?一体俺の目の前で何をしてもりなんだ?

「つぐぐ？どしたの〜？」

「モカの言う通り。一体『よし！』えっ？」

何か掛け声をあげて、フォークを持つと、ケーキを一口サイズに切ってそれを刺し、俺の口の方に持つてくる。

「お、おい。つぐちゃん？一体何を……」

「……………お、」

「お？」

「お兄ちゃん……………あーん」

「え……………」

目を潤ませ、必死な顔で俺の口にケーキを食べさせようとしてくれるつぐちゃん。そんなつぐちゃんを見て、心臓がドキツとするのと同じ時に俺は口を開けていた。

「あ、あーん」

口を開けた俺につぐちゃんはゆっくりケーキを口の中に入れた。食べたケーキを咀嚼すると、口の中いっぱい生クリームの甘い味が広がる。

「ど、どうかな、お兄ちゃん？」

「え、あ、えっと。すごく美味しい、です」

「そ、そっか。よかったー。あはは……………」

とつぎの不意打ちだったが、今の一口のケーキ。めちゃくちゃ美味しく感じた。理由は何か。つぐちゃんが食べさせてくれたから？つぐちゃんが一生懸命だったから。否、つぐちゃんが俺の事をお兄ちゃんと言いながら食べさせてくれたから！

「つぐちゃん！」

「は、はい!？」

「俺の妹になってください！」

「えっ？」

……………ってしまった!!何言っただ俺は！これじゃあただの変態じゃねえか!!!

「うわー、これは予想以上の反応」

「つぐだったからこの反応だったのかもな」

「うん。あたしとか巴だったらこうはいかなかった」

「お、お前ら！つぐちゃんになんて事させてんだ！おかげでちよつと……いや大分ときめいたじゃねえか！」

やばい。想像以上にやばかったぞ今の。もう理性が崩壊寸前なくらい！つぐちゃんもいきなり俺が変なこと言うから顔真っ赤にしてるし！

「ねえねえ、お兄ちゃん〜？」

「は！しまった！俺とした事がモカ以外の女の子にときめくなんて！！」

「お兄ちゃんの妹はあたしだけだよ〜？」

「うん。もちろんだ！わかってるぞ！」

「じゃあ他の子にうわきなんかしたらダメだよね〜？」

「え、いや、今のは浮気とかじゃなくて」

「うわきだよね〜？」

……あれ？モカもしかしくなくても怒ってる？

「お兄ちゃん、ちよつと正座して〜」

「いや、ここ、カフェ……」

「正座して〜？」

「……………はい」

俺は靴を脱いで、テーブル席の椅子の上でモカの方を向いて正座した。

「うーん…………結論。モカの目の前でやっちゃダメだったね」

「うん。あんなに怒ってるモカ見たことない」

「いつもと変わらないようにしか見えないんだが」

「妹…………私が…………ラテ君の妹…………」

「つぐもいきなり言われて壊れちゃった」

「とりあえず水飲ませてあげよう」

「だな。すいませーん、お冷〜つくださーい」

テーブルの椅子の上で正座してる俺とそれに対して俺に説教するモカ。顔を真っ赤にして壊れた機械のようになったつぐちゃん。それは介抱する3人というなんともカオスな状況が出来上がったし

まった。てか、元はと言えばこんなことしようとしたこいつらが悪い！

「お兄ちゃん、聞いているの〜？」

「はい、聞いてます！ごめんなさい！」

それから1時間。俺はモカの説教を聞き続けることとなり、罰として1週間、モカの部屋でモカと一緒に寝ることになった。……罰というかご褒美じゃね？

第8話 ご褒美の約束をするモカとご褒美を実行するモカ

「ああ、もう！わからん！」

「何叫んでるの、お兄ちゃん？」

「もうすぐ試験なんだよ。中間試験！」

試験が近づいていた。高校2年に上がって初めての中間試験。リビングで勉強しているとお風呂から上がってポカポカしているモカが話しかけてきた。

「あー、そういえばモカちゃんももうすぐ試験だったようなく？」

「呑気だなモカは」

「モカちゃんは優秀だから、勉強なんてしなくても全然大丈夫なんだよ〜」

そう。こう見えてもモカは成績優秀だ。こんなのにびりしていて、遅刻も良くするくせに成績は優秀なのだ。

「理不尽だ。俺もモカくらい勉強できたらこんなに苦労することはないのに」

「ふっふっふ〜」

冷凍庫からアイスを取り出し、俺の左隣にピタリとくつついてそれを食べ始めた。お風呂上がりだからとてもいい匂いがする。

「…………おいモカ。また髪の毛乾かしてないだろ」

「めんどくさいんだもん〜」

「はあ…………そのまま座つてろよ」

勉強を一旦中断して、俺は洗面所からドライヤーを持ってきた。

「ほら、髪の毛乾かしてやるからじっとしてろ」

「わ〜い」

モカの後ろに立って、アイスを食べるモカの頭をドライヤーで髪を傷つけないように優しく乾かしてあげる。

「気持ちいい〜。お兄ちゃんもつと〜」

「はいはい。これぐらいちゃんと自分でしろよ」

「お兄ちゃんがずっと一緒にいてくれるから、あたしはこうやってのんびりしてるだけでいいんだよ〜」

「俺はお前の下僕でも召使いでもない」

「知ってるよー。お兄ちゃんはあたしだけのお兄ちゃんだから〜」

「まったく。都合がいい時だけそういうこと言うんだから」

モカの髪は巴のように長くないから髪を乾かすのはそんなに時間がかからない。それでも決して手は抜かない。モカの外見に関わることだから。

「ほら、終わったぞ」

「ありがとう〜」

きつちり髪を乾かして俺はドライヤーを元の場所に戻して再び勉強に戻った。モカはアイスを食べ、俺は勉強する。俺たち以外誰もいないリビングで俺が書くペンの音と、時計のカチコチという音だけが響いている。

「ねえねえお兄ちゃん〜」

「んー?」

「ひまー。かまって〜」

「……今お前の目の前で勉強してる人間に頼むか普通」

アイスを食べ終えたモカはしばらく携帯をいじっていたが、暇になつたのか、俺の方に向けて抱きついてきた。

「お兄ちゃん、お願い〜」

「……そんなこと言われても俺は勉強をやめないからな」

俺は勉強道具を片付けて、モカの体を軽く持ち上げて俺の股の間に座らせた。俺は悪くない。こんなに可愛くおねだりするモカが悪い。

「これで成績下がったりでもしたらモカのせいだな」

「あたしは悪くないよー?集中できないお兄ちゃんが悪いんだよ」

「俺としては、成績が落ちるより、モカの残念な顔を見る方がよっぽど嫌だからな」

「おー、今のはキュンツってなったよ〜」

「それはどうも」

こうしてただモカと一緒に話すだけ。それだけなのに退屈なんて

言葉はどこかに吹っ飛んでしまう。素晴らしい。モカちゃん素晴らしいな。

「……つと、もう11時か。そろそろ寝るか?」

「そーだね〜」

よいしょー、と言いながらモカは立ち上がりリビングを出ようとする。

「……………あ、そうだ」

「ん?」

「もしお兄ちゃんが、テストで前のテストよりも成績が上がったら、モカちゃんがごほうびをあげるよ〜」

「ご褒美?」

「そうー。素敵なごほうびだよ〜」

それじゃあおやすみ〜と言ってモカはリビングを出て行った。前のテストよりいい点数を取ることでモカからのご褒美。何をしてくれるかわからないけど、モカのご褒美。

「……………死ぬ気で頑張ろう」

次の日から俺は変わった。モカからのご褒美という言葉信じて俺は寝る間も惜しみ、授業は全て寝ずに集中して聞いて。モカと一緒にいる時間をいつもより15分だけ削るといふ死にそうなる思いになりながらテストまでの2週間頑張った。そして……………

「見ろモカ！テストの点数上がったぞ！」

テスト返却日。俺はドキドキしながらもテスト用紙を受け取った。点数は前回の学年末テストより大幅20点を上げ、5科目すべて80点越えを叩き出した。ここまでいい点数を取ったのは初めてかもしれない。

「おおー、やるねー、お兄ちゃん」

「ふっふっふ。これもモカからのご褒美という言葉がここまでの成果をあげたんだ」

たった一言。その一言が俺をここまで強くしたんだ。そしてテストという壁を乗り越えたんだ。我ながら自分を褒めてやりたい。

「て事でモカ。お兄ちゃんここまで頑張ったんだし約束のご褒美を」

「いいよー。じゃあ先にお風呂はいつてきてねー」

「お風呂？なんで？」

「いいからいいからー」

なんのことかわからないが、モカのいう通りにして俺は変えの着替えを持って風呂場に向かった。

「一体何をくれるんだろう……」

湯船に浸かりながら何をくれるのか考えてみる。プレゼント？それともモカ自身が何かをしてくれるのか？マッサージとか、いつもより過激なスキンシップとか？

「……………まさかー！」

『お兄ちゃんお疲れ様。約束のごほうびだよー。お兄ちゃん、あたしを食べてー』

下着姿でベッドに仰向けになりながら寝転び、胸にケーキを乗せたモカがそんな事を言うなんて事……………

「だ、ダメだぞモカ。俺たち兄妹なんだ。そんなことができるわけないんだぞ！」

ああでも。想像するだけで理性が崩壊しそうだ。もし現実でそんな姿を目の当たりにしたら……………

「俺、死ぬな。社会的にも精神的にも肉体的にも」

「なんの話〜?」

「いや、モカが俺に食べて?なんて言うことかと思うと理性がモカ!?!」
「なーに〜?」

え、なに?なんでバスタオルを巻いたモカが俺の目の前にいるの?夢か。そうだこれは夢だ。じゃないと俺があんなに高い点数取れるわけない。こんな状況になるわけがない。

「モカ、ちよつと俺の両頬を引っ張ってくれ。夢なら覚めるはずだ」
「何言ってるの〜?」

両頬を引っ張ってくれるモカ。痛い。うん、夢じゃない。

「……………現実?」

「テストを頑張ったお兄ちゃんへのごほうびはー。モカちゃんが一緒にお風呂に入る事なんだよ」

「……………なぬ?」

一緒にお風呂?モカと?いつぶりだ?確かモカが中学1年終わりまでは入っていたから約2年ぶりになるのか?いや、3年なのか?ダメだ頭が回らない。

「お兄ちゃん、背中流してあげよーか〜?」

「ばっ!〜そこまでしなくてもいい!〜てか、これは流石に予想の斜め上だったよ!」

「遠慮しないでいいのに〜」

モカはシャワーで1度体を軽く流し、そして、俺に背を預けるようにして浴槽に浸かり出した。

「……………やばいなこれ」

「何が〜?」

「いやなんでもない」

成長したモカをまじまじと見るのはあれだが、こうしているとどうしても見えてしまう。バスタオルを巻いているとはいえ、育ったのがわかる胸。モカが風邪をひいた時とは違い、今は俺にもたれかかっているため、どうしても視点がそっちに行ってしまう。もし方が一向かい合って浴槽に浸かっていたら俺絶対死んでたな。

「ねえねえ、お兄ちゃん〜?」

「な、なんだ?」

「もつとギユってしてもいいんだよ?」

「んなつ!!」

「これは()ほうびなんだよ。お兄ちゃんがしたい事をしてくれていいんだよー」

ギユってする()抱きしめる。ただでさえ理性崩壊寸前、爆発しそうな俺にそんな甘い言葉をかけてくるなんて…………モカは俺を殺す気じゃないんだろうか。

「い、いや、いい。これ以上ギユってしたらのぼせちやいそうだし」
「んー?」

いや、できるならしたいよ?モカが妹じゃなく彼女だったら絶対してた。なんだったらそのまま襲う可能性まで考えられた。

「に、にしてもあれだな。俺もモカも育ったから浴槽がちよつと狭く感じるな?」

「前は2人で入っても余裕だったのにね」

昔もこうして入っていたが、あの時はこんな風に狭く感じることはなかったのに。やっぱり俺たち2人とも成長したってことなんだな。というかそろそろ限界かも。

「よ、よし!そろそろ上がるか!」

「お兄ちゃん、体洗ってないよね?」

「い、いや、それは」

「モカちゃんが洗ってしんぜよう」

「い、いやそれは!!」

「ダメなのー?」

「うっ……………」

そんな悲しそうな顔をしないでほしい。だって断れないから。そんなお腹空かしてる猫が見るような目で見られるのは本当断れないから!

「お願いします…………」

「はーん」

まずモカが湯船から上がり、そして、俺も上がって椅子に座る。モ

カはその後ろでおそらく膝立ちになっているはずだ。モカが後ろでボディソープを出す音が聞こえる。

(抑えろ！耐えろ俺！……こさえ乗りければ俺の勝ちだ！)

いつから勝ち負けの勝負になったか？そんなのは知らない。

「いくよ〜」

「お、おう！」

そうだ。モカだって流石に素手で俺の背中を洗うわけがない。つまり、タオルを使うはずだ。感触はタオル。問題ない。

「……………あれ？」

感触が違う。タオルじゃない。なんとというかぬるぬるしていて気持ちいい。

「も、モカ？」

「ん〜？」

「もしかしてお前、素手で洗ってる？」

「そうだよー。昔もこうして洗ってたから〜」

「そ、そうか。あ、はは……」

つまり今俺の背中に触れているのはタオルではなく、モカの手であって。このぬるぬるした感触はボディソープであってえっと……

「モカ」

「ん〜？」

「ごめん。もう無理だ。限界」

それだけ言うとうとう俺はそのまま前のめりで倒れた。いや、無理だから。ギリギリ保ってた理性も、そんなことされたら持つわけないから。

「お兄ちゃん〜？お兄ちゃん〜？」

ごめんモカ。ご褒美の途中なのに倒れてしまった。でも、1つだけ言わせてくれ。

「さいっこのの……ご褒美だったぞ」

それだけ言うとう俺の意識はどこか遠くに飛んで行ってしまった。

第9話 意地悪するラテと慰めるモカ

「ねえねえ、お兄ちゃん」

「んー？」

「ポツキー食べる？」

「また唐突だな……いただきます」

休日の夜、リビングでいつも通りにモカと一緒に過ごしている時、モカはいきなりポツキーを取り出した。

「じゃあ、はい」

「サンキュー」

モカはポツキーを箱から1袋出して、中身を開け、1本俺に手渡ししてくれた。

「おいしく？」

「ん。美味しいな」

「でしょー。モカちゃんが買ったポツキーだから」

「そうだな。モカが俺にくれる食べ物なんでも美味しいぞ。甘いものでも辛いものでもなんでもだ」

というか、モカが食べ物を与えるという行為を断ることができない。だって妹だもん。俺の可愛い妹が俺のために食べ物を与える。断れるわけがない。どれだけ満腹でもいただくぞ。

「モカちゃんは、辛いもの苦手だから、辛いものを買ったりする事はないんだよ」

「ああ、そういえばそうだったな」

こう見えてもモカは辛いものが苦手だ。好きなものはパンだ。そう思った俺はちよつと意地悪してやろうという気になった。

「なあ、モカ。もし山吹ベーカリーの新作でちよつとからくいパンが出たらどうする？」

「そんなのさーやのお店では出ないよ？」

「万が一の話だよ」

「んー、買わないかな？」

「どうして？」

「だって、からくりものなんですよ？　だったらあたし食べられないから〜」

予想通りの反応だ。その反応を見て俺はニヤッと笑う。

「でも、モカの好きなパンだぞ？」

「そうだけど、あたしが好きなのはチョココロネとかメロンパンとか甘いパンだから〜」

「そっかー。モカが好きなのはパンって聞いたのに。それならパンを好物とは言わないんじゃないのかー？」

「パンは好きだよー。でも、辛いものは苦手だから〜」

「パンが好きっていうならパン系なんでも食べれないとパン好きって言えないんじゃないのか？」

「…………お兄ちゃんのいじわる」

少々やりすぎてしまったか、モカはいじけて頬を膨らませてしまった。そんなモカの頬を優しく押して、口の中にためた空気を押し出してやる。

「ははっ、ごめんごめん。ちよつとからかいたくなつたんだよ。だからそんなに頬を膨らませるな」

「でもー」

「ん？」

「あたしが1番好きなのはパンじゃないよ〜」

「へっ？」

嘘だろ？　モカが1番好きなのはパンであって、いや、ていうかパン以外に好きなものあるのか？

「モカ、それってなんだ？」

「さあ、なんでしょ〜」

「当ててみるって事か」

モカの1番好きなもの。パン以外に一体何がある。モカがいつも一緒にいるもの……

「蘭か？」

「蘭も大好きだよー。でも、ぶ〜」

モカが間違いく、とでもいうように腕を交差してバツを作る。A f

terglowという幼馴染バンドの中でも特に一緒にいる蘭をあげたが違うようだ。失礼だが、蘭が違うという事は他の女の子も違うだろう。

「じゃあ、ギターか？」

「ギターも好きだよ。弾けるようになったら楽しいし、でも、ぶ〜」

「じゃあ……ライブ？」

「ライブも楽しいよ。みんなと一緒に居られる時間だから。でも、ぶ〜」

「………チョココロネ………ってこれはパンか。スイーツか？」

「モカちゃんはケーキもプリンも好きだけど、それもぶ〜、だよー」

他に何かがある。好きなもの……好きなもの。……好きな事とかならどうだ？

「のんびりする事」

「それがモカちゃんのアイデンティティーだよ」

「人をからかう事？」

「ひーちゃんの反応が面白いけど、それもぶ〜」

「………睡眠？」

「お昼寝するの気持ちいいけど、それもぶ〜」

ダメだ。全くわからない。他にモカは何か好きなものがあるっていうんだ。兄貴である俺が知ってる事は一通りあげたはず。ギブアップした俺は両手を挙げた。

「ダメだ……降参。わかんねえよ」

「ふっふっふー。わからないなんてお兄ちゃんも甘いね〜」

「うっ……そうだな。モカの事を全然わかっていなかった俺が甘かったよ。で、正解は？」

「じゃあ約束通り、お兄ちゃんはモカちゃんの問題に正解できなかったから、今度パンを5個買ってこないといけないね〜」

「わかったわかった！買う、買います！」

問題「正解できなかった俺はモカの命令をなんでも聞かないとならない。そんな約束一つもしてないけどな。」

「ついでに、さっきモカちゃんをからかったから罰として、追加でパン

「5個だよ〜?」

合計10個。結構痛いけど、モカの1番好きなものを知ることができ
るなら安いものだ。

「わかった。明日の朝絶対買いに行こうな。好きなものなんでも買って
やるから」

「わーい。じゃあ教えてあげる〜」

食べていたポツキーを机の上に置き、モカは俺の方に向き直った。

「モカちゃんが1番好きなのは〜」

「好きなのは?」

「お兄ちゃんだよ〜」

そう言っつてモカは俺に飛びついてきた。

「……………なるほど納得だ」

逆にどうして俺はわからなかったんだと突っ込んでやりたい。と
いうか答えられなかった自分がとても悔しい。

「これはあれだな。パン10個どころが20個でも30個でも買って
あげてもいいくらいの嬉しさだ」

「なんかいつた〜?」

「なんでもねえよ。モカは可愛いな、って言ったただけだ」

「ラテ。お茶買ってきてー」

「あ、じゃあ私も！」

「よし、お前ら。差し入れのパン抜きな」

次の日。モカがバンドの練習があるということで暇だったのと、俺がモカ達のバンドの練習をまだ見に行ったことがなかったこと。色々あって。俺はそれについていくことにした。スタジオに着くともう他の4人は揃っていて、俺がスタジオに入ると同時に蘭とひまりちゃんがそんなことを言ってきたのだ。

「ラテ。パンはもらって置いてあげる。だからお茶買ってきて」

「ラテさんありがとうございます！」

「ふざけんな！パンは15個ほど買ってきてあるが、うち10個はモカのためだからな！1個は俺の！残りはお前らにやる！」

「なんでモカちゃんだけそんなに多いの……」

「そうだそうだー！差別だー！横暴だー！ブーブー！！」

「よし。ひまりちゃん、パン抜きな」

「なんでそうなるんですか、もお！！」

文句を言うやつにはパンなんてやらん。モカが美味しく食べてくれる方が俺は嬉しい！！

「まあまあ落ち着けてひまり。ラテも差し入れありがとな。ありがたく受け取らせてもらおうよ」

「うんうん！ラテ君ありがとう！」

「巴とつぐちゃん。蘭とひまりちゃんのぶん食べていいぞ。こんな勝手な2人にやるパンなんてない！！」

「酷いー！蘭、私達ラテを憎む同盟だよ！」

「いや、あたしは別にパンいらないし、そんな同盟組まなくてもいい」
「蘭に断られた！！モカー！ラテさんが私の事をいじめるよー！！」

「……………」

「モカ？どうしたの？」

「……………あ、ごめんひーちゃん。話聞いてなかった」

「もお！みんな酷い〜!!!」

俺、蘭、モカに見放されたひまりちゃんは巴とつぐちゃんに抱きついた。2人ともよしよしとひまりちゃんの事をあやしている。相変わらずテンションが高い子だ。

「あ、ラテ。このパン練習始める前に食うから飲み物買ってきてくれ。アタシ紅茶な」

「じゃあ私もミルクテイで」

「巴、つぐちゃん！さっきの俺の信頼返して！」

結局俺はこのメンバーのパシリとして行動することになるのか？

「だいじょーぶだよ、お兄ちゃん〜」

「モカ……」

来る前に買ってきたパンをモグモグと食べながらモカは俺に話しかけてくれる。そうだ、モカは何かがあっても俺の味方をしてくれるはずだ。

「あたしは何かがあってもお兄ちゃんの味方だから」

「モカ!!」

「て事で喉乾いたから飲み物買ってきて〜」

「上げてから落とすなよ!!あーもう、行って来る!!」

「行ってらっしゃい〜い」

結局モカのお願いは逆らえず、俺はパンを入れた袋を置いてダッシュで買いに行くことにした。

「最初からモカにお願いしてもらえば良かったんじゃない？」

「そうだったね。モカちゃんの言うことならラテ君なんでも聞くもんね」

「ん〜？みんなどうしたの〜？」

「ほら！買ってきたぞ！お茶2つと紅茶とミルクテイー2つ!!」

「はやっ!!」

速攻で戻ってきた俺は順番に渡して行く。

「サンキューな、ラテ」

「ありがとうラテ君」

「お兄ちゃん、ありがとう〜」

「ありがとうございますラテさん……ってあつ!!」

「つつ……ラテ」

「ん? あつたかいとつめたいの指定はなかったからな。蘭とひまりちゃんには愛情を込めてあつたかい方にして上げた」

「ちゃんと指定してくれたらわかったのに。決して嫌がらせとかじゃないからな。俺の愛情を込めて置いただけだ。」

「……………」

「ねえねえお兄ちゃん?」

「……………」

「おい」

「ん? ああ、ごめん。ぼーっとしてたよ」

その日の帰り道。モカは帰りに残っていたパンを食べながら俺の隣を歩いていった。

「どうかしたの?」

「……………いや、今日の練習見てたらさ、お前達の本気の熱意が伝わってきたっていうか、俺は何してんだろうな、思ってたさ」

今日の練習。凄まじかった。モカがモカと思えないくらいにかっこよく見えて。いや、モカだけじゃない。Afterglowの面々全員だ。ライブじゃない。練習なのにみんな真剣にバンドに打ち込んで……

「お前ら5人があそこまで真剣にバンドやってるなんて知らなかったよ」

「そーだよ。モカちゃん先生はいつも頑張ってるんだよ」

「いや、モカちゃん先生ってなんだよ」

曲を何回か通して、合わなかったところがあればそれが合うまで何回もやり直す。それができたら、また他の気になる箇所を何度もやり直して。その繰り返し。

「そうだな。今日の練習見てそれがわかったよ。モカはいつも頑張ってたんだな」

どうだ、と言わんばかり胸を張るモカの頭を優しく撫でてやる。

「それに比べて俺はさ。やる事なくて、趣味もなくて、部活もやる気起こらない。仕方ないからバイトして、金ためて。そのお金もモカのために使って。っていう生活しかしてないからさ。正直何かに真剣に打ち込めるお前らがすごく羨ましく見えたよ」

「そ〜?」

「そーだよ。羨ましい。練習は真剣だけど、でも合間に楽しそうに笑ってさ。その練習の成果をライブで披露して。でも、ライブだったらお客さん達もたくさんいるからお客さんの歓声や熱気も伝わってきて、ライブが終わったらそれが直に全部伝わってきて、物凄く感動的なものになるんだろうな」

バンドの事はよく知らないけど、今日の練習を見ると、なんだかそんな感じがした。

「俺はお前らより1個歳上なのに。恥ずかしいよ。来る日も来る日もバイトとモカを愛でることしか考えてないんだからさ。本当にお前らが羨ましい……」

何かを夢中になってすることがこんなに素晴らしいものなんて思わなかった。

「ねえねえ、お兄ちゃん〜」

「んー?」

「お腹すいた〜」

「っておい!俺の話聞いてたのか!?!」

別に慰めてもらおうとこんな話したわけではないが、それにしただってその返しは流石に酷いんじゃないか。

「モカちゃんは、バンドの練習でいっぱい頑張ったからお腹すいたん

だよ」

「そーだな。頑張ったもんな」

「でもー、その頑張ったのをいつも労ってくれるのはあたしのお兄ちゃんなんだよ」

「えっ……………」

モカはいきなり俺の手をぎゅっと握ってそのまま歩き出す。

「練習から帰ってきたあたしにご飯作ってくれたり、一緒におしゃべりしてくれたり、甘やかしてくれるのは全部お兄ちゃんなんだよ」

「……………」

「いつもそうしてくれるから、あたしは頑張れるんだよ」

「……………ははっ」

これはモカなりに俺のことを慰めてくれてるってことでいいんだろうか。別にモカが大好きだから俺はいつもモカに構っているんだけどな。

「そっか。じゃあ俺はモカの役に立ててるって事か」

「そー。モカちゃんにはお兄ちゃんがいないとダメなんだよ」

「なら良かったよ。少なくともモカの役に立ててるってことだけでもわかったからさ」

モカも俺の事を必要としてくれている。それだけわかったただけでも今の俺にはとってもいい刺激薬となってくれた。

「なあ、モカ？」

「なーに〜？」

「今日のご飯、何食べたい？」

「パンがいい〜」

「…………それは作れないって言っただろ」

「ケチ〜」

俺たち2人が歩く空は、それはとても綺麗な夕日が俺たちのことを照らしていたように感じた。

第10話 パーティする6人と運の悪いモカ

「ラテ。はやく次焼いてよ」

「ラテさん、次は私もやりたい！」

「ラテ。そこにあるソース取ってくれ」

「お兄ちゃん、マヨネーズも取って〜」

「だああもう！いっぺんに俺に話しかけるな！はいモカ、マヨネーズ！」

「流石ラテ君。モカちゃんのお願いはきちんと聞いてる」

俺たちが今何をしているのか、疑問に思う人はいるだろうか。そう。俺たちは今たこ焼きパーティをしている。事の発端はモカだ。

『お兄ちゃん、たこ焼き食べたい〜』

『たこ焼き？別にいいけど2人するのはちよつと寂しいな。それだったら、みんな呼んでたこ焼きパーティといくか？』

『さーんせー』

という事になりすぐAfterglowの面々に連絡をして、材料を頂戴してたこ焼きパーティへと洒落込んだのだ。

「はいこれ。ラテ君の分ね」

「ありがとつぐちゃん」

「いいのいいの。ラテ君は私達の分焼いてくれたんだし、これくらいはね」

つぐちゃんはたこ焼きを作って手が離せない俺のために、出来上がったたこ焼きを俺の分だけ取り分けてくれた。

「変わって。冷めちゃうと美味しくなくなっちゃうし、次私がやるから」

「いいよ別に。ちよつと冷めてるくらいの方が食べやすくていいから。合間見つけて食べるからつぐちゃんはゆっくりしてなよ」

「え、でも……」

「つぐちゃんはこうして場所提供してくれたんだから全然いいよ。むしろ何も持って来ずただ食べてるだけのひまりちゃん達にやらせるべきだ」

今俺たちはつぐちゃんの家でたこ焼きパーティーをしている。俺たちの家よりつぐちゃんの家の方が広いという単純な理由だけなんだが。

「私は焼いてみたいって言いました。それに、私達だってちゃんと働いてますよー!」

「ほお。働いたって何をだ?」

「これ!食後のデザートとしてコンビニのプリン買ってきました!」

「……………それってただひまりちゃんが食べたかっただけだよね。というかなんでそれを冷蔵庫に入れないの?」

「あとはこれです。チョコレート!」

「やっぱりひまりちゃんが食べたいだけだよね。というかなんでそれも冷蔵庫に入れないの?」

プリンもチョコレートも冷蔵庫に入れないひまりちゃんがちよつとおかしく見えてきた。というかこれは働いたと言えるのだろうか。

「うう……………じゃあ蘭と巴はどうなんですか!あとモカも!」

「ん〜?あたしはお兄ちゃんと一緒に食材買いに行ったよ〜」

「アタシはたこ焼き機持ってきたぞ」

「あたしは飲み物。お茶とかジュースとか家から持ってきた」

「うう……………つぐ〜。ラテさんがいじめるよー!!」

「あはは……………ひまりちゃん一緒に作ろ!」

「ありがとうつぐ!!」

結局自分だけ何もできてないと自覚したひまりちゃんがつぐちゃんに助けを求めた。俺はつぐちゃんと場所を入れ替わり、モカの隣に座って食べることにした。

「美味しいな。たこ焼きなんて久しぶりに食べたけど、たまにはいいもんだな」

「そーだね。モカちゃんの案は大正解なのだ〜」

「はいはい。えらいぞモカ……………って、モカ、口の周りにソースついてるぞ」

「んー、どこ〜?」

「あ、バカ。袖で拭こうとするな。ほら、拭いてやるからじつとしてろ」

俺はティッシュを2枚取って、モカの口の周りを優しく拭いてあげる。

「よし。綺麗になった」

「ありがとう。はい、ご褒美だよ」

モカは口の周りを拭いてくれたお礼に、爪楊枝でたこ焼きを一つ取って俺の口の前まで持ってきた。

「あーん」

「どう〜?」

「……うん。美味しいぞ。モカが食べさせてくれたから美味しさ2倍になった」

「でしょー。これにはモカちゃんの愛情をたっぷり込めておいたからね〜」

「いつ込めたんだよ。でもまあ美味しかったのは確かだ。ありがとうな、モカ」

「えへへ〜」

やっぱり可愛い。このまま家に帰りベッドの中までお持ち帰りしたいくらいだ。

「いつも思うんだけど。モカとラテのあの空気ってどうにかできないの?」

「どうにもできないだろ。アタシ達が何年ああなるのを見てると思ってるんだ?」

「………だよね」

なんだ? 蘭と巴が俺の方を見て溜息をついてる。俺なんかあの2人を呆れさせる事でもしたのか?

「何だよ2人とも。俺なんか2人になんかしたか?」

「……あのさラテ。聞きたい事があるんだけど」

「なんだ?」

「ラテってモカが妹だから好きなの? それともモカだから好きなの?」

「んなもん決まってるだろ。どっちもだ。モカ自身大好きで大切だけど、妹だからより大切にしたいと思えるんじゃないか」

「じゃあもしモカが妹じゃなくて、あたし達みたいに幼馴染だったなら？」

「即告白。出会って3秒で告白だな」

「おー。お兄ちゃん言い切ったね」

俺がこの人生でモカが彼女だったらと何度思った事か。もう100回は超えてる。下手をしたら200まで行くまである。

「逆にモカはどうなんだ？ラテがもし兄貴じゃなくて、幼馴染だったら」

今度は巴がモカに聞いた。それは気になる。幾度なく愛し続けたモカが俺自身をどう思っているのかを。

「んー？そんなの考えられないよ」

「考えられない？」

「だってそれってー、お兄ちゃんが蘭みたいな感じになるって事でしょ？」

「ま、まあ、簡単に言えばそうなるな」

「あたしが家に帰ったら、いつもみたいにおかえりって言われないって事だよね？」

「そ、そうだな。幼馴染になるなら家一緒なわけないからな」

「いつも一緒にいてくれてー、やまぶきベーカリーのパン買ってくれてー、モカちゃんの事構ってくれるのがあたしのお兄ちゃんなんだよ」

「そ、そうだな」

「お兄ちゃんがない生活なんて、想像できないから」

「モカ……………」

「だから、お兄ちゃん。ずっと一緒にいようね」

「モカー!!!」

俺は号泣しながらモカに抱きついた。モカがずっと一緒にいようねって言うてくれた。それはつまり。俺の事を1番に考えててくれるという事。

「もちろんだ。ずっと一緒だぞ！」

「わーい」

「……………どんな話にしても2人はこうなるんだね」

「ああ。アタシ達には到底理解できない話だな」

「さあ！追加のたこ焼きだよ！」

「なんだか物凄く上機嫌なひまりちゃんが追加のたこ焼きを皿に乗せて持ってきた。

「へー。うまくできてるじゃん。ひまりちゃん初めてだったんだろ？ たこ焼き作るの」

「はい！つぐが一生懸命教えてくれました！」

「わ、わたしはほとんど何もしてないよ？」

「どっちなんだよ。と突っ込みたい。がそれより気になるのは、たこ焼きから目線をそらし続けるつぐみちゃんだ。

「じゃあ食べるか」

「その前に1つ。言っておくことがある！」

「ん？どうしたんだひまりちゃん？」

「このたこ焼き。全部で24個あるけど、そのうちの1個に。ある隠し味を入れましたー!!」

「はあ？」

「この子は一体何をするつもりなんだ。

「ズバリ、ロシアンたこ焼きですよ！」

「……………つぐみちゃん、なんで止めなかったの」

「わ、わたしは止めたんだよ。でもひまりちゃんがどうしてもっていうから」

「ちなみに隠し味って何を入れたんだ？」

「それは食べてからのお楽しみだよ、巴！」

ロシアンたこ焼き。確かにまあよく聞くものだけど。つぐみちゃんあのあの反応。きつとロクでもないものでも入れたんだろう。

「誰が当たっても文句なし！さあ、食べよう！」

食いたくねえ。そんな事言われて、はい！って領ける人間がいるわけがない。みんなの空気も重くなってるし。

「じゃ、じゃあみんな1個ずつ取ってせーので食べるか」

「そ、そうだね。わたしもそれがいいと思う！」

つぐみちゃんも賛同してくれてるが、つぐみちゃんは何を入れたか目の前で見たんだろう。絶対に食べにくいはずだ。

「じゃあ、まずは1回戦！」

なんでひまりちゃんはこんなにご機嫌なんだろう。万が一自分が当たる事を想像してないんだろうか。

「いったきまーす」

ひまりちゃんの掛け声とともにみんなが口の中にたこ焼きを入れる。うん、美味しい。

「どう？」

「美味しい」

「美味しいよ〜」

「美味しいな」

「わたしも美味しいよ」

「俺も大丈夫だ」

「ちえっ。みんなあたりなんだ〜」

1回目は全員セーフ。この妙な緊張感がギスギスと伝わってくるから早く終わらせたいんだけど。モカはマイペースすぎてよくわからないが。

「じゃあ続いて2回戦！」

ひまりちゃんの掛け声とともに2つ目を口に入れる。これも全員セーフだった。緊張して味がわからない。

「じゃあ3回戦だよ！」

「ま、まあアタシ達ならあれ食べて、耐えられるわけじゃないけど、あそこまで慌てる事じゃなかっただろうな」

「うん。今回は辛いものが苦手なモカが見事に引いちゃったから」

甘いパンを次々と想像していったおかげか、モカは次第に落ち着いていった。

「……………もう大丈夫か？」

「りやいりよーぶ」

「全然大丈夫じゃないな。とりあえず水飲んで落ち着こうな」

モカにもう一杯水を渡してあげる。さて。

「ひまりちゃん、ちよつとこつちに来ようか？」

「ひっ!!」

俺はひまりちゃんの方を向いてゆつくりと近づく。

「大丈夫。怖くないよ。ただ、すこーしだけお話するだけだからさ」

「む、無理です！怖いです！」

「大丈夫大丈夫。あんな危険なものももう2度と作らないように教えてあげるだけだよ？」

「蘭、つぐ、巴！助けて！」

「自業自得」

「わたしはちゃんととめたからね」

「ひまり、いってこい」

「そ、そんなー!!」

「ひまりちゃん？」

「は、はい!!」

「いいよね？」

「わ、わかりました……………」

その後、ひまりちゃんにマンツーマンでお説教をしてもう2度とこんなものを作らないと約束させた。にしても、モカも不幸だな。

第11話 ベッドでいちやく兄妹と兄妹に憧れる つぐみ

「ん……………朝か」

窓から差す太陽の光によって俺の目は覚めた。いつもなら目覚まし時計が俺を起こしてくれているがその日は違った。

「すびー……………」

「あー、そっか。昨日はモカと一緒に寝たんだっけ」

俺の眼前には気持ちよさそうに眠る可愛いモカの顔が。昨日はお風呂入ったモカが俺に髪を乾かして欲しいとねだってきて、そのまま一緒に寝たんだった。

「相変わらず気持ちよさそうに寝てるな」

そんなモカの頬をツンツンとつついてやると、モカは寝返りを打って俺の方にくっついてきた。

「寝ていても甘えん坊だなモカは」

俺の方に寄ってきたモカを優しく抱きしめて頭を撫でてやるときらに顔が綻んだ。あー、このまま時間が永遠に止まればいいのに。

「……………そういえば今何時だ？」

ふと今の時間が気になり、枕元に置いた携帯で時間を確認してみる。

「なんだ、まだ8時20分か。ならもうちょっとこうしてもいいな」

9時くらいになったらモカを起こしたらいいだろう。目覚まし時計が鳴らないということは今日は休日って事だし。ゆつくりさせてあげよう。

そう思っただけ俺は再びモカと向き合っただけ、モカを愛でることにした。

「なあモカ。モカはどうしてそんなに可愛いんだ？」

「んー…………それはモカちゃんがー、モカちゃんだからー」

「寝てても反応できるのか。流石モカ。でも意味わかんないぞその答えは」

「モカちゃんは今日も絶好調……………」

どこがだ！と突っ込んでやりたいがぐっすり寝ているモカを起こしてしまつてはかわいそうだ。

「……………んー、お兄ちゃんー？」

「つと、悪い。起こしちゃったか？」

起こすつもりはなかったが、どうやらモカの目は覚めてしまったらしい。体を起こして眠そうな目をこすっている。

「今何時？」

「8時半になったところだ。もうちよつと寝ててもいいぞ」

「じゃあそうする」

返事をしたモカが二度寝するようにして、ベッドに寝転がる。もちろん俺の方にくっついてだ。

「ねえねえお兄ちゃん？」

「んー？」

「腕枕してー」

「お安い御用だ」

俺は左腕をモカの頭の下に入れてあげる。モカは俺の腕を枕にして、くっついていてる体をからに密着させてきた。

「えへへー、お兄ちゃんいい匂いする」

「モカもとってもいい匂いだぞ。二度寝したらよく眠れそうだよ」

お互いが密着しているの、お互いの匂いがダイレクトに伝わる。モカが女の子だから特有の甘い香りするのは当然で気持ちがいいことだが、俺は男だから変な匂いとかがないか正直不安だ。でも、モカがこういつてくれる以上大丈夫なんだろう。

「モカちゃんはいっつもパン食べてるから、いい匂いがするんだよ」

「いやいや、パン食べてたらしい匂いがするわけじゃないだろ。沙綾みたいにパン屋で働いてるわけじゃあるまいし」

「お兄ちゃんはわかってないなー。パン屋で働いてなくてもパン食べてたらしい匂いがするもんなんだよ」

「じゃあ俺は？モカほどじゃないけど、俺もモカほどじゃないけどパン食べるぞ？」

比率でいうなら6：4くらいだろうか？もちろんモカが6だ。4が

俺。

「お兄ちゃんはあたしみたいにパン食べてないから、あたしのような匂いはしてないよ〜」

「……………じゃあどんな匂いをしてるんだ？」

「お兄ちゃんの匂い〜」

「……………全くわからん」

けどモカが幸せそうにしてるならそれでいいだろう。今も話しながらも俺の胸あたりをスリスリと頬ずりしてるし。

「ふわあ〜……………なんだかまた眠くなってきたよ〜」

「そうだな。今日は休日だし、2人でゆっくりしようぜ。バイトもバンドの練習もないんだろ？」

「今日はないよ、多分〜」

「相変わらず曖昧だな。まあないんじゃないじゃん。2人で寝たい時間まで寝て、お腹空いたら飯食って、また2人でまったり過ごして、そして、寝る。これでいいだろ？」

「さんせー」

見事なぐーたら生活だ。ただの引きこもりニートのようだ。でもいい。癒しであるモカがずっと一緒にいてくれるのだから。

「よし決まりだ」

「じゃあ今日は、モカちゃんと24時間ずっと一緒だよ〜」

「そうだな。ってそれは流石に困る。風呂とかは別だからな」

「えー、ダメなの〜？」

「だーめ」

主に俺の理性がもたないから。理性が持つてくれるならいくらでも一緒に入るのだが。シャンプーでも、身体洗いつこでもなんでもしてやるのに。

「ほら。眠たくなってきたんだろ？またいつもみたいに寝るまで頭撫でてやるから今日はゆっくり休めよ」

「わーい。じゃあそうする〜」

返事をしたモカはすぐに目を閉じた。俺は腕枕していない方の手でモカがまたぐつつすり眠れるように頭を撫でてやる。

「おやすみ、お兄ちゃん〜」

「はいはい。おやすみー、っと」

モカが寝息を立てるのを見た後、俺は携帯を確認してみる。現在時刻は8時45分。俺ももう一眠りするか。こんな近くにモカの寝顔があるんだ。俺もすぐに眠ることができらるだろう。

「んじゃ、俺もー」

モカの頭に手を置きながら俺も目を閉じる。二度寝できる幸せって本当に最高だ。今日が休日で本当に良かった……………

「ってあれ?」

意識が落ちる前にふと何か違和感を感じた。

「今日って本当に休日だったけ?」

目覚まし時計が鳴らなかった。休日。俺はそう思ったが、何かがおかしかった。

「俺たち昨日ずっと家にいたよな?その前の日は確かつぐちゃん達のバンドの練習を見に行ったから……………」

嫌な予感がしてもう一度携帯を確認してみる。時刻は8時48分。それはいい。曜日だ。曜日が重要なんだ。

「えーっと……………」

……………しまった。やってしまった。今日は休日じゃな

い。土日でも祝日でもない。月曜日だ。目覚まし時計が鳴らなかつたんじゃない。目覚まし時計をかけ忘れてしまったんだ。

「ああ……………やっちゃまったな。今日普通に平日じゃん。月曜日じゃん。週の始まりじゃん」

兄妹そろって何をやってしまっているんだ。というか遅刻しそうになったら巴が起こしに来てくれるはずなのになんで起こしに来ないんだ？

「……………まあいいか。今日は休もう」

そう決めた俺はモカの通う学校と俺の通う学校に連絡を入れることにした。うん、今日はモカと1日中一緒にいることに決めた。すいません、先生方。こんなダメな兄をお許し下さい!!

「ヤッホー、来たよつぐちゃん」

「あ、ラテ君。こんにちは」

次の休日。俺はつぐちゃんの家のカフェに足を運んでいた。

「あれ、今日は1人なんだね。モカちゃんは？」

「モカならバイトだよ。で、俺は1人で暇だから遊びに来たんだ。適当に座って大丈夫か？」

モカがバイトに行ってしまった1人寂しく家で留守番していた俺はそんな寂しい気持ちを拭うべくつぐちゃん家のカフェに遊びに来たのだ。

「大丈夫だよ。今日は何頼むの？」

「んー……………じゃあカフェラテ1つ。あとつぐちゃんのさいつこうに可

愛いスマイル」

「うちはそういうサービスはやってないよ。待っててね。すぐ作るから」

俺は空いているテーブル席に座った。いやー、つぐちゃんは今日もつぐってるな。とつても可愛い。モカには勝てないけどそれでも可愛い。

「にしても、今日暇なのかな？休日なのに人1人もいないじゃん」

「お待たせー。はい、カフェラテだよ」

「あ、サンキュー……つてなんでつぐちゃんが俺の向かい側に座るの？」

「今お客さんラテ君以外いないから。だから、お母さんがラテ君とお茶してていいよって」

「あー、なるほど」

カフェラテを持って来たつぐちゃんが俺の向かい側に座った。つぐちゃんが俺の喋り相手になってくれるのはすごく嬉しい。

「そういえばラテ君って部活とかクラブ活動してないよね？なんでなの？」

「ん？またいきなりな質問だな」

「ちよつと気になっちゃって」

俺は今までクラブ活動というものをした事が1度もない。見学すらもして事ない。中学から合わせて5年間ずっと帰宅部。

「別に運動が嫌いなわけじゃないんだぞ？野球とかサッカーとか体動かすのは結構好きだし。スポーツで嫌いなものはないから」

「じゃあなんで入らなかったの？」

「決まってるだろ。モカとの時間が減るからだよ」

「……………あー、なるほどー」

クラブ活動をする、ということは遅くまで学校に残ってそれに打ち込むという事だ。野球やらサッカーならば遅ければ18時くらいまで活動することがあるだろう。そんなことをすればモカとの時間が減ってしまう。

「なんで俺がわざわざ部活のためにモカとの時間を削らねえといけな

いんだ？モカと同じクラブに所属するならまだしも、俺たち学校まで別なんだぞ」

「そ、そうだね」

「その上さらに部活までしてモカと一緒にいる時間を削るとか……俺に死ねって言ってるのか！」

「言っていない言っていない！言っていないから！」

「っと、ごめんつぐちゃん。いきなり声荒げたりなんかして」

「ううん、私も不注意だったよ。ごめんね、ラテ君。でも、本当にモカちゃんが大好きだねラテ君は」

「当たり前だ。モカ以上に可愛い女の子はこの世に存在しないと俺は思ってるほどだからな」

そんな可愛い子が俺の妹なんて。俺はなんて幸せ者なんだろうか。

「でも本当、モカちゃんが羨ましいよ」

「モカが？なんで？」

「だって、いつも楽しそうだもん。ラテ君と一緒にいるモカちゃん。モカちゃんね、私達と一緒にいる時もよくラテ君の話をしてるんだよ」

「俺の？」

「うん！今日はお兄ちゃんが起こしてくれたと、とか。昨日は帰って来たらしいっぴい構ってくれたと、とか。よく私達に話してくれるんだ」

「へ〜」

いつも俺がモカにしていることをモカはつぐちゃん達に話しているのか。なんだかむず痒いな。まあ俺もよくみんなにモカの話はするんだけど。

「でもね。その話を聞くとと思うの。兄妹って羨ましいなく、って。私にはほら、一人っ子だからさ。お母さんやお父さんはいつも一緒にいてくれるけど、モカちゃんや巴ちゃんみたいに歳の近いお兄ちゃんや妹がいるわけじゃないから」

「あ……」

「2人を見てると、私も兄妹がいたらなくってよく考えちゃうんだ、え

へへ」

「……………なんか、ごめん」

「や、ち、違うよ！今のはその、そういう謝らせようと話をしたいんじゃないの！私が本当にそう思ってるから話をしただけで！」

つぐちゃんは俺と違って寂しい思いをしていたんだな。それなのに俺はつぐちゃんの目の前でモカの話ばかり……………本当に申し訳ないよ。

「あのさ、つぐちゃん」

「うん？」

「もしかして、俺が兄貴だったら、とか考えたりした事……………ある？」

「へっ？」

「いや、変な意味じゃないんだ。そういう事を考えるって事はどのようなのかな？って思っただけ」

「ま、まあ、一応……………考えた事はある、かな？」

「そうなんだ……………聞いてもいいか？もし俺が兄貴だったらどうかって」

モカはあれだけ受け入れてくれていたが、他の4人はみんな俺によく冷たい目をしてくる時がある。だから気になる。自分の兄として見た時、つぐちゃんはどう思ってるか。

「うーん……………正直に言ってもいいの？」

「もちろん。つぐちゃんがどう思ってるか聞きたいだけだし」

「え、えつとー」

つぐちゃんは頬に指を当て、苦笑いしながら言った。

「正直、ラテ君を兄として考えるのは嫌、かな？」

「ガーン!!」

俺は机に突っ伏した。そうだと思っただよ。正直に言ってもいいの？って聞くくらいなんだもん。あんな反応見せるという事は良い印象はないことくらいわかってたよ。

「あ、違うよ！ラテ君の事は嫌いじゃないし。もちろんモカちゃんや蘭ちゃんと同じくらい好きなんだけど、でも、ラテ君がもし自分の兄

だって思って考えるとちよつと……」

「だよな。そうだよな。やっぱり俺変なのかな？」

「でもモカちゃんはあるなりに喜んでるんだしきつと大丈夫だよ、うん！」

「……………それもそうか」

「えっ？」

つぐちゃんの一言を聞いて俺は顔を上げた。

「よく考えたらそうだった。他人からどう思われようがモカにさえ喜んでくれていれば俺はそれでいい」

「……………ラテ君」

「なんだ？」

「涙目で言っても説得力ないよ」

「ち、ちがう！これは涙じゃなく……………コーヒーだ！」

「……………ごめんね、やっぱり正直に言わない方が良かったかな？」

「うう……………いいんだ。いいんだよ」

蘭や巴に言われるのなら、おそらく全然耐えられた。だが、その事を言ったのはつぐちゃんだ。いつも優しくして一生懸命頑張っているつぐちゃんに言われるのはやっぱり少しきついものがある。

「だ、大丈夫？」

「うん。大丈夫。今日帰ってモカに慰めてもらうから」

「……………それだと私がラテ君をいじめたみたいになっちゃうみたいで心配なんだけど？」

「大丈夫。つぐちゃんにいじめられた。なんて言ったりしないから」

「そういう問題じゃないよねそれ!？」

「冗談だよ。元は俺から聞いた事なんだし、つぐちゃんは気にしなくていいからさ」

「う、うん。それならいいんだけど」

「さて……………つぐちゃんといっぱい話せたし、今日はもう帰るかな。モカは出迎える準備もしないといけないし」

「あはは……………それって必要なの？」

「もちろん！俺が空いている日の日課でもある」

「そうなんだ。頑張つてね」

「おう！コーヒーありがとう！ごちそうさま！」

コーヒー分のお金を支払って俺はカフェから出て行った。つぐちゃんにはああ言われたけど、そんな傷ついた俺を癒してくれるのはモカだけだ。

「モカ、早くバイト終わらないかなー」

「やっぱりラテ君の頭の中はモカちゃんの事でいっぱいなんだよね」

（ラテ君を兄として考えるなんて、やっぱりできないや）

「またね、ラテ君」

第12話 雨宿りする兄妹とモカのバイト先

「お兄ちゃーん、パン買ってー」

「ん？いいぞー」

「わーい」

学校からの帰り道。俺は途中でモカと偶然会って一緒に帰っている。他の4人はと言うとそれぞれ予定があって今日は1人で帰る事になったらしい。

「今日は何買うかな。やっぱりメロンパンかなー」

「いいねー。チョココロネも残ってるといいな〜」

2人で何のパンを買うか相談しながら歩いていると、ふと、頭に何か冷たいものが落ちて来た気がした。

「なんだ？」

「んー？どーしたの〜？」

「いや、なんか頭に何かが……」

ふと上を見上げると、ポツポツとまた落ちて来る。

「雨か」

「雨ー？」

「モカ、傘は持ってるか？」

「持ってないー。今日は雨降らないと思って〜」

「そっか……家まではまだちよつと遠いし……仕方ない。どこか雨宿りできるところまで走るぞー」

「おー」

だんだん雨が強くなる。俺は雨宿りできる場所を探すためにモカの手を引いて走り出した。

「ふー。とりあえずここで雨が止むまで待つか。モカ、大丈夫か？」
「へーきだよー。お兄ちゃんは？」

「俺も大丈夫だ。でもだいたい濡れちまったな」

ひとまず公園の中の休憩所のある場所まで移動して来る事ができた。だが、俺たちが走っている中、雨は強くなる一方で、休憩所に着いた時にはもう全身びしょ濡れになってしまった。

「多分通り雨だろう。すぐ止むさ」

「そーだねー。そのあとパン買いに行こー」

「そしたら沙綾のところ迷惑がかかるだろ。今日は我慢しろー」

「えー。そんな」

「その代わり明日いっぱい買ってやるから。なっ？」

「……はーい。約束だよー？」

「わかればよろしい」

ひとまず濡れた体を拭くために俺は鞆からタオルを取り出した。

「ほら、モカ。先に使え」

「いいの？」

「ああ。モカが風邪引いたら大変だしな」

「ありがとう、お兄ちゃん」

モカは素直に俺のタオルを受け取って、顔や腕を拭いていく………つて！

「……………モカ」

「んー、なーに？」

「えと、その……服、透けてるから。後ろ向いて拭いてほしいんだけど」

「えーつとー？……あつ」

今の季節は夏。もう冬服の時期は終わり夏服に移ってしまった。つまりモカの今の服装はカッターシャツなわけであつて。それが雨に濡れて下着が透けているのだ。

「お兄ちゃんのえっち」

「いや、仕方ないだろ！そりや気づかなかつた俺も悪かつたけどさ!!」
それにモカの透けた体をガン見たわけではない。ちらつと見え

ただけだ。モカの下着がちよつと……いや、ほんの少しだけちらつと。

「はいお兄ちゃん。タオルありがと〜」

「おう。家帰ったらすぐ風呂入ろうな?」

「一緒に〜?」

「入らない!先にモカが入るんだぞ!」

なんでモカは俺と一緒に風呂を入りたがるんだ。そりや気持ちはずかしいけど。

「でもー、お兄ちゃんも早く入らないと、風邪引いちゃうよ〜?」

「うぐつ……」

モカの言う通りだ。いくらタオルで体を拭いているとはいえ、雨に濡れて冷えた身体をすぐに暖めないと元も子もない。

「確かにそうだけど、でも大丈夫。俺は男だから。そんな簡単に風邪を引いたりなんかしない」

「ほんとに〜?」

「あ、ああ。多分。おそらく?……かもしれない」

「だんだん自信なくなってきたよ〜」

「と、とにかく!俺は大丈夫だからモカが先に入るんだ。いいな!」

「はい」

よし。やつとわかつてくれた。にしてもまだ止まないのか?早く止んでモカを家に連れて帰らないと……万が一モカが風邪でも引いたら天気を一生恨んでやる。

「今日の天気予報晴れだって言ってたのに……なんでだ?」

「晴れのちくもりじゃなかった〜?」

「あれ?そうだっけ?」

「多分〜」

「多分かよ。まあ所詮天気予報は天気予報だな。外れる時は外れるもんだ」

「そうだよ〜……へくちつ」

「モカ?」

「ちよつと寒い〜。お兄ちゃん、あつためて〜」

「そう言われても」

両腕を抱えて寒そうにしているモカ。夏といえどここまで濡れてしまっただけは仕方のない事だ。でもどうする？後ろから抱きしめてやればいいのか？でも俺も濡れてるし……

「……………いや、ちよつと待てよ？」

今日は体育の授業があった。夏だけどもあまり日焼けをしたくなかったから、ジャージも持って来てたんだった。

「ほらモカ。これ羽織つとけ。汗臭いかもしれないけど、何も無いよりマシだろ？」

「お兄ちゃんは？」

「俺はだいじよ……………へっくち!!」

「だいじよーぶじやないみたいだけど？」

「違う！今のは鼻がムズムズしただけだ。寒いからじゃない！」

本当は少し寒いけど。でもモカが風邪引くよりは100倍いい。モカが風邪をひくくらいなら俺はやせ我慢でもなんでもする。

「もく、お兄ちゃん。嘘ついてるのモカちゃんにはわかるんだよ」
「えっ？」

モカは濡れたカッターの上からジャージを羽織って、俺の前に立った。そのままクルリと半回転して俺の胸に背を預けるようにして俺の手を握ってそのままジャージのポケットの中へと導いた。

「こうすれば、少しはマシになるでしょ？」

「あ、ああ。そうだな。ありがとう」

「えへへー。お兄ちゃんの手、冷たいよ」

「それはモカもおんなじだ。でもこうしてる事でそのうちあったかくなるから大丈夫だ」

モカが羽織るジャージのポケットの中でお互いの手を温めるかのように手を握り合う俺たち。普通に握り合ったり、指の一本一本を温めるように握り合ったりと、ポケットの中は俺たち2人の両手がずつとじゅわんあつていた。

「ねえねえお兄ちゃん。お腹すいた」

「雨止むまでの我慢だ。それにこうして手を握り合ってるんだから食

べられないだろ?」

「そー?口で移し合えば食べられるよ?」

「く、くち?」

「口。例えば、お兄ちゃんがパンを口でとって、そのままあたしの口に持ってこれば?」

想像してみる。俺の口でパンを取り、そのままモカの口にパンを……それって一歩間違えればモカとキスする事になるんじゃない?

「あれー?お兄ちゃん顔真っ赤だよ?」

「な、なんでもない!」

「なんでもないよね?どうしたの?」

「なんでもないったらなんでもない!」

自分でも体温が上昇しているのがわかった。当たり前だ。兄妹でそんなバカな事があってたまるものか。

「もしかして。お兄ちゃん想像しちゃった?」

「なっ、な、何を?」

「あたしが言ったこと。口で食べさせあったりしたら、あたしとお兄ちゃんの口が」

「し、知らん!そんな事しない shouldn't!」

「でもしちやっただよね?」

「うっ……」

「やっぱりお兄ちゃんはえっちだね」

「う、うるさい!!そういうモカはどうなんだよ!今の言い方が正しかったらモカも想像したんだろ!」

「したよ。でも、モカちゃんは別に気にならないよ?」

「へっ?」

「モカちゃんはお兄ちゃんが大好きだからね」

えと……つまりそれは?いや、でもそんなわけないよなうん。冗談だ。冗談に決まってる。で、でも……もし冗談じゃないのなら……。

「も、モカ?今のはつまり……」

「あ。雨上がったよ」

「えっ?あ、本当だ」

空を見るとさつきまでザーザー降っていた雨がすっかり止んで太陽の陽が差していた。

「帰ろく。早くお風呂入りたいく」

「あ、ああ。そうだな」

ポケットから手を出し、握り合っていた手を片方だけ離して、俺たちはそのまま家に帰る事にした。さつきの事は気になるけど、今度も良いだろう。また今度聞く事にしよう。

休日。モカはバイトのおかげで暇していた俺は初めてモカのバイト先に顔を出す事にした。

「で、なんであたしまで付き合わされなきゃいけないの?」

「いいだろ別に。暇だったんだろ?」

「暇じゃない。色々したい事とかあったのに」

「いや、電話したとき暇って言ってたじゃねえか」

1人で行くのは少し不安に思い、蘭に電話をして来てもらった。

「大体忙しいのなら無理して付き合わなくて良かったんだぞ? つぐちゃんやひまりちゃんとかに変わってもらえば」

「や、やっぱり暇だったの。今日はやる事なくて暇だったから」

「お、おう。そうなのか」

やっぱり暇だったってどういう事だよ、と突っ込みたいが蘭にも色々あるんだろ。気にしたら悪いしなにも言わないでおこう。

「蘭はモカのバイト先によく行くのか?」

「まあ、たまにね。コンビニだし。でも、あたしよりひまりとかの方がよく行ってると思うよ」

「ああ、確かに。この前もコンビニの前でひまりちゃんにあっかし」
大のコンビニスイーツ好きのひまりちゃんがコンビニによく来るのは確かに納得できるな。モカに会いに行くついでというのもあるんだろう。

「と、ついたな」

「そうだね」

コンビニの前に着いた俺は入り口の前で立ち止まった。

「どうしたの？入らないの？」

「いや、入る。けど……………」

「けど、何？」

「なんていうか、緊張して来た」

「……………はっ？」

この前は外から見るだけだったけど、改めてモカのバイト姿を見ると、なんとというか少し緊張して来てしまって足が動かない。

「どうしよう、蘭？」

「いや、知らないし」

「薄情だな！」

「普通にはいればいいでしょ。ほら、行くよ」

「あ、おい！腕を引っ張るな！」

緊張して棒立ちしている俺の腕を蘭が掴み、そのままドアを開けて中へと入った。

「いらっしやいませー」

「しゃーせー……………あー、蘭だー」

中に入ると、レジの前で立っていたモカが蘭に気づいて手を振る。

「モカ。あんたの想い人、連れて来たよ」

「想い人？……………あ〜」

そして、俺の姿を見るとともにレジから出て来てトテトテと歩いてそのまま俺に抱きついて来た。

「うおっと」

「お兄ちゃんだ〜。どうしたの〜？」

「いや、バイトなくて暇だったからちよつと様子をな。それよりモカ、

バイト中だろ？抱きついたらダメだ」

「いいんだよ。今日はバイト前に成分を補給できなかったから」

確かに今日はバイト前にモカと構ってやることができなかった。俺も構ってあげたかったが、母さんから頼まれた家事のおかげで少し忙しかったのだ。

「お前が良くても店側は許さないだろ。帰って来たら存分に構ってやるから今は我慢しろ」

「はーい」

モカはしぶしぶという感じで俺から離れた。良かった。今お客さんは誰もいなくて。いたら少しいたたまれない空気になっていたことだろう。

「もしかして、あなたがモカのお兄さんですか？」

「え？あ、はい。そうですけど」

仲よさそうに話すモカと蘭を見ると、もう1人いた店員に声をかけられた。しまった。この人もいたの忘れてた。さっきのを見られたと思うと恥ずかしいな。

「へえー。なんというか聞いてたより全然違いますね。あ、自己紹介がまだでしたね。モカの1つ上の今井リサっています。よろしくお願いします、モカのお兄さん」

「よ、よろしく」

なんというか物凄く活発そうな子だ。それにモカと違って仕事の上では物凄く頼りになりそうだ。

「モカからよく話を聞いてますよ。今日はパン買ってくれたー、とか。あたしの事いっぱい構ってくれたー、とか」

「あはは、なんだか恥ずかしいな。と、こっちも名乗らないと失礼だな。モカの兄のラテだ。同い年だし敬語とかいらないよ」

「そう？なら遠慮なく。にしても……」

今井さんはじーつと俺の顔や身体を見つめる。

「な、何か俺についてる？」

「いやー、モカは頼り甲斐があつてすぐくかつこいいお兄ちゃんって言ってたんだよねー、お兄さんの事」

「そのお兄さんっていうのもいいよ。普通にラテって呼んでくれればいいから」

「あ、じゃああたしもリサでいいよ」

「わかったよ、リサ。で、実際に俺を見てどう思った？」

「うーん、なんとなくか……普通？って感じ」

「普通……それ褒め言葉なの？」

「いや、想像してるのとは違うと思っただけで、でも、うん。そうだね……悪くはないと思うよ？」

「あ、ありがとう」

なんだろう。全然褒められてる気がしない。

「あー、お兄ちゃん。もしかしてリサさんの事ナンパしてた？」

「ばっ！ちげえよ！普通に挨拶してただけだ！」

「ほんと……ラテって見境ないよね」

「蘭、お前が俺の何を知ってるんだよ」

「ラテがモカを溺愛する超シスコンで、モカのためならなんでもするってことは知ってるよ」

「それ見境ないっていう事とは関係ねえだろうが！」

「いいたい事言いやがって。こんな事ならひまりちゃんかつぐちゃんを連れて来たたら良かったよ。」

「賑やかだねー、ラテって」

「でしょー？モカちゃんのお兄ちゃんには常にあんな感じですから」

「モカはラテのどこが好きなの？」

「そんなの全部に決まってるじゃないですかー」

「いや全部って。具体的にとかないの？」

「全部は全部ですよ」

「……もういいや」

モカと話すリサがはあ、とため息を吐いた。俺の話をしてたように聞こえたがモカが何か呆れることでも言ったんだろうか。

「にしても、なんでラテはモカと同じところでバイトしようと思わなかったの？それだけモカの事が好きなら一緒にバイトしたらいいのに」

「あたしはそうしたかったんですけど、お兄ちゃんが」

「ラテがどうかしたの？」

「俺がモカと一緒にバイトしたら、俺がモカに。逆にモカが俺に構いまくって仕事にならないってわかってたから。俺からモカと一緒にバイトするのを断ったんだ」

俺の場合はバイト中でもモカの側を離れたくないという欲に負けてしまうだろうから。

「なんというか、凄いねこの兄妹」

「リサさん、こんなの序の口ですよ」

「蘭、もしかしていつもこんなのと共に過ごしてるの？」

「そうですよ」

「……………苦労してるんだね」

こんなのとか失礼だな。兄妹で仲がいいのがそんなに悪い事なのかよ。まあ、仲が良すぎるという自覚はあるけど。

「ねえねえ、お兄ちゃん？」

「ん？どした？」

モカが俺の服の袖をクイクイと引つ張る。何かと思い振り返るとモカはある方向を指差していた。そこはケーキなどのスイーツのコーナー。

「あれ買って〜」

「……………今バイト中だろ？」

「バイト終わったら食べるんだよ〜」

ひまりちゃんに限らず女の子はみんなスイーツが好きなんだろう。しかもこの夏限定スイーツと書いてある。食べたくなる気持ちはわからないでもない。

「仕方ないな。今日だけだぞ？」

「絶対今日だけなんかにならないでしょ」

「そこ突っ込むなよ！」

蘭がボソツと俺に突っ込んできた。絶対そうなるだろうけど、と思いつながらモカが指差した限定スイーツを3つ手にとってレジに向かった。

「あれー？何で3つなの〜？」

「言わなくてもわかるだろ。蘭とリサのぶんだ」

「え、あたしも？」

「モカが相当お世話になってるみたいだからな。蘭は今日付いてきてくれたお礼だ」

「あはは、ありがと」

「……ありがと」

「ありがとう、お兄ちゃん〜」

「どういたしまして」

そのあと、バイト中の2人をこれ以上邪魔するのも悪いと思い、俺と蘭はコンビニを出た。

「さて、時間もちよつと余ったな。蘭、どつか行くか？」

「どつちでも」

「なんだよ、相変わらず冷めてるな。俺と出かけるの嫌なのか？」

「別に。てか嫌だったらこうしてコンビニまで付いてきたりしない」

「それもそうか。じゃあつぐちゃん家のカフェにでも行くか。つぐちゃんところならそれ食べてても問題ないだろうし。コーヒーとかは奢ってやるからさ」

「何？今日は妙に優しい」

「俺が優しいのはいつもの事だよ。特にお前ら幼馴染の4人にはそのつもりだ。いつもモカが世話になってるんだからな」

もちろん俺もだけど。

「……ラテってさ」

「ん？」

「……やっぱりなんでもない」

「なんだよ……あ、ついでにつぐちゃんにもこのスイーツ買って行ってあげよう。蘭、ちよつと待っていてくれな」

俺はもう一度コンビニの中に入った。

「あたしだっていつもモカやあなたにお世話になってるよ」

この後つぐちゃんの家に行くと、偶然にもひまりちゃんと巴もいて、コンビニの限定スイーツを見てひまりちゃんが俺に泣きついてきたのはまた別の話。

第13話 モカの好みのタイプと修学旅行に行きたくないラテ

「なあ、モカ。俺ちよつと気になる事があるんだよ」
「んー、なにー?」

「モカの将来結婚したい人ってどんな人だ?」

「いきなりモカになに聞いてんの。もしかしてラテの頭おかしくなつた?」

現在つぐちゃん家のカフェで俺、モカ、蘭の3人でお茶している時。ふと、疑問に思っていた事をモカに投げかけた。

「いや、ふと思っただけだ。モカの好みの男性を知りたくなつて」

兄として妹の好みの男性を知る事は義務だと思っている。

「モカの好みの男性って目の前にいるじゃん」

「え、誰?!」

辺りの席を見渡すが、周りには女性客しかいない。

「……………誰もいないじゃん、男性客」

「目の前って言ったでしょ。ラテの事だよ」

「俺? そうなのか、モカ?」

「んー、お兄ちゃんはお兄ちゃんだから。結婚したい人って言うのとはちよつと違うんだな」

「そうなの?」

「そう。モカちゃんにとってお兄ちゃんは世界にたった1人しかいないかけがえのない存在なんだよ」

「……………モカ。俺もそう思ってるぞ。俺たち両思いだな」

「わーい。お兄ちゃんと両思いだ」

「……………つぐみ、コーヒーおかわり」

「あはは……………この2人は相変わらずだね」

蘭がため息をついて、飲み干したコーヒーカップをつぐちゃんに渡した。なんだろう、俺たちが一体何をしたって言うんだろうか。

「で、話戻すけど。モカは結婚するならどんな人がいい?」

「んー……考えた事ないな。あたしはずーっとお兄ちゃんと暮らせればそれでいいから」

「それはつまり、俺も絶対結婚してはいけないってことになるよな？」

一生結婚できずに独り身の生活を送るのか。それとも、モカとともに死ぬまで一生暮らすのか……………

「考えるまでもないな。モカと一生暮らすのが正しい」

「でしよ」

「……………一生こんな風に兄妹でイチャイチャしてるのもちよつと怖いと思う」

「た、確かに……………蘭ちゃん、これは幼馴染としてわたし達がどうにかしてあげるべきだと思うんだけど？」

ヒソヒソと俺とモカには聞こえないくらいの声で何かを話し出す蘭とつぐちゃん。俺たちにも聞こえるくらいの声で話してほしい。

「でも、確かに結婚はしたいよな。でも、モカともずっと離れたくないし……………」

「お兄ちゃん、いい考えがあるよ」

「なにっ？どんな考えだ？」

「ふっふっふー。それはねー？」

コーヒーカップをトン、と机の上に置いたモカはとんでもない事を言い放った。

「お兄ちゃんが蘭と結婚すればいいんだよ」

「へっ？」

「えっ？」

「なっ!？」

「そうすれば、あたしとお兄ちゃんと蘭の3人でずーっと一緒に暮らせるよ」

「何言ってるんだモカ？俺が？蘭と？結婚する？そんな事できるわけ」

「でも、モカちゃんはお似合いだと思うよ、蘭とお兄ちゃん」

「い、いやいやいや。そんなの……………いや、待てよ」

俺が蘭と結婚する。蘭は俺とモカがこうやって仲良くするのを幼

い頃から見てる。嫉妬なんて絶対しない。つまり離婚する事なんてほぼ100%ありえない。そして蘭はモカと一緒に暮らせる。3人でずーっと仲良く暮らしていける。

「……………意外とありかもしれない。いや、ていうかありだなそれ。モカ天才だな!!」

「でしょ。お兄ちゃん、もつと褒めて〜」

「天才だモカ! やっぱりモカは俺の自慢の妹だよ!!」

神がかった意見を出したモカの頭を優しく撫でてあげる。するとモカは気持ちよさそうに目を細めてもつとして〜、と言わんばかりに頭を近づけて来た。

「いやー。さすがモカだな。て事で、蘭。俺と結婚しようぜ」

「はあ!? なんでそうなるの!!」

「話聞いてただろ? 俺が蘭と結婚すれば俺たちはずっと3人で暮らしていけるんだよ」

「嫌! 絶対嫌!! 誰がこんなシスコンと結婚なんて!!」

蘭は席を立ち上がり、顔を真っ赤にして俺を指差しながら拒絶してくる。

「蘭ー、もしかして照れてる〜?」

「照れてない! 変なこと言わないで!」

「ら、蘭ちゃん。落ち着いて」

「そうだよ蘭ー。落ち着こう〜」

「モカは黙ってて!!」

「蘭が怒ったー。モカちゃんこわーい」

こわーい、って言ってるけど全然そんな風には見えない。むしろ楽しんでるようにしか見えないぞモカ。ていうか、周りからの視線が痛い。

「ら、蘭。落ち着け。他のお客がこっち見てるし、取り敢えず座ろう、なっ?」

「あっ……………」

冷静になってまわりを見渡すモカ。1人キレてるのを自覚した蘭は恥ずかしくなったのか、さらに顔を赤くして席に座った。

「ま、まあ、確かにあれだ。俺もいきなり変なこと言っつて悪かったよ」「あたしも。ごめんね、蘭」

「別にいいけど。でも、とにかくあたしはラテと結婚なんて嫌だから」「蘭にここまで嫌がられるのもすごくショックなんだけど……」

「お兄ちゃんかわいそー。よしよし」

「あー、癒されるー……」

落ち込む俺の頭を今度はモカがよしよしと撫でてくれる。

「まったく……」

「あはは……災難だったね、蘭ちゃん」

「……あ」

「ん？今度はどうした？」

ふと何かを思いついたように声を上げるモカ。そして、またとんでもない事を言い放つ。

「蘭がダメならつぐはは？」

「えっ、わたし!？」

「つぐちゃんか……」

確かにこの前つぐちゃんにこんな兄は嫌だと言われた。だが、結婚相手としてはどうだろうか？

「つぐならあたしたちのお世話もしてくれそうだよね？」

「お世話って……あー、でもわたしは」

「それにー、つぐと結婚したらこっちに引越して来てモカちゃん達3人でここを切り盛りすることもできるよ？」

「確かに……つぐちゃんと結婚すれば俺の就職先も一瞬で決まるわけだ。そしてモカとも暮らせる。一石二鳥だな！」

「確かにつぐみなら面倒見も良さそう。いいんじゃない？」

「ら、蘭ちゃん！モカちゃんも！わたしは別に結婚とかそういうのはまだ全然考えてないし……あ、ほら、ひまりちゃんも巴ちゃんもいるしーね？」

「……今明らかに話題ずらそうとしたよな？」

「したね？」

「うん、した」

「うう………」

涙目になるつぐちゃん。やばい、これはさすがにやりすぎたのかも
しれない。

「ご、ごめんつぐちゃん！冗談！冗談だから！な、2人とも？」

「う、うん。あたしもさつき色々言われたからちよつと言いついたく
なっただけっていうか」

「つぐ、泣かないで」

「う、ううん。いいの。私もちよつと焦っちゃっただけだから。ごめ
んね、わたし仕事に戻るね」

駆け足で厨房の方へと戻るつぐちゃん。なんかものすごい悪い事
をしてしまったような気になってしまった。

「あーあ。お兄ちゃんがつぐを泣かせちゃった」

「ラテ、最低」

「ちよつと待て！全部俺のせいか!？」

2人がすごい冷たい目で俺のこを見つめてくる。

「だって、ラテが勝手に納得したからつぐを泣かせることになったん
だし」

「お兄ちゃん、つぐをいじめたらダメだよ」

「いやいや！蘭の時はともかく今回悪いのは俺たちだろ。つぐと結婚
したらとか言ったのはモカだし、蘭だって納得してただろ！」

「あたしはやり返したただけだし。そもそもモカが変な提案するのが悪
い」

「モカちゃんはお兄ちゃんの話に答えただけだよ」

「……………」

「……………」

「……………」

「追加で何か頼むか」

「そうだね」

「そうしよ」

何かものすごい悪いことをしてしまった気になった俺たちは3人
で追加にケーキとコーヒを頼んだ。

「なあ、モカ」

「なーにー?」

「実は、ものすごく大変な事があるんだ」

「大変な事?」

「ああ?実はな」

俺は現在高校2年。そして、もうすぐ高校生で最大と思われる行事が行われようとしていた。

「もうすぐ俺修学旅行なんだ」

「……………つまり?」

「モカとまる4日ほど会えなくなる」

「それは本当に大変だね」

俺の高校は5泊6日の沖縄旅行に決定していた。つまりモカと丸一日会えない日が4日間も続いてしまうということだ。

「モカ。俺は考えた。5泊6日の旅行は楽しみ。確かに楽しみだ。でもさ、4日もモカに会えないってなると、俺に死ねって言ってるようなもんなんだと思うんだよ」

「そーだね。あたしもお兄ちゃんと4日も顔会わせられないのはものすごく辛いよ」

「そうだろ。だから、物凄く辛い決断だったんだけど、考えたんだ。モカと丸4日間会えなくなるくらいなら別に修学旅行なんて行かなくてもいいんじゃないか、って」

「いや、そこは修学旅行行けよ」

「ラテさん！わたしのお土産はちんすこうかサーターアンドギーがいいです!!」

今まで黙って俺たちの話を聞いていた巴とひまりちゃんに突っ込まれてしまった。

「嫌だっと思って考えても見ろよ！4日だぞ！1週間の半分以上モカと会えないんだぞ！そんなの………そんなの俺には耐えられない」

「我慢しろ」

「本当、ラテさんってモカ命ですよね」

「当たり前だろ！なんだったら俺の携帯の待ち受け見るか？モカとツーショットだぞ」

「うわ、それはさすがにキモいです」

「………そこまでバツサリ言わなくてもいいと思うんだけど。」

「あたしもツーショットだよー。見る？」

「ほら見ろ！モカもこう言ってるじゃん！」

「え、モカもなの？」

「モカ……それはさすがに」

携帯の待ち受け画面を俺たちに見せてくれるモカ。俺とモカは考える事が一緒なんだよ。だからモカも俺とのツーショットを待ち受けに……

「モカ、これなんのツーショット？」

「んー、山吹ベーカーリーのパンとツーショット」

「モカは平常運転すぎるな」

「ていうか、パンと写真撮ってるのをツーショットっていうの？」

「ツーショットだよー。モカちゃんは山吹ベーカーリーのパンを愛してるから」

確かにモカは山吹ベーカーリーのパンを愛してると言っても過言ではないだろう。けど、まさかパンとのツーショットを待ち受けにするほどとは思いつかなかった。

「……よし、話を戻そう。俺の修学旅行開始までは後10日ほどある。それが過ぎれば地獄の6日間だ」

「修学旅行って普通高校の最大行事だよな？それを地獄の6日間っ

て、ラテさん、ある意味凄いいよね」

「こいつにとつてモカと一緒にいけない旅行はただのおもんない旅行なんだよ。ほら、ラテって友達いないし」

「いるわ！バカにすんな！隣の席の鈴木とか、後ろの席の女の子の加藤さんとか！後……隣のクラスの山田とか！他にもいっぱいいるんだぞー！」

「うわっ、名前がありきたりすぎて、友達じゃなくて、知り合いにしか思えない」

「ああ。これは絶対いないな」

「ううっ……」

違うんだ。俺は悪くない。毎日毎日モカのために早く帰宅していたら、いつの間にかクラスで1人の状態が続いてしまっているだけなんだ。

「大丈夫だよ。お兄ちゃんにはモカちゃんがいるからー」

「……そうだな。俺はモカさえいれば後は何もいらぬ。友達なんていらぬんだ」

「ラテさんダメですよ！友達はちゃんと作らぬと大人になつた時後悔しますよー！」

「心配すんな。モカ以外にもひまりちゃんや巴つていう仲のいい友達がいるからな」

「やだっ、どうしよう。今わたしものすごくキユンつてなつた」

「あ、ああ。今のはちよつとした不意打ちだつたな」

俺の言葉にフツと顔を背ける2人。蘭とつぐちゃんもいるんだ。俺には友達が4人もいるんだからそれだけいれれば十分だろう。

「ねえねえお兄ちゃん。あたしは？」

「ん？最可愛で最高で最愛の妹」

「最可愛つてなんだ？」

「最強に可愛いの略だ」

「略すなよ」

最強に可愛いなんて言いにくいんだから略す方がいいに決まっている。

「よし。じゃあ話を戻そう。10日間ある中俺の取ることの出来る事は3つある」

「3つも〜?」

「ああ。まず1つ。これから10日間。ほぼ6日会えなくなる俺のためにモカ成分を吸収するために、毎日バイトもしないで学校以外の時は常に一緒にいること」

「おー、それは10日間幸せかも〜」

「2つ。もうモカと一緒に優先して修学旅行を休む」

「この人本当に必死すぎる……」

「3つ。俺が今まで貯めたバイト代を全て出してモカも修学旅行に着いてくる」

「却下だ! 3つともぜんぶ却下!! ラテももう高校生だろ! モカがいなくても生活できるくらいしつかりしろ!」

俺の素晴らしい3つの案は巴に全て却下されてしまった。この案のどこに不備があるのか教えてもらいたいところだ。

「たかが6日会えなくなるくらいでそんなメソメソしてどうするんだ? そんな事がいつまでも続いてたつてラテ自身何も成長出来ないだろう?」

「だって……」

「だってじゃない。修学旅行くらいちゃんと行ってみせろ!」

「巴、なんだかお母さんみたい」

「本当。トモちゃん、お兄ちゃんのパパだ〜」

「誰がママだっ!!」

バママは俺に厳しすぎる。アメとムチのムチしか与えてくれない酷いママだ。たまにはとつても甘いアメをくれたつていいじゃないか。

「うう……モカー、俺どうすればいい?」

「よしよし。お兄ちゃん、だいじょーぶ〜?」

拳げ句の果てにモカに抱きついた俺はよしよしと頭を撫でてくれる。ああ、癒される。

「……ラテさんつてモカのことになると、本当兄の威厳つてものが感

じられなくなる時あるよね」

「ああ。時々モカが姉に見える時があるのはアタシの気のせいじゃないんだよね？」

「現に今モカが姉のように見えるから気のせいじゃないと思う」

「あたしはお姉ちゃんじゃなくて、妹だよ？」

「それは理解してるから」

頭を撫でてくれるモカから離れた俺は、モカの後ろに回ってその場で胡座を組んで座り、モカを俺の足に座らせてそのまま後ろから抱きしめた。

「今日はこの体勢でずっと過ごす」

「お兄ちゃん、それはモカちゃんも辛いよ」

「もうラテさんが壊れちゃった」

「はあ……アタシたちどうすればいいんだ？」

もう10日後のことを考えたら嫌になりそうな俺は後ろからモカをギュツと抱きしめていた。もういいじゃん。修学旅行なんて行かなくてさ。

「……ねえねえ、お兄ちゃん？」

「何？」

「もし、修学旅行を無事に乗り切ったらモカちゃんとデートしよ？」

「デート、だと？」

「そう。お兄ちゃんの行きたいところ、どこでもいいよ」

「どこでも？」

「うん。あたしもお兄ちゃんと同じできつと寂しい思いをしてるから、きつとお兄ちゃんに甘えたくなるんだよ。だから、お兄ちゃんが帰ってきたら、お兄ちゃんと一緒にデートがしたいんだな。ダメ？」

「ダメじゃない！行きたい！むしろ俺も行きたい!!」

「わーい。じゃあ約束だよ？」

「ああ。もちろん！」

修学旅行が終わったらモカとデートができる。その思いさえあれば6日間なんてあつという間に乗り切れる気がした。

「どこ行くか。久しぶりに遊園地とかありかもしれないな？」

「いいね。でも、モカちゃんはお兄ちゃんとなら別にどこでもいいんだよ」

「じゃあ今からその予定立てるか!!」

「はーい」

抱きしめていたモカの体を離して、俺はメモ帳とペンを取り色々書き出していった。

「……結局、ラテさんの事を一番理解してるのはモカって事だよな」

「ああ。あの超がつくくらいのスコンを元気にできるのは妹のモカだけって事だ。ははっ、悩んでたアタシ達がバカみたいだな」

「だねっ！」

第14話 ホラー映画にビビる3人と怪談にビビる4人

「あー、1人って本当に暇だな。今日はモカが泊まりでつぐちゃんの家に行っちゃったし、どうしよう……」

現在、夜の10時。今日はバイトもなく、モカ達幼馴染5人もお泊まり会をするらしく男である俺がそんな中に混じれるわけもないので家で1人で暇していた。

「んー、久しぶりにゲームでもするかな。それとも読書するか。どちらにしるあんまり時間は潰れないか」

特にやりたいゲームがあるわけでもないし、読みたい本があるわけでもない。本当どうしよう。暇すぎる。

「あー、暇だー。もう寝るか?……つと、モカからメールだ」

ベッドの上に転がろうとした瞬間、携帯に着信が入った。送ってきたのはモカである。

「えつと……?」

『お兄ちゃん、ヘルプミ〜』

「……………なんだこれ?」

要件がよくわからないので、モカに電話をしてみた。すると、2コールも待たないままに繋がった。

『あ、お兄ちゃん?いまからつぐの家に来て〜』

「はあ?いきなり何を?てか、今から!」

『そー。いまから〜。それじゃあよろしく〜』

「あつ、おい!まで……………切れた」

一体なんなんだ?今すぐにつぐちゃんの家に来てくれだなんて……………

「とりあえず向かうか。暇してたし」

着替えた後、必要最低限のものだけ用意して、家を出て、途中コンビニに寄ってお菓子を買った後つぐちゃんの家へ向かった。

つぐちゃんの家に着くと、夜遅いと言うのにつぐちゃんのお母さんが家に入れてくれて、そのままつぐちゃんの部屋に向かった。

「モカー。つぐちゃんー？いるかー？」

『あ、お兄ちゃん。どうぞはいって〜』

つぐちゃんの部屋のドアをノックして声をかけると、扉の向こうからモカの声が聞こえたので中に入る。

「失礼します。つて、モカ。ここはお前の部屋じゃない……………何この状況？」

部屋に入ると、気になるものが目に入った。つぐちゃんの整頓された綺麗な女の子らしい部屋より、俺の愛しのモカがパンを食べる姿より、困った顔をするつぐちゃんより何より、つぐちゃんのベッドの上でうずくまる蘭、巴、ひまりちゃんの3人の姿が。

「どうしたんだあれ？」

「えつとね〜……………なんだっけ？」

「忘れるなよ!!」

「えへへ〜。あむっ」

「いや、パン食べてないで何があったか話してくれ。後こんな夜遅くにパン食べるな。太るぞ」

「だいじょーぶ〜。ひーちゃんにカロリー送ってるからモカちゃんは太らないんだよ〜」

「んなわけあるか!!」

ダメだ。話が全然進まない。パンを食べるモカは一旦放置して、今度はずぐちゃんに向き直った。

「ごめんつぐちゃん。何があったの？」

「え、えつとね。最初はみんなで楽しくお喋りしてたんだけど、途中で

ひまりちゃんが家から持ってきたホラー映画をみんなで見ようってなっちゃって」

「ホラー映画?」

「お兄ちゃんこれだよ」

モカがポチツとりモコンの電源ボタンを押すと、テレビ画面いっばいにホラー映像が映った。

「うおっ。びっくりした」

「やめてモカ!消して!すぐに消して!!」

「はい」

ビクビクしながら震える蘭に注意されたモカは再び電源ボタンをポチツと押した。

「なるほどな。見ようって言って見だしたのはいいけど、3人がビビりまくってベッドでうずくまって動けなくなったと」

「そーだよ。3人とも無理しなくても良かったのにね?」

「だ、だって。これそんなに怖くないって店員さんに言われたから持ってきたのに」

「ひまりの言葉を信じたアタシ達が悪かったんだよ……………」

「もうやだ。絶対夢に出る……………」

確かに持ってきた本人であるひまりちゃんがビビってるのも変な話だ。

「でも意外だな。モカはともかくつぐちゃんはこういうの苦手じゃないのか?」

ひまりちゃんや蘭がここまで怖がるのは納得だ。巴は流石にちよつとびっくりだったけど。でも、それよりも普通にしているつぐちゃんの方が予想外だった。

「確かに怖かったけど、泣きそうになったりする程ではなかったかな」

「へえ…………つと、話が脱線しちゃった。結局のところ、俺はどうしたらいいんだ?」

「お兄ちゃんは今夜ここで泊まるの?」

「……………へっ?」

モカさんや。今私になんて言ったのでしょうか?

「……………聞き間違いだよな。泊まるって?」

「聞き間違いじゃないよ」

「……………誰が?」

「お兄ちゃん」

「どこに?」

「ここ」

「お前らと一緒に?」

「そ」

「……………帰るわ」

「「ダメ!!」」

「うえっ!!」

踵を返して部屋から出ようとしたところ、うずくまっていた3人が俺の肩を掴んだ。

「帰ったら絶交します、ラテさん!!」

「帰ったら一生ラテの事許さない」

「アタシ達のために一肌脱いでくれ!」

巴はともかく他2人は懇願ではなくただの脅しではないのだろうか。

「ふざけるな!!妹であるモカと一緒に寝るのはいつでも歓迎するけど、お前らは流石に厳しい!!」

「なんですか!こんなに可愛い美少女5人と一緒に寝られるんですよ!!私だって好きでこんな事言ってるんじゃないんですから!」

「だから厳しいって言ってるんだよ!!俺の理性持たなくなっても知らねえぞ!あと、好きで言ってるんじゃないなら俺呼ぶな!てか、帰らせろ!」

「どうせラテはただのチキンだから理性持たなくなってもあたし達に何も出来ないでしょ」

「チキン言うな!!」

「蘭。ラテはチキンじゃなくてヘタレだぞ」

「どっちも一緒だよ!」

ていうか、ボソツという蘭の言葉って結構心に刺さるんだよな。チ

キンとか言わないでほしい。巴までへタレとか言ってくるし、泣きそう……

「大体この部屋で6人で寝るってどうやって寝るんだよ」

「2人がつぐのベッドで寝て、他4人が床に布団敷いて寝たらいけるんじゃないか？」

「よし。だったらその2人の方は俺とモカで決定だな」

兄妹で同じところで寝る。何もおかしいことはない。

「お兄ちゃん、ここあたし達の家じゃなくて、つぐの家だよ」

「わ、私もちよつと遠慮して欲しいかな。モカちゃんはともかくラテ君が私のベッドで寝るのは流石に……」

「ていうか、今のラテさんの発言、普通にセクハラですよね」

「ああ、今のはひどいな」

「ラテ、サイテー」

「たった一言でここまで貶められるってお前ら酷くね？」

顔を真っ赤にして言うつぐちゃんに賛同するように他3人が俺の事を罵ってくる。いやまあ確かに今の発言はどうかと思っただけども。

「じゃあもし俺がここに泊まって、俺が床で寝るのは確定だとして、俺が寝る位置は？」

「真ん中」

「俺に今日寝るなって言ってるのか？」

真ん中に横にさせられて可愛い美少女2人に挟まれて寝ろと？寝れるわけがねえだろうが。せめてモカを俺の抱き枕にさせてくれれば話は別かもしれない。

「だって怖いんですもん！」

「ホラー映画持ってきたひまりちゃんが悪いんだろ」

「だってほら、夏にお泊まりといえどホラー映画でしょ！」

「そのホラー映画見て自爆したのもひまりちゃんだからな」

「うう……」

「てか、別に俺がいなくてもお前らが固まってねれば怖くないだろう？床で寝るみんながぎゅーつとくっついて寝れば大丈夫だろうし。俺必要ないだろう？それに俺着替えもないしまだ風呂も入ってねえしな。

うん、俺は帰る方がいいに決まってる」

まだ風呂も入ってない男とこの子達は寝たくないだろ。モカはどうか知らねえけど。

「……ラテさんガード固いね。風呂だつてつぐの家の借りたらしいのに」

「ああ。仕方ない。使いたくなかったけど、この手しかないな」

「うん。そうしよう」

ホラー映画にビビっていた3人はモカに耳打ちをする。なんだか嫌な予感がする。

「モカ、いい？」

「いいよ。かわりに、今度パンおごつてね」

「ああ。10個でもそれ以上でも奢つてやる」

「モカ、お願い」

「は〜い」

持ってきていたパンを全て食べきったモカがのそのそと近づいてくる。本当に…嫌な予感しかない。

「お兄ちゃん〜？」

「な、なんだ？」

「もし今日お兄ちゃんがここに泊まってくれないなら、明日からお兄ちゃんと一緒にいる時間10分削つちやうけど、いい〜？」

「泊まります！青葉ラテは本日つぐちゃんの家に泊まらせてもらいます!!」

結局、モカに頼みごとや条件を出されたら断れないのが俺なのである。

その後。俺はつぐちゃんの家でシャワーだけ貸してもらい、体を

洗ってから部屋に戻って来た。部屋に戻ると就寝の準備が完了したのか、布団が4つほど並んでいた。

「……で、どうやって寝るんだ？言っとくけど俺は真ん中は絶対無理だぞ。絶対身がもたない」

「ぶーぶー！幼馴染なんですからそんな事気にする必要ないと思います！」

「いや、逆にお前らが気にしない方がおかしいだろ。妹であるモカはともかく」

「あたしはお兄ちゃんの隣で寝られるならなんでもいいよ」

「それだといつもと変わらないでしょ」

「ならじゃんけんだな。とりあえず勝ったやつがラテの両隣を独占できるって事でいいだろ」

「そうしよう！」

「わかった」

「……………あれ？いつの間にか俺が真ん中で寝るのが確定している。

おかしいな。俺の意見は全員無視なんだろうか？」

「わ、私は別に自分のベッドで寝るから大丈夫だよ。じゃんけんはみんなですてくれたらいいから」

「よし、ライバルが1人減った!!」

つぐちゃんの事をライバルというひまりちゃん。この子はどれほど俺の隣で寝たいのだろうか。もしかしてひまりちゃん、俺の事を……………いや、そんな事あるわけないか。

「つぐ、いいの？お兄ちゃんの隣で寝られるまたとない機会だよ？」

「だ、だってラテ君の横で寝るなんて……………想像しただけで恥ずかしくて寝られないよ」

俺も恥ずかしいから絶対却下。でも俺に断る権利はない。理不尽な話だよ…………

「でもお兄ちゃんって抱き枕にするとすごく寝心地いいんだよ。あったかいし、いい匂いがするし、ぐっすり眠れるよ？」

「そ、そうなの？」

「うん。あれは体験しないと後悔すると思うよ。例えるなら……モカちゃんに数量限定のパンを食べる時の至福のひとときくらいに……！」

「……………」

「つぐちゃん？別に考え直さなくても大丈夫だと思うよ？」

「変なことを言うモカの話聞いて考え直すつぐちゃん。」

「それなら……いや、やっぱりダメ！私は参加できないよ！モカちゃん、変なこと言わないで！」

「えー。つぐ、もつたいないよ〜」

「もつたいなくないの！」

「しようがないなく。それじゃあ始めるとしますか〜」

「だな」

「うん」

「いくよー！最初はグー、じゃんけん……」

「二「ポンツ」二」

「で、こうなったわけか」

電気を消した部屋の中で、ひまりちゃん、蘭、俺、モカが床に敷いた4つの布団の中で寝転び、つぐちゃんと巴がベッドの上で寝ることになった。今でもじゃんけんに勝った時の蘭の顔が俺の中で消えない。

「ラテ。離れたら怒るから」

蘭はくつつく、とまではいれないが俺の寝巻きの服の裾を掴んで離そうとしない。モカとくつついて寝ようにも蘭が手を離してくれない限り俺は寝る体制も変えることができない。

「理不尽だ……なあ、いいだろ？蘭がひまりちゃんとくつついて寝た

ら。俺はモカとくつつついて寝るからさ」

「あたしは別に蘭とくつつついて寝てもいいよ。ひーちゃん、交代する〜?」

「えっ、いいの!?!」

なるほど……モカとひまりちゃんが入れ替わってモカが蘭とくつついて、俺がひまりちゃんと………って!!

「待て。それだけはダメだ」

「ええっ! どうしてですか!!」

「そーだよ。お兄ちゃんのケチ〜」

「いや、だって………」

俺は蘭の隣で寝転ぶひまりちゃんを見つめる。ひまりちゃんがダメである理由。それはあの高校1年生とは思えない破壊的までな胸。そう、胸である。ひまりちゃんとかくつついて寝るということはあの破壊的まで胸が俺の体に押し付けられるということ。

「本当に。絶対に俺の理性がもたない。ひまりちゃんが隣に来るというならばその間に何か置こう。鞆でもなんでもいいから」

「理性? それって………あっ」

「わかってくれた?」

「はい………そう思うと私もラテさんの隣で寝るのは少し恥ずかしくなってきました」

ひまりちゃんも自分で言っただけで気づいたようだ。

「みんなももっと自分を大切にしないと。みんな可愛い女の子なんだから」

「かわっ!?!」

「ラテ。そうやってたまに不意打ち言ってくるのやめて」

「ああ。こっちまで恥ずかしくなる」

「私も、ちよつとずるいと思うかな?」

「お兄ちゃんのタラシ〜」

「なんで全員そんな否定的なんだよ。ていうかモカに言われた言葉が一番心に傷ついたぞ」

モカにそんな酷い事を言われるなんて思っていなかった。タラシ

じゃないのに。俺はモカ一筋なのに。

「モカ。心配するな。みんな可愛いとは思ってるけど、俺がこの世で一番愛してるのはモカだけだぞ」

「うわっ、ラテ、キモっ」

「ラテさん、気持ち悪いです」

「お前ら俺から離れろよ。キモいとかいうなら俺から離れろ」

「なんで今ここで愛の告白してるの？ラテ、大丈夫？」

「ラテさんって……モカのためなら世界の壁まで乗り越えてしまいうですぬ」

「なんだそれ？俺たちはあくまで兄妹だぞ。彼女ではないし、結婚もできない。というわけで、ほら、モカ。手繋いで寝てやるから機嫌直せよ」

「別に怒ってないよ。でも、そういうことなら遠慮なく」

モカが俺の手をぎゅっと握ってくれる。うん。暖かくて柔らかいいつもの手だ。

「あくまで兄妹って感じが全然しない。普段からこんな生活してるんだ、この2人って」

「なんていうか、あたし達の間が麻痺してる感じだよ」

「なんでだ？兄妹が一緒に寝るときに手握り合うのって当たり前のことだろ？」

「まず世間一般の兄妹は一緒に寝るなんてことはない。普通部屋が別のはずだろ」

「何言ってるんだよバ。俺たち部屋は別じゃねえーか」

「そーだよトモちん。あたし達は寝るときだけ一緒の部屋にいるんだよー？」

「……ダメだ。何を言っても通じない」

「あはは。本当いつも通りだよ」

はあ、とため息をつく4人。なんだ？俺たちなんか変なことでも言っただけか？

「ああ、もうこの2人見てたらお化けなんてどうでもよくなったかも。ラテ、もう離れてもいいよ」

「そーだね。私達ももう寝よっか」

「だな」

「そうだね」

蘭の方から服の裾離さなかったくせにその言い方はどうかと思うんだけど……………ちよつと腹立ったから仕返ししてやろう。

「……………そういや、蘭。この前クラスメイトが話してた話なんだけどき？」

「何？」

「こうやってみんなで一緒の部屋で寝るとき。生前で友達がいなくて1人ぼっちだった幽霊が現れるって話をしてたんだよ」

「はっ？何言ってるの？」

「ただの気になった話さ。楽しそうにしてる人たちの部屋によく現れるんだよ」

気になった話なんかではない。俺の即興で作った話だ。夏にホラー映画もありだろう。でも、やっぱり夏といえば寝る前の怪談に限る。

「じよ、冗談ですよねラテさん？」

「そいつの話だと、その幽霊は遊んでいる奴らが楽しそうにしているのを、その部屋の窓からずーっと見てるんだってさ。そんな幽霊はこう思ってる。『あー。楽しそうだな。僕も混ぜてほしいな。僕も死ぬ前にあんなに楽しそうなおことをしたかったな』って」

「や、やめろよラテ。冗談だよな？」

「その幽霊は遊んでいた奴らが寝静まったのを見計らって部屋に入るんだ。窓からスーツとすり抜けるようにしてな」

「ら、ラテ君。私まで怖くなってきた……………」

つぐちちゃんまで巻き込んでしまったみたいだ。申し訳ないけどここまでできた以上全部話させてもらおう。

「幽霊はみんなの寝顔をずーっと見てるんだ。上からも、横からも。そして正面からもじーっと。幸せそうな顔をして眠るみんなの姿をじーっと見つめるんだってさ」

「やだ。本当やだ。ラテ、やめて！今すぐやめて！」

蘭が泣きそうな声で俺に懇願してくる。もちろんやめない。何故なら今の蘭を見るのがとても楽しいから。

「やがて幽霊は寝てるやつの耳元でこう囁くんだって。『ねえ。僕も一緒に混ぜてよ。僕とも一緒に遊ぼう』って」

「ひいつ!!」

「もちろん寝てるから返答はできないよな?でも、幽霊はそうは思わないらしくて。『遊んでくれないんだ。酷い……酷いよ。みんなはよくて僕はダメなんだって』」

そのまま幽霊はいなくなるらしいんだけど。そいつらが朝起きたら

「起きたら〜?」

「話しかけた人間のうちの1人が、部屋から消えてしまっただってさあああ!!!」

「!!!いやあああああ!!!」

俺とモカ以外の4人全員が叫びながら布団の中に潜り込んでしまった。

「ラテのバカ!バカ!大バカ!なんで今その話するの!!」

「うう……もう今日絶対眠れない……」

「信じないぞ。アタシ絶対信じないから!」

「モカちゃん……今からでもいいから私と場所変わって……私、怖くなってきた」

「みんな大袈裟だよ。そんな事あるわけないじゃん」

「まあ、それもクラスメイトから聞いた話だし、本当かどうか知らないけどな」

もちろん嘘である。そんな話聞いてない。ただの作り話である。

「うう……もうやだ……」

「ラテさん……私怖いです……」

布団からひよっこり顔を出した蘭とひまりちゃん。やばい、2人も涙目で超可愛い。

「なあ、つぐ。アタシ達も床で寝ないか?」

「私もそうしたい。流石に怖くって」

「えっ、ちょっと待って。そんな2人まで床に来たらぎゅうぎゅう詰めになるってうわっ！」

俺が最後まで言う前に巴がひまりちゃんと蘭の間に。つぐちゃんが蘭と俺の間に寝転がった。結果、ひまりちゃん、巴、蘭、つぐちゃん、俺、モカの順番で床に寝転ぶことに。

「みんなでくつついてねればきつと怖くないよな」

「そうだね……元はと言えばラテさんの所為ですからちゃんと付き合ってくださいね」

「いや、それより狭い……モカ、そっち詰められるか？」

「はい」

「ひまりももうちよいそっちに行けるか？」

「だ、だいじょーぶだよ」

1番端つこにいるひまりちゃんとモカが壁の方によっていて場所を広げる。うん、少しはマシになった。

「うう……ラテ君？」

「つぐちゃん？どうしたの？」

「わ、私も手握っていい？なんだか怖くって」

……そんなに涙目で見つめないでほしい。無理なんて到底言えなくなってしまうから。

「……………はい」

「ありがとう、ラテ君！」

つぐちゃんが俺の手を両手で優しく握ってくる。わぎわぎ両手で握る必要はないと思うんだけども………まあいいか。

「さてと。じゃあそろそろ寝るとするかな」

「あ、ラテさんずるい！あんな話自分からしといて先に寝ようとするなんて」

「いやだつてそろそろ眠たくなって来たし。モカもそうだろ？」

「そーだね。モカちゃんはそろそろ眠たくなって来たかも」

モカの方を向くと目をとろんとさせている。本当に眠たくなっている合図だ。

「ほら。あの話はまあ冗談だとしても早く寝ないと。俺明日バイトあ

るし」

「そんなの関係ない。あたし達が寝るまでラテも起きてて」

「理不尽だろそれ。とにかく俺は寝る」

「あたしも先に寝るね。おやすみなさーい」

そう言ってから数十秒後にはモカの方から寝息が聞こえだした。相変わらず寝つきがいいな、モカは。

「俺も寝ないと……」

「あ、あの、ラテ君」

「ん？」

「私ももうちよつとラテ君とおしゃべりしてたいの。だから、もう少しだけ起きててもらってもいいかな？」

……だからそんな目で見つめないでほしい。まるで捨てられた子犬のような目で。はいとしか言えなくなってしまう。

「ひまりちゃん達と話してたらどうだ？」

「えっと……ラテ君の手を両手で握ってるから、ラテ君の方にしか向けなくて。ダメ……かな？」

俺の手を離せばいいだけなのでは？と思ったが、こんなつぐちゃんも珍しいのであえて突っ込まない事にした。

「……わかった。その代わり、向こう側の3人が寝てからだよ？」

「……！ありがとう、ラテ君！」

その後。蘭、ひまりちゃん、巴が寝静まったのを見た後、俺たちは朝方までずっと話をしてて寝ることができなかった。まあ、つぐちゃんといっぱい話せたからよしとしよう。

第15話 毎月の恒例行事とラテを慕う第2の妹

放課後。俺とモカは待ち合わせをして一緒に帰っていた。モカの他に蘭と巴も一緒にいる。

「ふんふーん♪」

「モカ。今日はなんだかご機嫌だな？」

「あ、わかる〜？なんてったって今日はお兄ちゃんとモカちゃんの毎月の恒例行事だからね〜」

「恒例行事？この後何かあるの？」

「そうだよー。ねー、お兄ちゃん？」

「ああ。俺が高校生になってバイト始めてから毎月の事だからな。俺もモカも両方ハッピーになれるんだよ」

「いや、お前ら2人は一緒にいたら常にハッピーだろ。でも……少し気になるな。その恒例行事って」

少し遠回しの言い方をしてるから、巴もどんな感じなのか少し気になるみたいだ。

「あ、だったら巴も付いて来るか？」

「いいの？」

「ああ。巴も来たらあいつも喜ぶだろうし」

「なんだ？他にも誰かいるの？」

「まあそれはお楽しみで。どうする？」

「そうだな。アタシも今日は予定ないし付いて行くとするか。蘭はどうする？」

「別にいいよ。あたしも今日は予定ないし」

毎月の恒例行事に巴と蘭の参加も決定した。

「じゃあ行くか。とりあえず一回家に帰ってからじゃないとな。荷物置かないと」

「なんだ？そんな大荷物になるの？」

「そうだなー……10袋くらいいくな」

「10!!？」

「2人とも何するつもり？」

「まあ付いてきたらわかるよ。なっ？」

「うん。お兄ちゃん、今日もお願いするね〜」

「ああ。任せとけ！」

「わ〜い」

モカと一緒に腕を組みながら俺たちは一旦家へと歩き始めた。

「一体なんだろうね？」

「アタシ達も付いて行っていいって事はそんな大した事じゃないと思うけどな」

「着いた〜」

「あれ？ここって……」

「まあ、そんな事だろうと思ってたよ」

家に戻って荷物を置いた後、俺たちは目的地へと歩いた。目的地とは商店街にあるやまぶきベーカリーの事である。そう。モカが常日頃通うこの場所で、俺たちは恒例行事を行うのであった。

「ではは〜」

モカがお店の扉を開けて俺たちがそれに続くようにして中に入っていく。

「いらっしやいませ〜。あ、モカ。それにラテさんも。くると思ってたから今日は奮発してあるよー！」

中に入ると店番をしていた沙綾が俺たちに声をかけてくれる。まあ、この日はいつも沙綾が接客をしてくれるから当然といえば当然なのだが。

「流石さーや。わかってるね〜」

「あ、巴と蘭も来たんだ。2人ともモカ達の付き添い？」

「ああ。2人が毎月の恒例行事だ、って言うからちよつと気になつてな」

「2人がここにくるのって別にいつもの事なんじゃないの？」

「えーつと……まあ、そうなんだけどね。今日は特別なの。初めて見るならびつくりするかもしれないよっ」

「どういうことだ？」

「まあ、見てたらわかるよ」

俺とモカはトレイとトングをとってパンを取り始める。

「まあ、メロンパンは外せないよな。とりあえず5個くらいだな」

「モカちゃんの方も合わせて10個は必要だよ」

「つと、それもそうか。それじゃあ」

まず1つのトレイに計10個のメロンパンを乗せてそれをレジの前に置く。

「あ、お兄ちゃん。チョココロネまだあるから欲しい」

「おう、別にいいぞ。好きなだけ取ればいい」

「わくわく。あ、クロワッサンは？」

「おー。それも外せないな。んー……とりあえず15個くらい取るか」

「はい」

今度はチョココロネを5個とクロワッサンを15個乗せてそれをレジの前に置く。

「……………なにあれ？」

「あ、あんなに食べるのか……？」

「ねっ、びつくりしたでしょ？」

「いやいやいや！おかしいだろ!?今放課後だぞ！」

「明日食べるぶんにしたとしてもあの量はおかしいと思う」

「まあ、かれこれ1年くらいあの光景見てるんだよね。なんかもう慣れちゃった」

「慣れちゃったって……ああ、もう！ラテに聞いて来る」

沙綾と話していた巴がズンズンと俺に近寄って来る。一体どうしたんだ？

「ラテ。これはなんだ？」

「え、何って。俺たちが食うパンだけど」

「……今日食うのか？」

「もちろん。言っただろ。毎月の恒例行事だって」

「お兄ちゃん、クリームパンはー？」

「んー……それも10個くらい買うか」

巴の相手をしつつもパンを次々とトレイにのせていく。もう全部で40個を超えそうになっていた。

「ラテ。恒例行事って一体どういう事なんだ？」

「ん？ああ！そういうえば説明してなかったな。俺今日給料日なんだよ」

「給料日？」

「それってラテのバイト先の？」

「そつ。いやー、バイト始めたものの貯金とモカへのプレゼント以外は使い道がなくてさ。何に使おうかなって思ってた時にモカが言ったんだよ。『毎月のこの日はお兄ちゃんとモカちゃんのパンの日にしよう』って」

「………ラテのモカの真似。気持ち悪いな」

「うん。いつも通りだけど、ラテキモい」

「突っ込むところなのか!!」

確かに自分でも少し気持ち悪いなって思ったけど。

「話戻すけど、それはいい考えだなって思ってたさ。給料日になるたびに俺とモカがこのパンを大量に買って帰るんだ。まあ、大抵は1日で全部なくなるんだけどな。調子が悪かったら次の日まで延びる」

「嘘だろ？」

「なんでラテもモカも太らないの？」

「んー……まあ俺のバイト先は結構忙しいからな。ホールとかキッチンとか走り回ってたら自然とこの体型を維持できるようになった」

ちなみに俺のバイト先は飲食店だ。モカは母さんと1度来たことがあるけど、それ以外のみんなはまだ来たことがない。

「あたしはひーちゃんにカロリー送ってるからね」

「モカ。そのネタまだ使うのか？」

「ネタじゃないよ。事実だもん」

「まあそういうことだよ」

「うちとしてはありがたんだよねー。この日だけはいつもより売り上げ上がるし。何より、それだけうちのパンがこの2人に気に入ってもらってるってことなんだし」

「やまぶきベーカリーのパンは最高だよ」

「ああ。沙綾みたいな可愛い店員もいる事だしな」

「もう。またすぐそういう事言う。おまけなんてしませんよ？」

「しなくていいよ。お世話になってるんだしちゃんと全部払うさ」

俺と巴が話してる時も。今こうやって俺と沙綾が話してる間にもモカは次々とパンを撮り続けていた。

「そういえばモカ。今日昼ごはん食べてなかったよね？もしかして……」

「そーだよー。この日のためにお腹を空かしてたんだ」

「俺も今日は昼飯食ってないしな。これを帰ってから2人で黙々と食べ続ける。それが俺とモカの恒例行事だ」

ドヤ顔で決めて見せたが、巴と蘭は顔を青ざめさせるだけだった。

おかしいな。俺変なこと言ったんだろうか？

「……………そうだ。蘭とトモチんも食べる？今日は家でパンパーティーだよ」

「へっ？」

「いや、アタシは別に」

「そうだな……………ここまで付いてきてもらったのもあるし、お邪魔じゃなけりや招待するぞ？」

「あたしはいい。見るだけでお腹いっぱいだから」

「アタシも遠慮しとく。胸焼けしそうだから」

「そうか？まあ無理には進めないけどさ」

「蘭もトモチんも変なの」

「変なのはお前だモカ!!」

「ていうか、トレイやばいことになってる」

蘭の見つめる先には山積みになったパンが。もう何個あるのかもわからない。いつもの光景だ。

「今月はこれくらいにするか。沙綾、お会計頼む〜」

「はいはい。ちよつと待ってね〜」

山積みになったパンを次々と数えていく沙綾。毎度毎度の事だがすぐ慣れていく。

「……なあ、これってアタシ達がおかしいのか？あの量を普通に捌く沙綾も十分おかしいと思うんだけど」

「巴のいうとおり。凄いね、3人とも」

「えへへ〜」

「モカ。褒めてないから」

「はい。終わったよー。全部で70個か。いつもより少ないね？」

あつという間に数え終えた沙綾が報告してくれる。確かに。いつもは80くらいいくのに今日は少し少ないな。

「それでいつもより少ないの……？」

「1番すごかった時って何個だ？」

「えつとー……確か、100個だったと思うよー」

「あー、そうだそうだ。食欲の秋って事でバカみたいに買ったんだっけ？いやー、あの時は流石に辛かったな」

「今日は暑いから、きつと夏バテだね〜」

「夏バテでもそんなに食わねえよ。あー、ダメだ。アタシ今日夜ご飯食べれるかな？」

「あたしも。自信なくなってきた」

「トモちん、大丈夫？」

「蘭も。しんどいなら無理するなよ？」

「誰のせいだと思ってるんだ！」

「こんな事ならついてくるんじゃないかった」

こうして俺たちは計70個のパンを家に持って帰った後すぐさま食べ始めた。結果的に俺とモカでその日のうちにすべて食べ終えることができた。

「いやー、美味かったな」

「うん。お兄ちゃん、来月もよろしくね」
「ああ。そうだな」

「さてと……今日は何して時間潰そうか」

モカはバイト。それ以外のみんなも何かしら用事があるみたいで俺は1人街でぶらぶらと歩いていた。

「本屋に行くか……それともゲーセンか……」

「あつ！ラテおにーちゃんだ!!」

「ん？」

とっさに自分の名前が呼ばれてそっちに振り向くとそこには見知った顔が。

「ラテおにーちゃん！」

「おおっと。久しぶりだなあこちゃん」

その見知った子は俺を見つけてるやいなや胸に飛び込んでくる。いきなりの事で仰け反りそうになるがその子をしっかりと抱きとめる。

彼女は宇田川あこ。巴の妹であり、彼女と同じくバンドを組んでドラムをしているお姉ちゃん大好きっ子である。

「ははっ。どうしたんだ？1人でいるなんて珍しいじゃん」

「今日はね、忙しいおねーちゃんのかわりにあこが夕飯の買い出しをするんだー」

「へえー。1人で買い物か……偉いな、あこちゃんは」

「えへへ、そうでしょー？」

ちなみに彼女は1番好きだと思っっているのは巴だが、2番目に好き

だと思っているのはどうやら俺らしい。俺のことを本当の兄のように慕ってくれている彼女の事を俺自身も本当の妹のように可愛がっている。いわば、第2の妹という感じだ。

「ちなみに晩飯は何を作るんだ？」

「カレーだよ！やっぱ暑い日に食べるカレーって美味しいから！」

「カレーか……いいな」

「でしょでしょ！良かったらラテおにーちゃんも一緒に食べる？」

「あー……そうしたいのは山々だけど、今日はモカがいるからな。帰ってモカの飯も用意してあげないといけないから」

「そっかー……残念」

あからさまにしよんぼりする彼女の頭を優しくポンポンと撫でてあげる。

「また今度誘ってくれよ。その時は俺があこちゃんを招待してやるからさ」

「ほんとっ!?!約束だよ!!」

「ああ。わかったよ」

無邪気な子どものような笑顔を浮かべる彼女。モカとは正反対だけどやっぱりこういう可愛い妹もありだよな……

「でも、そうだな……うん。俺も買い物手伝ってやるよ」

「いいのっ!?!」

「ああ。今日晩飯付き合ってやれない代わりだ。俺も暇してたしな」

「……ラテおにーちゃんって会う時いつも暇してるよね？もしかして友達いないの？」

「うぐっ!!」

痛いところを突かれて俺はその場に膝をつきそうになる。辛い。そんないきなり核心を突かれると流石の俺も辛いところがある。

「ああ、おにーちゃん！大丈夫!?!」

「も、もちろんだ。それにな、おにーちゃんには友達なんていなくても大丈夫なんだ」

「どうして？」

「俺にはこうやって慕ってくれるあこちゃんみたいな可愛い子がいる

「あれ、つぐちんだ」

「あこちゃん？もしかしてラテ君はあこちゃんの買い物の付き添いをしてるの?？」

「そうだよ。今日は忙しい巴の代わりにあこちゃんが夕飯の買い出しをしてるんだって。暇してたから俺もついてきちゃった」

「…………ラテ君」

「ん?」

「相変わらず友達いな『それ以上言ったらいくらつぐちやんでも怒るよ』ご、ごめんなさい」

「大丈夫だよ！例えばぼっちでもおにーちゃんにはあこやつぐちんがいるんだし!!」

「グハツ!!」

「ああ、ラテ君!」

ここがスーパードということも無視して俺は膝をついてしまう。キルだ。空気を読めずに言ったあこちゃんの言葉で俺のHPがオーバークルされた。

「ら、ラテ君!ファイトだよ!」

「だ、大丈夫。あこちゃん。俺にぼっちとか友達いないとか言うのやめようか。結構辛いところがあるんだ」

「ご、ごめんね…………だいじょぶおにーちゃん?」

「無論だ。お兄ちゃんに辛いことなんて1つもないんだから」

「さっすがあこのおにーちゃんだね!」

「さつき辛いところがあるって言ってたようなの?」

「つぐちちゃんそこ突っ込まないで!」

あこちゃんのおにーちゃんという言葉に励まされた。つぐちゃんがボソツと突っ込むがそこは気にしてはいけない。

「とりあえず続けて食材買いに行くか。つぐちちゃんも一緒にどう?」

「そうだね。つぐちんも一緒に買い物しよっ!」

「わかった。じゃあご一緒にしようかな」

つぐちちゃんも一緒に買い物をすることに。

「そういえば、今日つぐちちゃんは何作るんだ?ていうか、つぐちちゃんが

「買い物してるって珍しいな」

「そうかな？今日はお父さんもお母さんも忙しいから私が代わりに。今日はハンバーグにしようと思って」

「ハンバーグか……いいな」

「あこもハンバーグ食べたくなつてきちゃった」

「つぐちゃんの手作りハンバーグ……丁寧に、かつ繊細に作り上げてくれそうな感じだ。食べて見たい。」

「あはは……そんな大したものじゃないと思うけど、あこちゃんは何作るの？」

「カレーだよ。今日はおねーちゃんが帰ってきたら2人で作るんだ」

「巴ちゃんだったらきつと美味しいのを作ってくれそうだね」

「巴が作るカレーも美味そうだな。なんというかすごく男らしいカレーになる気がする……男らしいカレーってなんだ？」

「ラテ君は？」

「俺？」

「ラテ君は何作るのかなって思ってる」

「俺は昨日の残り物のシチューだな。俺は基本残りもんしか作らねえし」

「シチューか……いいな。そういうえばモカちゃんがいつも持つてきてるお弁当ってラテ君が作ってるんだよね？」

「まあ大概は俺だな。モカはあんな感じだし起きるの遅いからな。母さんがいる時はいつも任せてるけど」

「モカちゃんのお弁当っていつも美味しそうなんだよね」

「そうなの？」

「うん。具がたくさん入ってて、いつもモカちゃんが羨ましいって思うの」

「いいな。あこも食べてみたい」

「機会があったら作ってあげるよ」

「モカのためだからな。弁当は本気で作ってあげないとモカがかわいそうだから。」

「でもあいつ食後にいつもパン食ってるだろ？」

「そう……だね。お弁当食べた後にいつも2つはパン食べてるよ」

「俺が作る弁当は量はそんなに多くしてないからな。あいつが大好きなパンを食べさせてあげるためでもあるけど」

モカはいつも学校に行く前にやまぶきベーカリーに寄ってパンを買って行く。俺もたまに買う時はあるけど。

「さて、買うものはこれで揃ったかな？」

「うん。だいじょーぶだと思うよ！」

「よし。じゃああこちゃんが今日頑張れるようにあこちゃんの好きなポテトチップスを買ってあげよう」

「ホント!？」

「こんなところで嘘つかないよ。買い物カゴ持っててあげるから好きなの取ってきていいよ」

「やったー! ラテおにーちゃん大好き!」

すぐさま買い物カゴを俺に預けてお菓子売り場へと走って行った。

「いやー、元気だなー」

「ラテ君、あこちゃんに甘すぎるんじゃない？」

「ん? そうかな。あんな風に俺を慕ってくれてるのに何かしてあげないのは俺の流儀に反する気がしてさ」

「……単におにーちゃんって言うって欲しいだけじゃなくて?」

「つぐちゃん、なんでわかったの?」

つぐちゃんに心を読まれた。本当のことを言うと、ただおにーちゃんって呼んでくれるあこちゃんが可愛くて甘やかしてるだけである。

「私もラテ君と結構付き合い長いから。そのくらいはわかるよ」

「それもそうか。でも、あれだな。あこちゃんに何か買ってあげたのにつぐちゃんに何も買ってあげないのは不公平だよな。つぐちゃんは何かいる?」

「わ、私はいいよ! 今日たまたまあっただけなんだし」

「じゃあ今日たまたまあった記念だ。ほら、俺も行くからなんか選ぶに行こー!」

「ほ、ほんとに大丈夫だから!」

「いいからいいから。つぐちゃんはいつも遠慮しすぎ」

頑なに拒否するつぐちゃんの腕を取って俺たちもお菓子売り場の方へと向かった。

「もう………ずるいよラテ君」

「なんか言った？」

「な、なんでもない！」

買い物をしてスーパーを出た俺たちは、2人を家まで送ることにした。もちろん、2人の荷物は俺が持ってあげている。

「ラテおにーちゃん、荷物重くないの？」

「ん？大丈夫だぞ。俺男だし、これくらいはね」

「ごめんね。私の荷物まで持ってもらっちゃって」

「気にしない気にしない。ほら、あこちゃんの家ついたよ」

「あ、本当だ！それにおねーちゃんもいる。おーい、おねーちゃん!!」

「ん？おお、あこ。それにラテとつぐも」

ちようど家に入ろうとした巴があこの声に気づいてこっちに振り向く。どうやら巴の用事が終わったみたいだな。

「あこ、ちゃんと買い物できたみたいだな？」

「当たり前だよ。あこだってもう中学3年生だよ！これくらいは余裕だもん」

「ははっ、そっか。悪いなラテ。付き合ってもらっちゃったみたいだな」

「気にしないでいいよ。もともと暇してた俺が手伝いを申し出たんだし」

「暇してたって………ラテ、やっぱりお前友達』もうそれはいいっての

!!』あ、悪い」

今日だけで何度それを言われたらいいんだよ。本当に俺の心が折れるぞ。

「ほい。これ今日の夕飯の荷物な」

「サンキュー。じゃああこ。一緒カレー作るか!」

「うん! ラテおにーちゃん。つぐちんも今日はありがとう!」

「おう。次はちゃんとお邪魔させてもらうからな」

「あこちゃん、またね」

「バイバーイ!」

手を振るあこちゃんに俺たちも手を振り返して、今度はつぐちゃんの家へと足を向けた。

「ふう……重たかった」

「ラテ君、荷物持つの変わろうか?」

「問題ないよ。つぐちゃんにもたせてるのを蘭とかモカに見られたらそれこそ、またからかわれちゃうからな」

「それは……そうかもね」

「あはは、だろ? この前だってさ」

他愛もない話をしながらつぐちゃんの家へと向かって、やがてつぐちゃんの家に着くと、持っていた荷物をつぐちゃんに渡した。

「今日はありがとう。おかげで凄く助かった」

「別にいいよ。当然なことをしただけだし。お礼は……そうだな、つぐちゃんが俺に『ありがとう、お兄ちゃん。またよろしくね』って言うてくれるだけでいいよ」

「ええっ!!?」

俺の冗談を本気にしたのか、つぐちゃんは顔を真っ赤にしてあたふたし始めた。いやー、相変わらず反応が面白い。

「うそうそ、冗談だよ。今度カフェに来た時に何かご馳走してくれたらそれで『わかった!』へっ?」

「え、えっとー……」

「いやつぐちゃん? さっきのは冗談」

「き、今日は本当にありがとうだね、お兄ちゃん。ま、またよろしくね!」

「あ……………」

「そ、それじゃあ!!!」

顔を真っ赤にしたつぐちゃんはそれだけ言うと家へと入ってしまった。俺はあまりの出来事にしばらくそのまま立ち尽くしてしまった。

「……………また手伝おう」

しばらく経った後、俺は今度またつぐちゃんが困っていたら助けてあげよう。そう決意した。

第16話 案の定なラテと拗ねるモカ

夏祭り。それは夏を楽しみのイベントの一つでもあるだろう。家族で回るのもよし。友達と回るもよし、彼女彼氏と回るのもよし。夜に上がる花火など楽しみにする人間は多いんだろう。俺ももちろん楽しみだ。モカと一緒に花火は観たいし、甘い物だつてたくさん奢つてあげたいとも思ってる。そう、こいつらさえいなければ。

「はい、ラテさん。焼きそば持つてください」

「あ、じゃああたしも。唐揚げ持つといて」

「ちよ、ちよつと2人とも。ラテ君がもうそろそろ限界そうだよ……」

「お兄ちゃん、大丈夫〜?」

両手いっぱい食べ物や、射的などで当てた景品を持たされる事さえなければ。俺はモカと一緒にこの祭りを楽しめるというのに。

「はあ、予想通りすぎてもう突っ込む気も失せた」

現在ここにいるのは、わたあめをつまみながら俺の顔を覗き込むモカに、大量の荷物を持たせられて頂垂れる俺を心配するつぐちゃん。「ラテさん、だらしないですよ!祭りはまだまだ始まったばかりです!!」

「ひまり。あつちでラムネ売ってるよ」

「ホント!?すぐ買いに行こー!」

そして、そんなベンチで座る俺をグロッキー状態に……もとい荷物持ちとしてこき使う蘭とひまりちゃんがいた。

「なんかさ、あれだよな」

「あれー?」

「女の子から夏祭り誘われたら普通喜ぶ筈なのに、もう一切喜べない

俺ってやばいと思うんだ」

「それはあれだよー。蘭やひーちゃんだからじゃないの〜?」

「……………それはあるかもしれない」

「でしょー。もし誘ったのがあたしや、つぐだったら嬉しかったよね?」

「もちろん。妹であるモカは当たり前前に嬉しいし、蘭やひまりちゃんと違って俺のことをいつも気遣ってくれるつぐちゃんが誘ってくれるならもう飛び跳ねて喜んでしまうと思う」

「あはは……何だか嬉しいな。はい、ラテ君。お水だよ」

つぐちゃんが自販機で買ってくれた水を俺に渡してくれる。疲れてる俺のためにわざわざ買ってきてくれたみたいだ。

「ありがと。いくらだった?」

「ううん……お金は大丈夫だよ。私もラテ君に荷物持ってもらってるんだし、そのお礼って事で」

「いや、でも……………わかった。ありがたくいただくよ」

「うんっ!」

1度決めたらなかなか折れないつぐちゃんだ。お金はいいって言い続けるだろう。なら、俺が折れる方がいいはずだ。

「お兄ちゃんー?」

「ん?どうした?」

「モカちゃんもお兄ちゃんにご褒美をあげてしんぜよう〜」

そう言ってモカはわたあめをひとつまみとって、突き出して来る。

いや、それ俺のお金を買ったわたあめなんだけども…………

「あむっ」

口いっぱいに甘い味が広がる。

「どう?美味しい〜?」

「ああ。もちろんだ。ありがとうモカ」

俺を気遣ってくれたのであろうモカの頭を優しく撫でてあげる。

「えへへ〜。もつとあげるー」

「いや、いいぞ。それはモカのために買ってあげたんだから、モカが食べないともつたないだろ?」

「いいのー?」

「もちろんだ。その代わりモカの頭をもつと撫でさせてほしい」

「いいよー。好きなだけ撫でて〜」

許可をもらうことが出来たので、そのままモカの頭を優しく撫で続ける。わたあめが美味しくてなのか、それとも俺に頭を撫でられるのが嬉しいのかどっちかわからないが幸せそうな表情をしてわたあめを食べるモカはとてつもなく愛しかった。

「にしても、あの2人は俺に荷物持ちをさせてそんなに楽しいのか?」「そんなことないと思うよ。きつと、蘭ちゃんやひまりちゃんだってラテ君とお祭り回りがかったんだろうし」

「どうかな。俺にはただ都合のいい荷物持ちをさせられてるようにしか思えないよ」

「蘭もひーちゃんもそんな酷いこと思わないよ〜」

「とは言ってもな」

たこ焼きパーティーした時も雑用みたいだったし、前のシヨツピンもそうだし、もういいように使われるようにしか思えない。

「つと、噂をすれば戻ってきた」

「ただいま」

「戻りましたよー!〜って……うわ、ラテさんがいつものシスコンになってる」

「いつものシスコンってなんだよ。それに俺は常にシスコンだ!」

「それ突っ込むところが違うんじゃないかな?」

つぐちゃんの突っ込みはもつともだった。俺が常にシスコンなのはみんな知ってることだったしな。

「それより、ラテさん。これどうぞ!」

「ん?何これ?」

「ラムネ買いに行ったら隣にチョコバナナがあつたのでどうかなって思いました。ラテさん好きですよね?」

「モカの分もある」

「わ〜い。蘭、ありがとー」

「別に……」

どうやらラムネを買いに行くついでにチョコバナナも買ってくれたみたいだ。ひまりちゃんが待っていた俺たち3人に1本ずつ渡してくれる。

「あと、さつき買った焼きそばも食べていいですよ。今日付き合ってくれたお礼です」

「あたし達じゃ食べきれないだろうしね」

「あ、ありがとう」

なんだ。蘭にしろひまりちゃんにしろ、ちゃんと俺のことも考えてくれたんだ。

「ねっ？ひまりちゃんも蘭ちゃんもラテ君の事が好きだから、そんな風に思ってくれてる事なんてないんだよ」

「……みたいだな。俺変な思い違いしてたみたいだ。ごめん、2人も」

「何の事？」

「よくわかりませんが？まあいいや！ささっ、食べましょ食べましょ」

「ごちそうさま〜」

「ってモカちゃん！食べるのはやっ!!」

わたあめに続きチョコバナナも一瞬で完食したモカは続けて、焼きそばを取ろうとする。この子の胃袋は一体どうなってるんだろうか？

「じゃあ俺も少し食べるか」

モカに続いて、俺もチョコバナナを一口食べる。うん、美味しいな。

「あ、チョコバナナ200円だったんで後で返してくださいね」

「これ食べたら巴のところに向かうからまた荷物持ちよろしく」

「奢りじゃねえのかよ！しかもまた荷物持ち!?返せっ！さつき俺がお前らに感謝した気持ち少しでも返しやがれ！」

「あはは………」

「お兄ちゃん、水もらうね〜」

結局いつも通りの展開になってしまっただけだった。

その後いろいろ食べた後、また屋台を歩きながら祭り中に和太鼓をたたく巴や様子を見に来ていた。

「巴ー、来たよー」

「ともちん、元気〜?」

「おお、ひまり、モカ、それにみんなも……………って、ラテ。その荷物大丈夫か?」

「大丈夫に見えるか?心配してくれるだけ嬉しいけど」

巴がひまりちゃんやモカの声に気づいてこっちに振り向いたが、俺の持つ荷物の量と俺の表情見た瞬間俺を心配してくれた。

「もうラテさん!だらしないですよ」

「ラテ。ダサいよ」

「おいこら蘭。なにさりげなく人の事デイスってんだよ」

「間違えた。だらしないよ」

「絶対間違えてない!故意に言っただろお前」

俺がそんな言葉に騙されると思ってるのか?もし本当に騙されると思ってるなら蘭こそダサいぞ。

「わかりました!じゃあ私がラテさんの事応援してあげます!」

「へえ、どうやって?」

「では」

コホン、と一呼吸入れた後ひまりちゃんは言った。

「フレー!フレー!お、に、い、ちゃ、ん!」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「何でみんな黙っちゃうのさあ!!」

なんて反応したらいいのかわからなかった。普通ならお兄ちゃんと言われたときめくはずだった俺なのになぜかときめかない。

「…………モカ、見本見せてやれ」

「はい。えつとね…………お兄ちゃん、ファイト」

「任せろ!今すぐこの荷物持って家まで走って来てやるよ!」

「納得いきません!!何でそんなやる気のないモカの応援で元気出るんですか!私の方が絶対元気でのに!!」

モカの応援を聞いて、表情を明るくした俺を見てひまりちゃんが詰りめ寄って来た。

「いや事実元気出たのはモカの応援だから。ありがとうモカ。おかげで元気出たぞ」

「とーぜんだよ。モカちゃんが応援したんだから」

「そうだな。モカ、偉いぞ」

「えへへ」

「な、納得いかない!」

「まあまあひまりちゃん。落ち着いて」

「そうだぞひまり。何言ってもラテには無駄なんだから」

「確かに」

「そうだぞひまりちゃん」

「そーだよ、ひーちゃん」

「何で私が悪いみたいになってるんですかっ!私は善意で応援してあげたのに!」

顔を赤くしてプンプン怒るひまりちゃん。いつも思うけど、ひまりちゃんは本当に表情豊かだよな。喜怒哀楽がはつきりしすぎている。

「まあ、それはともかく。なあ、巴。あこちゃんはどこ行っただ?」

「あこか?あこならさつき、りんりんと屋台まわってくるー!って走って行ったぞ」

そうか。あこちゃんはいないのか。残念だな。

「よし。巴、こいつらの荷物ここに置いていくから後は頼んだ。俺は

モカと一緒にあこちゃん探ししてくるから」

「待てい!!」

いつの間にかりんご飴をペロペロと舐めていたモカの腕を掴んで走りそうになっていた俺の腕をひまりちゃんが掴んだ。

「荷物置いてどこ行くつもりなんですか」

「あこちゃんのところだ。モカとあこちゃんを連れてお祭り回るのが俺の本来の目的だったからな」

「そんなの聞いてませんよ!」

「当然だ。今言っただから」

モカとあこちゃん。2人の妹（1人は妹じゃないけれど）を連れて屋台を歩くのが俺の今日の目的だったのである。

「私達はどうするんですかっ!」

「ん?心配するな。和太鼓本番になったら戻ってくるさ」

「そういう問題じゃないですよね!」

「そういう問題だ!俺はモカとあこちゃんの2人を連れて屋台を回るんだ!2人と手を繋いで『お兄ちゃん、あれ買ってー』って言われたいんだよ!!」

他にも、お兄ちゃん、おんぶくとか。流石お兄ちゃん!とか、いろいろ言われたいんだ。

「本当どうでもいい野望だね」

「で、でも、ラテ君らしいよね」

「とうかあこはアタシの妹なんだけどな」

「ダメです!ラテさんは私達と一緒に回るんですっ!」

「ひまりちゃん達とはさつき一緒に回って荷物も持ってあげただろ!俺はもう行く!さあ、モカ。行くぞ!」

いつまでたっても離そうとしないひまりちゃんの手を乱暴に離して、モカの腕を引いてそのまま去ろうとする。

「って、あれ?モカ?」

「……………」

モカの腕を引こうとしたら、モカが何故かその場から動こうとしない。何でだ?

「おーい、モカ―?」

「あたし、いかない〜」

「……………はい?」

「お兄ちゃんは1人で行って来て〜。あたしは蘭達と一緒にお祭り回るから〜」

「どうして!?!俺は今日この今のためにこうやって荷物持ち頑張ったのに!!」

「うっわー、さりげなく本音漏らしてる」

「ラテ、最低」

「ラテ君、いくら何でもそれはひどいんじゃない?……………」

「ああ。酷すぎるな」

グサグサと俺の心臓に言葉の槍が飛んでくる。じゃなかった。それよりモカだ。

「どうして?」

「だって〜、お兄ちゃんはあたしと2人で回りたいわけじゃないみたいだから」

「えっ?いい、いや。そんな事ないぞ。俺はモカと一緒に回りたいと思ってる」

「だったら、あこちんを誘う意味ないよね〜?」

「えっと……………それは、その、なんていうか」

やばい。モカが怒ってる。というより拗ねている。そうだ。当たり前じゃないか。何で俺はモカの目の前であこちゃんとも一緒にこうとしていたんだ。モカが拗ねるのは当然な事なのに。

「ち、違うぞ。そ、そのあれだ!この前あこちゃんにはちよつと世話になって。そのお礼にこの祭りで何かを買ってあげようかと思っただんだよ」

「世話になっただって何したの〜?」

「こ、この前晩飯選ぶのに付き合ってくれたんだ!」

「……………ホント〜?」

「も、もちろんだ!」

厳密には俺が晩飯の買い出しに付き合っていたんだが。

「あれ？あの時って確かラテ君があこちゃんの買い物に付き合ってたよね？」

「ああ。アタシの家までわざわざあこを送ってくれたし。何だったらあいつあこのためにおやつも買ってたぞ」

「何でこのタイミングでバラすんだよ！空気読んでよ2人とも!!」

「じーっ」

モカが嘘をついた俺をじーっと睨んでくる。どうしよう、他の言い訳を考えなければ。

「違うぞ！俺もあの時は暇してたんだよ！で、あこちゃんが買い物するのを誘ってくれたから、俺の暇が潰れたわけで。そのお礼って事で」

「あー！ラテおにーちゃんだー!!」

後ろから俺の名前を呼ぶ声が聞こえる。……………何というタイミングで戻ってくるんでしょう。俺の事をラテお兄ちゃんと呼ぶのは1人しかいない。そう、あこちゃんである。

「ラテおにーちゃん！この前はあこの夕飯選びに付き合ってくれてありがとう！おかげであこ、お姉ちゃんと美味しいカレーが作れたよ！」

「……………あ、う、うん。どういたしまして」

「あ、おねーちゃん！ほら見て、このペンダント！凄いでしょー!!さつき射的でりんりんが当ててくれたんだ」

「あ、うん。そうだな。凄いであこ」

「あ、あこちゃん。ちよつと待って欲しいんだけどいいかな？」

「つぐちん？それにみんなも何だか怖い顔してるよー？」

当然である。俺が必死に言い訳しているタイミングでこの子が戻って来たんだ。もう今モカがどんな顔をしているのか見るのも怖い。

「えと、モカ。わ、悪気はなかったんだ。だから……………」

「お兄ちゃん〜？」

「は、はい!!」

「正座」

「は、はい」

モカに言われてその場に正座する。人通りの少ないところとはいえ何て迷惑なんだろう俺。

「モカちゃんに言わないといけない事があるよね？」

「は、はい。その通りです。モカの機嫌を直そうと嘘をついてごめんなさい」

「それだけじゃないよね？」

「えっ？えっと……モカ以外の女の子を誘おうとしてごめんなさい？」

「まだあるよー」

「えっと……あこちゃんにお兄ちゃんって呼ばせてごめんなさい、とか？」

「まだ？」

「まだ!？」

あと何がある？モカに内緒で買い物に行ったことか？いや、そんなことならこいつは絶対怒らないし。モカ以外の女の子にお菓子をかうこと？いや、それならひまりちゃんになんて殺されるくらいあげてるし。

「え、えっとー。みんなに迷惑かけてごめんなさい？」

「違うよー」

「……………ダメだ。降参だ。答えは？」

「モカちゃん以外に勝手に妹作ったらダメだよね？」

「(((そこっ!!)))」

「何の話ー？」

あこちゃん除く俺とモカ以外の4人のツツコミがシンクロしたような気がした。ていうか別に妹作ったわけじゃないんだけど。

「モカ？別に俺妹を作ったわけじゃないぞ。ただあこちゃんが純粋に慕ってくれるからそう呼ばせてあげてるだけで」

「それでもダメだよ。お兄ちゃんの妹はあかし1人だけなんだから」

「その通りだな。でも、あの子は単に俺と巴が被るからってそう呼ん

でくれているのであって」

「お兄ちゃんの事をお兄ちゃんって呼んでいいのはモカちゃんだけなんだよ。わかるよね〜?」

「え、えつと……はい、その通りです」

「じゃあ、これからはあたし以外にお兄ちゃんって呼ばせたらダメだよ〜?」

「わ、わかりました」

「はい。それじゃあ、お兄ちゃん。行こつか〜?」

俺の説教を終えたモカは俺を立ち上がらせた後満面の笑みでそう言った。

「えっ?行くってどこに?」

「屋台巡りだよ。今日はお兄ちゃんの財布の中が空っぽになるまで食べるから〜」

「え、いやいや!それは困る!俺もう貯金するぶんは銀行に入れたし!あと20日どうやって過ぐせば!!」

「お兄ちゃん、だめ〜?」

「よし行こう。すつからかんになるまで今日は楽しもう」

「はい」

しまった。モカの甘い声と上目遣いと、何よりもモカ自身の可愛さにOKしてしまった。

「蘭く。モカちゃんちよつと出かけてくるね〜」

「え、あ、うん」

「それじゃあ行つてきま〜す」

モカは俺の手を引いて、そのまま屋台へと歩いて行った。

「……………あんなモカ、初めて見たかも」

「モカって独占欲強いのかな?」

「多分ラテ君限定だと思うけど」

「だな。あこ、ちよつとアタシからお願ねがいがあるんだけどいいか?」

「ん?なに〜?」

「モカがいる時はお兄ちゃんって呼ぶのやめてあげてくれ。あれじゃあラテがかわいそうだから」

その後モカは本当に俺の財布の中がすっからかんになるまで屋台のものを食べきって今日の事は許してくれた。

第17話 夏休みを満喫したいラテと仲のいい蘭とモカ

夏休みに入った。夏休みといえば海、そして山。両方とも泊まりがけで行くのは最適だと俺は思ってる。他にも楽しい事は山ほどある。が、その前に終わらせなければならぬ事が1つある。モカとこの夏休み充実した毎日過ごすために。そのために俺は。

「夏休みの宿題を終わらせようと思う」

「いきなり何言ってるの？」

蘭と2人でつぐちゃんの家に遊びに来ている時に、俺は言った。そう。夏休みの宿題こそモカとの休みを満喫するのを邪魔する天敵である。

「去年の夏休み。俺はモカと充実した毎日を過ごすために宿題を最後にとっておいた。が、それは失敗だった。最後の最後にモカと一緒に過ごせなかったからだ。だからこそ、今回はモカと遊ぶ時間をほんの少しだけ削って、先に宿題を全部終わらせようと思ってるんだ」

「あっそ。勝手にすれば」

「て事で、蘭、つぐちゃん。俺と一緒に夏休みの宿題やろーぜ」

「あたしは嫌。勉強道具持って来てないし」

「私はいいよ。私も早く夏休みの宿題終わらせたいし」

幸い今日はつぐちゃんもお店の手伝いはないみたいだ。つぐちゃんがいるだけで勉強がはかどる。このツグってるつぐちゃんを見ることにより俺の勉強速度が2倍、3倍と上がって行くから。

「えー、いいだろー？どうせ蘭もひまりちゃんと一緒に最後まで溜め込んで後から苦労するタイプだろ」

「そ、そんな事ないし！」

「あ、絶対嘘だ。本当のこと言え！つぐちゃんに聞けば全部わかるんだぞっ！」

「うっ……………」

「蘭ちゃんも頑張ろうよ！早く終わらせる方が蘭ちゃんもきつと楽に

なるし！」

「そうそう。最後の日ゆつくりできるってやっぱいいと思うぞ」

モカはあんな性格だが宿題……というか勉強は基本できるやつだ。宿題もコツコツ終わらせる。去年、モカは宿題を終わらせていたのに対し、俺は何もできなかったため、モカをしょんぼりさせてしまった事を俺はもう2度と忘れる事はないだろう。

「でも、あたし本当に何も持って来てないし」

「今ならこのケーキとコーヒーを何回でも頼めるキャンペーンも付いてくるぞ」

「何のキャンペーンなの、それ」

ただ俺が奢るだけだけど。こんな時のために貯金はおろしてある。

「もし蘭が嫌って言ったら俺はつぐちゃんと2人きりで勉強することになるぞ」

「ええっ!？」

「あたしには関係ないし別にどうでもいい」

「わ、私は関係あるよっ!」

つぐちゃんが顔を真っ赤にしている。2人きりで勉強するのは流石に冗談だったのにつぐちゃんが本気にしている。最悪ひまりちゃんか巴を呼ぶつもりだったのに、そんな反応されたら余計に誰か呼ばないといけない空気になるじゃん。

「ラテ君と2人で勉強なんて……集中できなくなっちゃう」

「つぐちゃん、君は俺のことをどういう風に見てるんだ?」

「えっ?……えと、それは!」

もしかして俺ってつぐちゃんからいい印象持たれてない? そうだよな。俺みたいな兄貴は嫌って言うくらいだし。

「はあ………シヨックだ」

「ああ!ち、ちがうの!今のはラテ君と2人っていうから意識しちゃうってことで!!」

「いや、フォローはいい。仕方ない、ここはモカでも呼んでこの傷ついた心を癒してもらうしかないよな」

「モカは今日バイトでないんでしょ」

そうだった。あまりにショックだったからそのことも忘れてしまっていた。

「はあ……俺の心を癒してくれる奴はいないな」

「お、お願い蘭ちゃん！蘭ちゃんも一緒に勉強しよっ!!」

「はあ……」

ナーバスになる俺と一生懸命蘭にお願いするつぐちゃん。こんな2人に挟まれる蘭は気の毒なものだ。自分で落ち込んでいうのも何だけど。

「わかった。1回家に帰るから待ってて」

「……………！ありがとう蘭ちゃん!!」

「ありがとう蘭！」

「別にいい。それよりラテは約束守ってよ。ケーキとコーヒーだからね」

「任せろ！何だったら俺がキッチン入って作ってあげるまでであるぞ！」

「いらない」

「俺が蘭のケーキのために美味しくなる呪文もかけてあげるぞ」

「そんな事したらあたしもうこのまま帰るから」

「ごめんなさい。冗談なので許してください」

蘭のドスの効いた素直な言葉に俺はただ頭を下げ謝るだけだった。

「じゃあ、すぐ戻るから」

「あんま急がなくていいぞ。今日暑いし、俺はつぐちゃんと仲良くおしゃべりして待ってるから」

「……………すぐ戻るから」

「何でもう1回言ったの!?俺別につぐちゃんに何もする気ねえんだけど！」

俺の突っ込みを無視して蘭は1度つぐちゃんの家から出て行った。

「まったく。失礼な奴」

「あはは。あ、そういえばモカちゃんは何時までバイトなの？」

「夕方だよ。帰って来たら『つかれたくあづいしくぬく』って俺の方に

抱きついて来ると思うから、今日はバイト終わったらつぐちゃんの家に来るように言っている」

「あ、それで今日はうちで勉強するって言ったんだ」

モカにパンではないがつぐちゃんの家的美味しいケーキを奢ってあげようという俺の紳士的な対応である。

「まあそういうこと。あとはまあ単純に暑いからっていうのもあるけど」

「確かに。うちはいつでもクーラーついてるもんね」

「そそ。こうやってつぐちゃんとおしゃべりしながら勉強できるのも一つのいいところだしな」

「ふえっ!？」

つぐちゃんがいきなり驚いた表情を浮かべる。何をそんな驚くことが？

「友達とおしゃべりしたいって思うのは当然のことだしな」

「あ……………うん。そうだね!」

(ラテ君ってたまに誤解されるような事言うから反応に困っちゃう……………)

なんでだ？俺なんで今つぐちゃんにじーっと睨まれているんだ？俺そんなに悪い事したのか？と悩んでいる時にお店の扉のベルが

カランカランと鳴り響いた。

「おーっす。って、なんだ。ラテとつぐもいるじゃん」

「おお、巴。1週間ぶりくらいじゃん。どうしたの?」

「もしかしてわたしに何か用事でもあった?」

「いや。夏休みの宿題やろうと思っただけど家であこがゲームしててさ。ちよつと騒がしくて集中できなかつたら、ここに来たんだ。まさか2人がいるとは思わなかつたけどな」

巴も俺たちが座っているテーブルに同席する。でも巴も宿題か。やっぱり考えることは同じなんだな。

「ちよつどよかったよ。俺たちもこれから夏休みの宿題に手をつけようと思っけてさ。一緒にやろうぜ」

「今蘭ちゃんが宿題取りに帰って来るからそれを待ってるの」

「本当か？つて、よく蘭を誘うことができたな。何したんだ？」

「いや、特に何も。ただ、ケーキとコーヒー奢ってやるって言っただけ。巴も何か頼むか？今日は俺のおごりだぞ。もちろんつぐちゃんも」

「わたしもいいの？」

「どうしたんだラテ。やけに気前がいいじゃん」

「気分だよ。ほらほら、何か頼んで宿題に手をつけるとしようぜ」

蘭が来るまで待っていいようと思ったが、巴が参加したため一足早く宿題を始めることにした。

「ふう………だいぶ進んだな」

「そうだね。わたしもこの問題集の半分くらいまで終わらすことができちゃった」

つぐちゃんと巴はともかく、あまり勉強が得意ではない蘭をサポートしつつも俺たちは着々と宿題を終わらせて行った。

「にしてもラテ。お前だけ2年生だから大丈夫なのか？つて思ってたけど」

「ん？なに？」

「お前つて意外と頭良かったんだな。アタシ達が蘭に教えてる間も1人で黙々と宿題進めてたし」

「あたしも。ラテつて絶対バカつて思ってたから」

「2人とも！あ、でも私もちよつと意外だったかも」

「見くびるなよ！これでも俺はモカの兄貴なんだからな！あいつと同じくらいするのは容易いんだよ！」

「あ、確かに。モカちゃん勉強できるもんね」

俺の頭が悪いと思われていたのが心外だ。モカと同じくらい頭がいいと思われて当然なはずなのに。

「ラテって見た目からしてバカって感じしかしないよね」

「それに加えて普段のあのシスコンぶり。もうただのバカにしか見えないもんな」

「お前らそんな俺をいじめて楽しいのか？2人がかりでいじめて楽しいか!!」

「あはは……でもラテ君って確かに頭悪そうに見えるけど……意外とそうじゃないもんね」

「ぐふっ!!」

まさかつぐちゃんにそんな風に言われるなんて。

「あ、あれ？ラテ君？」

「つぐみがラテにトドメ刺した」

「なかなか珍しいよな。つぐがトドメ刺すなんて」

「ご、ごめんねラテ君。そんなつもりじゃ!」

俺がつぐちゃんの言葉によって泣きそうになっている瞬間、店の扉のベルがまた鳴り響いた。

「おじやましませーす。お兄ちゃんいる〜?」

俺の最大の癒しの声が聞こえた。

「モカー!!俺を慰めてくれー!!」

俺の姿を見かけるやいなや駆け寄って来るモカの胸に飛び込んだ。

「うわっ。ちよっとお兄ちゃん。こんな所で抱きつかないでよ」

「だって……だってつぐちゃんが俺のこといじめるんだよー!!」

「あれ!?私だけ!？」

「もうつぐ。お兄ちゃんいじめたらダメだよ」

「そうだぞつぐ。いくらラテがバ……ちよろそうに見えるからって」

「うん。ラテはバ……頭悪そうに見えるからっていじめたらダメ」

「2人の方がもっと酷いこと言ってる気がするよ?というか、どうして私だけ悪いってこと!？」

「もうダメじゃん。お兄ちゃんは意外と心脆いんだから」

「ご、ごめんなさい……」

「つぐも謝ってくれたよ〜？お兄ちゃんもいいよね？」

「うん。許す」

俺がモカから離れた所で全員席移動する事に。モカが俺の横に座り残りの3人が俺たちの向かい側に座った。

「さて、モカ。なに食いたい？」

「えーつと……ぜんぶ〜」

「よし。すいませーん、店にあるメニュー全部ください!!」

「ええっ!？」

「お兄ちゃん、うそだよー」

「え、嘘なのか？」

モカならそれくらい余裕だと思ったから本気で頼んだのに。

「いや、それくらい嘘ってわかるだろ」

「ラテってやつぱりバカだよね」

「バカじゃない！モカの事で頭がいっぱいなだけだ!!」

「やつぱりバカじゃん」

さつきから蘭は俺のこと何回バカにする気だ。

「なんだよ。俺にモカを取られるからってそんな嫉妬すんなよ。そんな嫉妬したって俺のモカはやらねえぞ」

「ばっ!!なに言ってるの!!」

「蘭、そうなの〜？」

「ちがっ！私は別にそんなこと思ってるじゃない!!」

顔を真っ赤にして否定する蘭。正直言ってる凶星にしか見えない。

「でも、確かに蘭はモカといるときのの方が生き生きしてるよな」

「うん。蘭ちゃんモカちゃんと一緒にいるといつも楽しそうだし」

「ちよつと、巴、つぐみ。変なこと言わないで!!」

「だいじょーぶ。モカちゃんは蘭の事も好きだよ〜」

「あ、あたしは別に……」

あ、蘭が照れてる。というかデレた。ランデレだ。ていうかなにこの百合展開。もっと見ていたい。

「えー、もしかして蘭はモカちゃんのこと嫌いなの〜？」

「誰もそんなこと……」

「お兄ちゃん、蘭がモカちゃんのこと嫌いつて〜」

「おいこら蘭！モカ泣かせたらダメだろ！」

俺にひつついて泣いているモカをかばうように俺は蘭に言う。別にモカが泣いてるわけじゃないんだけどな。ただ泣き真似をしてるだけ。

「あ、あたしは別に……でも、モカの事は大切に思ってるから……」

「えへへ〜。ら〜ん〜」

「ちよ、モカ！やめて！離れてよ！」

席を立ったモカが蘭の隣に座って蘭へと抱きつく。

「いやー、こういうのもたまにはいいな」

「そうだね。2人とも楽しそうだし」

「ちよつと2人とも。ラテも助けてよ！」

「いや、見てるの楽しいし、目の保養になるからもうちよつと。ほら、俺たち勉強してて疲れたからさ」

「この変態!!モカも離れて！」

「えー、いいじゃん。蘭も寂しかったんでしょ〜？」

「そ、それはっ……………」

「ほら〜。寂しかった蘭にモカちゃんがいつぱいかまってあげるから」

「いいー！」

といつつももう諦めたのか。モカを離そうとするのをやめてなすすべなくなる蘭。今この瞬間を写真撮っていいのかな？顔を真っ赤にしつつモカから顔を背ける蘭と、笑顔いっぱい蘭に抱きつくモカ。見るだけで疲れが吹っ飛びそうだ。

「ところでさ、夏休みみんな空いてる？」

「そうだな。バンド練習がないときは大丈夫だと思うぞ。みんなは？」

「私もお店のお手伝いがない時とかなら」

「あたしも基本暇」

「あたしはバイトない時〜」

「よし。それじゃあその日にみんなで行こうぜ。あ、もちろんひま

りちゃんも連れて」

「やだ。ラテいやらしそうな目で見る気でしょ。変態」

「え、そうなのか？それだったらアタシも嫌だぞ」

「わ、わたしもそれなら遠慮したいかな」

「んなわけあるか!!単純にみんなで海行きたいなって思ったただけだよ!!」

「ラテ、友達と行ったらいいでしょ？あ、ごめん。友達いないんだったね」

「よし。ごめん蘭。モカを止めなかったのは謝るからそろそろ俺の心えぐるのやめようか」

「こいつ絶対モカを止めなかったこと恨んでやがる。仕返ししてるのわかりやすすぎる。」

「あたしは別にいいよ。お兄ちゃんと海行きたい」

「流石モカ。話がわかってる。で、みんなはどうだ？」

「まあ、別にいいよ」

「あこに話したらなんていうかわかんないけど、アタシも多分大丈夫だ」

「私も。みんなと一緒に海行きたいし」

「よし。じゃあ後はひまりちゃんに聞くだけで大丈夫だな」

「ひまりには後でアタシから連絡してやるよ」

「サンキュー。じゃあ頼むな」

「夏休みの予定を1つ決定させた俺たちはその後もう1つずつケキを頼み、その日は解散した。」

第18話 デートするモカとデートするリサ

「モカー」

「なーにー?」

いつものように俺の股の間に座りパンを食べるモカ。そんなモカの頭を撫でながら俺は話を持ちかけた。

「ゲーセンいかね?」

「急にどうしたの?」

「いやー、せつかくの夏休みだしたまにはモカと2人でどっか出かけたいなって思ってたさ」

「でも、それでゲーセンなの?モカちゃんをエスコートする場所としては、ちよつとセンスなさすぎじゃないかな?」

「うっ…………それは」

確かに女の子であるモカには少し…………いや、かなりセンスが悪かったかもしれない。

「そうだな。ちよつと考え直すから少し時間くれ」

「ううん、いいよー」

「えっ?」

パンを食べ終えたモカがよいしょ、と言って立ち上がる。

「準備してくるからちよつと待っててー」

「あれ?嫌じゃないのか?」

「そんなことないよ。あたしはお兄ちゃんがデートに誘ってくれたのがいい嬉しかったし」

「デッ!」

別にそんなつもりはなかった。ただ、モカと一緒にどこかに行きたいと思っただけなのに、いきなりそんな言われ方をすると意識してしまう。

「それにモカちゃんはお兄ちゃんと一緒にいられるならどこでもいいからね」

「あっ……………」

それじゃあ、と言いながらリビングを出て自分の部屋へ戻るモ

カ。やばい、俺の妹がマジで可愛すぎる。

「あんなこと言うなんて卑怯だろ」

「とーちやく〜」

「暑い……さっさと中入ろう」

「お兄ちゃん、だらしないな〜」

ゲーセンまで2人で手を繋いで歩いてきたのは良かったけど、俺は暑さでダウンしそうだった。

「モカだって寒い日はいつもだらしないだろ」

「そうだっけ〜?」

俺は暑いのが苦手で、モカは寒いのが苦手。兄妹でなんで逆になるんだろうか?ちなみにモカ曰く、寒いのは辛いものの次にダメらしい。

「それより中入ろう〜」

「だな」

ゲーセンターの自動ドアをくぐり中に入ると、クーラーの涼しい風が俺たちを歓迎しているように思えた。

「はあ……涼しい〜」

「お兄ちゃん、何するの〜?」

「ん?そうだな……とりあえず適当に回ってみるか」

「は〜い」

とりあえず適当にぶらつくことに。モカはあまりゲームとかしないタイプの人間だから、そういう方面にはいかないほうがいいだろう。

「モカは何かしたい事とかないのか?」

「んー……モカちゃんはお兄ちゃんが楽しめればそれでいいよ〜」

にっこり笑ってそんな事を言うモカ。家に出る前も思ったけどいきなりそんなこと言うのは本当に卑怯だ。俺は今日何回モカに照れさせられるんだろう。

「そ、そっか……」

「お兄ちゃん、顔真っ赤だよ」

「う、うるさい！モカがそんな嬉しい事を言うからだよ！」

「嬉しい事？モカちゃんは普通にそう思った事を言ったただだよ………あ」

「ん？どうかしたのか？」

「……………」

モカが眺めるのはクレイゲームのコーナー。視線の先にはおそらくフランスパン型の抱き枕が。パン好きのモカにはたまらないものがあるんだろう。

「……………取ってやろうか？」

「いいの!?お兄ちゃん取ってくれるのー!」

そんなに欲しいのか。いつもののんびりした口調はどこに行ったのか。

「ああ。せっかく付き合ってもらったんだし俺もモカが喜ぶ事をしてあげたいしな」

「わーい。お兄ちゃん、頑張つて」

「任せろ！これでも俺はモカがいなくて暇な時はけっこうゲーセンに通ってるからな」

「お兄ちゃん、それ自虐だと思うよ？」

「そ、そんな事はない!!とにかくやるぞ！」

さて。息巻いたもののどう取るべきか。近づいてわかったけどこれ想像以上にでかい。落とす感じではいけばいけると思うんだけど……

「よし、とりあえず100円」

1回目。取れない。

「もう100円」

2回目。取れない。

「もう1000円入れよう」

3回目。取れそうで取れない。

「もうちまちましてられないな。500円入れよう」

4、5、6……………取れない。

「モカ、俺ちよつと両替して来るわ」

「あたしもいく〜」

1000円を両替機に入れる。よし、両替完了。

「よし、今度こそだ!」

取れない。取れない。取れない。取れない。取れない。

取れない。取れない。

「も、もう1回」

「お兄ちゃん、無理しなくてもいいよ〜?」

「いや、今度こそ取る!」

モカが心配そうな顔で俺を見ている。そんな顔をさせといてこの

まま帰れるわけがない!

「……………ここだ!」

ポチツとボタンを押したところでクレーンが下がっていく。落ち

る落ちる落ちろ!!

ポトツ

「落ちたー!!! やつと取れたぞ!!!」

「さすがお兄ちゃん〜」

イエーイとモカとハイタッチをして景品を手取る。フランスパ

ン抱き枕に一体いくらつき込んでるんだろうか。

そのまま、店員に袋をもらい景品をその中に入れてまた店内を歩き

始める。

「今度は何しようか?」

「お兄ちゃん、お金大丈夫なの〜?」

「俺がこの夏休みのためにどれだけバイトをしていたと思ってるんだ

?このくらい余裕だよ。今までの貯金も残ってるしな」

「おおー、お兄ちゃん太っ腹だね〜」

「はっはっはー。そうだろー?」

その後も店内をぶらつきながら、気になったものを適当にプレイしていく。たまに俺とモカが仲良くしてるのを見て、血走った目で俺たちを見ていた男達は一体何だったんだろうか？

「はあ、疲れた」

「楽しかったね」

「そうだな。でもモカはちゃんと楽しめたのか？俺はちゃんとゲームとかしたけどモカはそれ見てただけなのに」

「うん。楽しかったよー。さっきも言ったけど、あたしはお兄ちゃんと一緒にどこに行っても楽しいから」

ただ俺が行きたいところに付き合わせてしまっただけだというのに、モカはそんな俺といるのが楽しいと言ってくれる。こんなの嬉しいという感情しか込み上げてこない。

「……………なあ、モカ」

「なーに？」

俺が自販機で買った飲み物を口に含むモカの頭を優しく撫でる。いつもより繊細に、何より丁寧に。

「どーしたの？」

「いや、モカが妹でよかったって思ってさ。可愛くて優しい俺の大好きなモカが妹であるのが今何より嬉しくってさ」

「なんの話ー？」

「俺自身の話だよ。帰りにやまぶきベーカリーよるか。付き合ってくれたお礼になんでも買ってあげるよ」

「いいの？お兄ちゃん結構お金使ったんじゃないのー？」

「いいんだよ。俺がお金を使う理由はモカが最優先って決めてるんだから」

「じゃあ遠慮なく。お兄ちゃん行こー」

「ああ。そうだな」

モカの頭を撫でる手を下ろして、そのままモカの手を優しく掴んでそのままゲームセンターを出た。

「今日はありがとなモカ」

帰りにやまぶきベーカリーに寄ってモカの欲しいパンを買った後、

家に帰った。

「ああ！ラテじゃん」

「ん？おお、リサ」

モカのバイトが終わるまで適当に街をぶらぶらしていると、商店街を歩いているときにリサと会った。

「久しぶり〜。モカのバイト見に来た時以来だね」

「そうだな〜。あれ？リサは今日バイトないのか？」

「そうだよ〜。アタシは今日休みだから」

「そうか。て事は今モカは1人でバイトしてるんだな」

モカ……今頃寂しく1人で頑張ってると思うと応援しに行きたくなるな。

「あの……ラテ？流石にこんな昼間に1人って事はないから。ちゃんと店長とかいるからさ」

「店長……だと？」

もしかしてモカは今店長と2人きりで仕事してるんじゃないよな？。だとしたら……

『青葉さん、また仕事間違えてる！』

『すいませくん』

『もうこれで何度目だ！これはもう口で言ってもわからないんだな』

『そんな事ないですよ〜』

『いや。決めた！今から口でなく身体で指導してやる』

『そんな〜。困りますよ〜』

『ふっへっへ〜。覚悟するんだな』

なんて事になっている可能性が!!

「悪いリサ。俺用事できた」

「ちよ、ちよつと待った！アタシ今ラテが考えてる事がわかった気がする！大丈夫だから！絶対モカは大丈夫だから！」

今にも走り出しそうになった俺の手をリサはバツと両手で掴んだ。

「ほ、本当か？でも万が一って事があるかもしれないしさ」

「ああ見えてモカは仕事ちゃんとする子だから心配ないよ」

「そ、そうか……だったらいんだ」

「もう……本当にシスコンなんだねラテってさ」

「当たり前前だ。常にモカに気を遣い、常にモカに気を配る。それが今の俺の生き甲斐なんだよ」

「うっわ。これは想像以上だ」

リサがすーつと俺の手を離し距離を取る。俺もう何人の女の子にひかれてるんだろうか……

「ゴホン。で、リサは何してたんだ？」

「アタシ？アタシは買い物でもって思ってショッピングモールに行くこと思ってたんだけど……」

うーん……といきなり考え出すリサ。何か嫌な予感がする。

「そうだ！ラテもついて来てよ」

「はあ？」

「いいでしょ。どうせ暇してたんだから」

「いや別に暇してたんじゃないんだけど」

「モカのバイトが終わるまで待ってるんでしょ？やっぱり暇なんじゃないん」

ダメだ。これはどうしてもついていかなければならないようだ。いや、別に嫌ってわけじゃないんだけど。

「はあ……わかった」

「なんかアタシが無理やり連れて行くみたいで嫌なんだけど、そのため息」

「ああ、ごめんごめん。そんなつもりは全くなかったんだけど」

「あはは。わかってるよ！それじゃあ行こっか」

リサは俺の手を掴んでそのまま歩き出した。……なにこれ、もし

かしてデート？

「ねー、ラテ。これなんてどう思う？」

「うーん……似合ってると思うけど、もうちよつと落ち着いてる感じの服でもいいんじゃないか？」

デート……もといリサの買い物に付き合わされた俺はシヨツピン
グモールに着くなり服選びに付き合わされていた。

「落ち着いてる感じって……ラテってなんだかよくわからない表現するんだね」

「あんまり女の子と買い物行かないからな。こういうのは慣れてない」

「そうなの？ラテって周りに女の子しかいない感じがしないから、こういうの慣れてるんだと思っただけ？」

「そりゃモカと一緒にいれば嫌でも周りには女の子しかいなくなるよ。あ、でもモカと離れるつもりは毛頭ないからな」

「いや、まだなにも言っていないんだけど……まあいいか。じゃあ今度これ着てみるね」

次の服を手にとって試着室に入るリサ。にしてもあれだな。モカとは違っておしゃれもちゃんとして、みんなを引っ張っていける明るい性格に、面倒見のいいお姉さん体質。

「リサってさ」

「ん〜？」

「いい女の子だな」

途端試着室からドタンツ！という音が響いた。

「だ、大丈夫か？」

「だ、ダイジョーブ。そ、それより、い、いきなり何言うのっ!？」

「いや、単純に思っただけ。モカみたいな子の面倒もちやんとみ

て、明るい性格だから会話にネタが尽きない。話してて思ったんだけど、一緒にいると楽しいって思ってたよ」

もちろん一緒にいて楽しいのはモカだからそこは譲れないんだけどな。

「そ、そっか……ありがとう」

「おう」

……あれ？もしかして俺今変なこと言った？

「はあ……ラテにペース乱されるなんて」

「おい、それどういうことだ」

「別になんでもないよ……よし！これでどう？」

試着室のカーテンを開けたリサはさつきとは違い、俺の要望通りの落ち着いた服を着て見せた。

「うん、いいな。可愛いし似合ってる」

「かわっ!？」

「ん？どうかした？」

「う、ううん、なんでもない」

(なに？もしかしてラテって天然のタラシなの?)

顔を赤くしたりリサがうう、と唸っている。モカまでとはいかなくても結構可愛いんだけど。

「あ、あはは。ありがとね。素直に嬉しかったよ」

「ならいいんだけど。どうする、その服買うのか？」

「そーだね。折角ラテが褒めてくれたんだし、この服にしようかな」

「りよーかい。じゃあまた待つとくな」

リサはまた試着室に入って服を着替え始める。うん、やっぱり女の子はこうじゃないと。モカみたいにパーカー選んで試着せずに買うのとはやっぱり違うな。

「て、ダメだな。女の子を比べる時モカが基準になってる。モカも確かに可愛いけど、比べる対象が違う」

リサとモカでは性格も全然違うんだし。でも、不思議と2人は仲良くしてるよな。やっぱり波長か何かが合うのかな？

「お待たせ〜」

「いや、そんな待ってないぞ?」

「じゃあ、アタシこれ買ってくるね」

「はいよー」

そう言っつてリサはレジへと向かった。待ってる間店内でも見回るかな。

「ん……………これ似合いそうだな」

「今日はありがとね。すつごく楽しかったよ」

「こちらこそ。結構有意義な時間を過ごせたよ」

あれから、アクセサリーを見に行ったり、カフェに寄ったりして喋ったりして時間を過ごした。リサの話から以外にモカは仕事上手と聞いたときは驚いたけど。

「あ、ここでいいよ。家まで付き合ってもらうのは悪いし」

「いや、別にいいぞ?荷物そんな重くないし」

「本当大丈夫だつて。もう家も見えてるし」

「そうか。それなら……………」

俺が持っていたリサの手荷物をリサに返す。

「あと……………はい」

「ん?なにこれ?」

「服見てる時に見つけたんだよ。リサに似合うかなって思っつてさ」

リサに似合いそうなアクセサリーを見つけてこつそり買っつておいた物をリサの手荷物と一緒に手渡す。

「いいの?アタシが買いたい物に付き合わせちゃったのに」

「いいんだよ。いつもモカが世話になってるし、なんだかんだいっても有意義な時間は過ごせたからな。俺もリサと話すの楽しかったし、また誘っつてくれよ」

主に俺の知らないモカの事を聞きたい。

「ん〜……でも、アタシは付き合ってもらったのになにもしてないだし」

「そうだな……じゃあ、俺とリサの初デート記念って事でどうだ？」
「でっ!!？」

「あ、ごめん。流石にこれはなかった」

「まだ出会って2回目の女の子にデートなんて流石に酷すぎる。」

「うーん……もつと良い言い回しは……」

「う、ううん、ダイジョーブ。初デート記念って事にしよう！」

「えっ？良いのか？」

「良いの良いの。じゃあこれはありがたく受け取らせてもらうね〜。
今度一緒に出かける時にはちゃんとつけてくからね」

「あ、ああ。わかった。楽しみにしてる」

「うん！それじゃあね〜」

リサは俺に手を振って別れた。

「さて。俺も帰るか。お腹すかせたモカが待ってるだろうし、帰りにやまぶきベーカリーにでも寄るとするかな」

そのまま俺もやまぶきベーカリーに寄って、沙綾と少しおしゃべりした後、家に帰った。

「ただいま〜……ってモカ？どうかしたのか？」

「玄関に入ると目の前にモカが立っていた。」

「お兄ちゃん。これどういう事〜？」

「ん？………げっ」

モカが突きつけてきたのは携帯。どうやらさつきまでリサとメールしていたらしく、俺が先ほどプレゼントしたアクセサリーをつけたリサの画像と、『ラテとの初デート記念だよ〜。似合ってる〜？』という文章が。

「お兄ちゃん………？」

「は、はい？」

「今度は3人でいこーね〜」

「はい………て、え？それでいいのか？」

「もちろん〜。あ、やまぶきベーカリーのパン〜」

「え、あ、うん。モカが疲れてると思ったから買って来たんだけど」

「わーい。お兄ちゃん早速食べよー」

てつきり怒られるのかと思ってたのに、何事もなく流されて終わってしまった。モカ、何かあったのか？それともリサは何か特別扱いされてるのか？いやでもそれだったら蘭とかつぐちゃんはどうなるんだろ……………

「あーむ。おいしく」

「……………まあいいか」

第19話 海に行く6人

「みんな、揃ってるかー?」

「なんでラテが仕切ってるの?」

「いいだろ別に。この中で俺が1番年長なんだし、俺が仕切ったってなんの問題もないはずだ」

「1つ歳上なだけじゃん」

「うるさいっ!」

夏休み。俺とモカを含めた幼馴染5人は駅前に集合していた。理由はわかるだろう。前に約束していた海に行くためである。

「まあ、蘭の憎まれ口はともかく、巴。みんな揃ってるか?」

「さつきひまりがコンビニで限定スイーツ売ってるー! って走ってたぞ」

「また太るぞコラア!!」

「ラテ君落ち着いて。大丈夫! モカちゃんも一緒だからっ!」

「……それ、大丈夫なのか?」

ひまりちゃんとモカが一緒ってことは甘いものがいっぱいになるんじゃないのか?

「はあ……まあみんないるなら大丈夫だな。今更だけどこのメンツ引っ張って行くのって結構大変そう……」

「あはは……私もなるべくラテ君のサポートできるように頑張るねっ!」

「つぐちゃん……うん、今日は頼りにしてる!」

つぐちゃんがいたら100人だ。頼りにさせてもらおう。

「暑い……ラテ、水買ってきて」

「言うな。俺も思ってるんだよ。だいたい俺は暑いのが苦手なんだよ」

「ならなんで海行きたがってたんだよ」

巴が当然のツツコミを入れてくる。

「決まってるだろ」

「モカ(ちゃん)の水着姿が見たいから」

「3人ともなんでわかったんだ!」

「最近ラテの考えてる事がわかってきたよな？」

「あたしは分かりたくもないけど」

「あはは……」

蘭、巴、つぐちゃんの3人が寸分狂わず俺が言おうとしていた台詞を言われてしまった。

「まあいい。ていうかモカとひまりちゃん遅くない？もうすぐバス来ると思うんだけど」

「お待たせー!!」

「ただいま」

「遅い！2人とも何してたんだよっ！」

噂をすればひまりちゃんとモカが駆け足戻ってきた。

「ひーちゃんの付き添いだよ。ひーちゃん、お菓子いっぱい買うから」

「モカだつてパンとか買ってたでしょー」

「そうだっけー？」

「そうだよー。モカが自分で持つてる袋見たらわかるでしょー」

「そういえばそうだったね」

「呑気だな2人とも。まあ、みんな揃ったことだし、バス乗り場に向かうとするか！」

「あ、ラテ君ちよつと待って！」

「ん？」

荷物を持ってバス乗り場に向かうとしたら今度はつぐちゃんに止められた。

「どうしたの、つぐちゃん？」

「えっと……モカちゃんと入れ替わるようにして今度は蘭ちゃんがコンビニに向かっちゃって……飲み物買ってくるって」

「……………前途多難じゃねえか」

こんな自由人軍団引き連れて本当に海楽しめることなんてできるんだろうか。少し不安になってきた。

「うっみだー!!」

「ひ、ひまりちゃん!いきなり走ったら危ないよっ!」

バスに揺られる事1時間。無事に海水浴場に到着した俺たちは、手続きをした後に急いで水着に着替えて海水浴場へと乗り込んだ。

俺がパラソルを立てようとする間にひまりちゃんは早速に海に飛び込もうとしていたが、つぐちゃんがとめられていた。

「あっつ……ラテ、パラソル早く立てて」

「ちよつと待つてろ……よし、いいぞ」

パラソルを立てた後シートを敷いて、その上に俺の荷物やらクーラボックスやらを置いて飛ばないように固定した。

「ありがとう」

「モカちゃんもきゅーけい」

はあ、とため息をつきながら自分の荷物を置いた後、蘭とモカがシートの上に寝転んだ。

「つて遊びに行かないのかよ」

「暑いからいい」

「あたしも」

インドアすぎるだろ。たまにはアウトドアになってもいいと思うんだけど。いや、それにしても……

「じーっ……」

「なに。視線が気持ち悪い」

「いや。服の上からじゃわからなかったけど、蘭ってシュツとしてるなあと思って」

「なっ!」

ひまりちゃんのようなダイナマイトボディを持つてるわけじゃないけど、蘭には蘭の良さがある。

「蘭ー、顔真っ赤」

「う、うるさい!これはその……日差しのせいだからっ!」

「おいおい、ラテ。海に来て早々ナンパしてるのか？」

「なんでだよ！相手蘭だしそんな事ない！」

「いや、今のは完全にナンパの台詞だろ。なあ、ひまり？」

「そーですよー！ラテさん、私達はどうですか？」

「いや、アタシは別にそういう風に言いたかったわけじゃないんだけど」

いつの間にか戻ってきていたひまりちゃんが自分の水着姿を見せつけてする。一緒に戻って来たつぐちゃんは物凄く恥ずかしそうにしてるけど。

「……うん。みんな水着似合ってて可愛いな。俺には勿体無いくらい可愛いよ」

「……………」

その言葉に蘭とモカ以外の3人はポカーンと口を開けて呆けてしまっていた。

「ん？どうした？」

「いや、そこまで言われるとその……照れるっていうか」

「……………」

「ラテさん！」

「はい？」

「これからラテさんのアダ名は天然タラシに決定です！」

「はあ？」

ひまりちゃんが顔を赤くしながら俺を指差して不名誉な事を言うてくる。

「なんで!？」

「当たり前です！ねえ、巴？」

「ま、まあ、そうだな。無自覚だから余計に腹立つのもあるしな」

理不尽だ。俺はモカを愛しているだけであって他の4人は好きだけど愛してはいないというのに。

「って、つぐちゃん？ずっと顔真っ赤になってるけど大丈夫？」

「へっ!?あ、うん、大丈夫だよ」

「いや、あんまり大丈夫なように見えなんだけど」

俺が可愛いと褒めてからずっと俯いて顔真っ赤にしているつぐちゃん心配なつて来た。

「ほら、こつち来て休んだら？今日暑いし、最初からその調子だと身体もたないよ？」

「ラテ君の所為なのに……」

「ん？なんか言った？」

「な、なんでもないっ！行こ、ひまりちゃん！」

「あ、つぐ！ちよつと待ってよお」

顔を赤いつぐちゃんはひまりちゃんの腕を引いてそのまま海へと走って行った。

「……………なあ、蘭。俺今なんか悪いことした？」

「自分で考えれば」

「なんだよ……じゃあ、モカ。俺今つぐちゃんに悪いことしたっけ？」

「しらなーい。それよりお兄ちゃん、日焼け止め塗って」

「えっ？」

蘭と一緒にパラソルの下でうつ伏せに寝転んだモカが日焼け止めを俺に渡してきた。

「……………俺が塗るのか？」

「そーだよ。早くしないとモカちゃんの白い肌が焦げちゃうから」

「いや……………でも…………」

「いいのか？妹とはいえモカの素肌に直接触れていいんだろうか？しかも日焼け止めという事はモカの色んなところを触るわけで……」

「いや、別に嫌なわけじゃないんだけど。」

「蘭、モカに日焼け止め塗ってやってくれないか？」

「嫌。ラテが頼まれたんだから、ラテがすればいいでしょ」

「いや、でもさ……………あ、そうだ。巴、お前モカに日焼け止め塗ってやってくれないか？」

「悪い。アタシ先行った2人の事心配だからそつちの様子みてる。蘭とモカの事は頼んだぞ！」

「あ、おいっ！」

申し訳なきような顔をした巴はつぐちゃんをひまりちゃんを追いかけて海の方へ。え、なに？本当にこれ俺がやらないといけないの。

「お兄ちゃん、早く〜」

「いや、そうは言ってもさ」

「ラテ、今更日焼け止め塗ることに緊張する必要ある？」

「いや。いつもモカを抱きしめたり、くっついたりするのは服があるからあまり緊張しないけど、今はほぼ素肌だし」

「めんどくさ……」

「なんだと？」

「なんでも。あのさ、日焼け止め塗らなくてこんがり焼けて真っ黒になるモカと、日焼け止め塗って今のままのモカ。どっちがいいか想像してみてください。」

蘭に言われた通りに想像してみる。黒人のように真っ黒になるモカと今のモカ。どっちがいいか。

「いや、考えるまでもねえな。今のままに決まってる」

「ならやる事は1つだよ」

「……わかった」

いつもの蘭なら絶対こんな事俺に頼まないはずなのに……こいつなんか俺に恨みでもあるのか？

「よ、よし……やるぞ〜」

「よろしくね〜」

モカから受け取った日焼け止めを手のひらにたっぷり垂らして、ゴクリと一息飲んだ後モカの背中に塗っていく。

「んー……つめたい〜」

「が、我慢してくれ」

……やばい。なにがやばいって？主に俺の理性。女の子特有のすべすべの肌に俺の手に伝わる感触。これがもし蘭やひまりちゃんなら100%襲える自信がある。モカという妹であるというただそれだけの事が俺の理性を繋いでくれている。

「お兄ちゃん、もうちょっと優しく〜」

「こ、こんな感じか？」

「そーそー。そんな感じ〜」

はあく、と息を漏らしつつ幸せそうな表情をするモカ。本当に可愛いな俺の妹は。

「なあ、モカ。今日の昼は何食いたい？」

「えーと……パンがいいな〜」

「海の家に流石にパンはないだろう」

「えー。そんな〜」

「いや、当たり前だろ。てかモカに聞いたの間違いだったか。蘭は何食いたい？」

「別になんでも。しいていうなら、かき氷？」

「昼飯じゃねえよそれ……」

かき氷は昼飯じゃなくて今食いたいものだろ。

「まあいいわ。他の3人に聞いてから決めるわ」

「はーい」

「ん」

「……よし、塗り終わった。前は自分でできるな？」

「ええ。お兄ちゃん塗ってくれないのー？」

「頼むから前は自分でやれ。ていうかいつも言ってるだろ」

「お兄ちゃんのけちー」

不満そうな表情を浮かべるモカ。こんな人の多い所で前も日焼け止め塗ったりしたらただの変態になる。それだけは避けないとならない。

「ケチじゃない！俺は先行った3人探しにいくついでに遊んでくるけど、留守番できるな」

「だいじょーぶ〜。モカちゃんは蘭と一緒にゆーっくりしてるよ〜」

「あたしも大丈夫」

「じゃあ留守番頼むな」

「いつてらっしやーい」

「ひまりちゃん達どこいったんだろ。遠くに行つてなければいいけど」

「あーラテさんラテさん!」

人が少ないところに来ると、ピョンピョン跳ねて手を振るひまりちゃんの姿が。その暴力的な胸が周囲の目を集めているのは今はスルーしておこう。

「ひまりちゃん?それにつぐちゃんと巴も。何してるんだ?」

「ビーチバレーだよ。といつてもボール落としたら負けつて簡単なゲームだけだな」

「負けたら罰ゲームでラムネ奢りですよ!」

「へえ、面白そうじゃん。ちなみに今一番負けてるのは?」

「わ、私……」

涙目になりながらおずおずと手を挙げるつぐちゃん。確かにつぐちゃんはこういうのあまり強くなさそう。

「俺が入ったら今のポイントはりセットされるんだよな?」

「まあ、そうだな。今はダントツでつぐが負けてるけど、それもリセットだな」

「なら入ろうかな。このままだとつぐちゃんがかわいそうだし。

まあ、負けるつもりもないけど」

「あ、ありがとうラテ君!」

つぐちゃんは俺の手を握りながらお礼を言った。いつも思うけど、つぐちゃんがそういうことをするのは反則だ。自分が可愛いっていうのを自覚してほしいものだ。

「あ………ご、ごめんね」

「い、いや、全然いいよ。それじゃあ始めよっか」

「じゃあいくよー。そりゃあ!」

「ナイスひまり。つぐ!」

「わっ!と、ラテ君!」

「ほい。じゃあ、巴!」

「おっと……そういえば、ラテ?」
「んー?」

「お前的に今日のアタシ達の水着、誰が一番似合ってると思ったんだ?」

「ぶふっ!」

「ちょうど俺の番にボールが回って来たときに巴が変な事をいうせいでボールを落としてしまった。」

「ラテさん減点ですー!」

「ちよ、今のずるいだろ!」

「ずるくないぞ。アタシは気になった事を聞いただけだ」

「確かに。ラテさん誰が好きです、か!」

俺が減点された所でまたひまりちゃんから始まる。

「ラテ君、私も気になるかな?」

「いや、聞くのはいいけど、聞く意味ないだろ」

「えっ!誰ですか!?!」

「モカ」

「言うと思いましたっ!わわっ!」

俺にツッコミを入れているうちにひまりちゃんはトスを忘れてボールを落としてしまいひまりちゃんも減点。

「ひまり減点だな」

「むう……次いくよっ!ラテさん!今度はモカ抜きです。モカ以外の4人で選んで下、さい!」

「うーん……そう言われてもな……って」

ひまりちゃん。なんだそれは。ボールをトスするたびにその揺れる胸は。誰が一番似合ってるとか考えるよりも、その動く胸が気になって仕方ない。

「ひまり。ラテの目線がひまりに集中してるぞ」

「えっ!?!」

「い、いや違う!これは違うぞっ!」

「違うって何が違うの………あつ」

「つぐも減点だな。で、何が違うんだラテ」

「いや、えと………その………そ、そう！ひまりちゃんの水着がとてもよく似合ってるなって思ってた!!」

「ほ、本当ですかっ!？」

「も、もちろん。いやー、ひまりちゃん、体型いいから、可愛いなく、つて」

「い、いやー、そんなに言われたら照れちゃいます。えへへ………えいつ!」

顔を赤くしながらボールをトスするひまりちゃん。

「むう………ラテ君、私、は?」

「つぐちゃん?」

ボールをトスしながらもつぐちゃんの水着を見てみる。以前来たときと水着が変わってるから新しく買ったんだろうな。

「もちろんつぐちゃんもよく似合ってるよ。水着も新調したんでしょ? つぐちゃんらしさが出てて可愛いな」

「そ、そうかな………えへへ………」

「おい、つぐ。ボール!」

「へっ? うわっ!!」

巴のつぐちゃんへ放ったトスが、ぼーつとしてしまったつぐちゃん
の顔へ直撃してしまった。

「つ、つぐちゃん!？」

「つぐ、大丈夫か?」

「だ、だいじょぶだよ」

「ならいいけど。気をつけないとダメだよ?」

「ちなみにつぐ。今のも減点な」

「あはは………」

巴がつぐちゃんを起こして、少し休憩を挟んでまた再開した。しばらくし続けた結果、再開は俺が参加する前の同じく、つぐちゃんという事で終わってしまった。

「さてと、そろそろ戻るか。そろそろモカが心配になって来たし」

「ラテ君。蘭ちゃんは？」

「……………そろそろモカと蘭が心配になって来たし」

「言い直した」

「でもそうだな。そろそろ戻って昼飯の事も考えないといけないな」

「そーゆーこと。て事で、戻ろっか」

罰ゲームのラムネは戻ってから俺とつぐちゃんで買いに行けばいいだろう。万が一つぐちちゃんがナンパでもされたら大変だし。

第20話 シスコン2人と膝枕するモカ

「たっだいまー!」

「蘭ちゃんモカちゃん、お留守番ありがとう」

「別に。それよりモカが」

「モカがどうかしたのか!!」

「お兄ちゃ〜ん」

パラソルの下で寝転んでいるモカが甘える声で俺の名を呼ぶのが聞こえる。よく見ると少しぐったりして居る様子にも見える。

「モカ、どうした?具合悪いのか?」

「お腹すいた〜」

「よし。何食いたい?今すぐお兄ちゃんが買って来てやる!!」

「モカちゃんはお兄ちゃんが買って来てくれたものなら何でもいいよ〜」

「よしわかった。今すぐ海の家メニュー全部買って来てやるから!!
おい、みんな!モカのピンチだ!財布よこせっ!!」

「二人で勝手に行つてこい」
「ら、ラテ君。落ち着いて」

今すぐにも走り出しそうな俺をつぐちゃん以外の3人がきつい口調で言ってくる。おかしい。俺にいつも敬語で話してくれるひまりちゃんまでそんな風に言うなんて。

「ぐ、ごめん。なんか焦つてたかも」

「あはは……で、でもラテ君1人だつたら大変だと思ふし、誰か付き添いでついて行つてあげた方がいいんじゃないかな?」

つぐちゃん優しすぎる。俺のことを心配してくれるのはモカとつぐちゃんしかいないんだ。他3人はみんな俺のことがきつと嫌いなんだ。だからあんな風に言うんだ。そうに違いない。

「あたしは。暑いし」

「モカちゃんはお腹すいて動けないよ〜」

「蘭もモカもそんなのずるいっ!ここは公平にじゃんけんで決めよ。
ラテさん以外で」

「そこで無条件で俺を連れていこうとするひまりちゃんはもうついてくるの確定でいいと思う」

まあ女の子だけで行かせてもなにが起こるかわからないし別にいいんだけど。万が一モカがナンパされるものなら、そいつは死刑にしてもいいと思うくらいだ。

「まあ、ラテは確定でいいとしても、あと2人くらい付き添いでついて行った方がいいかもな」

「そうだね。この人数だしそれがいいと思う」

「全部ラテに任せたらいいと思う」

「おい蘭。お前だけ飯抜きにするぞ」

ひまりちゃんだけでなく、巴と蘭も俺が飯買いに行くのは確定のよ
うな言い方。まあ別にいいんだけど。なんか気に入らない。

「じゃあいくよー！最初はグー、じゃんけん」

「」「ポンッ！」「」

「2人ともあんま俺から離れるなよ？この時間だから人多いし逸れたら大変だからな」

「だいじょーぶ。お兄ちゃんの手握ってるからー」

「アタシも一応心配してくれてるのか？」

「当然だろ。巴も女の子なんだし」

結局負けたのはモカと巴だった。腹が減って力が出ないのか、モカは俺の手を握りながら俺にもたれかかっている。

「あー……なんだ。あんまりそういうことはないから、なんていうか照れくさいな」

「お兄ちゃん、あたしは？」

「俺以外の男には触ることすら許されない神聖な妹。触ったら天罰が下る」

「えへへ」

「いや、そこまで言うのかよ。少し落ち着け」

モカに近づく男は全員抹殺してやる。さあ、全員かかってくるとい
い。というのは冗談だとして。

「ほらモカ、しっかりしろ。もう少しでご飯だから」

「むりー。もうモカちゃんの体力はこの暑さと空腹でほとんど残って
ないんだよ」

俺の手と腕をぐっと組んでぐったりしているモカ。そんなモカも
可愛いと思うのだが、暑さが苦手な俺からすればこれだけくっつかれ
るのも少し辛いところがある。

「俺も暑いのが我慢してるんだから、モカももうちょっと頑張ってくれ
よ。それに、お前ずっとパラソルの下で寝転んでただけなんじゃない
のか？」

「そんな事ないよ。モカちゃんはお兄ちゃんがいない間にいーっぱ
い体力使ったんだ」

「へえ。どんなことに？」

「んーとねー。カバンからパン取り出したりー、飲み物取り出したり」

「……………他は？」

「蘭とおしゃべりしたり、後はぼけーつとしたりもしたよ」

「体力使うことほとんどしてねえじゃん」

「そんな事ないよー。お兄ちゃんはわかってないな」

モカの思考回路全て理解できるやつなんていない。そんなやつが
いるものなら、モカと付き合う事を考えてやらないこともなくはな
い。百歩……………いや、五百歩譲って許してやらないこともなくはな
い。

「それにしても、中々列が進まないな」

「そりやそうだろ。昼時だし、食べにくるやつは多いだろうしな」

「お兄ちゃん、モカちゃん疲れたよ」

「もうちよつとだから我慢しよーぜ」

「つかれたくあづいしぬ……………」

「はいはい」

ため息をつきながらも再度俺にもたれかかるモカの頭をよしよし

と優しく撫でてあげる。もう暑いのかどうでもいいや。モカを甘やかしてこの暑さを誤魔化すでしょう。

「きもちいい〜。もつとー」

「ああ。いくらでも」

目を細めてきもちよさそうにするモカの頭を撫でながらも、列が進むのを待つ。ああ、なんて至福なひとときなんだ。

「な、なあ、ラテ？そろそろ周りの視線が痛くなってきたんだけど」

「周りの視線？」

そういえばさつきから周りの人たちが俺たちの事をじーつと見ているような気がする。気のせいだと思ったけどそんな事もないのか？

「でもなんで視線集めて……」

「いやいや！気づけよ！それだよそれっ！」

「それ？」

「モカの頭を撫でてる手だ！」

……ああ、そういうことか。モカの頭を撫でるのが、こんなところでもイチャイチャカップルに見える。

「いや、モカとはカップルじゃなく、兄妹だからやめる必要ないな。なあ？」

「そーだよ。今お兄ちゃんが手を止めたらモカちゃん死んじゃうよ〜」

「なら仕方ない。ずっと撫で続けてやろう」

「アタシが周りの視線でやられてしまいそうだからやめてくれ！」

「巴はモカが死んでもいいのかっ!!」

「頭撫でるのやめるくらいで死ぬわけないだろっ！」

「トモちゃん、これはモカちゃんのしかつもんだいでもあるんだよ〜」

「……………もういい。アタシが悪かった」

「分かればいいんだよ分かれば」

よし論破した。巴だってあこちゃんというモカには及ばないが、超絶可愛い妹がいるんだから、この頭を撫でてあげた時の妹の反応のときめいた表情がわからないはずなのに。

「なあ、バママ」

「誰がバママだっ!!」

「あこちゃんにはよくこういうこととしてやらないのか?」

「あここに? んー……たまにするけど?」

「だつたらわかるだろう? 妹の頭を撫でた時のこの表情。気持ちよさそうにしながらかつもつとしてほしいとねだるように頭を寄せてくれるこの妹の表情が。お前はなんとも思わないのか?」

「まあ確かに可愛いとは思うぞ。あこだつてモカに劣らず可愛いしな。この前だつてアタシの事を世界一カツコイドラマーだつて、嬉しいこと言ってくれるしな」

「……………言ってくれるな。あこちゃんが可愛いのは認める。そこは認めよう。だが、モカに劣らずだと?」

「巴。お前は今俺の触れてはいけない所に触れてしまったな?」

「え、何がだ?」

「モカがあこちゃんに劣ってるわけないだろ! 世界一可愛い妹はモカだ! 異論は認めないっ!」

「なっ……いや、あこの方が可愛いね。これはラテにも譲れないな。お前がモカの事を好きなのはわかるが、アタシだつて同じ気持ちで負けているとは思ってないぞ」

「ほお、じゃあどつちが妹のいいところを言えるか勝負しようじゃねえか」

「いいぜ。負けたら今日の昼飯全員ぶん奢りだからな」

「乗ったっ!!」

「お兄ちゃん、そんな低レベルな話してないで、モカちゃんをたすけてよ」

「低レベル言うなっ!!」

「怒られたー……しくしく」

低レベルなわけがない。これはお互いに妹を持つもの同士、負けられない戦いである。どつちが可愛い妹の事をよくわかっているか。そんな勝負で常にモカを愛し続けている俺が負けてはいられない。

「負けた時の顔が眼に浮かぶな、巴」

「そつちこそ。負けた後に後悔するなよっ」

「……………あ、もしもし、ひーちゃん？ちよつと来てく。トモちんとお兄ちゃんが壊れちゃったく」

そして、戦いの火蓋は切られた。列を進む事を忘れて俺と巴のどちらが妹の事をより好きかという話は周りに観客ができるほど人を集め、それはひまりちゃん達が俺たちを止めに来るまでずっと続いてしまった。

「もお！2人して何してるの!!」

「ぐぬんなさい」

「ラテさんはいつも通りだとしても、どうしてそこに巴がラテさんの話に乗っかるの!!」

「いや、なんていうか、ちよつとあこが劣ってるって思ったら、なんていうか姉貴として負けられない気持ちが出してきて」

「でもびつくりしたよ。モカちゃんから電話あつた時は何事かと思っちゃった」

ひまりちゃんが止めに来てくれた後、財布をロッカーに戻し、無事に6人ぶんの昼飯を俺たちはひまりちゃんの説教を巴と2人正座して聞いていた。迷惑かけた罰として俺と巴が昼飯を奢ることになってしまった。

「私達がどれだけあの中に入るのが恥ずかしかったか、2人ともわかってるのっ!!」

「わ、悪かったって。ほら、ひまりちゃんの好きなアイスとラムネも買って来てあげたから」

「ホント!?わーい！ラテさんありがどうっ!」

物で簡単に許してくれるひまりちゃん。本当にちよろい。ちよろ

すぎる。

「さてと、じゃあ俺たちも飯食べるか」

「だな」

「ぐちそうさま」

「モカちゃん食べるのはやつ!？」

空腹で倒れそうになっていたモカは俺たちが説教されてるのを無視して先に海の家で買った焼きそばをもう完食していた。

「お兄ちゃん、お腹いっぱいになって眠くなってきちゃった」

「食ってすぐ寝たら牛になるぞ」

「牛じゃないよ。モカちゃんだよー」

「いや、それは知ってるけど」

「て事で膝貸してね」

いいよ、という間も無く俺の膝を枕にして寝転ぶモカ。そしてそのまま10秒もたたないうちに寝息を立てていた。

「……………こいつ海来たのに何にもしてないな」

「確かに。せつかく海に来たのにもつたいない」

「実はモカちゃん昨日楽しみにしててよく眠れなかったとか？」

「モカに限ってそれないと思う」

「ああ。でも仕方ないな。午後は蘭を加えて遊ぶとするか」

こうなってしまう以上俺とモカは必然的に留守番だ。モカが起きたら混ざることではできると思うけど。

「あたしも留守番がいい。暑いし」

「ダメだよ蘭!蘭だって海来てから何もしてないんだし遊ばないとっ！」

「だな。午後はせつかく海に来たんだし泳ぐとするか」

「いやあたしは……………わかった」

ひまりちゃんと巴に押されたのか、蘭も結局遊ぶことを決めたようだ。てか、モカにしろ蘭にしろどんだけ暑い嫌なんだよ。

「つぐはどうする?」

「私は……………ちよつと休憩してからいこうかな?ちよつと疲れちゃったし」

「つぐは午前中アタシ達にボロボロにされたから仕方ないか」

「あはは……休憩したらすぐ向かうから」

「わかった。よし、ひまり。蘭も行くぞ」

「おおっ！」

「ちよ、もう少し休憩してからでも……！」

浮き輪を持った巴とひまりちゃんに腕を引かれ蘭もそのままついて行ってしまった。蘭はともかく巴とひまりちゃんは元気すぎる。

「つぐちゃんは大丈夫か？ 疲れたんだったら寝転んでもいいけど。なんだったら飲み物とかもだそうか？」

「あ、ううん、大丈夫だよ。疲れたって言っても寝転ぶほどじゃないから」

「そうか？ ならいいんだけど」

「うう………あついく」

「モカ？」

俺の膝を枕にして寝ているモカが寝返りをうった。どうやら寝言みたいだ。

「モカちゃん苦しそうだね？」

「そりやまあこの暑さだし、パラソルの下といっても暑いんだろ」

つぐちゃんと話しながらもクーラーボックスの中に手を伸ばし、中に入っている保冷剤に手に取る。そして、それをタオルで包んでモカの頬に優しく当ててあげる。

「………きもちいい〜」

「そりやよかった」

「ラテ君凄いい……モカちゃんへの対処をあんな一瞬で」

「まあなんだかんだ言ってももうずっとモカの面倒は見て来てるしな。これくらいなら当然だよ。はいこれ、つぐちゃんの分」

「あ、ありがとう」

保冷剤をもう一つ取り出してタオルで包みそれをつぐちゃんに渡してあげた。

「はあ。冷たくて気持ちいい〜」

「だろ？」

「うん。ありがとうラテ君」

「どういたしまして」

にしても本当に暑いな。よく蘭とモカはこんな暑い中ここでじつとしてられたな。これならビーチで遊んでる方が絶対にマシだと思うんだけど。

「ラテ君は優しいね」

「え、今何て？」

「ううん、なんでもない。私そろそろ巴ちゃん達の所に行ってくるね」

「あ、うん。気をつけてな」

「うん！」

つぐちゃんはよいしょ、と言って立ち上がりそのまま走って巴達がいる方へと走って行った。

「さて、どうしようか」

普段なら本とか持って来てるんだが、今日は海に行くということだ。そういうのは何も持って来ていない。できる事と言えば、今俺の膝を枕にして寝ているモカの頭を優しく撫でてあげることだけ。

「……………俺も少し寝ようかな」

モカの気持ちよさそうな寝顔を見ているとこっちまで眠たくなってきた。いったいどんな夢を見ているのやら……………

「ダメだ……………ちよつとだけ。ちよつとだけ俺も寝よう」

「……………うう……………ん」

「……………あ、起きたく？」

「……………も……………か……………？」

「そーだよ。モカちゃんだよー」

目を覚ますと、目の前にはモカの顔が。どうやら俺が眠ってからはモカが代わりに俺に膝枕をしてくれてたみたいだ。

「……悪い。俺いつの間にか寝てたみたいだ。どのくらい寝てた？」
「うーん……1時間くらいかな？あたしが起きてからそれくらい寝てたと思うよ？」

「そっか。悪いな。モカが気持ちよく寝てたのを邪魔しちゃったみたいで」

「だいじょーぶー。お兄ちゃんの寝顔を弄ったり、写真もばっちし撮っておいたよ。ほら」

モカの携帯の画面には、モカに膝枕されながらも気持ちよさそうに眠る俺の顔が。

「いや、それ恥ずかしいから消して欲しいんだけど」

「ダメだよー。これはモカちゃん携帯のまちうけにするから」

「消しなさいっ！そんな事に使うなら絶対に消しなさい!!」

「えー。そんな」

「いいからっ!」

「はーい」

しよぼーん、と悲しそうな顔をしつつもモカは俺の寝顔写真を消して見せた。待ち受けに使ってくれるのは嬉しいけど、流石にそれは恥ずかしい。せめてツーショットならまだしも。あ、俺の待ち受けがそうだった。

「そういえばみんなは？まだ戻って来てないのか？」

「今さっき蘭がきゅーけいに戻って来たくらいかな？」

……なんてこった。蘭が戻って来たということは俺がモカに膝枕されて寝ているところをばっちし見られてしまったということじゃないか。

「でも、お兄ちゃんとあたしの姿みたらすぐに戻って行ったよー」

「え、そうなのか？」

「なんか蘭の顔がものすごく赤くなってたよ」

「なんで？あいつまさか暑い我慢してるとか？」

「なんでだろー？」

別に俺とモカが常一緒にいるところなんてあいつは見飽きてるはずだし、恥ずかしがる事は何もないはずだ。何故だ？

「まあいいや。それより、モカも遊んで来たらどうだ？今日1日ずつとここから動いてないだろ？」

「今のモカちゃんはお兄ちゃんと一緒にいたい気分だから別にいいー」

「うん。それは俺も同じ気持ちだけど、折角海に来たんだし、モカもみんなと一緒に遊びたいだろ？」

「そうだねー。遊びたいよー。でもー」

「でも？」

「お兄ちゃんがあたしの足から頭どけてくれないと動けないよー？」

「…………モカの膝枕が気持ちよくて動きたくないんだ」

モカの膝枕。いつもは俺がするけど、今日はめずらしくモカがしてくれてることに加え、水着も着用している。上を向けば、可愛いモカの顔が目の前にあり、ふと目をそらせばモカの成長中の胸があり、頭に意識を集中させればモカの柔らかい太ももが感じられる。正直に言おう。ここから一步も動きたくない。

「言ってる事とやってる事が全く違うよー？」

「…………許せ。お兄ちゃんもうモカを離したくないんだ。なんていうかもう俺死んでもいいと思ってるから」

「お兄ちゃんが死んだらモカちゃんも死んじゃうよ？」

「それはダメだ。てことで俺はここから一步も動かない」

「ダメ、ですっ!!」

パコーンっ！という音が俺の頭に響いた。何事かと思い起き上がると、いつの間にか戻って来ていたひまりちゃんの姿が。

「いったあ!!」

「私達が遊びに行っただけからいつまでたっても来ないと思ったたら2人で何やってるんですか！」

「モカに膝枕してもらってる」

「お兄ちゃんに膝枕してるんだよ」

「この兄妹は…………蘭が顔真っ赤で戻って来た意味がわかったかも」

「ひーちゃん、ため息ついたら幸せが逃げちゃうよ」

「誰のせいだと思ってるのっ！」

「ひーちゃんが怒ったー」

俺たちのやり取りを見てため息をついたひまりちゃん。

「あれ？他の3人は？」

「私が2人を呼びに来たんです。折角海に来たんだから、6人で遊ばないと」

「いや、荷物番いないと危ないだろ？」

「だいじょーぶ。貴重な物は全部ロッカーに入れてあるんですし、こんな人が多いところで泥棒を働くような人はいませんよ！」

「……………それもそうか」

ここに残ってるものといえば、パラソルとシートと飲み物を入れたクーラーボックスくらいのもの。これなら誰も盗む奴はいるはずないか。

「だからほら。モカもラテさんも一緒に遊びましょうっ!!」

「はいはいわかったよ」

「あつよいよお兄ちゃんおんぶー」

「今から遊ぼうとしてるのにおんぶしてどうするんだ」

「しかたないな」

眩きながらも、ひまりちゃんの隣を歩くモカ。どれだけ動きたくないんだうちの妹は。

「お、やっと戻って来た」

「遅い」

「モカちゃん、ラテ君！こっちこっち」

「お兄ちゃん、やっぱりおんぶして」

「もお！モカ、しつかり！」

モカがいて、蘭も巴もつぐちゃんもひまりちゃんもいて。こうして6人で遠出する事はなかなかないけど、やっぱりこいつらと一緒にいると楽しいな。

「みんな、何しよつか？」

「ラテの顔にボールをぶつけるゲームは？」

「蘭、お前俺に何の恨みがあるんだ」

「恨みはないけど、なんかムカついたから」

「り、理不尽すぎる」

俺が一体何をしたって言うんだ。

「とりあえず、折角海に来たんだし、ラテを砂で埋めるとするか」

「はあ!? ふざけんな!! 何で俺がそんな目に!」

「さんせーっ! つぐもいいよね?」

「そう…だね。ちよつと楽しそうかも!」

「つぐちゃんっ!」

俺の良心である2人のうちのつぐちゃんが俺のことを裏切った。どうして…つぐちゃんの事を信じてたのに。

「お兄ちゃん〜」

「モカ……」

そうだ。俺にはまだモカがいる。この子さえいれば俺はきつと……

「楽しいそうだから、モカちゃんもさんせ〜」

「……裏切られた」

「それーっ! みんなかかれー!」

ひまりちゃんの掛け声とともに一斉に襲いかかってくる5人。俺はなすすべもなく砂で埋められてしまったのだった。

第21話 怒るひまりと羽丘女子学園の七不思議

「あー、バイト終わったー。早く家帰ってモカで癒されたい」

夏休みももうすぐ終わりに近づいて来た頃。俺はあいも変わらず日々バイトをする生活が続いていた。

「夏休みももうすぐ終わりだと思おうと早いよなく……と、電話か？」
ポケットに入れている携帯が鳴っていた。

「はい、もしもし？」

『あ、お兄ちゃん、あたしだよ』

「モカ？どうかしたのか？」

『うん。えつとね、今からつぐの家にしゅーごーだよ』

「え、今から？なんかあるのか？」

『これからつぐの家で宿題終わらせるんだ。ひーちゃん達の』

「あー、ひまりちゃんのか。モカはもう終わってるんだろ？」

『うん。もちろん』

夏休みが始まり半分も過ぎないうちにおれは宿題を終わらせ、モカはその少し後に全てを終わらせた。今は俺たち兄妹は宿題という枷に追われず、のんびりと過ごしている。

「わかった。一回家に帰ってシャワー浴びてから向かうから。何か差し入れはあるか？」

『じゃあ、やまぶきベーカリーのパン』

「ははっ、言うと思ったよ。他のみんなは？」

『うーん……いっぺんに聞くのめんどくさいから、後でメールするね』

「はいはい。それじゃあまた後でな」

電話を切った俺は急いで家に帰り、シャワーを浴びてからつぐちゃんの家に向かった。もちろんやまぶきベーカリーのパンは忘れずに。

「おいーっす。来たぐへっ！」

「ちよつとラテさん、どういうことですかっ!!」

つぐちゃんの家の扉を開けた瞬間、ひまりちゃんが俺に向かって飛びついて来た。

「な、なんの話だ!?!」

「夏休み始まってすぐの頃、私以外のみんなで宿題終わらせるためにつぐの家に集まったって!今聞きましたよ!」

「え……………あー」

俺とつぐちゃんと蘭から始まり、たまたま来た巴が合流して、バイト終わったモカが来た時の話か。

「どうしてその時私も呼んでくれなかったんですかーっ!!!」

「ひ、ひまりちゃん落ち着いて!ラテ君が気絶しちゃうよっ!」

俺の胸倉を掴んでブンブンと俺の身体を激しく前後に揺するひまりちゃん。やばい、本当に吐きそうだ。

「おかげで、私以外のみんなはほぼ宿題終わってるって…………モカに至っては全部終わらせてるし」

「えへへー。すごいでしょ?」

「まあ確かにあの時の勉強会がなければもう少し残ってたかもな」

「あたしも」

「私もコツコツやって来てたけど、やっぱりあれが1番進んだおかげかも」

「ほらー!!どうして私だけハブにしたんですかー!!!」

「ひまりちゃん!!本当にラテ君死んじゃうから!!ストップ。ストップ!!」

再度俺の身体を揺するひまりちゃん。本当に待って。マジで俺死んじゃう。

「うう…………ラテさん酷いです。私ラテさんのこと嫌いです!!ラテさんと絶交です!!」

激しく揺すられて目が回っている中でもわかる。ひまりちゃんが涙目で俺を見つめているのを。

「え、つと……ひまりちゃん？」

「ふん。ラテさんなんて嫌いです」

ふい、と顔を背けるひまりちゃん。どうしよう、怒られてるのはわかるんだけど今の仕草物凄くキュンときた。じゃ、なかった。

「その……ほら、ひまりちゃんの好きなコンビニスイーツ買ってきだよー」

「どうせモカに言われて買ってくるように言われたんでしょ」

何故バレた？確かにこれはモカにメールをもらって買って来た物だ。モカから『ひーちゃんのだけ少し多めに買っておいたほうがいいと思うよ〜？』とメールが来たから買って来たものなのに。

「ほ、ほら！甘いものだけじゃなくて、パンもあるし」

「モカのパンのついでに買って来てくれたものなんていりません」

「ジュースもあるぞ」

「つぐの作ったマンゴーソーダの方が美味しいです」

ダメだ。何を言っても聞く耳を持ってくれない。誰か。誰か俺を助けてくれないか？

「自業自得」

「あー、あここに遅くなるってメールしないとな」

「……むぐむぐ」

「え、えつとね、ラテ君もきつと悪気があつて連絡しなかったわけじゃないんだよ？だから、ね？ひまりちゃん？」

おかしい。助けようとしてくれるのつぐちゃんしかいない。後の3人は全員どうでもいいような顔をしてるし。モカに至ってはいつの間にか俺の手に持つてる袋からパンとってるし。それはさておき。

「ひ、ひまりちゃん」

「なんですか？」

「えーっと、その」

どうしよう。何をしたら許してくれるだろうか？スイーツ奢る？デート一回？いや、デートなんていったら100%モカが怒るだろうし。いやでも……

「むぐむぐ……はあ。やっぱりやまぶきベーカリーのパンは最高だよ」

モカはいつもと変わらず呑気だし。でも、そんなモカも可愛い。

「ねえねえひーちゃん？」

「なに？」

「ひーちゃんにプレゼントを差し上げよう」

「プレゼント？」

「うん。えつとねー。お兄ちゃんの事を1日自由にできるプレゼントだよ」

「「「えつ？」」」」

「どうかな？」

モカの一言にひまりちゃんや俺だけではなく、蘭も巴もつぐちゃんも驚いていた。あのモカが。あこちゃんとモカを両方連れて夏祭りに行こうとした時に俺に怒ったモカが、俺を1日中にできるプレゼントをするなんて。

「ど、どうかなって言われても」

「お兄ちゃんと甘いもの食べに行ってもいいよ」

「ら、ラテさんと？2人で？」

「そー。その代わり、お兄ちゃんの事を許してあげてー？」

「で、でも……本当にいいの？」

「あの時はモカちゃん達も連絡するの忘れてたんだし、あたしもお兄ちゃんも悪いんだよ」

「モカ……」

呑気に俺の買って来たパンを食べてるだけかと思ったら……モカが俺のことを庇ってくれてるなんて。

「わかった！モカに免じてラテさんの事を許してあげるっ！」

「だってー？よかったねお兄ちゃん」

「あ、うん。そうだな」

モカのおかげで許してもらう事は出来たけど……モカがあんな事を言うなんて何か裏がありそうで少し怖い。素直に嬉しいのに、でも怖い。

「で、勉強会はどこまで進んでるんだ？」
「うっ……………それが」

「普通参考書を学校に忘れるか？」

「だ、だってえ…………」

どうやらひまりちゃんは宿題で使おうとした参考書を教室に忘れて来てしまったらしい。外はもう真つ暗だが、明日からは学校が閉まるらしいので仕方なくこの暗い夜の中、取りに行くことに。

「はあ…………先が思いやられるな」

「…………やっぱりさっきの事、許さなかった事にしますよ？」

「ごめんなさい」

ダメだ。しばらくはひまりちゃんに勝てそうにない。俺が全面的に悪いからなにも言えないのが確かだし。

「とりあえず中入るか。鍵空いてるっぽいしな」

「……………ていうかさ、男子である俺が無断で女子校に入っているのか？」

「だいじょーぶ。外も中も暗いし、お兄ちゃんが入っても見つからないよ〜」

「いや、そういう問題じゃないと思うけど……………まあいいか」

正面入り口から中に入ってそのままひまりちゃん達の通う教室へと足を運び、すぐさまひまりちゃんは自分の机の中を探し始める。

「にしても、なんか出そうな雰囲気だな」

「お兄ちゃん、なんかあって〜？」

「そりゃあれだよ。幽霊とか？」

「……………」

「蘭、冗談だぞ、本気にするなよ」

相変わらず、幽霊やらお化けやらは苦手らしい。あと巴も。一瞬ピクツて震えたのが見えた。

「まあいいじゃん。お化け怖いくらい。その方が女の子らしくて可愛いじゃん」

「そういう問題じゃないし。それに誰も怖いなんて言っていないし」「いや、つぐちゃんとモカ以外の3人がお化けとかホラー系にビビってるのはもう知ってるからな」

なにも強がらなくてもいい事なのに。素直じゃないな。

「あつたよ！参考書！これで宿題が進められるっ！」

「よかったあ」

「よし。今すぐここから出よう」

ホツと息をつくつぐちゃんと、早足で教室から出て行く蘭。どんだけお化けが怖いんだよ。

「でもさ、夜の学校って少し楽しみなんだよな。ほら、肝試みたいでさ」

「あ、確かに。こういう所を友達と一緒に探検してみたいかもっ」

「じゃあ、今から探検する？」

「そうしてみたいのは山々だけど、蘭がビビりまくってるから無理だろうな」

こういう機会は滅多にないだろうし、少しは遊んでみたかったけど、仕方がないか。

「さーて。帰ったらひまりちゃんにみっちり勉強教えないとな」

「やだー。私モカに教えてもらいたいです」

「だーめ。モカの説明だと曖昧でちゃんとわからなくなるだろうから、俺が教えます」

「ぶーぶー。ラテさんのケチー」

「はいはい。俺はケチなんですよ……ってあれ？」

「どうしたんですか？」

「いや……扉空かないんだけど？」

「……………はい？」

おかしいな。さつき入って来た時は普通に空いていたのに。

「巴、つぐちゃん、他の扉？」

「ダメだ。閉まつてる」

「こつちもダメみたい。もしかしたら警備員の人かももう誰もいないと思つて鍵を閉めちゃつたのかも」

正面玄関は全滅。さて、どうしようか。まあここはこいつらに任せ
るしかないな。

「お兄ちゃん？」

「んー？」

「おもしろくなつてきましたな」

「その通りだな」

「こんな状況面白いわけないでしょ……」

ふへへー、と笑い合う俺たちにすかさず蘭が突つ込んだ。ていうか
蘭が少し涙目に。

「だ、だいじょーぶ！きつと他にまだ閉まつてない扉があるはずだか
ら」

「た、体育館の非常口が空いてるじゃないか？部活で遅くなつた生徒
のためにいつも開けてくれてる扉があるんだ。そこなら」

「で、でもここから体育館まで結構距離あるよ……それをここから歩
いて行くの？」

昇降口から体育館まで結構距離がある。ということとは。

「なあ、モカ？」

「なーに？」

「マジで学校探検できそうだなっ!!」

「おー、たしかに」

「2人ともわくわくしないですよっ！」

「みんな、行くぞっ！」

こうして俺たち6人は学校探検……もとい学校から脱出するため
に体育館を目指すこととなった。

「な、なあ、みんな？」

「なに？」

「暑いから離れてくれね？」

体育館目指し歩いていく途中、右手をモカ、左手を蘭、右腕をひまりちゃん、左腕を巴、服の裾をつぐちゃんが掴んで歩いている。いや、おかしいだろ。怖いのはわかるけど、これじゃあ歩きにくくて仕方ないんだよ。

「だ、だって、夜の学校って予想以上に怖くって」

「あ、ああ。この静けさが余計にな」

「全く。とりあえず一回離れろ。それで誰か俺以外に先導する人を一人決めてくれ。お前らの学校初めて来たから道わからないんだよ。それに暗いし」

いくら男子とはいえ初めて来たやつに先導させるっていう、蘭たちも信じられないけど。

「あたしはお兄ちゃんから離れる気がないから先導は出来ないよ」

「心配するな。俺もモカを離す気がないから」

俺とモカは一心同体。ひと時も離れることは許されない。ということはないんだけど、とりあえずモカから離れたくはない。

「あ、あたしは無理」

「私も」

「アタシも無理だ」

蘭、ひまりちゃん、巴は当たり前のように無理。ていうか、モカが辞退した時にすでに決まっていたんじゃないのか？

「じ、じゃあ私がみんなを先導するね」

「ゴメンなつぐちゃん」

「大丈夫！」

勝手に借りて来た懐中電灯を持ったつぐちゃんが俺の横について歩き始める。そして俺と手を繋いだモカ、そして俺の服を掴み3人も歩き始める……って、歩きづら。

「あ、ラテ君ここを左だよ」

「ここって……ああ、こつちな」

懐中電灯があるとはいえ、見えにくいし何より後ろ3人のおかげで歩きにくい。

「つぐちゃん、懐中電灯俺が持とうか？」

「ううん、大丈夫だよっ！でも、私も少し怖いかな？」

えへへ、と笑いつつ俺より少し前を歩くつぐちゃん。そりやそうだよな。いくらしっかりしているつぐちゃんとはいえ女の子なんだし。

「ここは俺がしっかりしないとな」

そう思い、左手でつぐちゃんが懐中電灯を持っていない右手を優しくギュツと握った。

「ひゃああっ!!」

「うわあっ!!!」

「な、なにっ!？」

「っ……………」

握った瞬間、びっくりしたつぐちゃんの悲鳴に始まり、つられた巴の悲鳴とキョロキョロ周りを見るひまりちゃん、そして、声さえ出さなかったが蘭がビクビク震えてるのがわかってしまった。

「ラテ君、いきなりなにをっ!」

「ごめんごめん。なんかやっぱりつぐちゃん1人に背負わせるのは悪いと思つて。怖いのが少しマシになったらしいなつて思つてつぐちゃんの手を握つたんだ」

「び、びっくりした……い、いきなりは困るからせめて声かけてからにして欲しかったよ……」

「悪かった悪かった。巴と蘭も悪かったな」

「なにもなかったなら別にいいけど、あまりびっくりさせないでくれ」

「うん。巴の言う通り」

「わかったわかった。悪かったよ」

巴に謝りつつ、再度つぐちゃんの手を握つて歩き出す俺たち。暗くてよくわからないけど、つぐちゃんの顔が少し赤く見えるのは気のせいだろうか？

「そういえばさ〜」

「ん？」

「羽丘女子学園に伝わる七不思議って知ってる？」

「ん、なにそれ？」

「その話聞いたことあるかも。人体模型が動き出すとか、鏡に知らない人が映し出すとかだったよね？」

「どんな学校にも存在する七不思議ってやつか。ピアノが勝手になり出すとか、そういう怪奇現象の。」

「そーそー。他には階段が一段増えてるとかーん、体育館からドリブルの音が聞こえるとか？」

「あと、グラウンドにある井戸の事と、勝手になり始める音楽室のピアノの事！」

ピアノマジで当たってたのか!?

「あれ、あと1つってなんだっけ？」

「あと1つ？」

「音楽室のピアノ、動く人体模型、映す鏡、増える階段、体育館のドリブル音、グラウンドの井戸。これで6つでしょ？あと1つ……つぐー、覚えてる？」

「うーん、思い出せないな」

「……やばい。それ全部調べたいって思ってる自分がいる。でも、モカからは離れたくないし。モカも一緒について来てくれればいいのに。」

「ね、ねえ。この話もうやめようっ！それより早く体育館目指してここから出ようよっ！」

「だな。よしっ！早く行こう！」

「うん。あたしも早く出たい」

「そう思うならお前ら自分で歩けよ!!」

「こいつら俺の服を掴んで離そうとしない。あれだけ息巻いていたくせに自分では歩こうとしないなんて。」

「ら、ラテ君。いこっか？」

「お兄ちゃん、レッツゴーだよ」

「はいはい。レッツゴー」

こうして俺たちは閉じ込められた学校から出るために、体育館を
指してまた歩き始めた。

第22話 脅かすラテと呑気なモカ

「体育館に行くにはこの階段を上るのが近そうだな」

つぐちゃんに先導されるまま俺たちは学校内を進んで行く。

「なあ、モカ？」

「なーにー？」

「この階段って何段？」

「そんなのわかんないよ。でも、どうしてそんなこと聞くのー？」

「決まってるだろ。七不思議が本当かどうか確かめるんだよ」

羽丘女子学園の七不思議の1つ。増える階段。それを確かめるには絶好の機会だ。

「ちよ、ラテ。なんで今それ言うの。あたし今急に思い出しちゃったじゃん」

「いや、せっかくこうしてみんなで夜の学校にいるわけだし、楽しくいきたいじゃん」

「この状況を楽しんでるのはラテさんだけです！」

「そんなことないよ。あたしもお兄ちゃんと一緒に楽しいし」

「モカの言う楽しいはこの状況の楽しいとは全然違うだろ」

ギューつと抱きついてくるモカがそう言う。やっぱりモカはいつでも俺の味方をしてくれる。

「で、誰か階段の段数知らない？」

「知るわけないでしょ。階段の段数をいちいち数えるやつなんて普通いないし」

「だ、だよねー。よし、この七不思議は検証できずに終わりっ！」

「階段の段数、確か12段だったと思うよ？私よく生徒会の仕事で校内の清掃をしてるんだけど、掃除してるうちに階段の段数覚えちゃって」

階段を登ろうとするひまりちゃんと蘭の動きがピキツと止まった。空気を読まないつぐちゃんの発言だったが、俺からすればそれはとても嬉しいことだった。

「つぐ、その情報は今知りたくなかったよ……」

「階段の数、知ってしまった」

「はっ！ご、ごめん」

「ううん、つぐちゃんありがとう。おかげで七不思議を検証することが出来るよ。いやー、良かった良かった」

「ちつともよくない」

蘭がすかさず突っ込んでくる。

「でもさ、よく考えてみるよ。俺が階段の数を数えながら登ったとする。で、もし階段の数が違ったとしよう。それでお前らの身に何が起きるって言うんだ？」

「……………確かに」

「だろ？て事でここはひとつ、みんなで階段の数を数えながら登るとしよう」

「そ、そうだね！もしかしたらこの七不思議は嘘って事を証明できるかもしれないし」

「ほら、つぐちゃんも賛同してくれてるし、いいだろ？」

「モカちゃんもさんせー」

「はあ……………まあいつか」

「ラテさんすつごくウキウキしてるね」

「やっぱアタシ達とは違うんだな」

「ほら、ひまりちゃんと巴も」

「私達数えるって言っていないのに」

「諦める。こうなったらもう止められない」

モカと蘭も賛同してくれて半分くらい以上が賛成になった今止めるものは誰もいない。みんなで階段の段数を数えながら登ることに。

「いくよー、1…2…3」

「4…5……………」

みんなの階段を上るタイミングを合わせながら1段1段ゆつくり登っていく。

「10……………11……」

「12！なんだ、階段が増えるなんてやっぱりうそ」

『13！』

そして階段を登り切り、ひまりちゃんが安堵の息を吐いた瞬間、巴の声が俺たちに響いた。

「もう巴、冗談言わないでよ」

「え、アタシは何も言っていないぞ」

「いま、13つて言ったよね?」

「いやいや、そんなこと言ってないって」

あれ?おかしい。確かに巴の声だった気がするのに。

「モカも聞いたよな?・巴の声」

「うん。あたしもトモちんの声聞こえたよ」

「私にも聞こえたよ」

「」「」「……………」

巴じゃないとしたら、今の声の主は一体誰だったんだ?考えられるのは俺たち6人ではない第三者の人間。

「……早く次進もう」

「そ、そうだね。あはは。進もう進もう。レッツゴー!・ゴー!!」

「ひーちゃんが壊れてしまった……」

「いやー、肝試しっぽくなってきたなあ。次の七不思議が楽しみだぜ」

あれだけ先に行くのを怖がっていた蘭とひまりちゃんが先を歩き、俺はこの先も1人楽しみにしながら2人の後について行った。

「つぐぐ、体育館まで後どれくらい?」

「もうちよつとかかかると思う」

「方向はこつちであつてるのか?」

「あつてると思うよー。ほら聞こえない?』『こつちこつち』って声
が」

「あーあーあーわーわーわー!!聞こえない!アタシには聞こえない
ぞー!!」

「そういうこと言われると本当に聞こえてくる気がしちゃうじゃん」
「いや、ほんとに聞こえるんだけどなー」

『こつちだよ。こつちこつち』

「ほらー」

「え、嘘でしょ……」

「おい、冗談だろ。誰だよ、そんなこと言ってるやつ！」

『こつちだよ。ほらー、声が聞こえる方においで』

「ふ、ふざけるなよ。こんな声聞こえてたまるか！」

「聞こえない聞こえない。あたしには何も聞こえない」

「もうやだー！誰なの、この声ー!!」

「俺でーす」

「えっ？」

「はっ？」

「……………」

ドツキリ大成功！

「いやー、せつかく肝試しっぽくなってるから、折角だしその気分に合わせてようかと思って」

「ちなみにあたしは気づいてたよ。ほんのモカちゃんジョークでした」
「そうそう。ほんのラテさんジョークでした。いやー、声変えてたけど、俺だっけ見破れないのはお前らまだまだ俺の事を分かってないな」

「ごめんね。私は気づいてただけど、なんだか言いだしにくくて」

あはは、と笑いながらモカとハイタッチをする俺。つぐちゃんもちゃんと空気を読んでくれるし、3人の反応が予想以上に良くて楽しいな。

「モカ、それにラテ（さん）？」

「…………ごめんなさい」

「…………もうしません」

蘭と巴とひまりちゃんが物凄い形相で俺たちを睨みつけてきた。少しやりすぎたのかもしれない。自重しよう。

「そうだ！ねえ、みんなで歌でも歌ったら少しは怖さがまぎれるんじゃないかな？」

「確かに。歌にまぎれて他の音が聞こえなくなりそう！」

「やってみるか!!」

どうやらみんなで歌を歌うことにしてみたみたい。つぐちゃんから歌い始めたが俺はこの曲を知らないので参加できない。おそらくAftergrowで作った曲なんだろう。これでみんなの怖さがまぎれるなら簡単なもんだ………あれ？なんか変な音が聞こえてきた。

「……っ！」

「ん？どうした、ひまり？」

「ねえ、何か聞こえない」

ひまりちゃんも気づいたみたいでみんなが歌うのを中断する。聞こえてきたのはピアノの音だ。ゆったりと、でも何かこの雰囲気合う暗いフレーズがピアノの音として聞こえてくる。

「おい、嘘だろ？」

「……っ！この曲……」

「あたし達の曲……」

どうやら蘭達を作った曲で間違いなかったみたいだ。それを自覚した途端、蘭と巴とひまりちゃんが叫び声をあげた。

「もう無理！無理無理無理!!あたしも帰る!!」

「え、あたし達帰ろうとしてここまで来たんじゃないの？」

「モカ、もう蘭はビビリすぎてそれどころじゃないんだよ。察してやれ」

「もうやだあ！このピアノの音、いつまで続くの!!」

「知らないよっ！ああもう！おいピアノの音とまれえ!!」

「……それで止まるの？」

「モカ、もう巴はビビリすぎてそれどころじゃないんだよ。察してやれ」

モカのツツコミは最もなんだが、もう怖がり3人組はそれどころじゃないみたいだ。

「この音、もう聞いてたくない！怖い！音が聞こえない方まで逃げよ」

う！」

「賛成！あつちか？あつちにいけばいいのか!？」

「私もいくーっ!!」

「あ、3人とも！」

「おい、お前らだけじゃ危ないぞ！」

「……行っちゃった」

もう耐えられなくなったのか。蘭を筆頭にして3人がピアノの音から逃げるように走り出していった。

「どうしよう。懐中電灯も持ってないのに」

「とりあえずあの3人追いかけるしかないよね。つぐ、お兄ちゃん、ダーツシュ」

走って行った3人を追いかけるように俺たちも廊下を走る。しばらく走ってみたけど、3人の姿は見当たらなかった。

「蘭ちゃんー！巴ちゃんー！ひまりちゃん!!いないか。ラテ君モカちゃん。今度はあつちの方探してみよ」

「……あれ？」

「ん？どうかしたのか、モカ？」

「つぐ。ちよつとここに立って」

「この鏡の前？」

「そうそう、そこ」

鏡に何か変なものでも映ったのか、モカはつぐちゃんを鏡の前に立たせた。

「んー、ちゃんどつぐが映ってるなあ」

「なんだ、モカ！変なものでも映ったのか!？」

「ラテ君、なんで楽しそうなの……」

決まっている。こういうお化け類のものが面白いからだ。

「さつきつぐがこの前を通り過ぎた時、明らかにつぐじゃない人が映った気がするんだけどなく」

「えっ……モカちゃん、それ冗談だよね？」

「あっ！また映った！」

「あ、ホントだっ！」

「……っ！」

今度は俺にもハッキリと見えた。

「つぐがこっち振り向いた瞬間……また……」

「いやあああー！ー！ー！！！」

「あつ、つぐちゃん!!」

つぐちゃんも怖さに限界がきてしまったのか。つぐちゃんまで涙目になりながら廊下を走って行った。残ったのは俺たち仲良し兄妹。

「モカー」

「なーに〜?」

「2人つきりになっちゃったな」

「そーだね〜」

「モカは怖くないのか?」

「全然だいじよーぶだよ。お兄ちゃんはずっと手を離さないでくれるし〜」

「当然だ。こんな暗い中で手離して逸れたりでもしたら大変だろ?それにモカもずつと手を握っててくれてるしな」

「ふへへ〜」

にこーっと笑うモカの頭をよしよしと優しく撫でてあげる。こんな時でも可愛い妹がいるなんて俺幸せ者だなー。

「少しはゆつくりしたいんだけど、そうもいかないよなー」

「みんなを探しにいかないとー。蘭とか寂しくて泣いてるかもしれないよ〜?」

「それは……ありそうだな」

巴とひまりちゃんがいるから大丈夫だとは思うんだけど。それにとった1人で走って行ったつぐちゃんも心配だ。

「それじゃあ行くか。……とその前に」

「んー?」

さつきつぐちゃんが立った鏡の前に俺も立ち、モカの方を向く。

「モカ、俺はこの鏡に立ってどういう姿に見える?」

「いつもと変わらない、かっこよくて優しいあたしの大好きなお兄ちゃんだよ〜」

「そっかー。なら安心。モカもするか？」

「いいよー」

モカと場所を入れ替わり、今度はモカが鏡の前に立つ。

「お兄ちゃん、あたしはは〜？」

「いつもと変わらない、のんびりしていて可愛い俺の大好きな妹だよ」

「えへへ〜。それじゃあお兄ちゃん、レッツゴー」

「おー」

再びモカと手を繋いで、俺たちは先を走って行ったつぐちゃんたちを追いかけ始めた。

その後、走って行った4人は無事に見つかり、モカの軽い説教を受けた後にまたみんなで行動をし始めて、無事に体育館へとたどり着いた。

「やっとなついた〜」

「これで外に出られる……んだよね？」

「そのはず。いつも開いてる非常口は……」

巴が周りを見渡そうとした瞬間、体育館を照らしていた懐中電灯の明かりがパツと消えてしまい辺りが真っ暗になった。

「嘘でしょ……なんでこのタイミングで」

「これじゃあ非常口の場所もわからないぞ」

確かに周りが何も見えない。分かるのは俺が今手を繋いでるモカの姿だけ。……このままモカを抱きしめてもバレないんじゃないのか？

「お兄ちゃん？今変な事考えたでしょ〜？」

「何も考えていません。でも、モカ、絶対手放すなよ」

「はーい」

こんな真つ暗闇の中でも俺が今考えたことがわかったモカは恐ろしいがそれどころではない。

「……うう、私もう無理かも……泣きそう……」

「ひーちゃん泣かないでー。大丈夫だよー、よしよしー」

「ちよモカ。これあたしだから」

「あれー?ごめんー」

これだけ暗ければ誰が誰なんて分かることなんてない。………これだけ暗いのなら、適当に手とか動かしたら、誰かの胸にフツと当たるんじゃない。

「お兄ちゃん、また変なこと考えてる〜?」

「め、滅相もございません!!」

なぜわかる!?うちの妹天才なのでは?

「うう……みんなごめんね。あたしのせいで」

「ちよ、いきなり何言い出すんだ?」

「まるでこれが最後みたいな言い方するのやめてよ」

「た、だつてえ」

ひまりちゃんが諦めモードに入ろうとした瞬間、ヒュー、と風の音が聞こえてきた。

「風の音……て事はどこかに開いている窓かドアがあるって事じゃない?行ってみよう」

「蘭、天才かよ」

「風が吹いてきたのつてあつちの方だよ。行こう!」

「あ、あつちつてどつち?」

「こつち!みんな、私につかまってついてきて!」

こんな時でも頼りになるつぐちゃん。暗闇の中手探りでつぐちゃんを探し出して服を掴む。つぐちゃんはそのまま歩き出した。

「風が吹いてきたのはこつちの方だったと思うんだけど」

『こつちこつちく。こつちだよー』

「……う?こつち?」

「わあつ、つぐ。急に動かないですよ」

再びつぐちゃんの後について行く。ていうか、今の声誰だ?

「……あれ、明かりが」

「急になおったね。接触が悪かったのかな？」

明かりが戻り周りが明るくなった。非常口の方向はどうやらあっていたらしく、俺たちの立っているすぐ近くにその扉があった。

「よし。こんな所からさっさと出よう……つてあれ？」

「もしかして……鍵？」

「外側からかけられてるな。こっちからじゃどうにも」

「詰んだ……今度こそもうダメだ……」

「いや、詰んでない詰んでない。諦めるの早いぞモカ」

例えば、窓ガラスを割るとか。扉に体当たりするとか。他にも試せる事はある……はず。多分。

「すいませーん！誰かいませんかー！！開けてくださーい！！」

「誰かー！助けてくれー！！」

つぐちゃんとはが外に誰かいないか呼びかける。その声に応じてくれたのか、扉の外からガチャという音が聞こえ扉が開いた。

「助かったあ……」

「すいません。開けていただいて、ありがとうございます！」

「外……誰もいないよ？」

「えっ？」

つぐちゃんが外を開けた人にお礼を言ったが、外には誰も立っていないなかった。

「じゃあつ、誰が開けてくれたの？」

「ホントにもう……勘弁してよ」

「………思い出した。七不思議の7つ目」

「モカ？」

なぜ今このタイミングで思い出したのか。

「夜な夜な、生徒の幽霊がウロついてるんだって。遊び相手を探して、いろんないたずらをしてくるっていう」

「きやつ、風が……」

「今、誰かが通り過ぎたような感じがしなかった？」

「」「」「………」「」「」

え、じゃあ何。もしかして生徒の幽霊はずっと俺たちについてきたって事なのか？でもそう考えると階段にしても、ピアノにしても、鏡にしても納得がいくような。

「二」うわあああああ!!」

「あ、おい、みんな!」

「行っちゃった」

「…………俺たちも帰るか」

「そーだね」

一応体育館の非常口の方に一礼してから俺とモカも先を走った4人を追いかけた。

「…………なあ、モカ」

「ねえ、お兄ちゃん」

「二今日一緒に寝るか(寝よ)」

ないと思うが、万が一幽霊に取り憑かれてるか心配になり、その日から3日間モカと一緒に夜を過ごしたのはまた別の話。

第23話 落ち込むモカとその理由

Afterglowの練習日。蘭は他の4人より一足先にスタジオに入ってギターのチューニングを行っていた。他のみんなが来た後すぐに始めれるようにするための。

「……………うん、こんなものかな」

「らん……………」

「モカ？それにひまりも」

チューニングが完了した後すぐにモカとひまりが入って来る。だが、自分の名を呼ぶ声に少し元気がないことに気づいた蘭はモカに近寄った。

「モカ、どうしたの？なんか元気ないみたいだけど」

蘭の思ったことは的中していた。モカに近寄り顔を覗き込むと、モカは涙目で俯いていた。横でひまりも浮かない顔をしている。

「ちよつと2人とも。本当にどうしたの？」

「……………らんー!!」

心配してくれる蘭の心に耐え切れなかったのか、モカは蘭がギターを持っているにもかかわらず蘭に抱きついた。

「ちよ、モカ!？」

「おいーっす。ってどうした？」

「モカちゃんどうしたの!?大丈夫？」

「巴……………つぐ……………大変なの」

モカとひまりに続いて巴とつぐみが入って来て、今まで浮かない顔をしていたひまりが口を開いた。

「大変って何がだ？」

「もしかして今のモカちゃんに関係あるの？」

「うん。実は……………ラテさんが」

「ラテがどうかしたのか？」

「お兄ちゃんが……………あたしの知らない女の子とデートしてた」

「……………へっ?」

あまりに衝撃な言葉に3人とも言葉を失うほど驚いてしまった。

「はいモカちゃん。これお水」

「……ありがとう」

パニックっているモカを宥め、つぐみがモカのために水を買に行つて戻ってきて5人が揃ったところで本題に移ることに。

「それで、どういう事？あの妹バカで友達があたし達しかいないラテがデートしてたって」

「私も未だに信じられないもん。でもここに来る途中で見ちゃったの。ラテさんと女の人が手繋いで楽しそうに歩いてるところ」

「その人はモカちゃんもひまりちゃんも知らない人だったの？」

コクリ、モカとひまりが無言で頷く。

「いやいや単なる見間違いだろ。確かにラテの仲のいいやつは女の子が多いけど、あの妹バカに彼女なんて」

「うん。ありえない」

「私もないと思うな。モカちゃん、その人の顔とか見てないの？」

「……後ろ姿だけだよー」

「ならなおさらわからないだろ。顔見たならともかく後ろ姿だけなんて」

「でもでも、私だけならともかくモカだよ？ラテさんがモカの事を好きだと思ってるのと同じくらい好きなラテさんの後ろ姿をモカが見間違うと思う？」

「それは……確かにそうかもしれないけど」

ひまりの言うことは最もだった。ラテがモカを思う気持ちと同等、もしくはそれ以上の気があるモカが後ろ姿を見間違うのはほぼゼロパーセントに近い。

「ラテに直接聞いてみればいいじゃん」

「私もそう思ったんだけど……モカが」

「もし本当にあの人がお兄ちゃんの彼女だったら、あたしどうしたらいいかわからないから」

再び涙を浮かべるモカ。そんなモカにつぐみはハンカチを渡して、モカとひまりを除く3人で輪になり集まった。

「2人ともどう思う？」

「アタシはラテに彼女なんていないと思ってるぞ。というか手繋いでるのだけがデートとは限らないだろ？」

「私もラテ君がモカちゃんを放って彼女作るなんてそれこそないと思うな。でも2人が実際に見たって言ってるし」

「きつとあれだろ？ラテに似てるやつが手繋いでるのを勘違いして気が動転したんじゃないか？」

「でも、モカがラテの事見間違えるわけないのはあたしも賛成。モカもラテのこと大好きだし」

「それはそうだけど……じゃあどうするよ。いつそのこと、2人には内緒でラテをここに呼び出すか？」

「で、でももしそれで本当にラテ君が彼女作ってたらモカちゃんが大変なことになるよ」

ラテがいないと生活ができないと言っているモカだ。下手をすれば1週間くらい寝込んでしまう可能性だってありえてしまう。

「確かに。それはそれでやばいね。そろそろ次のライブも近いし」
「だな。今日はライブに向けてきっちり練習したいけど、モカがああ調子だと……」

この練習を逃せば次の練習がライブ前の最後の練習となる5人。モカをこのままにしておけば練習すらままならない。蘭達にとってはそのだけは避けたい事である。

「と、とりあえずモカちゃんとひまりちゃんにその人の外見を聞いてみるのはどう？後ろ姿だけでも髪型とかはわかるかもしれないし」

「お、つく。それいいな」

「うん。聞いてみよう」

3人はうん、と頷きあって再びモカとひまりに近寄った。

「モカちゃん。それにひまりちゃんも。その人の外見とか覚えてないかな？なんでもいいの。髪の色とか髪型とか」

「……あたしは覚えてない」

「私は髪の色なら。確か水色だったと思う」

「髪の色は水色……そんな珍しい人がラテと手を繋いで歩いてたのか？」

「うん。私も最初特徴的な髪の色してるなーって思ったもん」

「……それ、ひまりが言うの？」

「……蘭ちゃんもあまり人のこと言えないような？」

薄ピンク色のような髪をしているひまりも、赤色のメッシュを入れて
いる蘭もつぐみにとっては特徴的であると言える。つぐみの指摘
は最もだった。

「でも水色の髪で女の子……ねえひまりちゃん。その人は本当にラ
テ君と一緒に手を繋いでたの？」

「そうだよ。私もモカも見ただから間違いないよっ！」

「うーん……水色の髪の人がラテ君と一緒に？」

「どうしたつぐ。もしかして何か心当たりでもあるのか？」

「心当たりっていうか……ラテ君がもしその人と手繋いで歩いていた
としたら、そうなるってても不思議ではない人が1人いる気がするの」
「それって誰なの？」

「……ううん、やっぱり少し自信ないし、それにモカちゃんとひまり
ちゃんは知らない人って言ってるし多分気のせいだと思う」

「なんだそれ？」

「気にしないで。きっと勘違いだから」

つぐみの言葉に疑問を浮かべる蘭と巴だったが、まあいいや、と
言った巴が本題に戻した。

「とりあえずこれからどうする？」

「どうするって言われても……」

「あたし達にできる事といえば、ラテをここに呼び出して理由を聞く
くらいしかないと思う」

「だよな。でもそれは一種の賭けになるぞ」

モカ達の言うことが真実でないならば練習をする事ができる。だが、真実ならばライブすら危うい状態になってしまう。

「そ、そうだ！何も呼び出さなくても電話で聞けばいいんじゃないかな？そしたら2人には気づかれないうまま確認する事ができるし」

「お、それいいかもな」

「うん、そうしよう」

つぐみの提案にうん、と頷いた蘭がラテの携帯に連絡しようとした。その時

「おーっす。もうすぐライブ近いって聞いたから差し入れ持ってきてやったぞー。……ってなんだこの状況？」

「……………」

（（本人来ちゃった!!?!））

モカ達 After glow のライブが近いというので差し入れを持って来た俺だったか、なんで誰も練習してないんだ？

「どうするの？本人来ちゃったよ！」

「どうするって言われても……と、とりあえずなんか話そう」

「なんか話しても解決なんてしないと思う」

何3人でこそこそ話してるんだ？俺にも聞こえるくらいの声で話してほしい。

「お兄ちゃん……………」

「モカ…………ってどうした!?そんな泣きそうな顔して」

モカは瞼が腫れて、なんか泣いた後みたいになってるし。てか、多分泣いたんだなこれ。

「……………ラテさん!!」

「は、はい!!」

「ちよつとそこに正座して下さい!!」

「な、なんで?」

「いいから!!」

「は、はい!」

いきなり立ち上がったひまりちゃんの勢いに気圧され俺は素直にその場に正座をする。

「ラテさん!」

「なんででしょうか?」

「ここに来る前、何してましたか!」

「ここに来る前? お前らへの差し入れを持って来るために買い物して来たただけだぞ?」

「…………それは1人ですか?」

「いや、俺ともう1人いたけど?」

「…………その人は、女の子ですか?」

「そうだけど」

返事をした瞬間、モカとひまりちゃんがまるでこの世が終わったような表情をしていた。一体なんの話なんだ?なんでひまりちゃんは俺が女の子と買い物をしたのを知ってるんだ?

「…………ラテ」

「蘭、モカもひまりちゃんもどうしたんだ?なんか様子おかしいけど」

「ラテとその人はどういう関係なの?」

「蘭? 一体なんの話だ?」

「いいから答えて」

「訳わかんねえ。その人との関係? たまたまショッピングモールで知り合つて、そこからだんだん話すようになって、今はカフェとかも一緒に行く関係だけど?」

「カフェ…………と、巴、どうしよう。本当にあの妹バカのラテに?」

「い、いやまだ決まった訳じゃないだろ。カフェとかも行くのだったらアタシ達もそうだろ?」

「確かに……」

みんなどうしたんだ？なんでそんなに俺とその人との関係を知りたがってるんだろう。

「え、えっとラテ君。違ってたらごめんんだけど」

「つぐちゃん？」

つぐちゃんが顔を赤くしてモジモジしながら近寄ってくる。

「その人ってラテ君の彼女？」

「はあ!？」

「どうなの？」

「んなわけないだろ。俺がモカを放って彼女なんて作るわけないだろ。そんな事地球が爆発してもありえない話だ」

「そ、そっか……うん、そうだよね」

なんだそういうことか。やっとモカの頬に涙の跡がある理由がわかった。

「要するにだ、モカかひまりちゃんかが俺とその人と歩いているのを見て、俺の彼女だって勘違いしたわけなんだな」

「う、うん。そうみたい」

「はあ……俺がモカを放って彼女なんて作るわけないってちよつと考えればわかるのになんで……」

「だ、だってラテさん！その人と手繋いで歩いてたじゃないですか！」

「そこまで見てたのか……あれはその人が放って置いたら勝手に迷子になるから離れないように配慮してただけだよー」

「嘘です！本当はその人と手繋いで歩きたかつたんでしょ！」

「んなことするか！」

なんで信じてもらえないのか。本当にそんな事が目の前で1度あったからそうしているだけなのに。まあ確かにあの時はショッピングモールだったからっていうのもあったかもしれないけど。

「ね、ねえラテ君？」

「ん？」

「もしかして……その人って松原花音さん、って人じゃない？」

「へっ？なんでつぐちゃんが松原さんの事知ってるんだ？」

「えっ?」

「はっ?」

「へっ?」

「やっぱり……」

「1ヶ月前くらいかな?モカのバイト終わるまでシヨツピングモールでぶらぶらしてたら、ちょうど迷子になっていた松原さんを見つけて声かけて。それからだぞ、俺が松原さんと仲良くなったのは」

「……………」

ポカーンと口を開けて惚ける蘭と巴とひまりちゃんを置いて俺は座り込んでいるモカに近寄った。

「モカ、心配しなくてもお前を放って俺は彼女なんて作らないから安心していいぞ」

「……ほんとー?」

「嘘なんてつくかよ。ごめんな心配かけて。でも、モカももうちょっと俺のことを信頼してくれても良かったと思うんだけどな」

まさかモカにまで疑われるとはちよつとだけシヨツクだった。俺がどれだけモカに愛情を注いでいると思ってるのか。

「お兄ちゃん」

「ん?」

「今日帰りにパン買って帰ってもいい?」

「もちろん」

「家に帰ったら好きだけ甘えてもいい?」

「いいぞ」

「今日と一緒に寝てもいい?」

「全然構わないぞ」

「えへへ」

モカはそれだけ聞くと気が済んだのか、俺の胸に飛び込んできた。そんなモカをやさしく抱きとめ俺も優しく抱きしめてあげる。

「お兄ちゃん、大好きだよ」

「俺もモカの事大好きだからな」

「……………はあ」

「結局勘違いだったってわけか」

「でも良かった。ラテ君に彼女がいなくて」

「うんうん！これにて一件落着！さあみんな練習しよう！」

「ちよつと待った」

ひまりちゃんがケースからベースを取り出した瞬間、ひまりちゃんの両肩に蘭と巴の手が置かれた。

「なあひまり？この失った時間はどうすればいい？」

「モカが勘違いするのは仕方ないにしても、ひまりは花音さんのこと知ってるよね？」

「え、えーつと……あ、ほら私もラテさんの事大好きだからテンパっちゃって」

「ひまり？」

「だ、だってー!!」

「蘭ちゃん巴ちゃん。ひまりちゃんもわざとじゃないんだし許してあげようよ」

「はあ……まあ過ぎたことを言っても仕方ないか」

「だね。今から練習頑張ろう」

「そ、そうだよ！まだ時間はある！今からやれば問題なし！」

「ひまりが言うな」

「ご、ごめんなさい」

息ぴったしな2人に責められながらも急いでベースの準備にとりかかるひまりちゃん。

「あ、そういうえば差し入れて持ってきたのケーキだから。結構いいとこのだから早く食べないともつたいないぞ！」

「ケーキ!?ラテさん私今食べたいです!!」

「ひまり？」

「あう……でも早く食べないと」

「そうだね。味落ちちゃったらもつたいないし。練習をするのは食べ終わってからにしよう」

「つぐ神様」

「はあ……わかった。ラテ、あたしコーヒー」

「アタシは紅茶な」

「そう言うと思つて買つてあるよ。ほら、好きな飲め」

「ラテさんありがとう!!」

「ごめんねラテ君。いただきます」

「お兄ちゃん、食べさせて〜」

買つてきたケーキを取り出して、仲良く食べ始める5人。その後ケーキを食べ終えたみんなはライブに向けた練習をより一層頑張つていた。

第24話 ラテの苦手なものや夢に出るモカ

「ラテ君、ちょっと聞きたいことがあるんだけどいいかな？」

「ん？どうしたいいきなり。今の俺とモカの姿ならいつもの事だから気にしないでいいぞ」

「それはちよつとどうでもいいかな？」

「確かにどうでもいい」

今の俺とモカの姿といえばいつものように俺の股の間にモカが座って、いつものようにパンをもぐもぐと食べているモカをいつものように俺がそんなモカの頭をやさしく撫で続けている。つぐちゃんやとひまりちゃんがそれをどうでもいいと言うのは少し辛い所もあるが話を進める事に。

「で、聞きたいことって？」

「あ、うん。ラテ君って怖いものって何かある？」

「本当に唐突だな。怖いものか……」

「お兄ちゃんは熱いのが苦手だよね」

「それは苦手ってだけで別に怖くはないな。モカだって寒いのは苦手だけど怖くはないだろ？」

「そうだね。寒いのは辛いものの次にダメだけど」

「それとおなじだ。てか、なんでそんな話を？」

「えつと、この前みんな夜に学校に入ったでしょ。その時ラテ君もモカちゃんも全然怖そうにしてなかったから」

「ラテさんは怖いものあるのかな、って少し気になったんです」

「ああ、そういう事」

確かにあの時俺やモカは楽しく学校を歩いていた。モカと手を繋いでまるで肝試しをするかのように楽しむことができた。

「俺の怖いもの……怖いもの……なんだろう？」

「モカちゃんに怒られる、とかは？」

「あー、それは確かに少し怖いかも。モカはなんていうか圧力が凄いからな。ちよつと気圧される感じはある」

「あたしお兄ちゃんに怒ったことなんて一度もないよ」

「……………みんなで買い物行った時とか、夏祭りのあれはなんだったんだよ」

「あれは怒ってたんじゃなくてお説教だもん。お兄ちゃんがうわきするのが悪いんだよー」

「それもそうか。じゃあ怒られたことないんだな」

「それで解決するんだ」

俺が納得した瞬間、つぐちゃんが思わず苦笑いを浮かべた。でも今までののが全部お説教だと考えるとモカの怒ってる姿は想像できない。「じゃあ、モカに口聞いてもらえなくなる、とかは？」

「死んでも嫌だけど怖くはない。てかそれは俺が自殺するまでである」

「モカちゃんがお兄ちゃんの事を無視するなんてあり得ないからだいじょーぶだよ」

「モカちゃんに彼氏ができる！とかは？」

「怖くない。むしろ俺が修羅になってその彼氏を殺しにかかる可能性がある」

「というか、なんでさつきからあたしとお兄ちゃんが関係する事になってるの？」

「それが1番ラテさんに効果ありそうだから？」

「なんで疑問系なんだよ」

「と、とりあえずモカちゃんから1回離れてみよう」

俺も含めた4人でうーん、と頭を抱えて考えてみる。俺の怖いもの……

「雷！」

「それはつぐちゃんでしょ？」

「台風！」

「学校休めるからいいな」

「森」

「……………どゆこと？」

「キツク！」

「別に怖くないな。痛いだけ」

「熊」

「それどんなシチュエーション？」

「マントヒヒ！」

「だからどんなシチュエーション？」

「豹！」

「いい加減生き物シリーズから離れろ」

「宇田川巴く」

「巴に失礼だから謝ってこい」

「煙突！」

「サンタさん？ハマったことないから知らん」

「ツンデレ！」

「べ、別にこれあんたのために作ってきたわけじゃないんだからね！

……つてなに言わせんだよ」

「レーザービームく」

「食らったことないから知らん！」

「虫！」

「嫌い！でも怖くない。種類によるかもだけど」

「週刊誌！」

「俺は基本スポーツものしか読まんぞ」

「ししやもく」

「好きだ」

「モカ！」

「愛してる」

「怪談!!」

「怖くない。むしろ大好物だ」

ふたたびうーん、と頭を抱える俺たち。

「これだけ言ってもないなんて、やっぱり兄妹だね」

「確かに。モカちゃんもラテ君も怖いものなんて無いんだね」

「そりやそうだよー。あたし達に怖いものなんてなに一つないんだからく」

「いや、候補にあげてたものの半分以上おかしいだろ。てか、なんでみんな普通にしりとりしてんの？しかも最後のいい感じに終わったし」

モカの宇田川巴には少々無理を感じたがまあそこは突っ込まなくてもいいだろう。

「……………あ、虫で思い出したけど怖いものあるな」

「え、なにになに!?!」

「ラテ君教えて!」

「お兄ちゃんそれってー?」

むしろこいつを怖くないと思わない人間は少ないだろう。女性ならほとんどの人間が怖いはず。いつの間にか現れる、音もなく姿を現わすあいつの存在。

「G」

「……………あー、それは確かに」

「私も無理かも」

「あたしも〜」

「だろ?」

結果、みんなGは怖いと思っていた。

「らっくん、起きて〜」

「ん……………」

「起きろー」

「んん……………モカ?」

「そーだよー。らっくんの愛しのモカちゃんだよ〜」

聞き覚えのある声に目を覚ました俺だったが、数秒後ある違和感に気づいた。

「なあ、モカ?」

「なーに?」

「その、らっくんって一体なんだ?」

いつも俺の事をお兄ちゃんと呼んでくれるモカがらつくんと呼んでいる強烈な違和感。

「えー、らつくくんがそう呼んでほしいって言うからモカちゃんはそう言ってるのに〜」

「いや、俺そんなこと言った事ないんだけど。寧ろモカにはいつでもお兄ちゃんって呼んでほしい」

「そんな兄妹みたいな呼び方、あたししたことないよ〜?」
「……………えっ?」

おかしい。なんだこれ?

「なあ、モカ。ひとつ聞けど。お前は俺ってどんな関係?」

「えー、らつくくんそんな事を忘れちゃうなんて…………モカちゃんショックで寝込んでないそう…………よよよ〜」

「いや、忘れたわけじゃないんだけど。少し確認しておきたいんだ」
「えっとねー。らつくくとモカちゃんは恋人同士だよ〜」

「…………恋人。俺とモカが」

「そー。らつくくん、もしかしてまだ寝ぼけてるのー?」

「いや、寝ぼけてない。大丈夫だ」

要するにあれだ。これはきつと夢なんだな。モカが俺の恋人っていうそういう夢なんだ。よし、それなら夢に乗っかるとしよう。

「ごめんモカ。心配かけちゃって」

「いいよー。でも、その代わりにぎゅってしてほしいかな〜」

「ああ、もちろん」

両手を広げて抱きしめてほしいアピールをするモカを俺は優しく抱きしめてあげる。

「えへへー、らつくくんあったかいね〜」

「モカもだろ。あったかくて心地いい。このまま寝れそう」

いつもとすることは変わらないはずなのにシチュエーションが違うだけでこんなにも違うんだ。

「寝ちゃダメだよー」

「わかってるわかってる」

「もし寝ちゃったらモカちゃんのきょーれつなビンタが炸裂しちゃう

よー」

「冗談だ。本当に」

モカのビンタなんてくらいいたくない。死んでもくらいいたくない。てかくらったら死ぬ。精神的に。

「ねえねえ、らっくん」

「なんだ？」

不意に目を閉じて顔を近づけてくるモカ。これはもしかして、妹に
なら絶対にできないが彼女である今ならできてしまう行為なのでは
ないのか。よし、ならばその行為に答えよう。俺も目を閉じて次に起
こる瞬間に備えて。

「つてところで目が覚めた」

「ラテ、キモい。もう今までの中で1番キモい」

そんな夢を見た日の昼下がり。みんなとお茶している時に夢の話
をすると、蘭がドン引きしていた。そこまで言うのか。

「てか、なんでそんなキモい話をアタシ達にするんだ？」

「だよねー。そんなキモい話」

蘭だけではなく巴やひまりちゃんまで。もう帰ろうかな。

「み、みんな言い過ぎだよ。夢なんだからそういう事あるんだろうし。
……あ、ほら、みんなもラテ君が彼氏だった、みたいな夢見たことあ
るんじゃないの？」

「ない」

「ないな」

「ないっ！」

「あ、あれ？みんなないの？」

「えっ？」

「ん？」

「へっ？」

なにその言い方。もしかしてつぐちゃんは俺が彼氏だった夢を見たことあるのか？

「え、えっと……そ、その話は置いてこう!!」

「いや置いとけない!その話全然置いとけないよつぐ!」

墓穴を掘るといふのはまさにこのことだろう。俺をカバーするつもりで言ったことがまさか自爆するような事になるとは。

「ねえねえつぐ!それどんな内容だったの？」

「ち、違うの!これは昔の話だしもう覚えてない事だから。それに私も夢を見たってだけの話だから」

「えー、気になる。本当に覚えてないの？」

「え、えっと……ラテ君と手を繋いでたような気がする」

「それでそれで？」

「……は、はい!この話はおしまい!」

あまり人の夢に話をつ突つ込むのも悪い話だろう。本音を言うと俺も続きを聞きたかったのだが。

「そ、それよりモカちゃんは?ラテ君が彼氏だったら、とか。そういう夢見た事ないの？」

「んー？」

今まで俺の膝の上で一人一言も喋らずにパンを食べていたモカが口を開いた。

「見たことないな」

「えー、面白くないー」

「いや、モカの事だから覚えてないだけかも」

「あー、それはあるかも」

モカを普段からよく寝る子だしその考えは否定できそうにない。でも、モカと俺の話聞いて見たかったな。

「まあ所詮夢だし、気にする事ないな」

「確かに。ラテさんがモカと付き合うなんてあるわけないんだし」

「で、でも正夢って言葉があるんだし、もしかしたら……」

「いや、ないでしょ。この2人は血が繋がってる兄妹なんだから」
「そもそも俺はモカとそういう事をするつもりはない。あくまでモカを妹ととして可愛がってるんだから」

「いや、そんな体勢でモカの事を可愛がってるラテさんが行っても説得力皆無です」

うんうん、とひまりちゃんの言葉にみんなが頷く。

「これはいつもの体勢だ。気にする事はない」

「いや気にします!」

「でもあたしはお兄ちゃんとキスしても気にしないよ」

「だから気にする……………ってええ!」

モカのふとした言葉にひまりちゃんが声を上げて驚いた。俺も声を出したわけじゃないが驚いている。

「も、モカ!何言ってるの!」

「だってお兄ちゃんだよ。今更じゃない?」

「い、いや、でも…………」

そういえば夏休み入る前のモカがそんなことになっても気にしないみたいな話をしてたな。

「で、でも兄妹でそんな……………ダメだよ、うん。絶対ダメ!」

「それを決めるのはあたしとお兄ちゃんだよ」

頼んでいたケーキを食べ終えたモカは器用に身体を反転させて俺と向かい合うように座る。

「お兄ちゃんはあたしとキスするのはいやー?」

「そんな事いきなり聞かれても…………」

正直に答えるなら全然問題ない。むしろしてみたい。だけど……………

「……じーっ」

周りの視線が痛いほど俺に集まっている。それ以前に俺とモカは兄妹だ。夢のようにモカが俺の彼女とか言うなら問題は全くないんだが……………

「……………正直に言うなら俺もしてみたい」

「ラテ君!」

「ほらー」

「でも、俺はお前の兄貴だから。そういう風な事をするつもりは全くない。というかしたくないんだよ」

モカの頭を優しく撫でながら俺は言った。

「だってお前は俺の世界で1番大切な妹だから」

うん。言いたいことは言えた。あとはモカがどういう反応をしてくれるか。

「お兄ちゃん?」

「ん?」

「あたしはキスしたいかって聞いただけで、別に今するつもりは全くなかったよー」

「えっ?」

……考えてみれば確かにそうかもしれない。

「もー、お兄ちゃんはやとちりだな」

「いや、今の流れ的にそういうもんなんかと思って……いや、でもそうだな。ごめんごめん」

「もー、仕方がないな」

えへへー、と笑いながらさらに身を寄せてくるモカ。よかった。みんながドン引きするような状況にならなくて本当に。

「お兄ちゃん?」

「んー?」

「大好きだよ」

「ああ。俺も大好きだ」

((その体制であんな事言っても全く説得力ない))

この時、みんなが心の中でドン引きしていたのは俺は全く知らなかった。

第25話 弁当を忘れたモカと気持ちよさそうに眠る蘭

「いやー、モカが学校行ってるのに家にいるってなんか変な感じするな」

今日は俺の学校が創立記念日で休みなので、モカは迎えにきた巴と学校へ向かった。現在1人家で暇している俺は部屋の掃除をしている。

「今日はバイトがあるわけでもないし、掃除終わったらどうしようか……」

今日やる事を考えていると、机に置いてある携帯から電話の音が鳴った。

「つと、誰だこんな朝早くに」

携帯画面を開くとそこにはモカ、という名前が。

「はい、もしもし?」

『あ、お兄ちゃん? あたしあたし、あたしだよ』

「あたしあたし詐欺か?」

『もー、わかっているくせにく。お兄ちゃんが大好きなモカちゃんだよー』

「冗談だよ。で、どうした? 俺の大好きなモカ?」

『えっとねー。今日ひまつてるー?』

「そうだな。モカがいないから現在部屋を掃除してるくらいにはひまつてるぞー」

てかひまつてるってなんだ? ノリで返したけど、そんな言葉流行ってるなんて聞いた事ないぞ?」

『あのねー、今日モカちゃんはお弁当を置いてきてしまったのだよ』
「弁当?」

俺がモカが起きる前に作って置いた弁当の事だろう。下に降りて台所を確認してみると確かに弁当が置いたままになっていた。

「確かに忘れてるな」

『でしょー？だからお兄ちゃん。届けてくれないー？』

「は？届けるって？」

『モカちゃんの学校にー』

「まあいいけど。今から行けばいいのか？」

『うん。だいじょーぶだよー』

「わかった。すぐ届けてやるよ」

『よろしくね〜』

それだけ言うとモカは電話を切った。おそらく授業の始まりが近いんだろう。俺は最低限の準備をした後、弁当を持ってモカがいる羽丘女子学園へと向かった。

「さて、学園前にきたのはいいけど、この先どうしよう」

忘れていた。いや、忘れていたというか、抜けていたというか。よく考えたらモカがいる学校は女子校である。共学ならば、普通に入つて事務の人に届けばいいのだが、そうはいかない。女子校に、それも授業中のこんな時間に入ってしまったては絶対に変質者扱いを受けてしまうだろう。

「さて、どうしたものか」

授業中であるため電話もかけることができない。誰か学園に通う知り合いでも通ってくれば弁当を渡しておく事が出来るんだけど

……

「あれ、ラテじゃん。何してんの？」

「ん？」

名前を呼ばれて振り返ると、何故かりサの姿が。

「リサ。お前こそ何してんだ？」

「アタシはちよつとね。今日寝坊しちゃってさー。そういうラテは

？」

「ああ。俺はモカに弁当を届けに」

最後まで言おうとした瞬間、またもやポケットに入れている携帯から電話の音が。

「悪い、ちよつと電話出るな」

「うん。別にいいけど」

携帯電話を取り出して名前を確認すると今度は蘭の名前が。

「はいもしもし？」

『うちの校門の前でなにしてるの、ラテ？』

「なにしてるのはこっちのセリフだよ。お前今授業中だろ？何してるだ？」

『次の新曲の歌詞考えてる』

「授業は？」

『……………自主休講』

「サボんなよ!!」

『怒鳴らないで。耳に響く』

「全く。で、今どこにいるんだ？」

『屋上』

パツと屋上の方を見上げてみると確かに蘭の姿が。俺が見たのに気づいたのか、手を小さく振っている。

「まあいい。それよりちようどよかった。今モカの弁当を届けにきたんだけど。どうしたらいい？」

『モカの？てか、ラテこそ学校は？』

「俺は今日休みなんだよ」

『サボっちゃダメでしょ』

「俺は創立記念日で休みだ。サボりじゃねえ」

『ふーん。まあ、どうでもいいけど』

「おい」

お前から聞いてきたんだろうが。

『で、モカの弁当だっけ？それならりささんと一緒に学園の事務の方行って見たら？多分学園を徘徊できる許可証みたいなものもらえると

思うから』

「本当だろうか？学園内に入った瞬間、警備員のおじさんに捕まったりしないだろうか」

『なんの心配してんの？そんな事あるわけないじゃん』

「ならない」

『あ、無事に学園内入れたら屋上まで来て』

「はあ？なんでそんな事」

『1人で暇なの。じゃあまた後で』

「あ、おい！……切りやがった」

再度屋上を見上げてみると蘭の姿が見えなくなった。てかあいつ何堂々とサボってるんだ？

「ねえ、ラテ。誰からだったの？」

「蘭だよ。あいつ今授業サボって屋上にいるんだと」

「あははっ、何それ。なんか蘭っぽいね」

「笑い事じゃねえだろ。っとそうだった。リサに頼みがあるんだけど」

俺はモカに弁当を届けるように言われたことを伝えてリサに協力してほしいと話した。

「うん。別にいいよー。どうせアタシも遅刻理由書みたいなの貰いに事務行かないといけないから」

「ならよかった。1人で入ってなったら心細くてさ」

「ダイジョーブだよ。てか、もしかしてラテって意外とビビリ？」

「うるさい。ほら、さっさと入ろうぜ」

「はいはい。それじゃあ行こっか」

先に入るリサについていくように学園の中へと入り、事務の方へ向かう俺たち。

「ねえ、ラテってこの後ひまってる？」

「そうだな。別に用事があるわけじゃないし、ひまってるといえばひまってるな」

てかまたひまってる出て来たよ。なんだ？これもしかして流行ってるのか？でも、ひまってるって聞くとなんかつづってるのひまり

ちゃんバージョンみたいだな。

「ホントに？じゃあ今日お昼ごはん一緒に食べようよ」

「はあ!？」

「え、なに、そんなに驚く事？」

「いや、驚くだろ。大体俺昼飯持って来てねえし。それに今の時間帯は2限目くらいだろ？後2限何しろと」

「ダイジョーブ。お昼ご飯ならアタシが購買で何か買って来てあげるからー!」

「……………後者の質問は？」

「それは……………日向ぼっこ？」

今9月初めだぞ。俺が太陽の陽で焼け死ぬわ。

「……………まあいい。どうせ蘭に屋上来るように呼ばれてるし。暇は潰せるだろ」

「ならよかったー。じゃあ約束だよ？あ、なんだったらひまり達やあこも連れて来てあげよっか？」

そうか。よく考えたらひまりちゃんやあこちゃんもこの学園の生徒だったか。

「そうだな。そうしてくれる方が俺も楽かも」

「オツケー。じゃあまたお昼に集合って事で。あ、ここが事務だよ」
リサが事務の職員を呼び出し、リサは遅刻理由書を。俺は事情を説明

したら蘭の言う通り許可証をもらうことができた。

「これで大丈夫だね。じゃあアタシは教室に行つて来るから」

「あ、ちよつと待った。屋上に行くにはどの階段を登ればまっすぐつく？」

「あ、そうだったね。屋上はこの階段を登っていけば着くよ」

「サンキュー。じゃあまた後でな」

「うん。バイバイ」

リサと手を振り別れ、俺はなるべく目立たないように階段を登り屋上へと向かう。流石に授業中ということもあり、廊下を徘徊する先生は全くいなかった。

「着いた」

屋上の扉を開けると、スウと風が吹き抜けて行く。大きな音を立てないように屋上のドアを閉め辺りを見渡す。

「あれ？蘭ー。いないのかー？」

辺りを見渡しても蘭の姿が見えない。まさか先生にバレて授業に戻ったのか？いや、そんな事はないと思うんだけど。

「すう……すう……すう……」

「ん？」

なんか寝息のような音が聞こえる。音のする方へ歩いてみると、案の定だった。

「蘭。なんでこんなところで」

「すう……すう……すう……」

夏服姿の蘭が壁に背を預けて気持ちよさそうに寝ている。とりあえず寝顔が可愛いから写真に収めるとしよう。後でモカと一緒に共有しよう。

「さて。どうしたもんか」

蘭に来てくれと言われたから来たのに、当の本人は気持ちよさそうに寝ているときた。

「とりあえず隣に座るか」

隣に腰掛けて蘭をじつと見る。本当に気持ちよさそうに寝ている。試しに頭を撫でて見ると、緩んでいる顔がさらに緩みきった。そんなに嬉しかったのだろうか。本人が気づいたら100%殺されるだろうが。

「ん？」

蘭の膝元に何かノートが置いてある。

「……歌詞ノート」

おそらくこれに今まで作った曲の歌詞が書き込んであるのだろう。作詞は蘭っていうのはモカから聞いていたが、相当頑張ってるんだな。

「大切なものなのに膝元に置くなよな。もし風が吹いて飛んで行ったらどうするつもりなんだよ」

余計なお節介かもしれないが風が吹いて飛んでしまったらヤバイ

からひとまず俺のカバンを重しにして風で飛ばないようにする。

「にしてもここ、気持ちいいな。昼になったら太陽が傾いて陽が当たるんだらうけど。今の時間は日陰になっててちょうどいい」

「……………らて」

「ん？」

名前を呼ばれたので起きたのかと思ったら、俺の方に寄りかかって来ていた。え、なに？これはたから見たらただのカップルなんじゃないのか？

「すう…………すう…………」

「これ蘭が起きたらキレルんだらうな。でも、起こすのも悪いし」

何よりこうやって蘭がくっついてくれるのが全然悪い気がしない。むしろ良い。だって蘭可愛いし。こんな風に無防備な姿はあんまり見せてくれないし。なんていうか新鮮。

「読みかけの小説も持って来たし、しばらくはこうして寝かせてやるか」

俺は時間を潰すために持って来た小説を鞆の中から取り出して、そのまま読み始めた。蘭が俺に寄りかかりながら俺はそれを気にせず、むしろ受け入れながらも本を読む。うん。これ完全にカップルだな。

「面白かった。続編が早く出てほしいもんだ」

時間を忘れて小説を読みながらも、眠っている蘭が逆方向に倒れないうように配慮しながら過ごしていると、いつの間にか日陰だったこの場所は日陰ではなくなってしまうていた。

「さて、今何時だ？」

蘭を起こさないようにしてそつと携帯を取り出して時間を確認して見ると、時計の針は12時過ぎを指していた。という事はそろそろ昼休みの時間ではないだろうか。

「てか、そう考えると蘭は2、3、4って授業をサボったことになるのか。まあ起こさなかつた俺も同罪だろうけど」

隣を見ると変わらず寝息を立てて眠る蘭。どんだけ疲れてるんだよこいつ。絶対今日の夜寝れないな。でもそろそろ起こしてやらないうちも食べれないか。

「蘭ー。おーい、起きろー」

「……………んん……………もうちよつとだけ」

「いや、充分寝ただろ？もう昼休みじゃないのか？」

「……………んん……………」

「ダメだこりゃ」

どうしようか、と悩んでいると、階段を駆け上がる足音が響いて来た。

「あー、おそろくこれは」

こんな騒いで階段を駆け上がってくる人物なんて1人しかいないだろう。ていうか俺は1人しか知らない。

「ひまりちゃん参上!!ラテさん、会いに来ましたよー!!つてあれ？」

「闇を統べるものであるこの……………えーつと……………あたしがひーちゃんと参上!!」

バンツ!!と大きな音を立てながら扉を開けて入って来たのは見なくてもわかる。ひまりちゃんとあこちゃんだろう。また騒がしい2人が最初に来たものだ。

「あれー、ラテさん?どこですかー?」

「ラテおにーちゃん。どこー?」

「こつちだこつち。あともう少し静かにしてくれ」

「ん?ラテさんの声がある」

ひまりちゃんとあこちゃんが俺の声だよりに近づいてくるのがわかる。

「あ、いた!つてあれ、なんで蘭?」

「ちよつと色々あつてな。他のみんなは？」

「つぐと巴は日直の仕事終えてからするみたいです。モカはのんびりしてたので置いて来ちゃいました！」

「おい」

「ねーねー、そんな事よりひーちゃん。これはあこたち退散すべきじゃないのかな？」

「あー、確かに。私たち退散したほうがいいですか？とりあえず写真をひとつ」

「しなくていい。蘭も疲れてるんだろーしこうなっただけ。あとやめてくれ。蘭が起きたら俺が殺される可能性がある」

「てか、なんでこいつあんな大きな音したのに起きないんだ？普通起きるだろ。あんな大きい音がする扉の開け方したら。」

「とーちやく。つて、あれー？お兄ちゃんは？」

「ホントだ。ひまりとあこも先に行つたはずなのに」

「どうしたんだろ？」

「アタシ電話してみよーか？」

「そうするほうがいいと思うなっ！」

他のみんなも全員来たみたいだ。つてあれ？なんか1人聞き覚えのない人の声が聞こえたような気がする。

「あ、みんな。こつちこつちー」

「なんだひまり。いるなら声かけろよー」

「いやー。なんていうか。ラテさんと蘭がいい雰囲気だから」

「いい雰囲気？」

なんでそんな変な言い方するんだよひまりちゃん。誤解されたらどうする気だ。悪い気はしないけど。

「あ、お兄ちゃん。と蘭ー？」

「なにになにー？モカちゃんのお兄さんと蘭ちゃんって、もしかしてそういう関係？」

「いやいや、そんなわけ……………つて誰？」

俺を見かけた瞬間飛びついて来ようとしたモカだったが、蘭の姿を見て動きを止める。そんなモカの肩に手を置いた、俺の知らない女の

子が目をキラキラさせて現れた。

「初めまして！リサちゃんと同じクラスの氷川日菜だよ。よろしくね！」

「は、はあ。よろしく」

握手を求められたので手を差し出して見ると、両手でブンブンと振る氷川さん。なんというか随分テンションの高い子だな。リサと同じクラスっていう事は同じ年なのか。

「で、実際のところどうなの？モカちゃんのお兄さん………言いにくいや！ラテ君と蘭ちゃんはるん！ってする関係なの？」

「る、るん？え、えつと言ってる意味がよくわからないんだけど？」
「前々からラテ君とはあってみたいなーって思ってたんだ。なんと言ってもモカちゃんのお兄さんだからね。どんな人が気になってたんだー。でねでねー」

マシンガントークというのはこういうのをいうんだろう。話がコロコロ変わっていき全くついていけない。

「ご、ごめんねラテ。日菜はこういう感じの子だから。気にしないで普通に相手してあげたらいいから」

「普通に相手するのも難しいんだけど」

「んん………さつきから騒々しいような」

あ、ようやく蘭が目を覚めました。身体を起こして、眠たそうに目をこすりながら周りを見渡す。

「ん………あれ、なんでラテがここにいんの？それに何、この人の多さ」

あまりに状況が変わりすぎて理解できていない蘭。ていうか、目をこする姿可愛いな。

「蘭ー。おはよ〜」

「うん。おはよう。今何時？」

「もう昼休みだよー。これからみんなでお昼ご飯タイムだよ〜」

「昼休み………え、昼休み!？」

昼休みという言葉で完全に目が覚めたのか立ち上がって携帯を確認する。

「本当だ……あたしいつの間に」

「俺が屋上に着いた時にはもう寝てた。あまりに気持ちよさそうに寝てたから起こすのも悪いしそのままにしてたらこんな時間に」

「ちなみに蘭はこんな感じだったよー」

ひまりちゃんが俺にもたれかかって幸せそうに眠る蘭の写真を見せた。

「なっ!?!……………」

「なんていうか蘭とラテさん付き合ってるみたい。ね?」

「うんっ! あたし退散したほうがいいと思っちゃったもん!」

ひまりちゃんとおこちゃんがねー、と楽しそうに頷きあってる。そんな写真を見せられた蘭はプルプルと震えだした。

「ら、らん?」

「……………」

「ち、違うんだぞ。俺も本当は蘭を起こそうかどうか迷ったんだけど。でも、やっぱり悪いかなって思ってたさ」

「……………」

「でも、こう言ったらあれだけど可愛かったぞ。蘭の寝顔。それに、いつもは俺に冷たいけど、その蘭が俺を受け入れてくれてるような感じもして嬉しかった」

「……………」

「蘭は寝てたからこう言ってもわからないだろうけど……俺は今日屋上で蘭と2人でいられて良かったと思っただぞ。蘭の可愛い一面を見る事も出来たしな」

「っ!!」

「だからその…………『わかった』…………へっ?」

「もういい。あたしも呼び出して置いて勝手に寝ちゃったし…………その…………ごめん」

「え…………あ、いや、こっちこそ授業あるのに起こさなくてごめん」

何があった?あの蘭が。いつも素直になれなくてツンツンしている蘭が素直に謝るなんて。

「うん。じゃあ、あたしカバン取ってくるから」

「あ、うん。了解」

「じゃ。……………あ、ひまり。ちゃんと写真消しといてよ。じゃないと本気で怒るから」

「りよ、了解」

それだけ言うと言は急ぎ足で扉の方へと歩いて行った。

「な、なんだったんだ？俺絶対怒られると思ったのに」

「アタシも絶対蘭は怒ると思った」

「2人とも……………」

俺も巴も蘭の行動にイマイチ納得がいかない。なぜつぐちゃんは少し呆れたような顔をしているのか。

「なあ、みんなはどう思う？」

「えっ？ど、どうって言われても……………日菜はどう思う？」

「んーとねー。蘭ちゃん恥ずかしかったんじゃないかな。ラテ君が可愛いとか嬉しいとか言ってくれたから。ねっ？ひまりちゃん」

「ええ!?そこで私に振られても……………モカはどう思う？」

「あたしはわかんないよ。それよりお兄ちゃん、お腹すいたー」

「あ、そうだったな。俺はモカに弁当届けるためにここに来たんだっただ。えーつと……………はい」

カバンの中を手探りで弁当を掴んでそれをモカに渡す。

「ありがと〜」

「あ、ラテ。とりあえず適当に購買で何か買つといたから。好きなの選んで」

リサはそう言うっておにぎりや惣菜パンなどが入った袋を俺に渡してくれた。

「本当に買って来てくれたのか。サンキュー。いくらだった？」

「あ、これは奢りでいいよー。この前はお世話になっちゃったしねー」

「お世話って。あれは」

この前、というのはおそらく俺とリサがデートした時のことだろう。別にお世話ってほどの事をした覚えはないと思うんだけど。

「なにになに？ラテ君、蘭ちゃんとだけでなくリサちゃんにも何かしたの？」

「なんですかラテさん！その話私聞いてないですよ！」

「あこもあこも！ラテおにーちゃん。リサ姉に何してあげたの!？」

お世話という言葉に反応したのか、最初に氷川さんが話に食いついて来て、ひまりちゃん、あこちゃんと続くようにどンドン話が広がっていく。

「いや、大した事をしたわけじゃ」

「それでも気になるの！他にもたつくさん聞きたい事があるし！ラテ君とモカちゃんの生活とか、蘭ちゃんやみんなの馴れ初めとか！ねえ、教えて!!」

「わかったわかった。話すから。そんな全部は話すことできないと思うけど」

なんだろう。もしかしたら俺氷川さんの事少し苦手なのかもしれない。

「やったー！じゃあまずは……………」

お昼ご飯は食べながら俺は氷川さんが質問して来たことに次々と答えて言った。もちろん、他のみんななどのおしゃべりも忘れずに。モカの弁当を届ける、というだけだった筈がこんなことにまで発展してしまっただが、まあこんな休日もたまには悪くないだろう。

「はあ……………」

『でも、こう言ったらあれだけど可愛かったぞ。蘭の寝顔。それに、いつもは俺に冷たいけど、その蘭が俺を受け入れてくれるような感じもして嬉しかった』

「っ!!……………」

『蘭は寝てたからこう言ってもわからないだろうけど…………俺は今日屋

上で蘭と2人でいられて良かったと思ったぞ。蘭の可愛い一面を見る事も出来たしな』
「ラテのバカ」

第26話 ラブレターをもらおうラテ

「蘭、つぐちゃん、巴、ひまりちゃん。みんな集まってくれてありがとう」

「ラテ君が私たちを集めるってどうかしたの？モカちゃんは呼んでないみたいだけど」

俺は今日、モカ以外の4人を集めてつぐちゃん家のカフェに集まっていた。

「で、話って何？あたし忙しいんだけど」

「とか言いつつ呼び出したら来てくれる蘭の事が俺は大好きだぞ」

「う、うるさい！早く話して！」

蘭は顔を真っ赤にして俺に話を続けるように促す。なんだ、大好きって言われたのがそんなに恥ずかしかったのか？

「まあ、モカを呼んでない理由は後で話すとして。今日さ、学校終わって帰ろうとしたら下駄箱にこんなものが入ってたさ」

俺は下駄箱に入ってたものをみんなに見せる。

「これって……」

「手紙？」

「ああ。それもかなり可愛い感じの手紙だな」

「ラテさん、これってまさか……」

「ああ。中身も見ただけど、どうやら俺宛のラブレターみたいだ」

「……ら、ラブレター!!?!」

みんなも驚きを隠せないように声を上げる。当然の反応だ。俺だって驚いたわけだし。

「学校では1人も友達がいらないラテに」

「クラスでも教室では友達いないから自分の席で本を読むことしかできないラテに」

「昼休みになっても友達いないから、1人でいつもご飯食べてるラテさんに」

「……ラブレター!!?!」

「み、みんな落ち着いて！ラテ君が傷ついて死んじゃうよ！」

なんでこいつら学校違うのに俺の学校生活知ってるんだよ。事実だから何も言い返せないけど。あ、やばい。泣きそうになつて来た。モカがいたらすぐに抱きつくのに。

「嘘でしょ。そんな事ってあるの?」

「絶対何かの間違いだ。そうに違いない」

「うん。そうじゃなかったらきつと何かの前触れに違いない」

「うんうん。とりあえず警察に電話しよう」

「いや待て!これはきつとラテが勘違いしてるだけなんだ。警察じゃなくて救急車だろ」

「蘭、巴!110でよかつたつけ?それとも、119!」

「……ラテ君、大丈夫?」

「大丈夫じゃない。もう心ポッキリ折れそう。つぐちゃん、今日はモカがいらないから俺の隣座つてくれない?もう誰かそばにいてくれな
いと辛いんだ」

「う、うん、いいよ」

「ありがとう。つぐちゃん」

つぐちゃんに席を移動してもらつて俺の隣に座つてもらう。モカ
がいないと俺の味方はずぐちゃんしかいないみたいだ。

「今日つて4月1日だつけ?」

「いや、9月だ。9月14日」

「嘘でしょ。エイプリルフルでもないのにこんなことつて……」

「ら、ラテ君……」

「もうやだ。こんな事ならちゃんと相談に乗つてくれそうなたつぐちや
んだけに相談すればよかつた」

俺はいつの間にか机の下でつぐちゃんの手を握っていた。もうや
だ耐えれない。誰かが俺の心をあつたためてくれないと俺耐えれない。

「ふう……で、ラテ。これは本当にラブレターなの?」

「だからそう言ってるだろ!疑うなら中身見てみるよ!」

ゴクリ、と息を飲んだつぐちゃん以外の3人はゆっくりと手紙の封
を開けていく。つぐちゃんだけ俺に寄り添つててくれていた。今日
のつぐちゃん超優しい。いつも優しいけど。

「えつと……『前々から青葉くんの事が気になっていました。この気持ちを持ちやんと言葉にしたいです。明日の放課後、体育館裏で待ってます』だって」

「嘘だろ。マジでラブレターじゃないか」

「でも、確かにこれ見たらモカは卒倒しそうだよね」

「ああ。だからモカは今日呼ばなかった。幸いあいつはバイトだしな。ちようどよかったよ」

「で、でも、ラテ君。これどうするの?」

「どうするって何が?」

「何がって……その、このラブレターの返事」

「ああ。断るぞ。当たり前だろ?」

「だ、だよ。よかった」

つぐちゃんはほっ、と胸を撫で下ろした。当たり前だ。モカがいるのにこんな誰とも知らない子と付き合えるわけがない。

「答え決まってるならいいじゃん。なんであたし達を呼び出したの?」

「いや、どうやったら相手を悲しませずに断れるかなって。その相談をしたいんだ。流星に『妹が大好きだからあなたとは付き合えません』とは言えないだろ」

「え、ラテ……」

「な、なんだよ」

「そうやって断ったら傷つくってわかるんだ。シスコンのくせに」

「アタシも今のは凄いつて思った。シスコンのラテだから絶対そうやって断ると思ったのに」

「ラテさん、シスコンだから女心なんてわかってないと思ってましたけど、そんな事なかったんですね。私感心しました!」

「みんな。もうラテ君の心が折れるの寸前だと思うよ?」

つぐちゃん、それは違う。折れる寸前じゃない。もう3人がかりで折られてるから。

「もういい。つぐちゃんとだけ相談する。みんなは帰っていいよ」

「あははっ、悪い悪い。冗談だよラテ」

「そうですよ！私たちがあまりにびっくりしちやっただけですから、ね、蘭？」

「うん。正直今年一番びっくりしてる」

「はあ……まあいい。で、どうやって断ればいいと思う？」

「これが本題だ。女の子であるみんななら俺よりこの手の話はわかるだろう。」

「そうだなあ……ここはきっぱり断るのがいいんじゃないんですか？」

「と、言うത്？」

「例えば……『ごめん、俺他に好きな人がいるんだ』みたいな感じで！」

「……その相手を聞かれたら？」

「ええつと……『俺の、妹だ』って」

「それ結局なんも変わってないじゃん！結局俺ただのシスコンを超えたシスコンになるだけじゃん！」

「何言ってるの。ラテはもうシスコンを超えたシスコンでしょ」

「ありがとう」

「褒めてないから」

第1の作戦、失敗。

「じゃあ次、巴」

「アタシはこの手の話よくわからないから……とりあえず、キープっていうのはどうだ？」

「いやダメだろ。俺別にこいつのこと知らねえし、そもそも断る気しかないし」

「だよなー。悪い、この案は無しだ」

第2の作戦も失敗。もうちよつとマシな案が欲しいものだ。

「次、蘭」

「思いつかない。次、つぐみ」

「ええ!？」

「真面目に考えろよ！」

「真面目に考えた。でも思いつかない」

絶対真面目に考えてない。面倒臭いだけだろ。

「じゃあつぐちゃんは？」

「えつと……あ！ラテ君がもう彼女いるってことにしたらどうかな？」

「それを証明するには？」

「誰かがラテ君の学校についていく？」

「誰かって？」

「それは……蘭ちゃんとか？」

「なんであたし!?そこはつぐみに決まりでしょ!？」

「わ、私!?無理無理!絶対無理だよ!」

そんなに露骨に拒絶しなくても。俺のメンタルにも来るものがある。

「だって、つぐみ、ラテにはいつも優しいし、それにラテと一番仲良いのもつぐみでしょ。」

「仲良いつて言ったらひまりちゃんもそうじゃないかな。ほら、ひまりちゃんよくラテ君と甘いもの巡りしてるし」

「私!?私はラテさんとじゃ釣り合わないし、ここは一番かつこい巴に決まりでしょ!」

「かつこいってなんだよ!そこは普通一番可愛いやつだろ。それならつぐみに決まってる」

「一番可愛いのはひまりちゃんだよ!うん、絶対そう!」

「そんな事ないよー。可愛いのは蘭だと思うなく」

「それはない。可愛いのは絶対つぐみでしょ」

なんだろうこれ。ずっと循環してるんだけど。ていうか話進まないし。ちなみに俺が一番可愛いと思ってるのは絶対モカである。ここは譲らない。

「と、とにかく!誰かラテ君と一緒に学校に行けばいいんじゃないかな?」

「てか、それならモカを連れていくのはダメなの?」

「モカなら兄妹ってバレるんじゃないのか?顔はあんまり似てないけど、髪の色とか一緒だし」

「てか、そもそもモカにはこの話したらダメなんですよ。じゃあ無

理」

「ならこの案も却下だな。他に何かないか？」

第3の作戦も失敗。なかなかいい案は浮かばないな。

「ていうかさ」

「ん？」

「相手を悲しませずに断るっていうのがそもそも無理なんじゃないですか？」

「それは……………」

「確かにそうかも。勇気出してラブレター出してくれた相手にこんな相談してるのも失礼な話かもしれないね」

「いや、俺もそれは考えたけど、でもこんなものもらったの人生生まれ初めてだからよくわからないんだよ。だからこうして相談してるわけ」

「だったら尚更じゃないかな。ラテ君が初めてもらったラブレターの返事は自分が思ったことをそのまま伝えて、その上で無理っていう返事をするべきじゃないかな？」

「つぐちゃん……………」

「だな。アタシもつぐの意見に賛成だ」

「あたしも。よくわからないけど」

「巴、蘭……………」

確かにそうかもしれない。そもそもこうやって断ることを前提にして話すこと自体が相手に失礼な事だったのかもしれない。相手は顔も名前も知らないとはいえ勇気を出して送ってくれたんだから。

「そう……………だな。うん、つぐちゃんの意見を参考にして明日ちゃんと断ることにするよ」

「うん！それがいいと思う！」

「ひまりちゃんも、蘭も巴もありがとう。一応礼は言っとく」

「いえいえ、どういたしまして！あ、お礼はケーキでいいですよ！」

「じゃああたしコーヒー」

「アタシは豚骨醤油ラーメンな」

「黙れ。前半あれだけ俺のことをバカにしたやつらに何かを奢る気な

んでない。つぐちゃんは何が欲しい?」

今日のことは絶対許してやらない。相談に乗ってくれたことは感謝するが、それ以外のことは死んでも許さないからな。やっぱり持つべきものはつぐちゃんだ。

「私? うーん……じゃあ今度お店手伝って欲しいな」

「任せろ。いつでも手伝ってやるよ」

「うん! ありがとう、ラテ君!」

こうして俺たちはここで別れて、明日またここで集合という事で、俺は次の日のために早く寝ることにした。

次の日

「……………」

今日はお店が忙しいという事で、つぐちゃんの部屋に集合という事になり、俺は裏口からつぐちゃんの家に入ってそのまま部屋へと向かった。

「あ、ラテさん!」

「お疲れ様。結果聞いてもいいかな?」

「……………」

「お兄ちゃん、聞いたよー。もー、モカちゃんに相談もしないなんて白状だな」

「悪いラテ。モカには黙っとくつもりだけど、ひまりがうっかり口を滑らしてさ」

「でも、モカもこの調子だし大丈夫だと思う……………ラテ?」

「お兄ちゃん?」

「……………ん? ああ、モカもいたのか。ごめん、気づかなかったよ」

そういえばノックをした記憶もない。女の子の部屋にノックもし

ないなんて俺は最低かもしれないな。

「お兄ちゃん、どうしたの〜?」

「ラテ君、大丈夫? なんだか顔色悪いみたいだけど」

「へっ……あ、ああ。大丈夫。大丈夫だぞ」

「ラテ、何かあったの?」

「……………」

心配そうに俺の顔を見てくれるモカ達。ダメだな。なんとか明るく振る舞おうと思ったけど、これは無理だ。

「……………がらせだった」

「へっ?」

「嫌がらせだったんだよ。俺に対しての」

「え?」

「嘘!」

「そんな……………」

「待ち合わせの場所向かったら、俺のクラスの奴らがいたんだ。あいつら笑ってやがった。まんまと騙されてやんの、みたいな顔してやがったよ」

「酷い……………」

「なんだそれ……………」

「俺の顔見て笑って、バカにしてきて。なんて言われたかも覚えてねえけどな。正直どうでもよかったし」

「お兄ちゃん……………」

「いや、そもそも最初から気付くべきだったんだよ。あの手紙を見た瞬間に。差出人の名前が書かれてないことも、字体が女の子っぽくないこともさ。それに今日そいつらがなんか俺の方見てニヤニヤしてたし。はあ、なんで気づかなかったんだろう」

手紙を見返してみれば気がついた。よくみれば字も男が書くようなあまり上手くないような字に、単純な文章。ちよつと考えればまるつきり嫌がらせってわかるのに。

「単純に俺が馬鹿だったってことだよ。初めてもらったラブレターをバカみたいに喜んで、断る気しかなかったのに、お前らに相談して。」

はああ……ほんと馬鹿だ」

「ラテ」

「ラテさん……」

「ラテ」

「ラテ君」

俺の今日起こった出来事を話しするだけで辛そうな表情を浮かべる。つぐちゃんとひまりちゃんなんて少し目に涙が浮かんでいるくらいだ。

「みんなが落ち込む必要はねえ。楽しみにしてたところで悪いな。ほら、さつきやまぶきベーカリーでパン買ってきたから、みんなで食べようぜ」

なんとかみんなに心配かけまいと明るく振舞ってみせる。店番していた沙綾も俺の顔を見た瞬間何かあったのかと聞いてきたが何もないで済ましてきた。きつとあいつにも心配かけちゃったし今度謝らねえとな。

「さっ！暗い話は終わりだ！明るい話でもして今日は」

「お兄ちゃん」

買ってきたパンを置いて床に座ろうとした瞬間、モカが俺の体に抱きついてそのまま俺を引き寄せた。

「も、モカ？」

「……………」

「どうした？俺なら大丈夫だぞ。だからこうやって抱きしめてくれるくても」

「……………」

「や、やめてくれよ。そんなことされたら、俺、耐えられなくなるだろう……」

「お兄ちゃん、部屋入ってきてからとーっても辛そうな顔をしてたよー」

「っ!？」

「お兄ちゃんが辛い顔見せないように我慢してるのはわかったよ」

「……ああ。モカにはわかつちやうよな」

「でも、お兄ちゃんが辛い顔をしているのはあたしが見てられないから」
「……モカ」

「だから、モカちゃんがこうやって癒してあげるんだよ」
「も、か………」

優しくも、そして暖かいモカの抱擁に俺はその場に崩れ落ちた。そんな崩れ落ちた俺を包み込むように抱きしめつつ、頭を暖かい手で優しく、あやすように撫でてくれるモカに俺の保っていた理性までもが崩れ落ちた。

「俺、俺さ、嬉しかったんだよ。でもさ、それが一瞬で壊されて」

「そーだね。辛かったよねー。でもだいじょーぶー。モカちゃんはいつでもお兄ちゃんと一緒にいるよー」

「期待してたんだ。初めてだったのに。それなのに……」

「言わなくてもわかるよー。だってお兄ちゃんだもん」

「バカにされたのは悔しくない。でも、何より騙された自分に腹が立って」

「お兄ちゃんは悪くないよー。悪いのはお兄ちゃんは騙した人たちだから」

「モカ……ごめん。ごめんな、こんなダメな兄貴で」

「ダメじゃないよ。お兄ちゃんはいつでもあたしに優しくして、頼りになって、かつこいいんだよー」

「ありがとう。それで、ごめんな、心配かけて。ちよつとだけ。ほんのちよつとだけモカに甘えてもいいか？今日だけだから」

「もちろんーん。モカちゃんはお兄ちゃんの事が好きだからね」

こんな状態の俺でもいつも通りののんびりとした口調で俺を励ましてくれるモカ。そんなモカの胸で俺はいつぶりになるかわからない大粒の涙を流した。

「もう大丈夫。モカ、ありがとう」

「どういたしまして」

数分くらいモカの胸の中で涙を流した俺はモカの胸の気持ち良さにちよつと寂しさも残しつつモカから離れた。

「本当にモカがいてくれてよかったよ。やっぱり俺モカなしじゃ生きていけないな」

「モカちゃんもお兄ちゃんがいないと生きていけないから大丈夫だよ」

「それもそうか。じゃあモカとは一生一緒にいないとな」

「そうじゃないとモカちゃんが餓死して困っちゃうからね」

えへへー、と笑いつつ俺の隣に座って俺にもたれかかるモカ。やばい。最高に可愛い。

「よし！みんなも心配かけてごめんな。これは俺の奢りだからみんな存分に……ってあれ、みんなどうした？」

1人2個ずつ買ったパンを机の上に置いていこうとしたが、なぜかみんな俺たちの方を見ようとしない。

「おい、蘭ー？巴？ひまりちゃんにつぐちゃんも。みんな大丈夫か？」

「あんなの見せられて大丈夫なわけないじゃん……」

「ヤバイな。兄妹だつてわかつてるのにあんなにドキドキするものを見たのはアタシ初めてだ」

「うん。私も最初は泣きそうになつてたけど、モカの表情を見てたら、なんていうか胸が熱くなつて」

「ダメ。顔が火照つて……どうしよう、熱いのが冷め切らないよ！」

あれ？もしかしてこれはやってしまったやつか？

「と、とりあえず飲み物も買ってきたから先にこっちのむか？」

「飲む」

「くれ！」

「ラテさん、私も！」

「私も欲しい！」

飲み物を差し出すと、各々欲しいものをバツ、と取ってそれを音を立てて飲んでいく。

「……………ぷはっ、生き返った」

「なんだろうな。ラテを励ましてやらないといけないのに」

「ラテさんが凄く妬ましい……………というか羨ましいよね」

「あんなことするモカちゃんも初めて見ちゃったから」

「確かに。モカってあんなに大胆だったんだね」

「大胆なんてひどいな。モカちゃんはただお兄ちゃんに元気になっ
て欲しかっただけだよ」

「その方法が大胆だって言ってるの!!」

「そーかな？お兄ちゃん、普通だよねー？」

「いや、普通ではないと思う。でも、嬉しかったのは事実だから。あり
がとうモカ」

「えへへー。お兄ちゃん、膝の上座るよ」

「ああ。いいぞ」

モカは袋の中からパンを1つ取り出してそのまま俺の膝の上に座つてもたれかかる。モカなりに俺のことを励まそうと頑張つてくれたんだ。俺もちゃんとモカにお礼をしないとイケないな。

「なんだか私たちが、モカに負けた気分」

「いや、実際アタシ達はモカに負けてるだろ」

「ていうか多分一生勝てない」

「で、でも、私もラテ君の事元気付けたかったのに、モカちゃんに全部取られてなんだか悔しい」

4人は顔を見合わせてコクリ、と頷くと、全員でジリジリとにじり寄ってきた。

「み、みんな？どうした？」

「今度はアタシ達がラテの事を元気付けてやるよ」

「とりあえず今日はつぐの家でお泊まり会です！」

「はあ!？」

「元々そのつもりだったから、お父さんとお母さんにも話してあるから大丈夫だよ」

「ラテ、覚悟して」

「いや、そもそも俺着替えとか持っていない………ああもうわかった！付き合ってやるよ！なにするか知らないけど、全員かかってこい！！」

「みんなー、頑張ってくあむ」

俺の膝の上で呑気にパンを食べるモカを放って俺たち5人は全員で遊べるパーティーゲームなどで大いに盛り上がった。今日は最悪な1日でもあったが、最高の1日でもあったと、俺は心の底からそう思うことができる1日だった。

第27話 キュンとされたいラテときめいた頑張り屋さん

「へえ……なるほど」

「お兄ちゃん、おはよ」

ふわあ、と大きなあくびをしながらモカは自分の部屋からリビングへと降りてきた。これはちよっどいいかもしれない。

「モカ、ちよつとそこに立ってくれないか？」

「突然どうしたの？」

「いいからいいから」

モカは眠たそうに目をこすりながらも俺のいう通りに壁際に立った。モカが壁際に立ったのを見て俺も椅子から立ち上がりモカの目の前に立つ。

「よし……モカ」

名前を呼ぶと同時に俺は左手で壁に手をつけ、右手でモカの顎に優しく添えて、モカの顎を持ち上げるようにして言った。

「俺と、付き合っちゃえよ」

そう。俺が今やったのは巷で流行していると言われる顎クイである。朝起きてから昨日買った雑誌を読んでいると、壁ドンや顎クイと言った女性がキュンとする恋愛特集というものが載っていた。モカは妹であるが、これを活かしてみればきっとモカも俺に夢中になるはず。

「モカ、どうだ？」

「……………」

「あれ、モカ？」

再度名前を呼ぶが反応はない。ただじーつと俺の顔を見つめているモカ。

「もしもし、モカさん？」

「……………あ、ごめん。聞いてなかった」

「……………」

何これ恥ずかしい。モカが俺に夢中になると思ったのに、当の本人は聞いてないとか酷すぎる。俺今穴があつたら入りたいくらい恥ずかしい思いなんですけど！

「お兄ちゃん、わんもあぷりーず」

「勘弁してくれ。一回やっただけで十分だ」

「えつとー……なんのはなしー？」

「これだよこれ！」

俺はモカにさつきまで見ていた雑誌の特集記事を見せた。

「えつとー、恋愛特集ー？これがどうしたの〜？」

「いや、色々書いてあつてちよつと面白そうだなーって思つてモカにやつて見たんだよ。でもモカは聞いてなかつたつて……ああ、恥ずかしい」

「お兄ちゃん、大丈夫だよー」

「なにが？」

「そんな事しなくても、モカちゃんはお兄ちゃんに惚れちゃつてるんだよ〜」

「モカ………」

そうだった。こんなことをしなくてもモカは俺のことを大好きでいてくれるんだ。だから別に気にする必要は……

「つて、実際にやつて見てどうなるか反応を見たかつたんだよ！妹とかそういうのは関係なしで！」

「じゃあ、もう一回やってみれば？」

「え？」

「もう一回やつて見たらモカちゃんもこの記事に書いてあるみたいにな、お兄ちゃんにこう、キュンつてしちゃうかもよ〜」

「もう……一回」

さつきモカは眠たくて意識がはつきりしていない状態だったから聞いてなかつただけで、ちゃんと理解してくれた上でやってみればモカもさつきとは違う反応をくれるかもしれない。

「いや、でももう一回するのか？やつてからわかつたんだけど、これだいぶ恥ずかしいぞ？」

妹とはいえやった後は身体中がカア、と熱くなっていくのがわかるほど恥ずかしかった。さすがにもう一回するのは辛いところではあるんだが。

「えー、だめなの〜?」

「ダメってわけじゃないけど。少し時間が欲しいっていうか」

「今やってくれたら、今日はお兄ちゃんの言うこと一回だけ何でも聞いてあげるよー」

「よしやろう。さあ今やろう!すぐやろう!!」

「わーい」

ふっふっふー。今日はモカにどんなお願いをしようか。久しぶりにモカに膝枕してもらおうのもいいかもしれない。

「モカちゃん、準備完了だよ」

モカはさつきと同じように壁際に立った。さつきの眠そうな表情とは違い何故かキリツとさせている。

「よし。それじゃあ」

俺はもう一度モカの目の前に立ち、壁に手をつけ、モカの顎を優しく持ち上げるようにして言った。

「一生、俺から離れるなよ」

「……………おー」

「ど、どうだ?」

さつきより言葉の強みが上がったはずだ。付き合っちゃまえよ、から側にいろよにしたんだから。これならモカの胸にも響くものがあるはず。

「なんていうか…………」

「なんていうか?」

「お兄ちゃんにはそんなセリフは似合わないねー」

「がーん…………」

ショックだ。一度は聞いてもらえず、二度目は似合わないって言われるなんて…………

「もういい。モカに相手してもらえないなんて。今日から青葉ラテはグレることにする。手始めにつぐちゃんの家に行ってコーヒー飲んで

でくるから」

「それはグレるって言わないと思うよ?」

「もうモカなんて嫌いだ」

「もー、こんな事で拗ねないでよー。それにあたしはお兄ちゃんの事大好きだよー」

「……………そんな事で俺の機嫌が良くなると思うなよ」

「今日のお兄ちゃんは手強いね〜」

モカは満面の笑みを浮かべて俺にぎゅーっと抱きついて言ってくるが、俺は顔が赤くなっているのをバレないように顔を横にそらした。

「離すんだモカ。そして俺はつぐちゃんに慰めてもらう」

優しいつぐちゃんならこんな俺のことをきつと慰めてくれるだろう。

「あたしがお兄ちゃんを慰めてしんぜよう。よしよし〜」

「あー、癒される……………じゃなかった。離すんだモカ。今日の俺の気分はつぐちゃんによしよしされたい気分なんだ」

「お兄ちゃんそれは流石にダメだよ〜」

「ダメと言うと?」

「んーとねー。蘭みたいな感じで言うと、キモツ!かな〜?」

「……………まさかモカにまでそんな風に言われるなんて」

もう本気でグレてやろうか。今日は一日中外で過ごして、どこかのホテルに泊まって来てやろうか。

「……………そうだ。いいこと考えたよ〜」

「い(い)と?」

モカは俺から離れると、テーブルの上に置いた携帯を掴みそのまま誰かに電話をかけ始めた。

「あ、もしもしつぐー?うん。えつとねー。お兄ちゃんがとーっても大事な事をつぐに伝えたいんだってー。大至急あたしの家にしゅーごー。うん。それじゃあよろしく〜」

『あ、モカちゃん!?!ちよっと待って!!』

「……………」

どうやらでんわの相手はつぐちゃんらしい。つぐちゃんのモカに携帯を切るのを待ってもらいたい声が俺の耳に届いた。

「これでよし」

「いいわけあるかっ！何してんだモカ！」

「見ての通り。つぐにうちに来るように電話したんだよ。つぐ今日はお店の手伝いなくて暇なんだって」

「それは聞いてたからわかるわ！あと、そういう問題じゃない！」

モカの考えは大体予想がつく。俺の顎クイはモカにはあんまり通じなかった。だから他の人にやったら効果が出ると思ったんだろう。ましてやピュアなつぐちゃんだ。反応は幼馴染四人の中だったら一番期待値は高いだろう。

「だいじょーぶ。つぐならきつと良い反応を見せてくれるから」

「そういう問題じゃない！万が一つぐちゃんが本気にしたらどうすんだよ」

「あたしがフォロー入れてあげる」

「……………不安しかないな」

「えー、酷いよお兄ちゃん」

「酷くない。酷いのは俺の都合を聞かずに勝手に電話したモカだ」

「あたしはお兄ちゃんのためを思ってたのに。モカちゃんショックで泣いちゃうよー」

「……………はあ。まあ呼んじまったもんはしょうがないし。あんまり乗り気じゃないけど」

つぐちゃんに顎クイ……………どんな反応を見せてくれるんだろうか。流石にモカみたいな反応はないだろうけど。

「……………少し楽しみになってきた」

「でしよー。あたしもつぐがお兄ちゃんに惚れちゃう姿を見たいんだ」

けれどももし本当に惚れてしまうなんて事……………いやいや、つぐちゃんに限ってそんなことあるわけないか。

「とりあえずつぐちゃんに言う台詞でも考えながら待つとするか」

「も、も、モカちゃん！おじやまします!!」

「いらつしやーい。なーんにもないところですが、どうぞお上がりくださいい〜」

「う、うん!」

どうやらつぐちゃんが来たみたいだ。今モカが出迎えに行っている。

「つぐー。もしかして緊張してるー?それになんだかちよつとおしゃれもしてるような?」

「き、気のせいだよ!私はいつも通りなんだから!」

「そーかなー?」

「そーなの!それよりラテ君は?」

「うん。こつちだよ」

……ダメだ。何故か自然と顔がにやけてしまっている。平常心だ。平常心を貫いて、いつも通り。いつも通りに。

「お兄ちゃん、つぐが来たよ」

「こ、こんにちはラテ君」

「ああ。いらつしやいつぐちゃん」

つぐちゃんが部屋に入ってきたのを確認したのち俺はソファから立ち上がった。

「じゃああたしは自分の部屋にいるね」

「いや、モカもここにいていいぞ」

じゃないといざつぐちゃんがパニックした時に対処できないし。

「それじゃあお言葉に甘えて〜」

「ら、ラテ君。その…大事な話っていうのは……」

「わかってる。そのためにつぐちゃんを呼んだんだからな」

大事な話って言うのがただつぐちゃんに顎クイをしたいただけって

知ったら本人どう思うんだろうか。

「う、うん。それで……」

……よし。心の準備はできた。

「ら、ラテ君?」

顔を赤くしてもじもじしているつぐちゃんに俺はゆっくりと近づいていく。

「ど、どうしたの?なんだかちよつと顔が怖いつていうか……」

俺が一步近づくとつぐちゃんも後ろに一步下がる。一步、また一步と近づき、つぐちゃんも後ろに下がるが、次第に壁際についてつぐちゃんはこれ以上後ろに下がれなくなった。

「ラテ……君?」

「じつとして」

「は、はい!」

壁際まで下がり逃げ場を失ったつぐちゃんに囁きかけるように呟くとつぐちゃんは顔を真っ赤にしたまま目をぎゅつと瞑った。

「つぐちゃん、目開けて」

そんなつぐちゃんの顔の横にゆっくりと左手を壁につけ、右手で顎を持ち上げるようにして呟くと、つぐちゃんはゆっくりと目を開ける。完全に目が開ききったタイミングで俺は耳元で囁いた。

「ずっと。これからずっと一緒にいよう」

「……」

「おー。お兄ちゃんカッコいい」

決まった。これは完全に決まったはずだ。モカにも何か通じるものがあったらしく、俺の事を褒めてくれている。

「つぐちゃんどう?何かときめくもの……っていうか、キュンとしたんじゃないかな?」

「……はい。ずっと一緒にいます」

「だろー。ほらー、やっぱりずっと一緒にいたいって言ってくれた……えっ?」

「つぐー?」

「私、ラテ君とずっと一緒にいます」

「……………ちよつと待って。これ効果ありすぎじゃないのか？今のつぐちゃん完全に乙女の顔してるぞ。俺を見つめている目はめっちゃうっとりさせてるし、何故か涙目だし。表情はよくドラマとかである突然告白された女の子の表情だし。」

「……………モカ、これはちよつと効果出すぎなんじゃない？」

「みただねー。つぐー、戻って来て〜」

「ラテ君。私……………私ね！」

つぐちゃんは両手で俺の手を握って、何かを訴えようとしていた。やばいやばい。マジで本気にしちやつてる。

「ちよつと待って！落ち着いてつぐちゃん！しっかりして!!」

「つぐー。戻ってこーい」

「私は……………あれ？私一体何を？」

「つぐちゃん？」

「ラテ君、私今何を……………」

よかった。正気に戻ってくれたみたいだ。このままじゃ本当に取り返しのつかないところになるところだった。

「つぐちゃん、大丈夫？」

「あ、うん。平気……………あれ！なんで私ラテ君の手握って!？」

「そのことも含めてちゃんと話します。そしてちゃんと謝ります」

俺はこれまでの経緯をつぐちゃんに話した。俺がモカに顎クイをして失敗した事も、それをされたモカが自分以外の人間にやったらどうなるかも。その相手につぐちゃんが一番ふさわしいと思った事も。……………つまり、モカちゃんがラテ君の顎クイにいまいちピンとこなくて、代わりに私でそれを試したって事？」

「おっしやる通りです」

「それで、私はラテ君の顎クイにキュンと来ちやつてあんな事をしてしまったと」

「そういうこと〜」

「……………もう!!私でからかわないでよ!!」

「ごめんなさい」

「ごめんねつぐー」

ようやく自分が何をしていたのか理解したつぐちゃんは、正座して事情を説明した俺たちに怒った。

「うう…大事な話があるって言うから来たのに、まさかこんな事だったなんて……………」

「ほんつとうにごめん！でも、つぐちゃんを呼んだのはモカだからな。俺は何もしていないのに勝手にモカがつぐちゃんに電話したんだし、それにあんな紛らわしい言い方したのもモカだ」

「えー、モカちゃんに全部罪をなすりつけるなんて酷いよー。お兄ちゃんもつぐを呼ぶって言った時ノリノリだったのに」

「モカだって楽しみにしてただろー」

「お兄ちゃんだってつぐに言う台詞必死に考えてたよー」

「二人とも?」

「はい、ごめんなさい」

「もうしないから許してくださいー」

「もう……………ちよつとわくわくしてたのに」

「へっ?」

「な、なんでもない!」

今なんて言ったんだろう?声が小さくてよく聞こえなかった。

「で、つぐ。どうだったー?」

「どうだったって?」

「お兄ちゃんの顎クイだよー。キュンってきたんじゃないのー?」

「そ、それは……………うん。確かにキュンしてたかも」

頬を赤らめながらも頷いてくれるつぐちゃん。

「やつぱり。お兄ちゃん、つぐはキュンと来たってー」

「あ、ああ。でもごめんな。こんな事につき合わせちゃって。つぐちゃんをちよつと怒らせちゃったみたいだし」

「ううん、いいの。ああ言ったけど、その、ちよつと楽しかったし」

「そっか。なら良かった」

「うん!」

「あははー。一件落着いてやつですな」

三人で頷きながら笑い合う。だが、しばらく笑いあった後、モカが

またとんでもない発言を放った。

「じゃあ次はひーちゃんど蘭とトモチんだよねー」

「あはは……………えっ？」

「まずはひーちゃんだよねー。その次はトモチんで、最後は蘭かな？」

「いやいや何言ってるの？これで終わりだろ？」

「何言ってるのー。ここまで来たらみんなにやらないとダメだよー」

「いや、でも……………つぐちゃん？」

「私も見てみたいな。ひまりちゃん達に顎クイするラテ君」

「マジか……………」

「じゃあ早速ひーちゃんに電話するねー」

その後、他の三人にも順番に電話して呼び出したところ、ひまりちゃんと巴は何か違うと言われ、蘭に至っては失笑されて泣きそうになったのはまた別の話。

第28話 大量のパンと拗ねるラテ

「もぐもぐ……いやー、秋ですなー、モカさんや〜」

「むぐむぐ……そうですなー、お兄ちゃんさんや〜」

「いや、お兄ちゃんさんって何だよ。そこは普通にお兄ちゃんていいだろ」

秋である。秋で行事ごとといえば体育祭や学園祭、修学旅行といった思い出を残す一大イベントが多いだろう。でも、秋といたらそれだけじゃない。芸術の秋、読書の秋。そして、食欲の秋。そう、食欲の秋である。

「ところでモカさんや」

「むぐつ……なーに〜?」

「どうするよ、これ」

「どうしよう〜?」

「流石にこの量は腹ペコの俺ら2人揃っても食べられねえんじやねえかな?」

「そーだね。モカちゃん的にもこれはちよーつと厳しいかも」

「だよなー。食べながら言われてもあんまり説得力ないけど」

時刻は午後5時。俺たちの視線の先にあるものはテーブルいっぱい重ねられたパンの山である。メロンパンやクリームパン、ジャムパンあんぱん。クロワッサンにバターロールにサンドイッチにetc。その数は100を優に超えている。下手をしたら200個まで届きそうなくらい。去年は100個くらいだったが、今年はその上をいっていた。

「なんでこんなことになったんだっけ?」

「えつとねー。いつもどおりにやまぶきベーカリーにいったら思いの外パンが少なくなつて〜」

「これじゃあ足りないからって他のパン屋にもいったんだよな」

そう。食欲の秋、ということではいつもの恒例行事（詳しくは第15話参照）で張り切った俺たちだったが、食欲の秋、ということもあつてか、やまぶきベーカリーのパンは結構売れていて、俺たちがいった

時には残っている量が少なくなっていた。

「で、他のパン屋でも似たようなことになってたから、次々の店を回って買って行ったら」

「こうなっちゃったわけなのですよ」

あははー、と笑うモカだったが冗談抜きでやばい。というかよく俺たちはこれだけのパンを買って出禁にならずに済んでいるんだろうか。

「お兄ちゃん、どうしようー？」

「どうするかなー？」

うーん、と2人で頭を抱えるが、悩んでも何も案は出てこない。

「……とりあえず食べながら考えるか」

「そうしよう」

「て事で食べるの手伝ってくれ」

「嫌」

「無理」

「わあ、美味しそう！じゃなかった。私も無理ですよこんな量」

「私もちよつとこれは……」

食べても食べても減ってる気がしないパンに限界がきた俺たちは幼馴染である、蘭、巴、ひまりちゃん、つぐちゃんを呼んだ。

「いや、俺たちも結構食べてるんだけど、食っても食っても減った気がしねえんだよ」

「自業自得でしょ。てか、やばい。見るだけで胸焼けしてきた」

2人で数えながら食っているところ、今で合わせて30個目。まだまだパンは減りません。

「大丈夫。飲み物ならたくさんあるぞ。メロンソーダにコーラにコーヒー、紅茶。ほら、オレンジジュースも」

「ここはパンバイキングか!」

「お、良いこと言うな巴」

「トモちん、ナイスツツコミ」

鋭いツツコミにグツジョブ、と親指を立てると何故か巴は溜息を吐いた。

「でもでも、見てたらなんだかお腹すいてきたかも」

「私も。ちよつとだけ食べようかな?」

ひまりちゃんをつぐちゃんやんがパンの甘い匂いに誘われている。これはチャンスかもしれない。

「ひまり。また太るよ」

「うっ……それを言われると確かにこの量は……」

「確かにまだ晩御飯食べてないけど……」

「心配するな。今日はこれがみんなの晩御飯だから」

「そーだよ。今日の晩御飯はみんなでパンパーティーだから」

「栄養に悪そうだな」

当然である。確かにサンドイッチやカツサンドといった、肉や野菜が入ってるパンもあるが、大半はカロリー多めの甘いパンばかりなのだから。

「俺やモカがこんなに必死にパンを食べてるというのにお前らは見るだけなんだな……俺たちの熱い友情はどこにいったんだ!!」

「その友情を利用してあたし達を太らせようと目論むラテに言われたくない」

「……言い返せない。いや、別に太らせるつもりはないけど……」

蘭の太った姿とか見たくないし。

「でも、ラテ君もモカちゃんも困ってるみたいだし……少しでいいなら私手伝おうかな」

「マジ!?!」

「流石つぐ。持つべきものはやっぱりつぐだね」

「あ、あはは……それじゃあ、いただきます」

俺とモカの向かい側に座り、メロンパンを手にとって口に入れようとするつぐちゃん。

「つぐ。本気か?」

「うん。ラテ君とモカちゃんが美味しそうに食べてるの見たら、何だか私もお腹が空いてきちゃって」

「そう言われると確かに」

「……もう我慢できない! 私も食べるっ!!」

つぐちゃんが食べ始めたのを見て我慢できなくなったのか。ひまりちゃんもパンの山へと飛びついた。

「ひまりまで……蘭、どうする?」

「……仕方ない。あたし達も食べよう。こうなったらモカもラテも止められないし」

「いやー、それほども」

「褒めてないから」

「はあ……仕方ないか。あこに晩飯いらないつて連絡しないとな」

「……何ならあこちゃんも呼ぶか?」

そうすればモカとあこちゃんに挟まれ二人を愛でながらパンを食べる妹パンライフが楽しめることができる。

「別にいいけど、あこをラテの隣には座らせないぞ」

「何故に!」

「お前が今考えてる事が丸分かりだったからだよ」

「ラテの事だからモカとあこに挟まれてみたいなこと考えてたんでしょ」

「だな。まあとりあえずあこも呼ぶとするか」

そう言つて携帯を取り出しあこちゃんにメールをしようとする巴。くつ。まさか巴だけでなく蘭にまでバレるなんて。こうなればあこちゃん以外の妹候補を考えなければ。

「お兄ちゃん?」

「冗談です。冗談ですからそんな目で睨まないください」

モカにジト目で睨まれて俺はその場で頭を下げた。よく考えたらモカに隠し事なんて出来てるわけないじゃん。

「仕方ない。ここはひまりちゃんを妹として迎え入れるとするか」
「え、なんでわたし!？」

いきなり話を振られたひまりちゃんは驚いて声をあげた。

「だって…蘭は絶対嫌がるし」

「当たり前でしょ」

「巴は妹じゃなくて姉貴って感じだし」

「まあ…確かにそうかもな」

「つぐちゃんは俺のことを兄としてみるのは嫌ってこの前言ってたから」

「確かに言ったような…」

「て事で必然的に俺の妹になるのはひまりちゃんしかいないってわけだ」

「おかしいです!その理論絶対おかしいです!」

その場で立ち上がり声を荒げるひまりちゃん。

「何もおかしくないだろ。さあ。遠慮なく俺をお兄ちゃんと呼ぶがいっつ!そうすれば俺たちは兄妹だ!」

「絶対嫌です!」

「なんでだよ。俺みたいな兄貴欲しいだろひまりちゃんなら」

「いりません!いりませんから!」

「遠慮しないでいいんだぞ。なんなら俺もモカみたいにひーちゃんって呼んでやろうか?」

「やめて!モカく、ラテさんがセクハラしてくるよ!」

「あつ、そこでモカに泣き付くなんてズルいぞ!!」

何とんでもお兄ちゃんと呼んで欲しいがためにひまりちゃんに迫り寄るが、ひまりちゃんはよりにもよってモカに抱きついた。

「もおー、お兄ちゃん。ひーちゃん困らせたらダメじゃん」

「ご、ごめんなさい」

「ひーちゃんを困らせていいのはあたしだけなんだから」

「そ、そうだよな。悪かったモカ」

「…………あれ?助けてもらったはずなのに何故か釈然としない?」

今現在モカにからかわれてるという事に気付かないひまりちゃん。

なんて哀れなんだ。

「俺の妹はモカだけ。そう、モカだけなんだ」

「お、あこから返事きたぞ。『ラテおにーちゃんに会いたいからすぐ行く！』だつてさ」

「よし。俺今からあこちゃん迎えに行つてくるわ。モカ、みんな。留守番頼んだ」

「ラテ、数秒前に言ったこと思い出しなよ」

もう陽が落ちて暗くなっている頃だ。そんな時間に中学生1人で出歩くのは危険だからな。迎えに行つてあげないと。

「お兄ちゃん」

「ん？なんだ？」

「行つちやダメだよ」

「え、でも」

リビングから玄関に向かおうとしたが立ち上がったモカに腕に抱きつかれて立ち止まる。

「行つちやダメだよ」

「いやこんな時間に一人じゃ危ないだろうし」

「行つちやダメだよ」

「外暗いだろ？あこちゃんにもしもの事があつたら」

「行つちやダメだよ」

「……………モカさん？」

「行つちやダメだよ」

「……………今日何曜日だ？」

「行つちやダメだよ」

「……………明日の朝食何がいい？」

「行つちやダメだよ」

……………なんだ。うちの妹はいつからゲーム世界の住民化としたのか？何を聞いても同じ事しか返してくれないなんて。気のせいが目が死んでいるような気がする。

「……………巴。あこちゃんを迎えに行つてあげてくれ」

「まあ言われなくてもそうするつもりだったけど。ラテに任せたらあ

「こがどんな目に合うかわかったもんじゃないし」

「少しは俺の事信用してくれよ!？」

「もしかして俺って信用度ゼロ？」

「つぐちゃんは俺の事信用してくれるよな!？」

「蘭ちゃんこれ見て？凄くカッコいい衣装だと思わない？」

「うん。いいと思う」

「聞いてすらない!？」

「いつも優しいつぐちゃんにすら無視されるなんて。もう辛いなんてもんじゃない。こうなれば頼りの綱はひまりちゃんだけ。」

「ひまりちゃん!!」

「は、はい!？」

「ひまりちゃんは俺の事を信用してくれるよね？」

ズカズカとひまりちゃんの方に歩み寄って聞いてみる。

「えーっとー。そう、ですね。ラテさんはいつも優しいですよ」

「いや、優しいとかじゃなくて。俺は信用できる男だよな？」

「ラテさんは……私に美味しいスイーツを買ってくれますよね!」

「……………もういいや」

俺はもう誰からも信用されてないんだ。

「だいじょーぶ。あたしはお兄ちゃんのこと信用してるよー」

「モカ……………」

「この手に持ってるパンの大きさくらいに〜」

「そう言っただけで来て来たパンの大きさは通常の4分の1程度まで食べた大きさくらい。」

「チクショー!みんな嫌いだー!!」

「みんなに裏切られた俺は泣きながらリビングを出て部屋に閉じこもった。」

「ラテ、出てこいよ。あこも来たぞ」

「闇の深淵の狭間から……んーと……ラテおにーちゃん！あこも来たよー!!」

どうやらあれから巴は無事あこちゃんを家に連れて来てくれたみたいだ。巴もあこちゃんも呼びかけてくれるが俺は部屋に閉じこもっている。

「みんなアタシがいない間に何してたんだ。ラテが部屋に閉じこもるなんて」

「あたしはつぐみと衣装について話し合ってただけ」

「あはは……私も蘭ちゃんと夢中で話し合ってたから」

「まったく……モカとひまりは？」

「ひーちゃんがお兄ちゃんをいじめてたんだよね」

「ちーがーうー!!ラテさんにトドメさしたのモカじゃんかー!」

ドア越しにみんなが話しているのが聞こえる。いいよ。どうせ俺だけ仲間はずれでみんな楽しんでいればいいんだ。

「はあ……仕方ない。あこ」

「なーにー?」

巴があこちゃんに何かを言ってるみたいだ。

「うん、わかった!!ラテおにーちゃん!」

「なんだ?」

ドア越しに聞こえるあこちゃんの声に返事をする。

「あこ、おにーちゃんと一緒にパンが食べたいなく。だから部屋から出て来て、ラテおにーちゃん!!」

「あ、あこちゃん……」

おそらく巴があこちゃんにそう言うように促したんだろう。でも、そんな事を言ってくれるのはきつとあこちゃんだけだ。

「わかった」

「いいの?」

「ああ。あこちゃんの言いたいことはわかったよ」

「よし。これでラテは部屋から出てくれる」

あこちゃん、俺とパンを食べることができればそれでいいわけだ。というわけで。

「あこちゃん、リビングから好きなパン持ってきておいで。あこちゃんだけ部屋に入れてあげるから一緒に食べよう」

「ってなんでそうなる?!?!」

「ラテ君と巴ちゃんがおかしな事になってる……」

巴の鋭いツツコミが炸裂した。あれ？俺なんかおかしなこと言っただかな？

「わかった！取ってくるね！」

「待て待てあこ！行かなくていいから！」

今日の巴叫んでばかりだな。そんなに叫んで疲れないのか？

「ラテ、頼むから出てこいよ。モカが寂しくて泣いてるぞー」

「何!?ホントか!!」

泣いてるモカも見過ごせるわけがない。待っている今すぐ部屋をでて

「んー？あたし別に泣いてないよ〜？」

「騙したな巴!!」

「おいモカ！なんでノツてくれないんだよ」

「いや、今ので部屋から出てくると思った巴にビックリだよ」

「でも、ラテさんも結構反応してたみたい」

俺も巴も単純なのかもしれない。

「仕方ない。最後の手段だ。つぐ」

「へっ？わたし？」

「ああ。これはつぐにしかできない事だ」

今度はつぐちゃんを使って何かをしようとする巴。何をされても

俺は部屋から出ないからな。絶対に。

「……………ええっ!?そんなの私できないよ！」

「頼むよつぐ。折角来たあこのためだと思って」

「お願いつぐちゃん！あこもおにーちゃんと一緒に遊びたいの！」

「で、でもそんなの私じゃなくてモカちゃんでも」

「無理だと思う。モカ今不機嫌っぽいから」

「流石蘭く。モカちゃんの事をよくわかっていらつしやるなく」

「ぜ、全然そうには見えないんだけど」

宇田川姉妹でつぐちゃんに懇願している。いったいどんな手を使おうと言うのだろうか。

「つぐ、頑張って!」

「言ってやれ、つぐ!」

「つぐちゃんフアイトー!!」

「つぐみ、お願い」

「つぐってるつぐをお兄ちゃんに見せてあげようく」

「」「つーぐ!つーぐ!つーぐ!つーぐ!」

突然始まるつぐちゃんコール。当の本人は顔を真っ赤にしてるんじゃないだろうか。

「わかったわかった!やる!やるから!」

そんなコールに気圧されたのか。つぐちゃんはドアをノックして俺に話しかけて来た。

「えつと…………ラテ君…………」

「なんだ?」

「へ、部屋から出て来てくれたら…………わ、わ、私が…………」

「私が?」

「私が…………ラテ君に…………ラテ君に…………ぱ、ぱ…………パンを…………」

待て。何をするつもりなんだこの子は。というか何を言わせるつもりなんだ巴は。

「パンを…………た、た、食べ…………」

「パンを…………なに?」

「食べ……………食べさ…………ごめん!やっぱりできない!!」

「あ、おいつぐ!!」

ドア越しにドタドタと走っていく音が聞こえていった。

「……………失敗だな」

「うん」

「いい作戦だと思ったのに」

「お前らつぐちゃんになにさせるつもりだったんだよ！」

あの健気で純情で優しく頑張る屋さんのつぐちゃんに何を……こいつらもしかして鬼なんじゃねえのか。

「とにかく俺はでないからな!!」

「はあ……ラテってこんなにめんどくさい男だったか？」

「ラテさんはいつもめんどくさいと思うけど」

「うん。ラテはいつもめんどくさい」

聞こえてるんだけど。え、何。みんなそんなに俺の事めんどくさいと思ってたのか？

「もう絶対でない。死んでも出ない」

「あ、しまった。今の会話聞こえてたか」

「もういいんじゃない？ラテもしばらくしたら部屋から出てくるでしょ？」

「確かに。顔真っ赤にして行っちゃったつぐも心配だしね」

どうやらみんなの中で俺よりつぐちゃんの方が大事みたいだ。事実そうなんだろうけど、それも辛い。

「……もー、仕方ないな」

みんながリビングの方に降りると思った瞬間、今まで黙っていたモカの声が聞こえた。

「お兄ちゃん」

「な、なんだ？言っておくけど、モカが何を言っても俺は出る気は『ごめんね』……えっ？」

「お兄ちゃんをあこちゃんに取られると思って意地悪しちゃったの。モカちゃんはお兄ちゃんの事をちゃんとして信用してるよ」

「モカ……」

……そうだ。あこちゃんが来るからと浮かれて俺はモカの事を全然考えてなかった。モカだって寂しい思いをしたはずなのに。

「あたしはお兄ちゃんの事めんどくさいって思ってたないよ。いつも優しく、可愛がってくれて、頼りになるお兄ちゃんだから」

「……………」

「なーのーでー。部屋から出てきてモカちゃんと一緒にパンを食べよ

うゝ」

「……………ああ、そうだな」

俺はその場で立ち上がり部屋のドアを開けモカの目の前に立った。

「悪いモカ。俺、モカの気持ち全然考えてなかったよ。モカも意地悪するのは当然のことだな」

「お兄ちゃんがあこちに構いすぎだからだよ」

「そーだな。悪かった。お詫びに今日はモカにいっぱい構ってあげるからな」

「とうぜーん。そうじゃないと許さないからね」

「わかってるよ。さあ、もどるか。……………と、その前に」

モカの頭を数回ポンポンと撫でるように触った後俺は蘭達たちに向き直った。

「蘭、巴、ひまりちゃん。それにあこちゃんも。悪いことしたな。俺が拗ねてめんどくさい人間になっちゃったから」

「うん。めんどくさかった」

「まあ別にいいさ。ラテがめんどくさいのはいつもの事だし」

「だね。ラテさんがめんどくさい性格してるのは私たちはもう知ってますから」

「あこはおにーちゃんの仕事めんどくさいなんて思ってないよー！いつものおにーちゃんに戻ってくれて嬉しい」

「ありがとうあこちゃん。あこちゃんは優しいな。でも、他3人。流石に傷ついたぞ」

まあ俺がこんな性格してるのが悪いんだろうけど。いや、悪くないな。多分こいつらが俺のことを悪く言いすぎてるだけだ。

「まあいいや。じゃあパン食べにもどるか。つぐちゃんも心配だしな」

その後階段を降り、顔を真っ赤にしているつぐちゃんを宥めた後、俺たちはあこちゃんを加えた7人で山積みとなったパンを食べ始めた。

第29話 迷子になる女の子

休日。モカのバイトの日に俺は相変わらず街をブラブラ歩いて暇を潰す事にした。べ、別に友達がいらないなんてわけじゃないぞ！

「うーん暇だ。つぐちゃんの家にでもお邪魔しに行こうかな」

そう決めた俺はつぐちゃんの家へと足を向けようとした。

「ふええ……」

「ん？」

「ふええ……ど、どうしよう」

何か聞き覚えのある声が聞こえたような。というかこの独特の鳴き声。忘れるわけがない。

「ま、また迷子になっちゃったよ……」

声の方に近づいてみると案の定その子はそこに立っていた。

「松原さん松原さん」

「え……あ、青葉君！」

青葉君、と俺を苗字で呼んでくれるこの子は松原花音さん。前にモカとひまりちゃんが俺の彼女と勘違いした女の子である。

「どうしたの？……って聞く必要もないか。また迷子？」

「う、うん、そうなの。つぐみちゃん家のカフェに行こうとしてたんだけど、ここがどこなのかわからなくて」

彼女は極度な方向音痴である。実際今いるところもつぐちゃんの家とは逆方向であるのに、なぜこっちに来てしまうのか。

「そしてなぜ俺は迷子の松原さんとよく会うのだろうか」

「青葉君？」

「あ、いや。なんでもない。つぐちゃん家なら俺も今から行こうかなって思ってたんだだけだ。良かったら一緒に行く？」

「ご、ごめんね。もうここがどこなのかわからなくて」

「全然気にしなくていいよ」

こうして俺の暇な暇な休日に松原さんを連れて行くという役目をする事となった。

「そういえば青葉君は何してたの？」

「おれ？俺は……暇だから街を1人でブラブラしてただけだよ」

「そ、そうなんだ……あれ？でも、今日って休日だよ。友達と遊んだりしないの？」

「うぐっ……」

痛いところを突いてくる松原さん。別に友達がいらないというのをバラしてもいいが、自分で言うのとそれは悲しくなってくるのであまり言いたくない。

「まあ……あれだ。たまには1人でこうしてブラブラしたいなっと思う事があるんだよ」

たまにはではない。いつもである。

「そっか……あ、ごめんね！1人でブラブラしたいのに私の用事につき合わせちゃって」

「気にしなくていいよ。1人より2人でいる方が楽しいしね」

むしろここで松原さんと会えたのはラッキーである。モカのバイト終わりまで楽しく過ごす事ができる。

「ありがとう、青葉君。青葉君つとつても優しいね」

「そうか？そんな事ないと思うけど」

「ううん、そんな事あるよ。私が迷子で困ってる時、青葉君はいつも私を助けてくれるんだもん」

「そりやそうだよ。困ってる女の子を見過ごす方がどうかしてるって話だし。それに松原さんってなんかほっとけない感じだし」

「ほっとけない感じ？」

「うん。なんていうか……困ってる時の姿が捨てられそうになっている子猫や子犬みたいな感じで」

それにあんな風になええ、と困ってるような鳴き声を言われたら流石にどうにかしてあげたいと思うのか人間というものだろう。他の人は知らないけど。

「子犬……そんな風に見えるのかな？」

「少なくとも俺にはね」

「そうなんだ……なんだか自分ではよくわからないかも。……そういえば。青葉君はつぐみちゃん幼馴染なんだよね？」

「そうだよ。まあ、つぐちゃんだけじゃなく、蘭やひまりちゃん。巴も幼馴染だぞ」

「う、うん。それでね、青葉君から見てつぐみちゃんってどんな子なのかな?」

「つぐちゃん?んー………何事も一生懸命頑張ってる、困ってる時はいつも相談に乗ってくれたり、助けてくれたりしてくれる凄く頼りになる女の子だと思うよ」

「そうだよ。私もつぐみちゃんに相談とかのってもらって、いつも助けてもらってるの。私より1つ歳下なのに凄くよだね?」

実際つぐちゃんはかなりしっかりしてるだろう。Afterglowの中でもあの子と巴は周りをよく見て行動してくれている。

「まあそれがつぐちゃんの良さだからね」

「確かに……じゃあ、モカちゃんは?」

「モカか………」

俺から見るとモカのいいところ。ありすぎるな。それを絞って少ない言葉で話すこと………

「無理だな」

「え?」

「モカの良さを二言三言で語ることなんて不可能だ。端的にまとめようとしても二十言くらいは必要になる」

「へ、へえ。そうなんだ」

「うん。モカは魅力的な妹だからな………って、あれ?心なしか松原さん、少し俺から離れてない?」

「う、ううん、そんな事ない、よ?」

「なぜ疑問形………」

そういえば松原さんには俺がとてつもないシスコンという話をした事がなかったような。だから少し引いてるのか?

「ま、まあいいや。その辺の話はつぐちゃん家のカフェでゆっくりしよう。もうすぐ着くしね?」

「う、うん。そうだね」

(も、もしかして、青葉君って凄くシスコンなのかな?)

「いらつしやいませー！あ、ラテ君。と、花音さん？」

「こ、こんにちは、つぐみちゃん」

「ここに向かおうとしていた迷子の松原さんを拾ってきた。席2つ空いてる？」

「え、あ、うん。空いてるよ。案内するね」

普段見ない組み合わせにまたついていけないのか、つぐみちゃんは戸惑いながらも席に案内してくれる。

「花音さんとラテ君が一緒って見た事ないからびっくりしちゃった……あ、ご注文は？」

「私はミルクティーと後……苺のショートケーキで」

「俺はカフェラテとチーズケーキ。後、つぐみちゃんのさいっこうに可愛いスマイルで」

「もう。ラテ君、そればっかりだよ？すぐ作るから待っててね」

いつもの俺の冗談にクスツ、と微笑んでくれたつぐみちゃん。今日もつぐみちゃんはとてもつぐみているみたいだ。

「仲、いいんだね？」

「ん？そりやもちろん。幼馴染だから」

「いいなく。青葉君とつぐみちゃんが羨ましくなっちゃう」

「そうかな？」

「うん！幼馴染って関係になんか憧れちゃうかも」

目をうつとりさせながら俺と少し遠くにいるつぐみちゃんを交互に見る松原さん。

「別に幼馴染って事にこだわらなくてもいい気がするけど。幼馴染じゃなくても、松原さんをつぐみちゃんは仲良いし、俺と松原さんも仲

良くなれたでしょ?」

「それはそうなんだけど……でも、青葉君は私の事を松原さんって呼ぶからなんだか少し寂しいかも」

「あー、それは……」

少し前にあつてからというものの、もう松原さんと呼ぶのに慣れてしまっていた。同い年なのにさん付けで呼ぶのもおかしな事かもしれないな。

「うーん……じゃあ、松原ちゃん? いや、なんか違う。でも、呼び捨てっていうのも微妙な感じだし」

「青葉君の好きなように呼んでくれて大丈夫だよ」

「そう? それじゃあ……花音ちゃん、でどう?」

「ふええ!?!」

「あ、ごめん。嫌だったかな?」

「う、ううん、違うの! いざ名前で呼ばれちゃうと恥ずかしかった……から」

モジモジしながら顔を赤くして俯いてしまう花音ちゃん。これは少し面白いかも。

「ねえ、花音ちゃん?」

「な、なーに?」

「呼んでみただけ」

「ふええええ……」

「……花音ちゃん」

「ふええええ」

「あはは。やっぱり反応が面白い」

「も、もう! からかわないでよ!」

ぷくー、と頬を膨らませて睨んでくる。うん、怖くない。むしろ可愛い。

「ごめんごめん。もうしないから」

「ラテ君、あんまり花音さんを困らせたらダメだよ?」

花音ちゃんの反応を見て面白がっていると、つぐちゃんがミルクティとカフェラテをそつと置いてくれた。いつの間に席に来てたん

だろう。気づかなかった。

「ごめんなさい花音さん。ラテ君が花音さんを困らせてるみたいで」
あれ、なんでつぐちゃん俺の保護者みたいになってるの？

「う、ううん、大丈夫だよ。青葉君っていつもこんな感じなの？」

「そう…ですね。多分いつも蘭ちゃんやひまりちゃんにからかわれるから、その影響なのかも」

「そんな事ないぞ！確かに蘭やひまりちゃんにはからかわれる事多いけど、でも、それとこれとは話が別!!」

「そうなの？」

「そうだよ。多分…おそろく…」

「青葉君、だんだん自信がなくなってきてるよ」

別にあいつらにからかわれる事が俺のストレスになっているわけではないはずだ。うん。絶対に。

「そ、それはそうと。俺も花音ちゃんって呼ぶわけだし、花音ちゃんも俺のことを好きに呼んでくれてもいいよ？」

「あ、うん。それじゃあ……………ラテ…君でいいのかな？」

「うん。それで大丈夫！」

「ラテ君…………ラテ君。な、なんだか改めて名前と呼ぶのって恥ずかしいね」

少し頬を赤らめながら俺の名前を呼んでくれる花音ちゃん。うん、可愛い。花音ちゃんは俺の癒しの人第3号になるかもしれない。

「そのうち慣れると思うから大丈夫。じゃあ改めて。これからもよろしくね、花音ちゃん」

「こ、こちらこそ。よろしくね、ラテ君！」

改めて花音ちゃんと仲良くなれて気がした。いやー、よかったよかったです。

「…………2人とも、私の事忘れてないですか？」

「あつ…………」

別につぐちゃんの事を忘れていたわけではないけど、なんだか恥ずかしい思いをさせて、申し訳なくなつた俺達は追加で飲み物を頼んだ後、つぐちゃんも交えて3人でお茶しながら楽しんだ。

第30話 ラテの妹になる4人とラテの幼馴染なモカ

蘭ver

「兄さん、ちよつといい?」

「ん、どうした蘭」

自室で本を読んでいると、扉をノックしてきて入ってくる蘭を出迎えた。

「えつと、その……あたし達もうすぐライブするんだ」

「そうなのか? だったら今度またみんなに差し入れ持って行ってあげようかな」

「う、うん。それも嬉しいんだけど……できれば兄さんにもあたし達のライブを観に来て欲しいんだ」

そう言って蘭は俺にライブのチケットを渡してくれた。

「……うん、大丈夫。この日ならバイトも休みだし空いてるよ」

「ほ、ほんとに?」

「そんな事で嘘つくわけないだろ。でも、そんな事を言うなんてどうしたんだ? ……もしかして、父さんのために蘭の勇姿をビデオで撮ってあげればいいのか?」

「そ、そんなわけないじゃん! バツカじゃないの!?!」

「それはそれで父さんがかわいそうだぞ……でも、それならどうして俺にライブを観に行つて欲しいんだ?」

「そ、それは……その」

理由を聞くと、蘭は顔を赤くして言いにくそうにモジモジし始めた。

「あ、別にいいんだぞ。無理に話さなくても」

「いや、言いにくいっていうか」

蘭は息を吸って、吐いてと二回ほど繰り返すと俺の目をじっと見て言い始めた。

「……兄さんがあたし達のライブを実際に見に来てくれてるって思っ

たら、あたしはその日のライブをもっといいものにできる、と思ったから」

赤かった顔がさらに赤くなっていくのを御構い無しに、蘭は最高に嬉しい事を言ってくれた。

「そっか……わかった。絶対に観に行く。だから、蘭は俺含めた観客をその日で一番魅了できるような最高の演奏をしてくれよ？」

「うん。わかってる。あと……」

「ん？」

「明日からも練習とか頑張れるように……頭、撫でて欲しい」

「……ああ。気がすむまでいくらでもしてやるよ」

蘭を俺の隣に座らせてあげて、俺は蘭が良いと言うまでずっと蘭の頭を優しく撫でてあげた。

ひまりver

「お兄ちゃんお兄ちゃん！これ見て!!」

「なんだひまり。朝から騒がしい……」

休日の朝。ひまりが自室から俺の部屋へと飛び込んできた。せつ

かく二度寝しようと思ったのに。

「これー!」

「何々……『カップル限定、駅前にあるスイーツ店。どんなスイーツでもお一人様お一人無料』……え、まじで!!?!!」

「お兄ちゃん、これはいくしかないよね?」

「ああ!!……って思ったけど、俺ら兄妹だぞ。一体どうやって誤魔化すつもりだ?」

「ふっふっふー。大丈夫だよお兄ちゃん!」

悪い笑みを浮かべたひまりは俺の左横に立って、右手で俺の左手を握り、もう片方の腕で俺の腕に抱きついた。

「こうしてお店に入ったらどこからどう見てもカップル、でしょ?」

「ひまり……お前天才か!!」

「えへへ。そうでしょ?」

「ああ!そうと決まれば早速駅前に向かうぞ!!」

「おおー!!」

駅前に行くために準備をした俺達はひまりが見せてくれたチラシを持ってすぐに駅前に向かった。そして、ひまりの考えた策を講じてお店の中に入ろうとした。のだが。

「まさか学生証が必要だったなんて……」

「きつと俺達みたいな兄妹で来ようとするやつ対策なんだろうな」

お店に入った瞬間、店員から学生の提示をお願いされたため、お店から出た。

「うう……スイーツ、食べたかったな」

「ひまり……」

俯きながら残念そうにつぶやくひまり。そんなひまりの頭をポンポンと優しく叩いてあげる。

「そうだな。俺もスイーツが食べたい。だから食べに行くか」

「えっ?」

「つぐちゃんのところにお邪魔しに行こう。ひまりの好きなものなんでも奢ってやるから。だから元気出せ。なっ?」

「えっ………いいの、本当に?」

「もちろん。ほら、だから早く行こうぜ」
ひまりの腕を引つ張ってつぐちゃんの家の方へと足を向ける。
「お兄ちゃん、ありがとう!!お兄ちゃんの事、大好き!!」
「俺もひまりの事が好きだよ」

バ ver

「あー、また負けたー!!もー!おにーちゃん強すぎるよー!!」
「はっはっはー。日々友達と遊ばずにバイトかゲームしかしていない俺に勝とうなんてまだまだ早いわー!」

隣で頬をぷくーつと膨らませるあこ。そんなあこの頬を指で突っついていじる俺と、俺達を見守る巴。実に充実した休日だ。

「むうー!!もう一回!!」

「いいぞー。何度でも相手してあげる」

「ストップだ、あこ、兄貴。もう1時間くらいしてるんだし1回休憩した方がいい」

「えー!あこ、まだ1回も勝ててないのに〜!!」

「休憩だ。もうすぐ昼飯の時間だからな。兄貴もしっかりしてくれ」

「わ、悪い。あことゲームするのが楽しすぎてつい」

「ったくー。ゲームが楽しいのはわかるが程々にするんだぞ」

「ご、ごめんなさい」

2人で巴に頭を下げて謝った。俺が一番上なのにどうも巴には頭が上がらない。

「まあ、わかっているならそれでいいよ。で、昼飯はどうする？」

「そうだな……1日中家にいるのもアレだし、何か食べに行くか？」

「あこはおにーちゃんとおねーちゃんが一緒ならどこでもいいよ」

「俺もどこでもいいかな。て事で今日はラーメン食いに行くか」

「え、いいのか？」

「どっか食べに行くって言った瞬間巴の顔にラーメン食へに行きた
いって書いてあったんだよ」

「え!?嘘だろ!？」

巴が凄くラーメン食べたいなく、って顔をしているのはすぐわかった。おそらく俺でなくても気づく。蘭でもモカでも絶対に気づくはずだ。

「わかりやすすぎ。な、あこ？」

「うん!おねーちゃん超わかりやすかったよー!」

「マジかー。なんだか恥ずかしいな」

「そんな事ないだろ。俺もあこも巴の好きなものなんてなんでも知ってるしな」

「うん!あこ達家族だもん!」

「そっか……そうだな。よし、じゃあちよつと準備してくるよー!」

「あこも!おにーちゃん、ちよつと待っててね!!」

そう言つて2人は軽い身支度をして、3人で一緒に家を出てラーメン屋へと歩き始めた。

「2人とも早く早くー!!」

「はいはい。……つとそうだ。巴、これ」

「ん、なんだ？」

「安もんだけどへアゴムだ。お前髪長いからラーメン食うとき大変だろ?だからそれをやるよ」

「兄貴……………」

へアゴムを受け取ると巴は歩いてる足を止め、その場から動かずじーっと棒立ちし始めた。

「ま、まあアレだ。俺もあこに構ってばっかだしな。巴にも何かしな
いとつて」

「へアゴムならもう持つてるぞ」

「思ったんだよ……………って、はあ？」

「いや、へアゴムならもう持つてるよ。ほら」

服の右ポケットから取り出したのは、たしかにへアゴムだった。

「え、マジ？なんで持つてんの？」

「なんでって……………兄貴の言った通りだよ。ラーメン食うときに髪邪魔になるからいつも結んで……………まさかアタシがラーメン食うときいつも髪結ばずに食ってると思ってたのか？」

巴の問いに俺は無言で頷いた。

「……………あははははは！そんなのアタシが一番理解してるに決まってるだろ。兄貴、バカだな」

「う、うるせえ!!バカって言うな！」

「はあ……………あー、流石兄貴。面白いな！」

「笑うなあ！そんなに笑うなら返せ!!」

「ごめんごめん。もう笑わない。ありがとな、兄貴。これは大切に使用わせてもらうよ」

そう言っつて巴は古いへアゴムをポケット中に入れ、俺が手渡した新しいへアゴムで髪の毛をくくった。

「どうだ兄貴。似合うかな？」

「……………ああ。似合ってる。カッコいいぞ、巴」

「カッコいい……………か。まあそれでいいや」

「おにーちゃん、おねーちゃん!!何してるのー。早くいこーよー!!」

「わかってるー!ほら行こうぜ」

「ああー!」

後ろで髪の毛をくくった巴はいつもと雰囲気が変わって、その姿はとつても巴に合っていた。

「兄貴、ラーメン屋まで競争するか！」

「はあ!?いきなり何言って」

「兄貴が負けたら昼飯全部奢りだからな！」

「あ、おい待て！フライングは卑怯だぞー!!!」

つぐみver

「いやー、暇だなく」

「お兄ちゃん、お仕事中にそんな事言ったらダメだよ」

店内の掃除をしながら呟くと、つぐみに注意されてしまった。

「仕方ない。ここは愛する妹であるつぐみを愛でながらお客さんを待つとするか」

「それは……………いつお客さんが来るかわからないのにそんな事してちゃダメだよ」

「ちえー。つぐみのケチー！」

「ケチじゃないよ。お兄ちゃんがお仕事サボろうとするからだよ！はい、これ箒とちりとり。一緒にお店の掃除しよ」

「はい」

つぐみに促されて仕方なく俺は店内の床を隅から箒で掃いていくことにした。にしても最近つぐみは店の手伝いにしろ、バンドにしろ生徒会にしろと色々頑張ってるな。

「……………なあつぐみ」

「どうしたの、お兄ちゃん？」

「今度一緒にショッピングモール内の喫茶店に行くか」

「別にいいけど……………急にどうしたの？あそこの喫茶店のケーキ、結構高かったと思うけど？」

「いや、最近つぐみが頑張ってるなあ、って思ってたさ。そのご褒美でも思ってた。あと、お兄ちゃんとしての株を上げておきたい」

「最後の一言は絶対いらなかったよね。……………でも、嬉しいな。私が忙しいのもあったけど、あんまりお兄ちゃんと一緒に遊びに行けなかったし」

「だろ？俺も久しぶりにつぐみと一緒に出かけたいしな。じゃあ、今度の日曜日なんてどうだ？」

「ちよつと待ってね」

ポケットから携帯を取り出して確認するつぐみ。俺に散々注意しといて自分はいいいのか？まあこんな時に予定聞いた俺が悪いんだけど。

「うん、大丈夫！その日なら空いてるよ」

「じゃあその日にするか。早めに行ってどっか色々回るのもありかもしれないな」

「あつ。だったら服屋さんに行きたいな。この前ひまりちゃんに教えてもらった服を見に行きたいから」

「全然いいぞー。なんなら俺がつぐみをコーディネートしてあげようか？」

「それは大丈夫！お兄ちゃんあんまり服のセンス良くないから」

「うつ……………結構ズバツと言ってくるな」

「ごめんね。でも、事実だから」

「酷い。さらに傷ついた」

「ふふっ。でも、楽しみにしてるね、お兄ちゃん！」

「ああ。任せとけ」

俺が親指をグツと立てると、つぐみは微笑んで再び掃除に戻ろうとした。

「……………あ、そういえば。お兄ちゃん」

「ん？どした？」

「えっと……………さっき言ってた、私を愛でる？って言ってたやつ。あれ、私が寝る前になら別にいいよ？」

「えっ……………」

「そ、それだけ！さっ、お仕事頑張ろう！」

恥ずかしがって焦っているのか、つぐみはさっき箒で掃いたところをもう一度掃き始めた。でもそうか……………寝る前にならつぐみの事をいっばいめちやくちやに愛でていいのか。

「覚悟しとけよー。つぐみ自身が恥ずかしくなるくらい愛でてやるからな」

そう決意した俺は再び掃除を再開した。

モカ ver

「おー。らつくんではないですか」

「ん？ああ、モカか。おはよ」

「おはよ。らつくんは今日も1人なの？」

1人商店街をブラブラ歩いていると、前方からチョココロネを食べながら歩いているモカが近くに寄ってきた。

「まあ…そうだな。今日もどうやって過ごすか考えながら1人で歩いてた」

「ふむふむ。ということは、らつくんは今暇って事なんだよね？」

「そう…だな。暇だ」

「じゃあ、ここはひとつ、モカちゃんとお出かけなんていかがでしょう？」

「それは別に構わないけど。どっか行きたいところでもあるのか？」

「うーん…：特にないね」

「おい」

「まーまー。とりあえず、モカちゃんは今らつくんとお出かけしたい気分なんですよ。あーむ」

そう言っつてモカは鞆から新しいパンを取り出して食べ始めた。

「…：モカ。自分で結構恥ずかしい事を言っつて気づいてるか？」

「んー？」

「まあいいや。それじゃあ可愛くて美しいお姫様、モカちゃんをエスコートさせてもらうとするかな」

「おー。らつくん、モカちゃんのことをわかってるねー。そう。あたしは可愛くて美しいパンの国のお姫様だったんだよ！」

「はいはい。それじゃあ行きますか」

「あー、ちよつとー。流さないでよー」

先を歩こうとする俺にモカが小走りで追いついて、2人で並んで一緒に歩く。

「…：…：そういえば、最近バンドの練習は頑張ってるのか？」

「もちろんだよー。もうモカちゃんのおててにママができたり、それ

がつぶれちゃったり。それはもう大変なくらい頑張ってるよ」
「へえ……どれどれー？」

パンを持つていない方のモカの手を取って、俺はモカの手のひらを確かめてみる。確かにマメができたりしてる。若干指先が硬くなってる気もする。

「やっぱりギター弾いてると指先って硬くなるのかな。なあ、モカ………モカ？」

「らつくん……ちよつと恥ずかしいかも」
「へっ？」

俺は気づいてなかった。ここは人通りの多い商店街。そして今日は休日。人通りはいつもより多いはず。そんな時に俺は咄嗟にモカの手を取って、にぎにぎと手の感触を確かめていたのだ。モカが顔を赤くして俯くのは当たり前前である。

「うわっ、ご、ごめん！っつい！」

咄嗟にモカの手を離して俺は周りを見渡す。案の定、商店街を歩く人々がこつちを見ていた。『あらあら』とか『若いっていいね』という声が聞こえてくる。

「もー。………らつくんのバカ」

「ごめんって。ほら、いこうぜ」

俺たちは早足でその場を後にして、そのまま公園に入った。休日という事もあって、公園では子どもたちが一緒に遊んでいる。

「はあー。ここまですれば大丈夫だな」

「そーだね」

少し急いだためか、モカは少し息を整えていた。

「ふうー。もー、らつくん」

「はい」

「人前であんな事するなんて酷いよー」

「ご、ごめんなさい」

「ダメー。許さない」

まあ、怒られても当たり前な事を俺はしでかしてしまったわけだ。でも、どうにかして許してもらいたい。

「どうしてもダメか？俺ができる事なら何でもするから」

「……………ほんとにー？」

「あ、ああ。できる範囲なら、だけど」

「じゃあ〜」

少し悩んでモカは鞆を持っていない空いている方の手で俺の手を握った。

「も、モカ？」

「今日はこうやってあたしとお出かけする事〜」

「え……………あ、ああ。わかった」

ギョツと手を握ったモカの手を俺も優しく握り返してそのまま歩き始めた。

「……………な、何だか恥ずかしいな」

「そーだね〜。モカちゃんのお顔がきつとリンゴのように真っ赤になってるよ〜」

「またまた、そんな冗談を……………つつ……………!？」

冗談ではなかった。確かにモカの顔がとても真っ赤になっていた。それはもう耳まで真っ赤になるようなくらいに。

「あ、えと……………このままつぐちゃんの家に向かうか」

「ううん。今日はこのままらっくんと2人で歩いてたい気分〜」

「そ、そっか……………じゃあこのままぶらぶらするか」

そうして俺たちは2人で手を繋ぎながら街をぶらぶらしてその日をゆったりと過ごした。

第31話 女装をしたくないラテと準備のいいモカ

「じーっ……………」

「そういえばこの前……………って、ひまりちゃん？どうかしたの？」
つぐちゃん家のカフェでお茶している俺たち幼馴染6人。普通にお喋りして楽しんでるところだったが、何故か対面にいたひまりちゃんにはじーつと俺の顔を見つめていた。

「ひーちゃん。お兄ちゃんの顔見つめてどうしたの？」

「いやー、ふと思っただけ……………」

「思っただけど？」

「ラテさんって女装したら、似合いそうじゃない？」

「……………はい？」

いきなり何を言っているんだこの子は。女装？誰が？似合う？

「ははは。そんな変なこと口走るのはこの口か？この口なのかな？」

「いふあいふあい！いふあいふ、らてふあん」

悪意のあるような言葉に俺はひまりちゃんの頬つぺたをぎゅーと引っ張った。あ、お餅見たい。柔らかくてプニプニしてる。

「お兄ちゃん。今変なこと考えてたでしょー？」

「滅相もございません」

モカの言葉で冷静になった俺はひまりちゃんの頬つぺたから手を離した。

「もう！酷いですよ！」

「いや酷いのはひまりちゃんですよ。人の顔じーつと見つめて女装が似合いそうとか何言ってるの？」

「ほら、ラテさんの顔ってどっちかって言ったらあんまり男の人！って感じじゃないですか」

「ひでえ。本気で傷つく」

「確かに。ラテってラテのお母さん似っばいよね」

「でしょでしょ！それにラテさんって色白だし、細身だし。ちよっと身長高めだけど、いけると思うんだよね」

「言われてみれば……………そうだな」

「うん。いけるかも」

ひまりちゃんの指摘に頷く蘭と巴。どうしよう、ものすごく嫌な予感がする。

「なので、ラテさん」

「言いたいことはわかるけど、とりあえず言ってみて？」

「女装して『断る!』もー!最後まで言っていないですよ!」

「絶対嫌だぞ。こればかりは譲らん」

何が楽しくて女装なんてしないといけないんだ。断固断る。

「大丈夫ですよ!私がラテさんを可愛くしてみせます!」

「なおさら断る」

「うう……酷い」

「あーあ。ラテがひまり泣かした」

「本当だ。ひまり可哀想」

「蘭、巴。そうやってひまりちゃんの味方しても無駄だぞ。今回ばかりは絶対譲らないから」

「「ちっ」」

「おい今ちっ、って言ったな」

こういう時三人が協力して俺を追いやろうとしてくるのはわかっていた。その手には引つかからないぞ。

「とにかくくしないっいたらしないからな」

コーヒーも全部飲み干して、そのまま荷物を持って帰ろうとすると両隣に座るつぐちゃんとモカに服を掴まれた。

「えっ?」

「えーっと。私もラテ君が女の子の格好してるの見てみたいなー、なんて」

「つぐの意見にさんせい。お兄ちゃん、一回女装してみてはいかがでしょう?」

「嘘……だよな?モカとつぐちゃんは俺の味方だと思ってたのに、嘘だよな!」

2人は絶対ダメだっというと思ってたのにまさかの裏切り。これは俺も予想できなかった。

「何事も挑戦だよ〜」

「こんな機会ないだろうし、せつかくみんな揃ってるし、ね、ダメかな？」

「やだ。絶対やだ。死んでもしたくない」

「だ、だよね」

あはは、と苦笑いしながら頷くつぐちゃん。だがどうしたものか。つぐちゃんはともかく他の4人は諦めるかと言ったら微妙なところだ。何か手を打たないと、モカが俺をお姉ちゃんと呼ぶことになる。そんなのは絶対に嫌だ！なにか、何か手を……………そうだ！

「ひまりちゃん、女装やってあげてもいい」

「え、本当『ただし!!』？」

「みんなが男装するなら、してやる」

「みんなって」

「あたしたち全員が？」

もかをのぞく4人全員で顔を見合わせた。モカだけ幸せそうにケーキを食べている。てか、もう俺の女装のことはどうでもよくなつたのか？

「あたし達全員に男装させようとするなんて、ラテやっぱり最低だね」

「親友の兄貴に女装させようとする鬼畜蘭に言われたくねえな」

「……………バカ」

「理不尽だなおい」

なぜ罵倒された。悪いのは女装させようとしてくるこいつらのはずなのに。

「とにかく。俺を女装させたいならみんながこの条件を飲むこと。それが出来ないなら俺女装なんてしない」

「んー、別にいいよ〜？」

「ほら、別にいいって言ったろ。だからこの話はもう……………えっ？」

「モカちゃんは別に男装してもいいよ。楽しそうだし〜」

ケーキを食べ終えたモカが口の周りを拭きながらそう言った。え、待って。なんでモカは男装すること許可してんの？

「まあ、アタシも別にいいかな。アタシ達が男装するのは恥ずかしい事じゃないし」

「うん、あたしも。それよりもっと面白いものが見られるんだし」
モカに続いて蘭と巴も了承した。え、ちよっと待って。これやばくない？

「わ、私が男装……？絶対に合わないような……」

「似合うか似合わないかじゃないよつぐ。私たちが男装すればラテさんは女装してくれるんだよ！」

「た、たしかに。私だけじゃないならやってみてもいいかも」

「だよね！そして私もオツケーです！」

「お、じゃあ全員男装する事に賛成だな」

3人に続きつぐちゃんといまりちゃんも了承。つまり、幼馴染5人全員が男装する事をオツケーしたという事。どういふことか。俺に逃げ場がなくなるということ」

「さあ、ラテさん。覚悟ですよ！」

「確か、アタシ達が男装するならラテも女装するんだよな？」

「男に二言はないよね？」

「お兄ちゃん、覚悟〜」

「ご、ごめんねラテ君」

5人がジリジリとにじり寄ってくる。ひまりちゃんなんか凄い悪い笑みを浮かべて近づいてくるもんだから正直怖い。

「……………さらばー」

「あ、逃げた!!」

店の扉を開ければ俺の勝ちだ！そして幸い俺は店のドアに近いところにいる。これならば俺が先に出れるのは確実。この勝負俺の勝ち

「こんにちは〜。モカに用があつて来たんですけど……………つて、ラテ。何してんの？」

なんて事はなかった。なんて事だ。逃げ切れるはずだったのに、突然現れたりサに行く手を阻まれてしまった。さながらボスをもう少しで倒せそうなのに、取り巻きのザコモンスターがボスのHPを回復

する絶望感……

「リサさんグッドタイミング！」

「でも、どうしたんですか？モカに用があるとはいえタイミングが良すぎる気がするんですけど」

「え、あ、うん。さつきモカから『とーつても面白い事があるので、今からつぐの家にしゅーごー』って電話が来たんだけど」

「モカーーーーーー！！！！」

下手すれば隣の家にも聞こえるんじゃないかと言う声で叫んでしまった。今お客さん誰もいなくてよかった。ていうか、いたらこんな風に騒ぐこともできない。

「モカはリサさんと呼んだのか。じゃあアタシもあこを呼ぼうかな」

「じゃ、じゃあ私は花音さんを」

「じゃああたしも日菜さんを」

「3人ともほんとやめて！なんで今日はみんなでそんなにいじめるの！！」

巴もつぐちゃんも蘭もモカも。なんでそんな俺の事をいじめてくるんだよ。泣きそう。

「モカ。ラテがもうこれ以上にならないくらいに落ち込んでるけど、何したの？」

「えつとですね〜」

「てな事がありました〜」

モカの提案により、お店の中では邪魔になると、一度俺の家に移り先ほどの話の続きを。モカはいつものものんびりとした口調でリサに

事情を説明していた。

「なるほど、そういう事が。ダメだよひまり。男の子の気持ちをもつと考えると。ラテだつてかつこよくいたって思ってるはずなんだから」

「り、リサ……………」

「たしかに、ラテを女装させてみるのは面白そうだけど」

「リサー……………!!!」

味方だと思つたのに突然の裏切り。いやよく考えたら元から敵だつたか。俺もうキレていいのか？それ以前に帰っていいか？もう帰ってもいいよな。

「……………あ、ごめん電話がきた。一回出てくるからちよつと待つてて」
携帯をポケットから取り出しながら立ち上がり、部屋から出ようとする。すると巴とひまりちゃんに俺の手を片方ずつ掴まれた。

「……………どうしたんだ2人も。今バイト先から電話かかってきてるんだ。もしかしたら人が足りないという話かもしれないし、手を離してくれないとか困るんだけど？」

「そうやって逃げようとするのは男としてどうなんだ？」

「……………女の子に手を握られるのはとても嬉しい事だけど今はその時じゃないし、早く離して欲しいんだけど？」

「ラテさん、観念して女の子になりましょう？」

俺の言葉を無視してさらに手を握る力を強める2人。ダメだ。これ絶対逃げられない。

「……………あ、そうだ！服はどうするんだよ！」

「服？」

「そう！モカの服なんて俺絶対着れないぞ。サイズ違うし。という事は服がない。それはつまり、女装をする事はできないという事！」

「……………ラテさんの言うことは一理ある」

「てか、どんだけ女装したくないんだよ」

巴がボソツと突っ込んでくる。当たり前だ。誰が好き好んで女装なんてするもんか。するのはそういう事をするのが好きな一部な人間だけ。俺は違う！

「よし。これで俺の女装する計画は無理になったな。じゃあみんな解散だな。いやー、よかつたよかつた」

「お兄ちゃん」

「どうしたモカ？今なら俺山吹ベーカーリーのパンを買って………あげる………けど？」

俺を呼ぶモカの声に振り返りモカの方を向くと、何故かモカは女物の服とスカートを俺に広げてみせた。明らかにモカのサイズとは違う大きいサイズのそれを。

「………えーつと、モカさん？それは一体」

「ふっふっふー。こんな事もあるうかとモカちゃんは一回り大きいサイズの服とスカートを買っていたのだよ」

「嘘、だろ？」

「………あ、その服。モカちゃんと服を買いに行った時に、モカちゃんがサイズ間違えて一回り大きいのを買っちゃった時のやつだよね？」

「もー、つぐー。バラさないでよ」

「まあ、モカらしいといえばモカらしいよね」

「あははー、それほどでも」

「いや褒めてないから。……もしかしてこの事を予測してモカの家に場所を変更したの？」

「さあー。それはどうでしょう？」

………やつとわかった。今回のことに関してはモカは完全なる敵である。もう味方だと期待してはいけない。つまりこれは俺とモカの兄妹の仲を考え直さないといけなくなるかもしれない。

「モカ、後で覚えとけよー。俺絶対モカに仕返ししてやるからな」

「そんなー………モカちゃんはお兄ちゃんのためだと思っただけなのに………」

「いやもう許さない。俺を怒らせたらどうなるか後でその身に味合わせてる」

「つぐー、お兄ちゃんが怖いよ」

「ら、ラテ君。モカちゃんも悪気があってやったわけじゃないと思う

し」

「いや、悪気かないでしょ」

「つぐの家からモカの家に移す事を提案したのもモカだし」

「…………モカ、俺はモカを許さない。もう今日はお前と喋らないからな」

「あーあ。ラテが怒った」

「モカ、どうするのー？ラテが怒ったみたいだけど」

「だいじょーぶですよりサさん。モカちゃんはお任せあれ」

トコトコ、とこつちに歩み寄ってくるモカ。

「ねえねえー、お兄ちゃん？」

「……………」

「無視されたー。悲しいよー…………」

ぐつ…………。モカから話しかけてくれたのに無視するのは少し辛い。だが俺は今日モカとは話さないと今さっき決めたのだ。これは突き通す。

「もし、お兄ちゃんが女装してくれて、さらに、モカちゃんの事を許してくれるなら」

…………わかったぞ。この後言葉が。おそらく俺に何かをしてあげるから、的なる事を言うつもりだろう。俺はそんな言葉に惑わされないぞ。俺の精神が強くて硬い事を今ここで証明してやろう。

「許してくれるなら」

「……………」

「お兄ちゃんと3ヶ月、一緒に寝てあげるね」

「おいみんな！服よこせ!!今すぐ着るから!!」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

俺とモカ以外の4人の想いが通じた瞬間だった。まさかつぐちゃんまでチョロい、なんて言うとは…………おそるべしモカ。

「モカ、約束だからな！」

「もちろん。モカちゃんは約束を破らないよ」

「よし、じゃあ、かかってこいだ！」

「ラテ…………ホントにチョロいな」

「うん。というかよくモカも3ヶ月一緒に寝るって提案したよね。アタシなら絶対無理」

「というか初めからモカにお願いしてもらえればよかったんじゃない？」

「確かに。ラテ君、モカちゃんのいう事なら基本何でも聞くからね…」

「何はともあれ！ラテさんの女装計画開始です!!」

「お兄ちゃん、頑張って〜」

「任せとけー!」

なにを頑張ればいいのかわからないがとりあえずモカから受け取った服とスカートを着ることにしよう。そうすれば俺はこれから3ヶ月、夜寝るときもモカと一緒に幸せに過ごさることができるのだから。

第32話 酷い目に遭わされがちなラテ

前回までのあらすじ！

ひまりちゃんの提案でなぜかいきなり俺が女装させられる羽目になってしまった！

「……………なあ、リサ？」

「んー、どしたのー？」

「ここまでするのか？」

モカから受け取った服とスカートを着た俺はそのままリサの指示に従い椅子に座らさせられた。普通に女装するならここで終わっていいだろう。だがリサはやる気満々なのか、化粧道具まで取り出して俺に化粧してくれている。

「当たり前じゃん。むしろこれから本番だよ？だから動かないでじっとしててね〜」

「り、りようかい」

ここまでやる必要があるのかと言われればぶつちやけのところないだろう。だがモカと3ヶ月一緒に夜を共にする交渉権を得た今、俺は従うしかない。従うしかないのだが……

「……………リサ」

「はいはい？」

「暇だ」

「と言われてもな〜。後15分くらいはこのままじっとしててもらわないといけないよ」

「それは困るな。俺がモカー！と叫びたくなるくらいやばいかもかもしれない」

「それは正直やめて欲しいかな……………」

ちなみにモカ達5人は1階のリビングで待っていてくれる。俺に、完璧な女装が完了するのを楽しみにしてるね〜、と言って下に降りていった。

「んー、そうだな〜…………ラテって男の子で仲良い友達ってほとんどいないよね？」

「いないな。1人もいない」

「なんで自信持ってそんな事言い切れるの？」

「事実だからな。リサには隠す必要なんてないし」

「あはは………ってそうじゃなくて。逆に女の子で仲良い子は何人くらいいるの？」

「女の子？えっと、モカ、蘭、つぐちゃん、ひまりちゃん、巴だろ。後はリサにモカ、それにあこちゃんに沙綾、日菜、モカ、花音ちゃん。後この前花音ちゃん経由で1人仲良くなった子がいるから……全員で13人かな？」

「うん、モカが3人くらい出てきたから2人省いて11人だね」

省かれてしまった。俺の最愛の妹は何人いてもおかしくないはずなのに。

「ていうか、モカは妹だからカウントしなくていいよね？」

「おまつ！俺からモカを除いたら何が残るんだよ!!」

「いや、わかんないけど」

俺の中からモカを除くなんて。リサの頭は一体どうなっているんだ？

「でね、思ったんだけど。なんでラテって男の子の友だちができないの？女の子はこんなにたくさん仲良い子がいるのに」

「学校に女の子の友だちがいるわけでもないけどな。というか、学校に友達は1人もいない」

「言い切ったね」

「事実だしな」

なんか自分で言ってる悲しくなってきたな。おかしいな、目が少し潤んできた。

「まあ、でもあれだ。俺に友達が1人もいないのは、俺自身から友達を作ろうとしないからな」

「えっ、どういう事？」

「そのまんまの意味だよ。モカの幼馴染で気がついたら仲良くなっていた蘭達。巴経由で仲良くなったあこちゃん。モカ経由で仲良くなったリサと沙綾と日菜。迷子になってるのを助けた花音ちゃん。

で、花音ちゃん経由で仲良くなったその子、だ」

「……………なるほど。ラテから話しかけて仲良くなったのは花音から
いって事か」

「そゆこと。まあ、もう一つ理由があるとすれば……………」

「あるとすれば？」

「……………考えてみる。学校にいるほとんどの時間で妹の事を考えてるや
つと仲良くなりたいたいって思うか？」

「それは……………たしかに。というか、8割型それが理由な気もするね」

「みんなー、ラテの準備完了したよー」

「リサさん、お疲れ様です！」

「ラテ君は？」

「扉の向こうだよー。みんな準備はいい？」

「はい！」

「どんな感じなのか少し楽しみになってきたな」

「気持ち悪い感じじゃなければあたしはいつでも」

「ら、蘭ちゃん！」

「さてさてー、お兄ちゃんは一体どんなお姿に」

「じゃあ、扉開けるよ」

そう言つてリサは扉を開けた。

「……………」

みんなが女装した俺の姿を頭のとっぺんから足のつま先まで
じーっと眺めているのがわかる。無言が一番辛いから何か言つて欲

しい。

「……………か」

「か？」

「可愛いです!!!」

「えっ？」

「えっ?じゃないですよラテさん。すごく可愛いです!」

「ホントに。一瞬ラテ君がどうかわからなかったもん」

「ああ。女のアタシが自信なくすくらいに可愛いな」

「うん、可愛いねラテ」

「お兄ちゃん、……………ううん、お姉ちゃんだ。お姉ちゃん、すごく可愛いよ」

「んなっ!!?」

まさかモカにお姉ちゃんなんて呼ばれるなんて……………最悪だ。死にたい。

「そ、そんなに可愛いのか？」

「めちやくちや可愛いですよ!あ、写真撮ってもいいですか？」

「やだ。断る」

「そんなあ!」

「当たり前だろ!っておい蘭、無言でカメラをこっちに向けるな!」

「バレた」

「バレバレだ!というか誰か鏡貸してくれないか?まだどんな感じになったのか見てないんだよ」

「ちよつと待ってね。……………あつた。はい、ラテ君」

つぐちゃんから手鏡を借りて今の自分の姿を見してみる。丁寧な化粧が施されている。というか……………

「……………誰だこれ?」

「お姉ちゃん」

「お姉ちゃんじゃない!」

「今はお姉ちゃんだよ。ね、トモちん」

「ああ。今だけラテじゃなくてラテ子ちゃんに改名したらどうだ?」

「いや誰だよラテ子ちゃんって!!」

不名誉だ。もうちよつと可愛い名前をつける努力をして欲しいものだ。

「いやあ、まさかラテの女装がこんなうまくいくなんて。あ、あこと日菜から返信きた」

「おいちよつと待て。いつ俺のこの姿送ったんだよ！」

「ラテが蘭と話してて油断している隙にね。えーつと、あこからは『ラテおにーちゃんじゃなくてラテおねーちゃんになってる!?!』だって。

で、日菜からは『ラテちゃんの姿、ピピってきてるんっ!♪っでする!』ってさ。良かったね、ラテ！」

「何が良かったのか全くわからないんだけど？」

あこちゃんはともかく日菜のセンス独特すぎて意味わかんない。というかラテちゃん言うな！

「なあ、みんな満足しただろ？この格好なんか落ち着かないし……着替えてもいいいか？」

「え、何言ってるのラテ。本番はこれからだよ」

「えっ？」

「リサさんが何のためにここまでしてくれたと思ってるんですか？」

とてつもなく嫌な予感がする。リサのやけに凝ったメイクが俺にそう感じさせていた。

「アタシ達も一緒にいてやるからさ」

「ラテ君、ごめんね？」

「おい、まさか……」

「お姉ちゃん、今から一緒にお出かけのお時間だよ」

「……………さいっあくだ」

あの後必死に反論してみたが、5対1で勝てるわけもなく、この後練習があると帰ってしまったりサを除いた6人で一緒に出かける事に。

「イジメだ。こんなのもうイジメ以外のなにものでもない。もうみんな嫌いだよ」

「ラテさん泣いちゃダメですよ！メイク崩れちゃうます」

「それより先に俺の豆腐メンタルが崩れ落ちそうだよ」

「ダイジョーブ。お姉ちゃんの可愛い姿はモカちゃんが保証してあげるから」

「モカ、励ましてくれてるんだらうけど、全然嬉しくない」

俺の横をぴったりとくつついて歩いてくれるモカが励ましてくれるが、俺のメンタルにはなにも通らない。

『なあ、見ろよ。あの超美人』

『ホントだ。いや、よくみたら6人とも可愛い』

すれ違う男子2人組から俺たちを褒める声が聞こえる。

「ふふっ、よかったねラテ。『可愛い』って言ってもらえて」

「嬉しくない……生きてきた中でもダントツで嬉しくない」

「で、でも今のラテ君はほんつとうに可愛いと思うよ！それこそ、私なんて霞んじやうくらい」

「つぐちゃん、励ましてくれてるところありがたいんだけど、本当に辛いからやめて欲しいかな」

可愛いって言うてくれるのはここにはいないリサのおかげだろう。このことを褒めるならリサを褒めるといい。俺はなにもしてないし、俺が可愛いわけでもない。

「はあ………生きるって辛いんだな」

「ラテが意味わかんないこと言いだしたぞ」

「うーん、ここまで落ち込んでるのを見ると流石に罪悪感が」

「わ、私もあんまりラテ君の気持ち考えてあげられなかったかも」

「まあ、あたしはもう十分楽しめたし」

「だねー。それじゃあ、ちよつと早いけど、そろそろ『あ、あの!!』」

俺以外の5人がヒソヒソと話していると、1人の男が俺に声をかけてきた。つて、あれ……こいつどこかで見たとあるような……

「えと、何か用ですか？」

『えと、その………いきなりで申し訳ないんですけど………』

なんだこいつ？顔赤いし、めっちゃモジモジしてるし。みんなも首を傾げている。

『あの!!』

「は、はい？」

『ひ、一目惚れしました!!よ、良かったら俺と友達から始めてもらえませんか!』

「………へっ?」

男は俺の方に手を差し出してそう言った。えと、これはつまり………

「告白された………のか?」

ちよつと待て。思考を停止するな。こういう時ってどうすればいいんだ?そうだ。返事だ。返事をしないと………

「え、えっと、その………ごめんなさい」

俺はその人と向き合って頭を下げた。

『あ、はは………そ、そうですよね。迷惑でしたよね。……ごめんなさい』
「いや、その、こちらこそ、ごめんなさい」

『え、えーっと、す、すみません!失礼します!!』

男はもう一度俺に頭を下げるとそのまま走って行ってしまった。

「………」

「お兄ちゃん？」

「………」

「お兄ちゃん。もしもくし?」

「………なあ、モカ」

「なーにー?」

「俺………初めてガチで告白されたよ」

「………」

頭の整理が追いついてなかった俺の放った言葉に黙っていたモカ

以外の4人が嘖き出した。

「ちよ、巴！笑ったらダメだよ」

「いや、蘭だって笑ってるだろ」

「2人とも、そんな笑ったら酷いよ！」

「そういうつぐだつて……フフツ」

みんなが必死に笑うのは堪えているのがわかる。いや笑ってしま
う気持ちもわかる。わかるけど。

「おい、笑うな!!俺が今まで生きてきた中でガチで告白されたんだぞ
！笑うなよ！」

「いや、だつて……ラテさんが初めて告白されたのが男の子からだ
なんて」

「ラテ、どうやらラテの女装は本当に可愛いみたいだね」

「うるせえ！最悪だよ、本当にさ！」

まさか相手も俺が女装してるだなんて思いもしなかっただろうな。
相手には申し訳ない気もするけど。

「ま、まあ、あれだ。よ、よかつたな、ラテ」

「うん！おめでどうラテ君！」

「巴、つぐちゃん。本当に怒るよ？」

言われても全く嬉しくないおめでどうだ。どうせなら女の子に告
白される方が嬉しいのに。

「お兄ちゃん」

「ん？どうしたモカ？」

そういえばモカの呼び方が元に戻っている。モカもいきなりのご
とでびっくりしてるんだろうか？

「今日帰ったらモカちゃんがいっぱい慰めてあげるよ」

「へ、あ、うん。ありがとう」

よしよしと俺の頭を撫でながらモカは慰めてくれた。うん、嬉し
い。今日1番に嬉しかったことかもしれない。

「あ、ラテさん！私も一応言っておきます。おめでどう！」

「あ、じゃああたしも。おめでどうラテ」

「嬉しくないおめでどうをありがとう。2人とも」

それにしても今日は散々だな。女装させられるし、メイクされるし、いきなり男に告白されるし。今日は不幸だ。

こうなったらこんな提案をしたひまりちゃんには罰を受けてもらうしかない。手始めに、俺が用意したコンビニスイーツを全部食べてもらうところから始めようか。

「ラテ君、絶対何か悪いこと考えてる」

「ああ。多分仕返ししてやる、って顔だな」

「多分標的はひまりだね」

「えっ！私なの!?!」

おかしい。モカ以外にも俺の考えが読まれてる。そんな悪い顔でもしてたんだろうか。

「なあ、モカ。ひまりちゃんが1番嫌がることって何だと思う?」

「うーん……ひーちゃんはね、シイタケが嫌いなんだよね?」

「えっ、うん、そうだけど……」

ひまりちゃんはシイタケが嫌い。なるほど、そうかそうか……

「ひまりちゃん、今度俺が美味しいお弁当作ってあげるよ」

「え、い、いや、大丈夫ですよ?」

「気にしないでいいよ。モカの弁当作るついでだし、弁当はモカに渡しもらうからさ」

「いや、えと……その」

「そうだなー。メニューはシイタケの炒め物と、シイタケの煮物と、シイタケとご飯を混ぜ合わせたものと、後デザートにシイタケ丸ごと用意しといてあげるから!」

「や、やだ!そんなの絶対やだ!」

「ひ、ひまりちゃん……」

涙目になりながら隣にいるつくちゃんに抱きつくひまりちゃん。

「だいじょーぶ。ひまりちゃんがちゃんと美味しく食べれるように味付けしてあげるから」

「う、嘘ですよ?そんな酷いことしないでくださいね?」

「そうだ。モカ、ひまりちゃんがズルしないように見張っててくれるか?」

「い、いや！モカ、助けて！」

「ひーちゃん……なむく」

「モカあ!!」

「さて、そうと決まれば早速帰って、この服を速攻着替えて買い物に行かないと。明日が楽しみだな、ひまりちゃん？」

「ごめんなさい！謝ります！謝りますから許してください!!」

今度は俺に抱きついてくるひまりちゃんの頭をポンポンと叩きながら、俺も帰路を歩き始めた。

「……なんかさ、アタシ達が何も被害受けないのも申し訳ないしさ」

「うん。私達も後で謝ろう。ひまりちゃんがかわいそうだよ」

「よく考えたら男装するって言ったのに、結局やってないしね」

「確かに」

おまけ

ラテの学校にて

『昨日か、めちやくちや可愛い子が歩いててさ、俺気づいたらその人に告白しに行ってたよ』

『えっ、マジ!?結果は!?!』

『ダメだった。ごめんなさいってフラれちまったよ』

『だろうな。お前に彼女できるとかありえねえし』

『うるせえ。にしても、誰かに似てる気がするんだよなあ、あの子って』

「……………しばらくあいつとは顔会わせないようにしよう」

第33話 風邪を引いたラテと看病するモカ

「ゲホツ、ゲホツ。やばいな、風邪引いたか?.....」

朝、目が覚めると妙な気だるさと喉の痛みが襲いかかってきた。

「体温測らないと.....」

ベッドから降りようとするのと体の節々がズキズキと痛む。熱を測るまでもなく、自身に熱があるというのは一発でわかってしまった。

「.....38.6℃か。完全に風邪だな。もう少し体をあつたかくして寝るべきだったかな」

季節はもう直ぐ冬に差し掛かろうとしていた。俺はモカより寒いのが苦手なわけではないが、お風呂に入ってから薄着でモカと一緒にリビングでのんびりしすぎたせいかもしれない。

「幸い今日は土曜日だし、バイトもない。家で大人しくしていれば明日にでも良くなるだろうけど」

薬飲んで大人しくしていればすぐ良くなるはず。だがそうもしてもらえない事情が1つある。

「モカのご飯を作ってあげないとだよな」

痛む身体をゆっくりと起こし、パジャマを着替えて、なるべく服を着込み部屋を出ようとする。

「.....ゲホツ。まずいな。頭もクラクラするし、これいけるか?」

身体も痛い。息も少し荒いのがわかる。だが、愛する妹のためにお兄ちゃんがしっかりしなければ。その気持ちを糧に階段をゆっくりと降りリビングへと向かう。

「んー.....ここはこうで.....あ、お兄ちゃん。おはよう」

リビングへの扉を開けると、悩みながらもギターの練習をしているモカの姿が。何としてでも俺が風邪を引いている事はモカに隠さないで。

「おう、おはよう。土曜日なのに朝から練習とはえらいな、モカ」

「えへへー。もうすぐライブが近いからこのスーパーギタリストモカちゃんは頑張らないといけないわけですよ」

「そっか.....じゃあそんなスーパーギタリストモカちゃんのため

に、精が出るようなご飯を作ってあげないとだな」

「そうだね。お兄ちゃんの料理を食べる事ができたらあたしのやる気も元気も100%アップなのですよ」

「わかった。じゃあ早速『デーもー』ん？」

モカは持っていたギターを横に置き、ソファから立ち上がりトコトコと俺のそばまでやってくる。

「今日のお兄ちゃんはゆっくりしてないとダメだよ？」

「……………何でわかった？」

「わかるよ。あたしがお兄ちゃんと何年一緒に過ごしてると思ってるの？」

恐るべし俺の愛するモカ。一言二言会話しただけで俺の調子が悪いのを見破られるとは。

「ど、いうわけで。今日はあたしがつきつきりで看病してあげるから、お兄ちゃんは部屋でゆっくり休んでいいよ」

「いや、そういうわけには。ライブが近いっていう事は練習もしなきゃならないんだろ？せつかくの土曜日にそんなモカの練習時間を削らせるわけには」

「お兄ちゃん」

「はい？」

「もし仮に。お兄ちゃんがスーパー天才ボーカルギタリストで1週間後の土曜日に武道館でのライブが控えているとします」

「は、はあ」

いきなり何を言い出すんだこの子は。俺にそんな事ができるはずがないと言うのに。だがそんな意味のわからない事を言うモカは続けて話す。

「その日は大事なバンド練習もある。ライブに失敗しないためにも練習はしないとイケない。けれど、お兄ちゃんの愛するモカちゃんは熱を出して倒れてしまいました」

「うん」

「さて、お兄ちゃんはどうする？」

「……………迷うはずもない。俺はギター練習よりも、バンド練習よりも、モ

カカの看病を優先する」

「うん。そういうことだよ」

「……なるほどな」

つまりモカは1週間後に控えているライブよりも、熱を出した俺の方を優先したいと、そう言ってくれてるわけだ。

「そういうわけなので、お兄ちゃんは今から部屋に戻ってベッドで休んでみてくださいーい」

「そう言ってくれると助かる。実はこうして立っているのも結構しんどくて……つと」

「およよ……お兄ちゃん、大丈夫？」

「すまん、大丈夫だ。ありがとう」

頭がクラクラしてふらついて倒れそうになる俺をモカがしっかりと受け止めてくれた。情けない兄で少し泣きそうになる。

「部屋まで一緒に着いて行ったほうがいいー？」

「いや、大丈夫。モカに風邪うつすわけにもいかないし直ぐに部屋に戻って休ませてもらうよ」

「りよーかーい。お兄ちゃん、寂しくなったらいつでも呼んでくれていいからね。お兄ちゃんが寂しくならないように、モカちゃんがすぐに駆けつけて抱きしめてあげるから」

「モカに抱きしめられたらすぐに風邪治りそうな気がするけどな。でも、ありがとう、その言葉だけでも俺は嬉しいよ」

片方の手で壁に手をつけふらつかないようにしながらもう片方の手でモカの頭を優しく撫でる。

「おー、気持ちいい………じゃなかった。お兄ちゃん、すぐに部屋に戻らないと」

「そうだな。ご飯とかは適当に済ませてくれればいいから。俺は少し寝させてもらうよ」

「はーい。ゆっくり休んでね」

ニッコリ笑って見送ってくれるモカに感謝しながら俺はすぐに自室に戻りそのままベッドへと潜り込んだ。

「ふう………ゴホ、ゴホ。やばいな、安心して気が抜けたら寒気までし

てきた。早く寝ないと」

布団にくるまり俺はすぐ寝られるように目を閉じた。

「モカ、ああ言ってたけど大丈夫かな。ご飯は外食にすれば問題ないけど、ライブも近いって言って……たし、ちよつと……心配………か、も………」

「……………ん……………」

「あ、起きたら?」

「んー……………あれ、モカ?」

「そうだよ。お兄ちゃんの事が大好きなモカちゃんですよ」

目が覚めると椅子に座って俺の顔をじーっと見ているモカの姿が。どうやらベッドに入った後すぐに俺は寝てしまったみたいだ。ってあれ、モカがいる?」

「モカ、なんでここに!?!」

「なんでって。さっき言ったでしょー。今日はあたしがつきつきりで看病してあげるって」

「いや、確かに言ってたけど。でもお前に風邪をうつしたら悪いし、それにモカには練習が」

「練習はもういいんだよー。蘭達にも今日の練習は休むって言ったから今日はつきつきりで看病してあげるよー」

「いや、でも………」

時計を見ると昼の1時を指していた。モカは土曜日のバンド練習はいつもこのくらいの時間にはすでに家にいないはず。バンド練習を休んだというのは本当みたいだ。

「俺は寝てればきつと良くなるから俺の事は気にせずに」

「いやー」

「いやー、つてお前」

「お兄ちゃんが元氣にならないと、あたしも心配で元氣にならないから。だから、今日はモカちゃんがつきつきりで看病します」

「モカ……………」

「だいじょーぶ。このモカちゃんがお兄ちゃんがいともより元氣になるように、今日はずっと一緒にいてあげるから」

本当に涙が込み上げそうになる。こんなに優しい妹がこの世にいてくれるだろうか。いやいやない（知らないけれど）

「悪いな、迷惑かけて」

「ぜんぜーん。あたしもお兄ちゃんにはいつもお世話になっているからね〜」

「いや、それと言ったら俺もそうなんだけど」

「そうだね〜。これはモカちゃんとお兄ちゃんがお互いにういんういんな関係を築けているって証拠だね〜」

「ウインウインって、今日日そんな言葉聞かないけど」

「えー、そんな事ないよモカちゃん大百科には常に載ってるのに」

「17年間一緒にいて初めて聞いたよそんな大百科は」
顔を見合わせて俺とモカはどちらもともなくぷっ、と吹き出してしま

う。
「お兄ちゃん、お腹空いてる〜?」

「そう、だな。朝から何も食べてないし、お腹空いてるかも」

「ふっふっふー。そう思ってたこのあたしがお兄ちゃんの為に素晴らし
いものを作ったあげました〜」

「……………へっ?」

「持つてくるからちよつと待つててね〜」

そう言つてトコトコと部屋を出て行ったモカ。作った?モカが?

という事は手作り？信じられなくなり頬をつねってみる。

「……痛い」

つまり夢じゃない。今日のような事がこれまでも何度かあったがその時はレトルト食や母さんがなんとかしてくれたため、特に気にすることもなかったが。

「お待たせく。モカちゃん特製のお粥だよ」

5分くらいしてお盆を持って戻ってきたモカ。

「ささー。どうぞ召し上がれ」

「おおー、これは」

お盆の上に乗っていたのは、みる限りは完璧な卵の雑炊とお水とお薬。そしてなぜかクロワッサンとメロンパンとチョココロネ。

「……………モカさんや？」

「なんででしょう、お兄ちゃんさんや」

「色々突っ込みたい事があるのだけれど、この3つのパンは一体？」
まさか病人である俺に食べるという事なのか？確かにモカには劣るが俺もパンは好きだ。そしておそらくこれは山吹ベーカリーのパン。こんな状態でも食えない事はない。食えない事はないが、流石にしんどい。

「お兄ちゃん」

「はい？」

「山吹ベーカリーのパンは……………風邪を倒す殺菌作用があるんだよ！」

「ねえよ！どこの民間療法だそれは！」

「おおー。熱を出しているとは思えない人のツツコミだ」

思わず声を張らせて突っ込んでしまった。おかげでゲホゲホと咳き込んでしまう。

「おおー、これは失敗。お兄ちゃん、大丈夫？」

「誰のせいだ誰の」

「えへへー。ほんのモカちゃんジョークだよ。この3つのパンはあたしが食べる為に持ってきただけだよ」

「あー、そういうことか。それなら納得」

えへへ、と笑いながらメロンパンを取り頬張り始めるモカ。そのパンを食べる幸せそうな顔だけで身体の熱が吹き飛んでしまいそうになる。

「あーむ。おいしく。あ、お兄ちゃんも食べていいよ。つぐに作り方教えてもらいながら作ったからきつと完璧なはずだから」

「つぐちゃんが？」

「そー。お兄ちゃんが風邪引いたって言ったたら、すぐに作り方教えてくれたよ」

「……………そっか」

今度つぐちゃんにもお礼しないと、と心の中でつぐちゃんに感謝をしながら俺はモカが作ってくれた卵雑炊を手取る。

「じゃあ、モカ。いただきます」

「はい」

モカの初の手作りのご飯に感謝しながら俺は卵雑炊を口に運んだ。

「……………うまい」

「えへへー。そう言ってもらえるとモカちゃんが一生懸命つぐってよかったよー」

つぐちゃんが教えてくれてたとはいえ初めて作ってこれとは感動すらも通り越しそうになる。一口目を飲み込むと、そのまま二口三口と次々とお粥を口の中に運んでゆく。お腹が空いていたとはいえ、5分もしないうちに完食してしまうレベルに美味しかった。

「はあ、美味しかった。本当にありがとうモカ」

「いえいえ。お兄ちゃんに喜んでもらえてあたしも何よりだよ」

メロンパンを食べ終え、チョコココロネを頬張っているモカの頭をまた優しく撫でると気持ちよさそうに目を細めた。

「これはまたモカにご飯作ってもらわないとな」

「ざんねーん。モカちゃんのお料理屋は今日限りで閉店でーす」

「何故に!?!」

「今日はお兄ちゃんが倒れているから特別に開店しただけなんだから」

「……………じゃあこのまま熱を出し続けてる事にしてまたモカにご飯

作ってもらおうかな」

冗談で笑いながらモカに言ってみると、当の本人はチョココロネを啜えながらむーっ、と俺を睨んでいた。

「お兄ちゃん？」

「冗談だよ、冗談」

「まったくもー」

「でも、本当に美味しかったから。だからいつもとまでは言わないけど、たまーにでいいからモカの料理屋を開店してくれるとすごく嬉しいかなって」

「そうだねー。モカちゃんの気が向いたらかなく？」

「そりやいつになるか全くわからないな」

1ヶ月後、3ヶ月後、半年後。下手をしたら1年後やその先になるかもしれない。

「まあでも気長に待つよ。モカがまた料理作ってくれるのをさ」

「その時はお兄ちゃんがびっくりして飛びのいちゃうくらい美味しいご飯を作ってあげるからね」

「ああ、楽しみにしてる」

「で、モカ。いつまでいるつもりだ？」

「1人でリビングにいるの寂しいから、お兄ちゃんの部屋にそのまま

「いようと思つて」

「そのギターは？」

「練習用」

「俺一応病人なんだけど」

薬を飲んでまた布団に潜り込んだ俺。モカはというと俺の食べた食器をキッチンへと戻しに行き、また俺の部屋へと戻ってきた。ギターと譜面を持って。

「あたしのギターでお兄ちゃんをリラックスさせてあげようと思つてね」

「うるさくて逆に寝れないパターンでは？」

「あー、ひどーい。モカちゃんはこんなにお兄ちゃんの事が心配で心配で仕方ないのにー」

目に手を当ててよよよーつと、泣いてるふりをするモカ。

「いや気持ちは嬉しいんだけど、それだったら今からでも遅くないしバンド練習に参加するべきなのでは？」

「それなら大丈夫。あたしが今日休むって確定した時点でバンド練習は休みになったから」

「いやそれもそれで問題ありなんじゃ？」

「ちなみにさつき連絡きて、夕方頃にみんなでお兄ちゃんのお見舞いに来るそうです」

「いや余計寝れないじゃん。今のうちに寝とかないと」

現在時刻昼の2時。今からすぐ寝れば3時間くらいは寝られるはず。ひまりちゃんがきた瞬間絶対眠れなくなるからなんとしてでも寝なければ。

「モカ、本当に俺寝ると思うけどいいんだな？」

「もちろん。モカちゃんのこのリラックsgivingでお兄ちゃんのことをゆつたりと眠らせてしんぜよう」

「頼むよ、本当に」

夕方までに寝とかないまた熱が上がりそうな気がするから。

「はーん」

返事をしたモカが小さい音で音楽をかけ始めた。スローテンポな

曲。そんな曲に合わせてモカもギターを弾き始めた。

「フンフンフーン♪フーン♪」

曲に合わせて鼻歌まで。ギターも弾きながら鼻歌も歌って。本当にモカはすごい子になったんだなあと改めて実感してしまう。

「ほんとうに……すごいなあ、モカは」

「すごいのはあたしだけじゃないよー」

俺が話しかけると曲とギターを弾く手を止め、俺の方へと振り向いた。

「蘭もひーちゃんもつぐもトモチんもみんなみーんな凄いだよ。あたしたちAfterglowはあの5人だからAfterglowなんだよね〜」

「まあそりゃ俺も何回か練習見てるから、言ってる意味はわかるかも」
「でしょー。あの中の誰か1人でも欠けちゃったら、それは全く別のバンドになっちゃうからね〜」

それはそうだろう。あの中の誰か1人でもいなくなったら、それはAfterglowではなくなる。それ以前にバンドとして成立しなくなる。5人全員一緒だから、バンドを続けられている。

「あたしたちはあたしたちがいつも通りにいる為に、バンドを始めたからね〜」

「そうだな」

「だから、お兄ちゃん」

ジャーン、とギターの音色を響かせたのち、モカは俺の方を向いてニコツと笑って言った。

「モカちゃんがいつも通りでいる為に、早く風邪治して元気になつてね〜?」

「……ああ、わかってる。早くこんな風邪治して、モカがいつも通り元気でいられるように俺も頑張るよ」

「約束だよ〜?明日風邪治ってなかったらモカちゃんも怒るから〜」

「それは酷くね?」

「あははー。じょーだんじょーだん」

そうしてモカはまた音楽をかけ、ギターを弾き始めた。さつきとま

た同じ曲。ゆったりとしてそれでいてどこか眠気を誘うような曲。

「フンフンフーン♪」

(というか、こんな曲をライブでするつもりなのか？こんなゆったりとした曲、ライブでは合わないんじゃないか……)

何故この曲を練習してるのかを疑問に感じながら俺は瞼を閉じた。

「お兄ちゃん、おやすみなさーい」

「お……や……すみ……も、か」

番外編

番外編 お兄ちゃんと呼びたいひまりとお兄ちゃんに甘えたいひまり

「あ、ひまりちゃんだ」

「あれ？ラテさん偶然ですね」

学校からの帰り道。腹が減ったのでパンでも買って帰ろうと商店街に行くと、おそらく俺と同じで学校から帰る途中なのであろうひまりちゃんに出会った。

「どうした？1人なんて珍しい」

「あはは、なんかみんな用事があったみたいなんですよ。そういうラテさんは？」

「俺は腹が減ったからパンでも買って帰ろうかと思ってさ」

「そうなんですか。あ、て事は今暇なんですか？」

「ん？そうだな。今日はバイトもないし暇だな」

「なら良かった。ちよつと付き合ってください。私も暇してたところなんですよー」

「ああ、別にいいよ。どこ行く？」

「ここであつたのも何かの縁だろう。予定を変更して俺はひまりちゃんとどこかに遊びに行くことにした。」

「そうですね。じゃあどこかでお茶しませんか？」

「いいぞー。じゃあ行くこうか」

「はいー」

テンションが上がっているのか、ご機嫌なひまりちゃんと一緒にお茶するためにカフェに向かうことにした。

「で、なんで俺の腕に抱きつくんだ？」

「いいじゃないですか。モ力がよくしてるの見てるとどんな感じなのかなー、って気になっちゃうんです」

「まあいいけどさ」

ただひとつ。ひまりちゃんの胸が俺の腕に当たっている。この暴

力的までの胸が俺を襲っていると考えると少し興奮してしまう。

「あれ、どうしたんですか？顔赤くして」

「なんでもない！」

顔が赤いのを気付かれるなんて。俺もモカで慣れたものだと思うたがまだまだ甘いようだ。

「そうだ。あの、1つお願いがあるんですけど」

「ん？」

「今日だけ、ラテさんの事『お兄ちゃん』って呼んでいいですか？」

「やだ」

「即答!?酷いですよも〜！」

「いや、俺の妹はモカだけだし」

モカ以外の妹なんて認めない。俺の妹であるのはモカだけだ。

「私お兄ちゃんいないんでちよつと興味があるんですよ。私も小さい時からラテさんと一緒にいるわけですし、いいですよね？」

「ダメ」

「そんなに否定するなんて。うう……」

俺の隣を歩きつつも涙目になるひまりちゃん。そうだ。この子喜怒哀楽がはつきりしてるから、けっこう涙もろいんだよな。

「今日だけ。今日だけですから……ダメ、ですか？」

「くっ……」

腕に抱きついていいる上に暴力的までの胸。それに加えてそんな涙目でお願いしてくるなんて。ひまりちゃん、強敵だ。

「い、いや、ダメったらダメ！」

だが俺も負けない。俺の精神もちゃんと貫き通す。これだけは譲れられない。

「お願い、ラテお兄ちゃん……」

「よし、いいぞ」

「やったー！ありがとう、お兄ちゃん！」

しまった。甘い言葉につい引っかかってしまった。こんな方法を取ってくるなんて……卑怯な女だ、上原ひまり。

「じゃあレッツゴー！」

「はいはい。ったく、モカに見つかったらなんて言われるか」

モカにだけは会いませんように。そう願いを込めながら俺たちはカフェに向かった。

「でねお兄ちゃん。今日は巴がお昼に弁当持ってきてたんだけど」

カフェについて注文を取ってから、向かい側に座ったひまりちゃんは俺に対して物凄く色々なことを話してきた。所謂マシンガントークというやつだ。今日のひまりちゃんは一段と機嫌がいいみたいだった。

「でさでさ、巴がお弁当箱開くと」

「なあ、ひまりちゃん」

「なーに、お兄ちゃん？」

「くっ……いや、今日は物凄く機嫌がいいんだなって思ってたさ」

やばい。俺の妹はモカだけ。モカだけなのに、ひまりちゃんが本当の妹のように思えてきた。モカののんびりとした口調とは違い、元気ハツラツで色々なことを話してくれるひまりちゃん。こんな妹もありなのかもしれないと俺は思ってしまった。

「えっ？そうかな？私は普通のつもりなんだけど」

「いや、絶対いつもより機嫌いいよ」

絶対そうだ。俺とカフェに来られるのがそんなに………いやこれは自意識過剰すぎるか。

「じゃあ、多分それは今日はお兄ちゃんが一緒にいてくれるからだね
!!」

「ぶふっ！ごほっ、ごほっ」

「ああ、お兄ちゃん。大丈夫？」

「うん。大丈夫。大丈夫だぞ」

突然の発言に驚いて口に含んだコーヒーを吹き出しそうになった。いきなりなんて事を言いだすんだこの子は。

「ごめんね、お兄ちゃん。私何か悪いことしたのかな？」

「いや、悪いことっていうか……今自分が何言ったのかを理解してくれたらいいと思うんだけど」

「何をもって……あ、ち、違うんだよ！お兄ちゃんが一緒にいてくれるからってというのは事実なんだけど、その、そういう意味じゃなくて！！」

そんなに必死に否定しなくてもわかるのに。顔真っ赤にしてるひまりちゃん。グツジョブ！

「そ、そんなことよりお兄ちゃん！このケーキとっても美味しいよ！」
「へえ。まあひまりちゃんは食べ過ぎに注意だけだな。ほら、今は食欲の秋だろ？食べ過ぎるとまた体重増えちゃうよ」

「またって、私そんなに体重増えてないのに！もく！」

「そんなに、って事はちよつとは太ったんだな」

「うっ……………」

ぱつと見はわからないけど今の言葉で詰まらせるという事はやっぱり体重増えたんだろうな。かわいそうに……

「モカはあんなに食べても体重増えないのにどうしてひまりちゃんは……」

「もく酷い！！女の子に体重の話をしたらダメってモカに言われてないの？」

「バカやろー。まず俺がモカにそんな話すると思ってるのか？だいたいモカは太っても太ってなくても可愛いんだよ。モカはどんな姿してても可愛いんだよ。てか、モカは可愛いんだよ」

「うっわー。本当引くくらい酷いねそのシスコン。あ、でもでも今は私もお兄ちゃんの妹なんだよ？」

「だから？」

「その……私にも甘やかして欲しいな、なんて？」

「つまり、ひまりちゃんにモカと同じ事をしてほしいのか？」

「はい！」

結局この子も相当な甘えん坊だな。まあ、それもひまりちゃんの可愛い一面ではあるんだけど。

「ひまりちゃん。こっちおいで」

「こっちつて……お兄ちゃんの隣って事？」

「ああ」

「わかった！」

返事をするひまりちゃんは向かい側の席から俺の隣の席へと座った。

「で、何してくれるの？」

「ん〜そうだな……じゃあまずは無難に」

いつも俺がモカにしている事を考えた。モカにしていること……多すぎて、どうか普段してる事を他の女の子にするっていうのはなんだか難しいな。とりあえず、隣に座ったひまりちゃんの頭を撫でてあげる。

「ふわあ……………」

「ちよ、そんなに驚かれたら逆にやりにくいんだけど」

「あ、ごめんなさい。いきなりでびっくりしちゃって」

「モカなら無言で頭撫でてでもすぐに俺の方に頭寄せてくれるぞ？」

「普段からしてたらそうなるのは当たり前だよ」

「そういうもんかな？」

モカにいつもやってあげるように優しく頭を撫でてあげるとひまりちゃんは気持ちよさそうにしていた。

「えへへ〜、幸せ〜」

「それは何より。じゃあ次な」

頭を撫でている手を止め、俺の残っているケーキをフォークで切つて、それをひまりちゃんの口の前まで近付ける。

「ひまりちゃん、あーん」

「えっ、それもしてくれるの？」

「いつもモカにやってる事だから。興味あるんでしょ？」

「う、うん。それじゃあ、あーん」

ひまりちゃんは緊張しながらも、俺の差し出したケーキを口の中に

入れた。

「どう？美味しい？」

「はい！とつても！もう一回して欲しいな〜」

「はいはい。何度でもしてやるよ」

と、ふいに言った言葉。その言葉で俺は後で後悔することとなってしまった。そう、さっき言ったばかりだったのに忘れていたのだ。ひまりちゃんが甘いものを好きだという事を。

「お兄ちゃん、もう1回！」

「まだするのか？てか、もうケーキなくなつたぞ」

「あ、ホントーだ」

「そろそろ出よう。ひまりちゃんもケーキ食べ終えた事だし」

「すいませーん、ケーキの追加お願いしまーす！」

「聞けよ!!」

ひまりちゃんは結局この後、ケーキを5回も追加して頼み、そしてずっと俺にアーン、とせがんできた。流石にそろそろやめようかと思いつめてくる。そんな顔をされてやめられるわけがない。このループが続いてしまった。

「そ、そろそろ帰ろう。なっ？」

「えー、お兄ちゃんのケチー！」

「ケーキはタダじゃないの！」

「わかつたよー。じゃあ支払いはよろしくね、お兄ちゃん!!」

「……どれだけがめついんだこの妹は！」

モカなら頼んでも2つなのに、と後悔を思いながら俺は支払いを済ませた。

「ごちそうさま、お兄ちゃん！」

「本当ごちそうさまだったなひまりちゃん。まあいい、じゃあそろそろ……とメールか？」

ポケットの中で携帯が鳴つたのを確認してみる。差出人はモカだった。

『今すぐひーちゃんをつぐの家まで連れてきて〜。この事はひーちゃ

んに内緒だよ〜』

「なんだこれ？」

何故ひまりちゃんをつぐの家に？今日なんかの予定でもあるのか？

「まあいいか。モカからのお願いだし」

モカのお願いなら聞かないわけにはいかない。そう思い俺はモカに了解、と返して流石に食べ過ぎたのか、お腹をさすっているひまりちゃんに声をかけた。

「ひまりちゃん、まだ時間大丈夫？」

「ん？だいじょーぶだよ！」

「なら良かった。今からつぐちゃんの家に行こうと思うんだけどいい？」

「つぐの？どうして？」

「いや、モカがひまりちゃんを……………じゃなかった！モカが迎えにきて〜、って言うから」

「うん、いいよ!!」

危ない危ない。危うくモカのお願いを破りかけそうになった。でも、どうしてひまりちゃんを連れてこないといけないのだろうか。

「じゃあ今度はつぐの家にレッツゴー！」

「はいはい、って腕には抱きつくのな」

「着いたな」

「はあ。食べ過ぎちゃったから疲れたよ…………」

「はいはい、お疲れ様」

自業自得だ！と言ってやりたい。でも俺もそこまで鬼じゃない。その場に座り込みそうになるひまりちゃんの腕を掴んで、俺はつぐ

ちゃんの店の中に入った。

「おい、モカー。約束通りひまりちゃんをつて……………?」
「んー、どうしたのお兄ちゃ『パン!!』……………ふえ?」

店のドアを開けて中に入ると、店の中は真っ暗だった。その様子に気づいてなかったひまりちゃんが声をあげると、いきなり店の中に大きな音が鳴り響いた。

「ひまり(ちゃん)、お誕生日おめでとー!!!」
「ひーちゃんおめでと〜」

真っ暗だった店の中に突然照明が付くと同時に蘭、モカ、巴、つぐちゃんが俺たちの目の前で待っていた。

「え、なにこれ……………なにこれ!?!」

「もう忘れたの?今日はひまりちゃんの誕生日だよ!」

「そうそう〜、ひーちゃんの生まれた日だよ〜」

「ひまりのためのアタシたちのサプライズだ」

「大成功、だね」

「そう、だった。今日は私の誕生日……………」

日にちを確認する。今日は10月23日。確かにひまりちゃんの誕生日だ。俺もすっかり忘れていた。

「みんな私のために……………」

ひまりちゃんがまた泣きそうになってる。今日は何日目だろう。ひまりちゃんの涙目になる姿を見るのは。

「蘭、モカ、つぐ、巴。ありがとう、みんな大好き!!」

そしてひまりちゃんは幼馴染4人に抱きついた。なんだろう、この俺の場違い感は。俺帰った方がいいんじゃないかねえのか?

「ひまりちゃん……………もう、大袈裟だよ」

「ひーちゃん、おおげさ〜」

「まあ、ひまりらしくていいんじゃないか」

「そうだね」

こんな微笑ましい5人の姿を見るのはやっぱりいいな。泣いているひまりちゃんにそれを見て慰める他の4人。やっぱり幼馴染が羨ましく思えるよ。

「……………あ、誕生日プレゼント買ってねえ」

「うわっ、ラテ最低」

「お兄ちゃん、それは酷いよ〜」

「わかってる自覚してる！すぐ買って来ないと!!」

「とは言ってももう19時だぞ?」

「うん。この辺だとプレゼントに見合うものを買える店はもう閉まってるんじゃない?」

どうしよう。ひまりちゃん以外からのみんなの目が冷たい。しかも何より辛いのはモカまでもがそんな目で俺を見てくることだ。

「うっ……………だ、大丈夫だよ……………みんな」

「ひーちゃん?」

「もう、プレゼントは貰ったから!」

泣いていたひまりちゃんが涙を拭って俺の目の前に立った。そして、最高の笑顔で俺に向かって言った。

「今日は1日ありがとうラテお兄ちゃん!! 一生の思い出にするね!」

「へっ、あ、うん……………」

「二「お兄ちゃん?」二」

「なんでもないよ…みんな本当にありがとう!!」

ひまりちゃんはみんなに向き直った。今日の1日のことは俺とひまりちゃんにしかわからない事だ。ひまりちゃんの誕生日に、偶然にもひまりちゃんの一生の思い出となるようなプレゼントができたならば、それはそれでいい事なんだろう。

「……………誕生日おめでとう、ひまりちゃん」

番外編 買い物に付き合うラテと綺麗な蘭

「蘭ー、悪い待ったか？」

「遅い。10分遅刻だよ」

「いや、いきなり30分前に電話入れて来てそれはないだろう」

現在時刻9時40分。その30分前に電話で9時半に駅前に来て欲しいと言われ急いで準備して向かって来た結果がこれだ。理不尽すぎる。

「せめて昨日の夜とかに電話くれたら話は変わってたのに」

「うるさい。文句言わないで」

「はい、ごめんなさい。で、今日はどこに行くんだ？」

「ついてくればわかるよ。ほら、行くよ」

「あ、おい、蘭」

どこに行くか教えてくれないのは疑問があるけどまあいいか。ついていけばわかる事なんだし。

「ていうか蘭、お前今日は俺と出かけていい余裕あるのか？」

「なにが？」

「いやなにがって。今日はお前の……」

そう。4月10日は蘭の誕生日だ。蘭の誕生日パーティーをするのだが、モカから話を聞く限り、夜は蘭の家の食事会があるのでパーティーは昼頃にするらしい。

「……ああ、大丈夫。そんなに買い物は時間かからないだろうし。それに、そのこともあったからこうやって開店時間前にラテを呼び出したんだから」

「ああ、なるほど……ってなに、蘭の中で俺は今日暇だって思ったの？」

「そうだけど……暇じゃなかったの？」

「いや、えーと……」

バイトは蘭が誕生日だと言うことで空けていたし、モカを愛でようと思ったが、あいつは朝早くにつぐちゃんの家に行っちゃったし、家事全般は俺が朝早くに起きてやってしまった。

「……いや、暇。物凄い暇。もう蘭がこうやって買い物に呼んでくれたのが死ぬほど嬉しいくらい暇だったね」

「っ！………そっか」

「ん？蘭、どうかしたのか？」

「別になんでもない」

一瞬間の顔が真っ赤に見えたんだけど、気のせいかな？

「それよりほら、着いたよ」

「ん？ああ、楽器屋か」

しばらく歩いて着いたのが楽器屋。なんで自分の誕生日だというのに楽器屋に来たかったのかはよくわからないが、そのまま中に入る。

「蘭はなに買いに来たんだ？」

「この機会に色々と道具を新しく変えようと思って。弦とかシールドとか。あと、チューナーも最近調子悪くなって来たし、新しいの買うかなって」

「ちゅーなー？なんだそれ？」

「チューナーっていうのは、音程を素早く合わせる機械のこと。ギターはチューニングをしないといけないから。後はアンプとかも少し見たいな。あ、エフェクターも何かいいのあれば……」

「ちゅーにんぐ……あんぷ？えふえくたー？それにさつきシールドって？なんで盾？」

なんだ？全く話がついていけない。ていうかなんのために俺は連れてこられたんだ？絶対後日にモカとか連れて来たほうがよかっただろ。こんな事ならモカが家でギターの練習してる時に色々話を聞いておいたらよかった。

「ラテは少し待ってて。なるべくはやく終わらせるから」

「って言われてもなあ」

音楽はよく聞くけど別にバンドとかに興味があるわけでもないし……いやでも、この機会に少しは勉強してみるのもありか？After glowの事をもっと知る機会なのかも。

「とりあえず蘭についていけばいいか」

そう思い、蘭の後ろをついて行くことに。決してストーカー的行動ではありません。単に蘭の邪魔をしたくないだけです。

「……………へえ」

あんな風に目をキラキラ輝かせる蘭もあまり見たことがない。よっぽどバンドが好きなんだろう。俺としても何か協力してやりたいところではあるんだけど……

「なあ、蘭?」

「なに?」

「えつと……………その……………何か俺が買ってやろうか。お前の必要なもの」
「えつ?」

「いや、そのなんていうかき。バンドもすごい頑張ってるし、モカがいつも世話になってるし、なにより、今日はお前の誕生日だろ?」

「あ……………」

「真剣に頑張ってる蘭達はやっぱりかっこいいし、応援したくなるからな。なんだかんだ言っても俺はお前らのファンだし」
「……………」

「で、でもあんまり高すぎるのはダメだぞ。ちゃんと俺が買えそうで限度のあるものだったらいいから。だから、えつと……………」

「ぷつ……………」

「ん?」

「ラテ、何でそんなに焦ってるの。凄い面白い」
「んなっ!」

蘭が口元を手で抑えて笑っている。

「し、仕方ないだろ!モカにならともかく蘭にはこうやって物買ってやるなんてあんまり言わないし、慣れてねえんだよ!」

「だ、だからって……………」

「ああもう。言わなきゃよかった」

折角蘭が誕生だから何かプレゼントにとでも思っていたのに、そんな事されたら買いたくなくなる。

「ほら!俺の気が変わらないうちに早く選んでくれ!」

「わかった。で、いくらまでならいいの?」

「そうだな……所持金が大体1万程度だから……つて、おいまさか、このギリツギリまで買う気じゃねえだろうな?」

「わかってる。じゃあまずシールドから」

「本当にわかっているのか?なあ?おい!!」

結局、一つ一つは少ないけど合わされば結構な値段がいくほど買わされて、本当に言わなければよかったと思う俺だった。

「はあ……最悪。楽器屋であんだけ奢らされだ挙句、昼飯まで奢るところになるなんて」

「感謝してるよラテ」

「くそー、俺が誕生日の時覚えてろよ。絶対蘭に奢らせてやる」

「あたしがそれを覚えてたらね」

俺は今、楽器屋で買ったものを持たされながら蘭の家の前まで来ていた。何やら、今日の夜に蘭の家で食事会があるらしく、その準備をしてから、誕生日会に行くということに。

「じゃあちよつと待ってて。少し時間はかかるだろうけど」

「はいはい。俺はモカに電話でもしながら気長に待つとするよ」

蘭が家に入っていくのを見送ってから俺は家の前で待たせてもらうことに。

「はあ……モカの声が聞きたい」

そう思いポケットから携帯を取り出しモカに電話をすることに。

『……もしもし、モカちゃんですよー』

「おー、朝ぶりだなモカ。そっちの準備は?」

『準備万端だよ。もうつぐの家の中でクラッカー持ってスタンバってるよー』

いや早い。まだおそらく20分はかかるはずだ。女子の準備は長いと聞くしな。

「そっかそっか。俺ももう少ししたら蘭と一緒にそっち向かうから」
『はい。用はそれだけ？』

「いや、単純にモカの声が聞きたくなっただよ。愛しい愛しい妹のモカの声が」

『あたしも大好きなお兄ちゃんの声が聞きたかったよ。寂しくて寂しくて、ひーちゃんの胸に飛び込みたくなるくらい』

『えっ？何で私に!?!』

電話越しにひまりちゃんの驚く声が聞こえる。まあひまりちゃんは何をも包み込んでしまうあの胸があるからな。いやー、俺も包まれてみたい。

『お兄ちゃん……?』

「ん？なに？」

『あたしも脱いだらすごいんだよ』

「え、いきなり何のカミングアウト!？」

『も、モカ！いきなりなに言いだすの!?!』

『だってお兄ちゃん今絶対ひーちゃんの身体を想像したよー』

『えっ……』

「待てしてない！してないから！」

『したよねー？ひーちゃんの胸に飛び込むって言った時お兄ちゃん少し考えてたよね』

「考えてない！全く……いや、ほんの少しだけ。20%くらい考えてたけど、考えてない！」

『ほらー。やっぱり考えてるんじゃない？』

「うっ……」

『………変態』

「いや待て！そんな怖い声で言わないでっ！」

ひまりちゃんのドスの効いた声が俺の耳に響く。いや本当に怖い。

『ラテ君変態さんだったんだね。蘭ちゃんが心配だね』

『ああ。今からでも遅くない。アタシ達が迎えに行くか？』

「何もしねえよ！いいからお前らはそこで待ってる！ちゃんと蘭をエスコートしてやるから!!」

つぐちゃんや巴まで俺のことを変態扱いしてくるなんて。みんな酷い。事の発端はモカなのに。

『まあそれは置いといてー。お兄ちゃん、ちゃんと蘭の誕生日プレゼント買ってあげたの〜?』

「ああ。大丈夫だ。ちゃんと蘭にあったプレゼントを買ってあげた」

『ならだいいじよーぶだねー。モカちゃんもそれはそれは蘭に似合うものを買ってあげたんだよ〜』

「へえ。なに買ったんだ?」

『えへへ〜。ひみつー』

「秘密つて。やけに気になる『ラテ』言い……方だ……な?」

『んー、お兄ちゃん?どしたの〜?』

名前を呼ばれ振り返るとそこには蘭が立っていた。何気なく振り向いたが、何だその格好?着物着ていて、いつもと全然違うお淑やかな雰囲気。なんて言ったらいいのかわからない。いやもう今のこいつに会う一言なんてこれしかない。

「綺麗だ」

「んなつ!」

『お兄ちゃん〜?』

「悪いモカ。もうすぐしたらそっち行くから」

モカには悪いと思ったが電話を切らせてもらい蘭の姿をじつと見つめる。なんだ。こいつ本当に蘭なのか?

「ちよつと。いやらしい視線でこつち見ないで」

「いやだつて……お前のその姿をまじまじとみるなつて言う方が無理だぞ。お世辞とかじゃなくて、マジで綺麗だ」

「や、やめてよ……恥ずかしいから」

「無理だ。もし俺がお前の彼氏になってたら絶対抱きしめてる。それくらい今のお前は可愛いんだ」

「わ、わかったから!ほら、早く行くよ」

え、待つて。こんな綺麗な蘭を今からつぐちゃんの家までエスコー

トするの？この俺が？場違いにもほどがある。
「くそ、こんな事なら俺ももうちよつと清潔感ある服でくればよかつた」

「着いた。周りの視線が痛かったけど、何とかここまでくることができた」

「まだ帰りがある事を忘れたらダメだよ」

「うわマジか。もう一回この羞恥に晒されるのか」

つぐちゃんの家まで向かう中、こんな綺麗な蘭の隣に歩く俺は羞恥に晒されていた。通りかかる通行人から蘭への憧れのような視線と、何であんな奴があんな綺麗な子の隣にという嫌悪の視線が向けられていた。

「まあ、夜は少しは暗くなるだろうしいつか」

「そうだね。それじゃあ蘭。扉をどうぞ」

「……………の前に一つ言いたい事がある」

「ん、何だ？」

「……………えつと、その……………なんていうか」

なんだ？なんでそんなモジモジしてるんだ？何なんだ、言いたい事があるって……………いや、もしかしてトイレに行きたいのか？でも、それを言いにくくてモジモジしてるのか？

「ら、ラテ」

「は、はいー」

「い、言うよ」

「お、おう」

すー、はー、すー、はー、と深呼吸を繰り返す蘭。なんだ、トイレ

じゃないのか？まあ言われたところで俺はなにもしないけど。

「……………き」

「き？」

「……………今日は、買い物に……………付き合ってくれて……………ありがとう……………兄さん」

「えっ……………」

「そ、それだからー！じゃあ私中入るから!!!」

急いでつぐちゃんの家扉を開けて中に入ってしまった。その後聞こえるクラツカーの音も、みんなの叫び声が聞こえた気がしたが、俺の耳には深く入ってこなかった。

「蘭が……………蘭が俺を……………」

今日は蘭が誕生日の筈なのに、俺が逆にお祝いされた気分だ。蘭が俺のことを兄さんと呼んでくれたんだ。じゃあ俺はこうして返してあげるのが自然だろう。

「誕生日おめでとう、妹よ」

番外編 恋人のようなモカとパンに包まれるモカ

誕生日。それは一年に一回ある自分の生まれた日であり、多くの人
はそれを祝う日でもある。祝われる側からすれば一年の中で一番特
別な日と言えるだろう。それは俺の妹、青葉モカにとっても同じであ
り、何が言いたいかと言うと。

「身だしなみOK、服装OK、荷物もOKっと」

兄である俺、青葉ラテが誕生日のモカを一番盛大に、そして一番喜
ばせてやりたいということだ。

「よし。準備完了ー」

時刻は午前11時。自分の姿をチェックして、忘れ物もない事を確
認した俺はおそらく外で待つてくれているモカの元へと急いだ。

「モカ、準備完了だ！行くとしよう……あれ？」

靴を履いて外に出たがモカの姿がどこにもない。おかしい。あい
つきつき『あたし外で待つてるね』って言ったのに。

「お兄ちゃん、こつちこつちー」

「ん？」

後ろからモカの声が聞こえ振り向いてみると、そこには俺がアルバ
イトで初めて稼いで買ったパーカーを着たモカが立っていた。なぜ
かパンを食いながら。

「モカ？その格好は？」

「んー？今日はモカちゃんにとってスペシャルな日ですからねー。モ
カちゃんもびしつと決めちゃおうと思っちゃった訳ですよ」

「……つまり、自分の一番のお気に入り服を着て一緒に出かけると」

「そーいうこと」

……俺がモカのためにプレゼントしたパーカーを一番のお気に
入りって言ってくれるなんて。今日はモカの誕生日のはずなのに、い
きなり俺が喜ばされてしまった。

「そ、そっか。そう言ってくれたならプレゼントした甲斐があったよ」

「うん。これで今日のあたしはただのモカちゃんからスーパーモカ
ちゃんに変身するのだ」

「……やっぱりモカもテンション高いな」

「もちろーん。お兄ちゃんと二人で出かけるのは久しぶりだから」

「そうだな。ちなみに俺は昨日楽しみすぎて全然眠れなかったぞ！」

「気づいたら日が昇りそうになるくらい明るくなっていた。おかげで今日はあまり寝れていない。」

「おおー。それは大変だ。じゃあ今日はモカちゃんがお兄ちゃんが歩いてる途中で眠らないようにしっかりと見張ってしんぜよう」

「いや、そんな事には絶対にならないから」

と、こんな話していても時間はただすぎて行くだけだ。

「そろそろ行くか」

「おおー」

返事をしたモカは靴を履いて俺の隣に寄り添い、そのまま自然に俺の指に絡ませるようにして手を握った。所謂恋人つなぎというやつだ。

「……えと、モカさん？」

「なーにー？」

「いつもと手の繋ぎ方が違うような気がするんだけど？」

「今日はモカちゃんのスペシャルな日ですから」

「いや、それはそうなんだけど。その、知り合いに見られたら勘違いされるっていうか」

「だめー？」

……よく考えてみよう。俺自身モカとこうやって恋人のようにして歩くのが嫌かどうか。デメリットは俺たちを知っている人に見られるのが恥ずかしい。ただそれだけである。

じゃあメリットは？いつもと違うスキンシップが楽しめる。よりモカを近く感じる事ができる。モカの手、指の感触が一層味わえる。

「……今日はこうやって歩くか。俺もそうしたい」

「ヤッター。今日は一日楽しく過ごせそうだよ」

明らかにメリットの方が多い。むしろモカからこうやってスキンシップをしてきているのに断る方が失礼というものだ。

「じゃあ行くか」

「はい。いやー、楽しみですなあ」

改めてモカと手を握り合って俺たちは出かける事にした。

「それで、今日はどこに連れてってくれるのー？」

「それはお楽しみだ。でも、ちよつと歩く距離が長いけど、いいか？」

「だいじょーぶ。お兄ちゃんが一緒だから」

「そうだな。俺もモカが付いてくれてるんだし頑張らないと……それにしても今日は暑いな。玄関で喋ってる時はあんまり感じなかったけど」

何度でも言うが俺は暑いのが苦手だ。今も帽子をかぶっているが太陽の光は俺を襲っている。夏はクーラーが効いた部屋でのんびり過ごすのが一番王道だと思っている。

「無理しない方がいいよー？辛いならモカちゃんが介抱してしんぜよう」

「大丈夫大丈夫。まだ外に出たばかりだしな」

「いやいやー。油断していると暑さで倒れちゃうかもー」

モカが一緒だから大丈夫だって。でも、心配してくれてありがとう
な」

「えへへー」

心配してくれるモカの頭を空いている方の手で撫でてやると頬を
緩ませた。

「あれ、ラテ。それにモカじゃん。何してんの？」

「ん？おお、リサ。偶然だな」

「リサさん、こんちは」

しばらくそうしていると前方からやってきたリサが声をかけてきた。モカの挨拶に手を小さくフリフリして返す。というか出かけてすぐに知人に会うって。これは普通に手を繋いでいた方が良かったのか？

「リサは何してんだ？」

「アタシはちよつとショッピングに行こうかなーって。そういう二人は？」

「ああ。俺たちは」

「あたしたちはデート中なんですよ〜」

「でっ、デート?!?!」

俺が答えようとしたが、モカが俺の腕にぎゅーっと抱きつきながら先に言った。そんなモカの顔を見ると何やら悪いことを考えてる顔をしている。

「デートって、ラテとモカは兄妹でしょ?」

「そーですよ。でも、あたしだってたまにはらっくんとデートしたい時もありますよ〜」

驚くりサはマジマジと俺たちを見つめていた。……………ん? ちよつと待て。今モカは俺の事をなんて呼んだ?

「で、デートって……………でも、兄妹なのに手の繋ぎ方が恋人みたいだし……………呼び方もお兄ちゃんじゃなかったし、モカはなんだか気合入ってる格好してるし……………」

モカはただ一番お気に入りのパーカーを着ているだけなんだけどね。というか、呼び方も勘違いじゃなかった。

「おいモカ。なんだその呼び方は?」

「今日はお兄ちゃんじゃなくてらっくんだよー。モカちゃんスペシャルデイ限定なんだよね〜」

いや知らない。そんな話今初めて聞いたぞ。新鮮だから別にいいけど。

「ま、まさか……………本当に兄妹で?」

「ふっふっふー。どうでしょう〜?」

「もお。モカはすぐはぐらかす!ラテ、どうなの?」

「えっ。えーつと……………」

チラツと横目でモカの顔を見て見ると、俺の事をじーつと見つめていた。これはつまりあれだろうか。この流れに乗ってくれという事だろうか?

「……………まあ、そうだな。俺もたまには大好きなモカと一緒にこうやってデートしたいって思うこともあるんだよ。ほら、俺も男だし、な?」
「そうそう。モカちゃんも乙女ですから〜」

モカの悪ノリに乗ってやるとリサは顔を真っ赤にさせてワナと震えだした。もしかしてやりすぎたのか？

「じゃ、じゃあ俺たち急いでるから。また今度な」

「リサさーん、さようなら〜」

「あ、ちよつと二人とも！」

リサの俺たちを止める声が聞こえたが、俺はモカの手を引いて走ってその場から去った。

「……………蘭に連絡した方がいいのかな？」

「ふう。もうだいじょーぶだな」

「ですなく」

「ですなく、じゃなくって。モカやりすぎ。あれじゃありサは絶対勘違いしたぞ」

「だいじょーぶ。リサさんには今度会った時にちやーんと説明するから〜」

「……………ならいいけど」

本当に説明してくれるだろうか？モカなら『あー、ごめん。忘れてたよ〜』的なことがあるかもしれない。

「……………まあいいか」

「そんな事よりらつくん」

「その呼び方は継続なのな。で、なんだ？」

「目的地はまだ〜?」

「ああ。走ってきたから、もうすぐ着くよ。だから、楽しみにしてろよ。きつとモカが喜ぶところだから」

「えー、気になるよー」

「はいはい。もうちよつと待ってな」

そのままモカとおしゃべりしながら歩くこと数十分俺がこの日のために調べて予約までした店に着いた。

「ほらモカ。着いたぞ」

「……ここつて〜?」

「中に入ればわかるさ」

二人並んでお店の中に入る。入った瞬間これでもかというパンの匂いが俺の鼻を刺激した。眼に映るのはトレイに置かれた大量のパン。

「いらつしやいませー。何名様でしょうか?」

「あ、えっと、予約していた青葉です」

「青葉様ですね。少々お待ちください」

「お兄ちゃん……もしかしてここは」

「呼び方戻ってるぞー。まあ、おそらく今モカが考えてる通り。ここはパンバイキングのお店だぞ」

今年のモカの誕生日に俺自身が何をしてあげたいかと考えたとき、真っ先に思いついたのがこれだった。モカの大好きなパンをお腹いっぱい食べさせてあげるにはこれが一番だと思ったから。

「大変お待たせしました。お席にご案内するのでどうぞこちらへ」

「はい。ほら、行くぞ?」

ぼーっとパンを眺めているモカの手を引いて俺は店員の後ろを歩いて行った。

「こちらへどうぞ」

店員に勧められた席に座って、バイキングの説明を少し話してから店員はその場を去った。

「俺が荷物見ててやるから好きなパン取ってきな? 時間内なら何個取って何個食べようとも問題ないからさ」

「……………らつくん……………ううん、お兄ちゃん」

さつきから呼び方が全然統一しないモカ。というか、このお店に入ってからというもののモカの様子がなんだかおかしい。

「どうした?」

「……………やばいよー」

「やばいって……………何が?」

もしかして長時間歩いてどこか調子が悪いのか?

「ごんな……………ごんな大量のパン」

辺りを見渡す限りパンだらけ。サイズは少し小さいものの、俺もモカも大好きなパンが大量に置いてある。

「大量のパン……………食わずにいられない!」

そう言つてモカは席を立ち上がり、お盆を手にとって次々とパンを取つて行く。

「……………体調悪いんじゃないのかよ」

様子がおかしいからちよつと心配したじゃねえか。まあ、本人はとてつもなく喜んでるみたいだからいいけど。

「ただいま〜」

「おかえり。大量みたいだな」

「もっちりーん」

お盆の上にはまるで綺麗なピラミッドになるようにパン積み上げられていた。

「お兄ちゃん、先食べてもいいー?」

「もちろん。俺も今から取ってくるから。あ、飲み物は何がいい?」

「ん〜?」

「聞いてねえ……………もう食い始めてるし」

モカ自身パンの香りを嗅いでからというもの我慢ができなかったんだろう。ピラミッド型に積まれたパンの頂上のメロンパンを手にとって食べ始めていた。

「まあいいか。ミルクティーでいいだろ」

パンとともに飲むものといえばミルクティー。異論は認めない。「にしてもモカなら本当に置いてあるパン全てを平らげそうだな」

パンを十個取って、モカの分の飲み物も入れて席に戻ると、モカはもうピラミッドの三段目に突入していた。ちよつと早すぎやしないか？

「モカ、そんなに勢いよく食って大丈夫か？後々お腹持つか？」

「んー、だいじょーぶ。パンは別腹だから」

「その別腹にいくつのパンを入れるつもりなんだ？」

「えーっと……いくつでしょー？」

自分でもわかんないくらい詰め込むつもりならそれは別腹ではないと思うんだけど。

「まあ、程々にな。ここ終わっても色んなところ回るつもりだしな」

「らじや〜」

モカとの誕生日は一年に一回。当たり前だけどその一年は存分に喜んでほしい。まあ、本人はもう充分みたいな顔してパン食ってるけど。

「俺も食べるか」

パンの中でも特に好きなクロワッサンを一つ手に取り口に放り込む。……うん、うまい。

「ぶはー。おかわりいってきまーす」

「……マジで早いな」

奥でモカのことを見ていた店員がもう食ったの!?みたいな顔をしている。心配しないでください。モカのパンに対する胃袋は宇宙に匹敵すると思いますから。

「たいりよーたいりよ〜」

先ほどと同じようにパンでピラミッドを作って帰って来たモカ。店員がまた!?って顔をしてる。安心してください。あと何回この光景を目にするのかわかったもんじゃありませんよ。

「えへへー、あーむ」

「そんだけ喜んで食ってくれると俺も嬉しいよ」

「そーかな〜？」

「そーだよ。モカのその幸せそうな表情が見れるだけでここに来た甲斐があったなって思うしさ」

「モカちゃんはこんなにとくさんのパンに囲まれて幸せだよ。今日はお兄ちゃんとパンの夢を見る事が出来そうだよ」

「ならよかった」

そんな幸せそうな表情をしつつパンを食べ続けるモカを見ながら俺もパンを食べ続けた。

余談だが、この日おそらくモカはパンを食べることにおいて今まで生きてきて最高記録を出しただろう。正確には数えてないがその数一人で七十個は食っているはずだった。サイズが小さかったとはいえここまで食うとは俺も予想外だった。

その後モカとショッピング行ったり、ゲーセン行ってゲームしたりプリクラ撮ったりしてうちに時間は過ぎていき、時刻は午後5時を指していた。

「いやー、楽しかったな。まさかモカがゲーム結構上手かったとはな」「ふっふっふー。今日のモカちゃんは何でもこなせるスーパーモカちゃんなのだよ」

「はいはい。凄かったぞスーパーモカちゃん」

「もーお兄ちゃん、流さないでよ」

「あはは。っとメールだ。なにになに?」

ポケットに入れていた携帯からメールの着信音が響き、携帯を開いてみる。送り主は蘭だった。

『妹と付き合ってる変態ラテ。すぐにモカをつぐみの家に連れてきて』

「……誰が変態ラテだ。ったく」

りよーかい。すぐ行く。とだけ打って返信した。そして、そのままもう一人用がある人物にメールを送って携帯を閉じた。

「どしたのお兄ちゃん？」

「いやなんでもない。ちよつとメールが来ただけだ」

「メール？誰から？」

「蘭から。ちよつとお茶したいから今すぐつぐちゃんの家に来てだつてさ」

「おおー。蘭からお兄ちゃんに呼び出しがかかるなんてー。もしかしてこれは？」

「んなわけあるかよ。モカも来てほしいって言ってたから。すぐ向かうぞ」

「はーい」

モカと手を繋いで今度はつぐちゃんの家へと歩き始めた。だが、流石に色々回って疲れてるのか、モカの歩くペースが少し遅かった。俺は立ち止まってモカに聞いて見る。

「モカ、大丈夫か？ちよつと疲れてるだろ？」

「うん。モカちゃんの足はもう限界だよ。お兄ちゃんたすけて」

「だよな。ごめんな無理させちゃって。ほら、つぐちゃんの家までおんぶしてやるから」

「おおー。お兄ちゃんやさしく」

本当に疲れていたのか。俺が背中に乗るように屈むとモカはくたーつと倒れこむように俺の背中に乗った。

「よつと。どうだ？少しは楽か？」

「うん。ありがとうお兄ちゃん」

「気にしなくていい。今日はモカちゃんスペシャルデイだからな」

にしても……あいつあれだけの量のパンを食べていたというのにもかかわらず軽すぎないか？女の子はみんなこんなにも軽いのだろうか？

「お兄ちゃん、今変なこと考えたでしょう」

「滅相もございません」

「だいじょーぶ。ひーちゃんはあたしよりは重いと思うよ」

「考えてる内容まで読まれてる……」

まあ確かにひまりちゃんにはあの誰でも包み込んでしまいそうな豊満な二つのお山がついてるから当然か。

「ひーちゃんにお兄ちゃんは渡さないよ？」

「いや、誰もひまりちゃんの物になるなんて思っただけ。ひまりちゃんの豊満な二つのお山について考えてただけで……あ」

「……お兄ちゃん？」

「……言い訳はしません。一思いにやって下さい」

つい口が滑って考えてることを話してしまった。こんな事を考えていたなんてモカに知られてしまっただけは仕方ない。ここはモカのピントでもなんでも一発喰らって……あれ？

「……えと、モカさんや？」

「なに？」

「あなたは私の背中になにをしてるのでしょうか？」

何故か俺の背中に二つの柔らかい感触が感じられる。いや、聞くまでもなくしてわかるんだけど、一応確認してるだけだから。

「モカちゃんもひーちゃんまでとは言わず成長してるでしょ？」

やっぱりか。モカが俺にぎゅーっと密着している。そのおかげでモカの成長途中の胸が俺の背中に当たっている。

「ま、まあ、そのなんだ。うん。成長してると思うぞ」

「ふっふっふー、これがモカちゃんクオリティなのだ」

「いやごめん。それは全く意味わからない」

「えー、そんな。お兄ちゃんならわかってくれると思ったのに」

まあそれはともかく。こうしてモカをおんぶしていると昔の事を思い出す。モカが膝すりむいた時とかもこうやっておんぶして家まで連れてったっけか。

「なあモカ。ちよつと寄るところあるから寄ってもいいか？と言ってもつぐちゃんの家の前なんだけど」

「うん。いいよ〜」

もうすぐつぐちゃんの家に着きそうだ。でもその前に少し寄るところがある。

「蘭にもうちよつと遅くなるって言わないとな」

「蘭のことだから、遅い。なにしてたの、って怒ってるかもよ〜？」

「そうだな。じゃあもしそうだったらモカがおんぶしてってせがんだからって言つとくよ」

「えー酷いよお兄ちゃん〜。モカちゃんは歩き疲れただけなのに〜」

「冗談冗談。そんなこと言う訳ないだろ：つと着いた」

まだ電気はついてる。って当たり前か。連絡はしておいたから大丈夫だろう。

「はい。モカ、降りて」

「ええー。モカちゃんクタクタなのに〜」

「だーめ」

「お兄ちゃんのケチ〜」

と言いながらもモカは渋々俺の背中から降りた。

「ちわー。沙綾、いるー？」

「あ、ラテさん。待つてましたよー。というか、メール来てからここに来るの時間かかりましたね」

「すまん。モカがおんぶしてってせがんで来るから」

「えー、お兄ちゃん。それは言わない約束でしょ〜」

「それを約束したのは蘭にだけだ。沙綾に言わないとは約束してない」

ぶー。つと頬を膨らませるモカ。そんなモカの頬の空気を両手で押して抜いてあげた後沙綾に向き合った。

「あはは。相変わらず仲良いね二人とも」

「とーぜんだよ〜。お兄ちゃんとあたしは運命の鎖で繋がれた運命共同体なのだよ〜」

「いや、それは意味わかんない」

「えー、ひどーい。お兄ちゃんがノツてくれないとモカちゃん泣いちやうよ〜」

「……それより沙綾。約束のものを」

「無視しないでよ」

「はいはい。これね」

「むーしー!」

隣で本当に涙目になっているモカを無視して俺は沙綾からやまぶきベーカリーの紙袋を一つ受け取った。

「ありがとう。じゃあモカ。はいこれ」

「んー?これって?」

そのまま受け取った紙袋をモカに手渡した。何のことかわかっていないモカだったが、そのまま中身をのぞいてみる。

「これは……パンですなあ」

「パンだよ。やまぶきベーカリーの。そして、俺からの誕生日プレゼントだ」

「おおー。これはもしかして……」

モカは紙袋からパンを一つ取り出した。そのパンは普通のお店で出されているものと比べると形は歪で、見た目もいつも買ってるパンと比べるとあまり美味しそうには見えない。

「モカ。食べてみたらわかるよ」

「ほんと?それじゃあ……」

モカはその場を一口パクリ、とパンをかじった。

「……どうだ?」

「これはっ!」

「「これは?」」

「いつものパンの味とちがう」

ドテツ、とその場で崩れそうになった。まあそりや違うのは当たり前なんだけど。

「でも美味しいよ。お兄ちゃんの手作りのパン」

「……やっぱりバレるか」

「さすがモカ。一発で見抜いちやうか」

「とーぜん。モカちゃんがどれだけこのパンは食べて来てると思ってるのさ」

そう。これは俺がこの日のために沙綾に時間が空いてる時にコツコツと教えてもらって作った手作りのパンだ。今朝早くにやまぶきベーカリーに行って沙綾に手伝ってもらいながら作っておいたのだ。

「うーん。もうちよつと時間があればモカを騙せたかな?」

「むりむりー。モカちゃんのお口はもうここのパンの味を全て覚えてしまってるんだよね」

「あはは、確かにそうだね。モカじゃほとんど毎日うちのパン食べてるし、一発でわかっちゃうよね。じゃあ……はい。これ私からね。ラテさんと被っちゃうけど」

「おおー。お兄ちゃんにもパンをもらって、さーやにもパンをもらえるなんて……モカちゃんしあわせ」

二つの紙袋を両腕で抱えるモカ。なんて幸せそうな表情をしてるんだろう。まあ、こんな顔を見ただけで俺は兄として幸せ者なのかも。

「お兄ちゃん、さーやもありがとう」

「うん。じゃあモカ。また来てね。あ、もちろんラテさんも」

「なんか俺はついみたいなき感じだな……まあいいや。また来るよ」

幸せそうに紙袋を抱えるモカとともにお店を出た。

「で、味はどうだったんだ?」

「あじー?なんの?」

「パンだよ。お前いつも言ってただろ。俺の手作りのパンが食いたいって。そのお味は?」

「うーん……味はやまぶきベーカリーに負けてるよね」

「いや、そりやそうだろうよ」

「でも、お兄ちゃんのモカちゃんに対する気持ちは口いーっぱいに広がったのがわかったよ」

「え、マジ?」

「うん。大マジだよ。だからありがとうお兄ちゃん。このパンはお兄ちゃんの心だと思って大事に大事に食べさせてもらおうよ」

モカに何か通じるものがあつてよかった。これでもし何も思わな

いなんて言われたらショックで立ち直れない可能性まで感じてたんだけどそうならなくてよかった。

「ていうか、大事に食べるのはいいけど、早く食べないとパンが痛んじまうぞ」

「ええー、そんな〜」

パンを抱えてショックな表情を浮かべるモカ。本当にパンが好きすぎるこの妹は。でも俺もそんなパンが大好きな妹の事が大好きなんだよな。世界一大好きだ。

「モカ」

「んー？なーにー？」

だからそんな妹に俺が今日ずっと言いたかった言葉を今伝えよう。大好きな妹に。大好きなモカにこの言葉を精一杯気持ちを含めて言おう。

「誕生日おめでとう。これからもずっと一緒にいような」

「もっちらーん。あたしとお兄ちゃんはずーっとずーっと一緒だよ」

番外編 平和な1日と怖いモカ

「いやー、平和ですな〜」

「急にどうしたんだモカ」

「モカちゃんは思うのですよ。こうしてお兄ちゃんと2人でお出掛けできるというのは平和そのものだということをし〜」

「そうだな。こうしてショッピングに来れることは平和そのものだ」

休日。2人でショッピングモールに来た俺たち。ふと今を平和だというモカに俺はうんうんと首を縦に振った。

「こんな平穏な日にそうそう変なことなんて起こるはずがないよな〜」

「ですな〜。あはは〜」

さて。モカと一緒に服でも見に行くとするかな〜。

「あれ、ラテさんだ」

「ホントだーっ！ラテおにーちゃん。それにモカちゃんも！」

「あれれー、もしかして2人でお出掛けかな?」

と思った矢先、そんな俺たちに声をかけ、駆け寄ってきたひまりちゃんとあこちゃん。それに前にモカの弁当を届けに行った時に出会った氷川さんの3人。

「…………なるほど。平穏というのはこうして崩れ落ちていくんだな」

「ラテさん、何の話ですか?」

「いや、なんでもない。それにしても珍しい組み合わせだな」

「そーかな?あたしたちみんな同じ学校だし、当然だと思っけど?」

「うんうん!あこはひなちゃんともひーちゃんとも仲良しだよ」

ねー?と向かい合って笑い合うひまりちゃん達。たしかに仲良く遊びに来るのはいいことだよな。

「うんうん。それは良いことだな。じゃあ、俺たちはこれで。モカ行くぞ〜」

「あ、そうだ!ラテ君とモカちゃんも一緒にまわろーよー!うん、その方がきつとるん♪つてするよね!」

モカを連れて3人から離れようとした瞬間、氷川さんがとんでもな

い発言を繰り返した。

「それさんせーいっ！ひーちゃん、どうかな？」

「私も賛成！ラテさんとモカがいいならですけど」

「だって！どうかな、ラテ君？」

「うーん、どうって言われても」

正直に言おう。ひまりちゃんとあこちゃんは全然いいんだが、どうやら俺は氷川さんの事が少し苦手みたいだ。このテンションの高さについていけない。

「モカはどうだ？」

「私は別にいいよ。ここで会ったのも何かの縁みたいなものだしね」

「さすがモカ！わかってる」

「モカちゃん、ありがとう」

「じゃあモカちゃん。それにラテ君もレッツゴー!!」

「え、ちよつと待って。俺の意見無視なの!？」

先頭を歩く氷川さんに腕を引かれ俺たちはショッピングをするごとに。モカとの貴重な2人っきりの時間が……

「ねえねえラテ君！この服どうかな？」

「そーだな……氷川さんはこっちの服の方が似合うと思う」

「ラテおにーちゃん、この闇の羽衣みたいにカッコいい服は？」

「いいと思うよ。あこちゃんならそういう黒っぽい服は似合うから」

「ラテさんラテさん、これは？」

「ひまりちゃんはもうちよつと明るい服の方がいいんじゃない？」

「お兄ちゃん、この服はどうでしょう」

「似合う！最高！可愛い!!」

5人で行動する事になって最初に来たのは服屋。何故か俺がみんなの服をチョイスする事に。

「そっかー。ところでラテ君？」

「なんだ？」

「その、氷川さんってなんかやだなー。あたしもひまりちゃんやあこちんみたいに下の名前で呼んでほしい！」

「いきなりだな。まあ、別にいいんだけど」

氷川さんの下の名前。確か……日菜だったっけ？

「えーっと、じゃあ……日菜。これでいいか？」

「うんーラテ君ー」

下の名前を呼んであげると、凄くいい笑顔で俺の名前を呼んでくれる日菜。少し可愛いと思ってしまった。

「お兄ちゃん。モカちゃんの買う服はこれに決定しましたー」

袖をくいくいと引つ張って俺を呼ぶモカが持っていたのは、これから寒くなる時期に備えてなのか、あつたかそうな厚手の紺色のパーカー。

「またパーカーなのか」

「そーだよ。ゆったりしてて楽だから、好きー」

「そっか。まあモカがいいならそれでいいんだけど。買ってあげようか？」

「いいのー？おにーちゃん、太っ腹ですなー」

「まあな。給料入ったばっかだし」

モカが買おうとしているパーカーを受け取った。モカが喜ぶ顔が見られるなら、全然問題ない。

「あー、モカずるいー！ラテさん。私もこの服買ってくださいー！」

「ひーちゃんずるいー！ラテおにーちゃん！あこもあこも！」

「じゃああたしも！」

みんな各々欲しい服を俺に手渡そうとしてくる。しまった。みんないるんなら買ってあげるなんて言うのやめるべきだったか。

「モカは妹だから買ってあげるんだ。みんなはダメ」

「ぶーぶー！モカだけずるいですよ！」

「そーだそーだ！モカちゃんだけなんてずるいよー！」

「ラテおにーちゃん、ダメ〜？」

「ぐっ……………」

あこちゃんが涙目で見つめてくる。だ、ダメだ。そんな甘い誘惑に負けてしまったら俺はこの先もみんなに何かを奢ってあげなくてはならない。

「だ、ダメだ！ダメだったらダメだ！」

「むー。ラテ君のケチー！」

「待って下さい日菜さん！私にいい方法があります！」

ひまりちゃんがあこちゃんと日菜を手招きしてコソコソと話し出す。一体何を言おうと言うのか。

「ひーちゃん、それ上手いくの？」

「うん！ラテさんだから絶対上手いく。日菜さんもどうですか？」

「任せて！」

頷き合った3人は欲しい服を両手で持って俺の前に並び出す。

「な、何を言われても俺は譲らないぞ……………」

「ふっふっふー。そうやって言ってられるのも今のうちです！ラテさん覚悟です！」

ひまりちゃん。人を指差しちゃいけないって小学校の時に習わなかったのか？

「ひーちゃん。人を指差しちゃダメって小学校の時習わなかった？」

「モカはちよつと黙ってて！」

「えー、ひどーい。あたしは正しい事を言っただけなのに。お兄ちゃん、ひーちゃんがあたしのこといじめるよ〜」

そう言っつて抱きついてくるモカを俺はよしよしと頭を撫でてあげる。というか、モカは俺と全く同じことを思っていたんだな。

「はあ。とにかく何を言われても俺は絶対に」

「おにーちゃん。どうしてもダメ？」

「お兄ちゃん。私、この服欲しいの……………」

「おにーちゃんが買ってくれたら、あたしはこの服を一生大事にする。だから……だめ?」

「わかった。買ってあげよう!!」

「やったー!ありがとう、ラテおにーちゃん!」

し、しまった。3人がかりで涙目で上目遣いで言われるもんだから、反射的にオツケーしてしまった。

「どうですかラテさん。私たちの演技は!」

「もうずるい。本当にずるい。だから罰としてひまりちゃんには買ってあげない」

「そんなー!ラテさん酷いですよ!!」

まったく。そんな卑怯な手を使ってくるなんて。俺がお兄ちゃんと呼ばれるのに弱いのを知ってるからって。

「まったく。本当にず……るい……」

「ラテさん?どうかしました?」

「いや、えっと……その……」

「ラテ君?」

「いや、違うんだ。その、なんでもないんだ」

「ラテおにーちゃん。様子が変だよ?」

「う、うん。大丈夫。大丈夫だぞ?」

「……」

なぜ俺がこんな急に焦り出しているのか。そして、なぜ俺はこんなに冷や汗が止まらないのか。理由は2つある。まず1つ。

「よ、よう。蘭、それにリサも。こんなところで奇遇だな?」

おそらく今の会話を一部始終を見ていたであろう蘭とリサがいる事。2人とも俺の顔を見てドン引きしている。

「あれ、リサ姉だ!」

「ホントだー。リサちー、それに蘭ちゃんも。2人で買い物?」

「う、うん。そうだよ。たまたま偶然そこで会ってね?」

「ひ、日菜さんたちも買い物ですか?」

2人がいるのに気づいたあこちゃんと言葉が駆け寄っていく。とりあえず蘭とリサの事は置いておこう。

理由の2つ目。俺に抱きついてたモカの力がめっちゃ強まって
いる事だ。胸に顔を埋めてるおかげで表情はまだ見えてないけど、想
像したくない。とりあえず今はこっちの方がやばい。ひまりちゃん
もそれに気づいたのか。横で凄くあたふたしている。

「あの、モカ？ち、違うんだぞ。今のは……」

「ねえ、お兄ちゃん？」

「は、はい！」

「あたし以外に妹を作ったらダメって言ったよね？」

顔を上げたモカの顔を見ると、どす黒い闇のオーラを纏っているよ
うに見えた。マジだ。これはマジな方でやばいかもしれない。

「い、いや。今のは妹を作ったんじゃない、お兄ちゃんって呼ばれただ
けで」

「あたし以外にお兄ちゃんって呼ばせたらダメって言ったよね？」

「はい。言っていました」

あれ？でもあこちゃんにもう何度もラテおにーちゃんって呼ばれ
てるはずなのにそれはいいのか？

「お兄ちゃん」

「はい？」

「あこちゃんはもういいんだよー」

「えっ!？」

「あこちゃんはもうあの呼び方でいいんだよー」

なぜ俺の考えてることがわかった？もう以心伝心とかテレパシー
とかじゃ説明つかないんだけど！

「じゃ、じゃあ問題なのはひまりちゃんと日菜にお兄ちゃんと呼んで
もらったこと…なのか？」

「そーだねー。ダメだよね〜？日菜さんとひーちゃんにまでお兄ちゃ
んって呼ばせたらー？」

抱きつく強さが少し強まる。というか少し痛い。

「ひ、ひまりちゃん！何とかしてくれ！」

「む、無理ですよ！こんな状態になったモカ見るの私初めてです！」

「ひまりちゃんのせいでこうなっただぞ！」

「ラテさんがモカにだけ鼻屑するから悪いんです！」

「おかしいだろ！ひまりちゃんが変な案さえ上げなければこんなことにはー！」

「ラテさんがケチだからいけないですよ!!」

「お兄ちゃん？」

「は、はい!!」

「ここじや邪魔になるから、一回家に帰ろ〜」

「え……家に帰るのか？」

「そーだよ。モカちゃんお兄ちゃんと話したいこといーっぱいあるんだよ〜」

……今のモカと一緒にいたら何をされるかわかったんもんじゃない。できるならばここからダツシユで逃げてほとぼりが冷めるまでどこかで隠れてたいんだけど。

「えつと……ちなみに断ったら？」

「断ったらー……どうなるでしょー？」

「疑問を疑問で返された。どうなるんだ？」

「んーとねー……モカちゃん自身何するかわからないよー」

「………帰ります」

「はーい。じゃあいこー」

俺の手を取って笑顔でそう言ってくるモカ。いつもなら嬉しいのになんでだろ。笑顔なはずなのに目が全然笑ってないからものすごく怖い。

「でねでね、ラテおにーちゃんがね?……あれ?モカちゃん、どうしたのー?」

「用事思い出しちゃったから帰るね〜。リサさん。3人のことお願いしまーす」

「え、あ、うん。りよーかい……気をつけてね〜」

「はーい。ありがとうございまーす」

リサもモカの顔を見てわかったのだらうか、今のモカには何を言っても通じないというこを。

「それじゃあ、いつてきまーす。蘭ー、日菜さんにあこちん。またね

」

「あ、うん。また」

「バイバイモカちゃん!」

「ラテおにーちゃんもまたね〜!」

日菜もあこちゃんもちよつとは助けてほしいよ……………

「なんかモカちゃん、凄く怖い顔してたね?どうしたんだろ〜?」

「今のモカちゃん、漆黒の魔王の……………こう……………化身?みたいなのが見えたような?」

「日菜、それにあこも。それはちゃんと説明するから。今は…………ラテを優しく見守ってあげよう」

「そうですね。それが良いと思います。ひまり、大丈夫?」

「全然大丈夫じゃないよ〜!蘭〜!リサさん!モカが怖かったです〜!!」

「???

「よくわかんないけど、ラテ君頑張ってる〜」

4人が見送ってくれる中、先頭を歩くモカの後ろを俺はトボトボと重い足取りでついていった。そこから先は……………思い出したくないから何も言わないでおこう。平和になると思ってた1日。それがたった1時間で平和から混沌化してしまったとき。

番外編 モカの冒険

昔々あるところに。パンツクール王国という大きな国が存在していた。そこには、パンを食べる事が大好きな王様、ラテと、パンを作る事が大好きな王妃、サーヤ、が治める大変幸せな国であった。

だが、そんな平和が突如崩されることとなる。北の国を乗っ取り城に住む大魔王、アコが魔物達を連れてこう言ったのだ。

『ここで作るパンは大変美味であると評判である!!この大魔王アコにこの国のパン全てを差し出すがいい!さすれば、命だけは助けてやる』

いきなりの事で納得のいかない王様、ラテは魔物達に対抗すべく、たくさん兵を大魔王アコの前に送り込み立ち向かった。だが、結果は惨敗。偉大なる大魔王アコの大魔法の前では、一国の兵士には敵うわけなどなかった。

「はーはっはっはっはー!!大魔王アコの、この……最高の、じゃなくて……だ、大魔法の前では100人いても敵うまい!!」

大魔王アコの手によって、王は降伏をせざるを得なかった。国も大切だが、何より人を大切にするラテ王には傷ついた兵士は見るに耐えなかったのだ。

「では、王よ!この大魔王アコに兵を差し向けた罰として、この国の王妃であるサーヤは頂いていく!!」

なーに、大人しくしていれば、傷つけたりはしまい」

「ラテー!!」

「サーヤ!!」

なすすべもなく王妃は攫われてしまった。そして、パンツクール王国も魔王軍の手よっての支配が徐々に進んでいってしまった。

「ラテ王よ……このままでは大魔王アコの手よって国が滅んでしましますー!」

「王妃様が攫われてしまった今、美味しいパンを作るのもままならない!作れたとしてもパンは全て魔王軍に渡さなくてはならないのです!!」

「どうすれば良いのですか、王様!!」

「王よ!!」

「王様!!」

「ラテ王!!」

「……………わかつている。早急に対策を打たねば……………」

「あたしにまかせなさい」

国の会議場にのんびりとした声が響いた。

「お前は……………モカ!」

現れたのはモカ。王の実の妹にして、王以上にパンが大好きな女の子である。

「お兄ちゃ……………じゃなかった。王様。あたしが大魔王アコを倒してきてあげましょう」

「モカ……………ダメだ!危険すぎる!!」

ラテ王はモカに溺愛していた。そんなモカを大魔王アコを倒すために旅に出させるのはラテ王は許せなかった。

「だいじょーぶ」。モカちゃんには頼りになる仲間、ランが付いているのだから」

「……………あたしにお任せください」

モカの世話役であるラン。モカが生まれてきたから頃からずっと一緒に過ごしてきた者で、その実力はかなりのもの。

「モカ、ラン…………………………わかった」

他に對抗すべき手段がないため、ラテ王しづしづ。しづしづモカの提案を受け入れた。

そして、出発の日の朝。

「では、王様。行ってきます。モカの事はあたしにお任せください」

「もー、ラン。心配しすぎだよー?」

「あたしにお任せください」

「なんで2回言うのさ」

「うむ。モカの事は任せただぞ。それと、モカ。これを受け取るがいい」

「おー。これはー?」

「かつて伝説の勇者が使っていたと言われている伝説の剣。その名

も、『フラン・スパンソード』である。きっとお前ならば使いこなすことができるだろう」

「おー。ありがとう」

「あと、これも持っていけ。王妃、サーヤが攫われる前に作っていったパンだ。お腹が空いたら食べるんだぞ」

「王妃様のパン……ゴクリ」

「モカ。今食べたらダメだよ」

「では……行ってこい!! 国の命運はお前たち2人に預けた!!」

「はい」

「はい」

こうして、大魔王アコを倒すべく、モカの旅は始まったのである。

「モカ。まずは仲間できそうな人を探そう。あたし達2人で旅に出るのは危ないと思うから」

「おー!」

モカ達は城を出て、仲間を探すべく、パンツクール王国で有名なカフエに訪れた。

「いらつしやい。今日はどんなご用で?」

「えつと……その……旅に出るために仲間を探しにきました」

「仲間か……それならうちの娘なんてどうだい?」

「娘、ですか?」

「ああ。ツグミ。こつちにおいで」

「は、はい!!」

呼ばれてモカとランの前に立ったのは、このカフェのマスターの娘にして、看板娘、ツグミである。

「つ、ツグミです!よろしくお願いします!」

「ら、ランです!こ、こちらこそ、よろしく」

「ランく。こんな所でも人見知り発揮しなくても良くない?」

「う、うるさい!モカは黙ってて!!」

「えー、ひどーい」

「あ、あはは。えつと、お父さんから話は聞いてるよ。大魔王アコを倒す旅に出るんだよね?何も取り柄もないこんな私でよかったら、喜んで旅に同伴させてもらいます!!」

「ツグミはこう見えても回復系の魔法が使えるんだよ。魔法の本をすごく頑張つて読んで覚えたんだ」

「へえー、回復魔法。いいかもね」

「ツグミはつぐつてるんだね」

「つ、つぐつてる?」

モカの変な言葉にツグミは首を傾げた。コホン、ランが咳払いをして話を戻す。

「で、どうするの、モカ?」

「うーん。ツグは他に何が得意なの?」

「えつ?うーん……あ!ケーキとか作るのが得意だよ!!」

「今日からツグはあたし達の仲間だよ!!」

こうして、頑張り屋さんの看板娘、ツグミは仲間になった。

「じゃあ、私旅の準備してくるからちよつと待っててね!」

「あたし達はここでコーヒーでも飲んで待ってようか」

「そーしよ」

ツグミを待つ間、モカとランはケーキとコーヒーを食べながら待つことにした。

「ランく、これからどうしよう?」

「とりあえず、ツグミが仲間になった事だし、大魔王アコが住む城を目指そう。目指す間に魔物を倒したり、あたし達のレベルをあげたりす

る。そんな感じはどう?」

「いいんじゃない? いやー、ランがいるとモカちゃんは何も考えなくていいので楽ですな」

「……モカ。あたしも怒るときは怒るんだよ?」

「ジョーダンだよジョーダン」

「お待たせー! 旅の準備、万端だよ!!」

ツグミの準備が完了した事で、モカとランはケーキを平らげてカフェを出たのち、そのまま、国の外に出て大魔王アコの城を目指すことに。

「そういえばモカ。ラテ王からもらった剣は?」

「んー? ちゃんと持つてるよ」

「そうじゃなくて。ちゃんと使えるのって事」

「おー、そういえば確認してなかった」

モカはラテ王からもらった伝説の剣『フラン・スパンソード』を手持った。

「どう?」

「うーん……」

「モカちゃん?」

「……」

「あれ、モカ?」

「……………くー……………くー……………」

「寝てる!!?」

「ちよつとモカ! 立ったまま寝ないで!」

「……はっ! ……ここどこ?」

「パンツクール王国出たばっかだよ」

「おー、そうだったそうだった。今日は天気が良くて気持ちいいから、ついつい立ったまま寝ちゃったよ」

あはは、と笑ってごまかすモカに他の2人はじーつとモカを睨みつけた。

「もうしないように気をつけるよ」

「まったく……で、話す戻すけど、モカは」

「ねえねえ!!」

ランが話を続けようとした瞬間、見知らぬ誰かが3人に話しかけた。

「私、ヒマリっていうの！あなた達、大魔王アコを倒すべく旅に出るんだよね？」

「え、えつとその……」

「そうだよー」

「私たち、今から大魔王アコの城目指すところなんだ」

「よ、よかつたら、その旅に私も同行させてくれないかな？」

「うん、いいよー」

「ほ、ほんとに!?!」

「ちよつとモカ！理由も聞かずに!!」

「だいじよーぶー。モカちゃんの目に狂いはない。ヒーちゃんはい子だよー」

「ヒーちゃん……な、なんでもいいや！じゃあ、改めて！私、ヒマリ！攻撃魔法が得意なの。これからよろしくね？」

「モカです。あたしの武器はこの『フラン・スパンソード』」

「……ラン。一応まだ完全に信じたわけじゃないけど、よろしく」

「私はツグミー！これからよろしくね、ヒマリちゃん!!」

「こちらこそ!!じゃあみんな！魔王の城を目指して頑張ろう!!せーの！

「えい、えい、おー!!」

「……………」

「……………」

「……………」

瞬間、ヒマリ以外の3人が空気が凍ったような感覚に襲われた。

「ひどーい!!なんでみんなやってくれないのー!!」

「いや、いきなりだったから」

「ていうかー、その掛け声はないよねー」

「えーっ!?!ツグはそんな事思わないよね？」

「え!?!えーつとー……さ、さあ！魔王の城を目指して、頑張ろう!!」

「……流したね〜」

「うん、流した」

「うう……みんな酷い……」

こうして、モカとランはツグミと新たな仲間、ヒマリを加えて魔王の城へ向かうべく旅立った。

だがモカ達は知らない。この旅はすごく過酷なものとなることを。モカ達の大魔王アコを倒す旅は、まだ始まったばかりなのである。

「ていう、夢を見たんだけどー、みんなどうかな〜?」

「色々突っ込みたいことあるんだけど、まず、フラン・スパンソードってなんだよ。無茶ありすぎだろ」

「あと、パンツクール王国っていうのも意味不明」

「アタシの出番がないのはどういうことなんだ?」

「で、でも凄くファンタジーなお話で楽しそうじゃない?ね、ひまりちゃん?」

「たしかに。この後どんな展開が待っているのか楽しみかも!!」

「いやー、今後のモカちゃんの活躍に期待ですな〜」